

ラブライブ！～合同企画短編集～【完結】

藪椿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は、ハーメルンの作家陣たちが執筆した『ラブライブ！』および『ラブライブ！サンシャイン!!』の小説をまとめた短編集となります。

11月25日(日)～12月26日(水)の期間で、毎日21時に1話ずつ投稿予定です。

総勢32人の作家さんが小説を手掛けており、日頃から『ラブライブ！』小説を執筆している方、既に引退されている方、別の原作の小説を執筆している方など、作家のジャンルだけでも多岐に渡ります！

雰囲気の違いが毎日投稿されるので、是非最後までご覧ください！

《各作者の投稿作品》※敬称略

1. 藪椿 『Aqoursに甘やかされるだけの日常』
2. またたね 『“私達”』
3. かさくも 『独語、桜散る前に。』
4. 北屋 『ひかりのまち』
5. うおいど 『想いよひとつになれ(仮)』
6. 苗根杏 『レディオ・ガ・ガ』
7. たーぼ 『一度きりの言葉』
8. 香月あやか 『お姫様達と騎士の夜』

9. 紅葉久 『願いを言葉にするからこそ、意味がある』
10. グリツチ 『三度目はない』
11. そらなり 『凜と咲く花のよう』
12. ちゃん丸 『スウェットの僕と朝焼けの君』
13. Lドラド 『ヤンデレ♡真姫ちゃん』
14. スピリチュアルなカリスマ 『100%の表情』
15. アリアンキング 『再開する女神達と歩んだ軌跡』
16. ゆいろう 『あれから三年』
17. シベリア 『あの人を眺めて』
18. 鍵のすけ 『園田海未最強決定戦』
19. こうのとりに 『巡り合わせてくれた』
20. 宇宙一バカなラブライバー 『スクールアイドルが好きでも愛してるのはあなただけ』

21. 豚汁 『深き海底に眠る』
22. 黒とかげ 『夢か真か』
23. 雷電p 『ないちんげーるらぶそんぐ』
24. m o k k e 『第一次料理大戦』
25. 大里野上 『マイ』
26. カゲショウ 『A smiling Cafe』
27. 名前はまだ無い♪ 『休憩』
28. 黒つばい猫 『記憶と想い』
29. ジマリス 『待ってる。』
30. 銀行型駆逐艦ゆうちよ 『恋人は天使』
31. ちゃーもり 『浜辺少女とのパス』
32. 間邦人 『まぶしいほどに輝くもの…』

目次

Aqoursに甘やかされるだけの日常	1
“私達”	16
独語、桜散る前に。	33
ひかりのまち	49
想いよひとつになれ(仮)	71
レディオ・ガ・ガ	78
一度きりの言葉	99
お姫様達と騎士の夜	109
願いを言葉にするからこそ、意味がある	129
三度目はない	164
凜と咲く花のよう	173
スウェットの僕と朝焼けの君	186
ヤンデレ♡真姫ちゃん	216
100%の表情	224
再開する女神達と歩んだ軌跡	232
あれから三年	247
あの人を眺めて	260
園田海未最強決定戦	272
巡り合わせてくれた	297
スクールアイドルが好きでも愛してるのはあなただけ	319
深き海底に眠る	327
夢か真か	355
ないちんげーるらぶそんぐ	363
第一次料理大戦	382

マイ	389
A s m i l i n g C a f e	396
休憩	419
記憶と想い	426
待ってる。	439
恋人は天使	478
浜辺少女とのパス	487
まぶしいほどに輝くもの…	505

A q u o r s に甘やかされるだけの日常

某月某日、土曜日 of 真昼間。

今日も今日とてネットでオナニーのネタ探しが始まる。外は雲一つない快晴なのに、部屋に籠ってオナネタの探求だなんて、陰キャの中のド陰キャだって自覚はしているんだ。でも、オナネタを探している時の時間が何よりも至高だからやめられない。ベッドの上で1人で耽っている時もそりや気持ちいいけど、今日はどんなネタを使うか物漁りをしている時の背徳感に勝る快感はないね。

それに、偉い人がこう言っていた。美味しいモノを食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待っている間だって。さつき僕が言っていたことと少しニュアンスは違うかもしれないけど、オナニーでも同じことが言えるんじゃないかな？ 毎日同じ時間帯にPCの前に座り、目を皿にしてネタを探す。いいネタを見つけたらとりあえずブックマークし、ある程度集まったらブックマしたネタの中から今日のオカズに使用するモノを選定する。このサイクルを毎日やってるけど、決して飽きることがない。むしろ毎日のこの時間が楽しみすぎて、このためだけに生きていって感じがするよ。

……うん、分かっている。自分でも最底辺な人生を歩んでいるって。でも仕方ないじゃん、気持ちいいんだから!!

ちなみに、さつき同じサイクルを毎日繰り返していると言ったけど、その言葉に偽りはなく1年中365日通してだ。平日も休日も休むことなく、昼間はベッドの上で1人格闘技を披露している。ここまですべて聞いてお察しの通り、僕は学校にも行っていなければ働いてもいない。まあ、いわゆるニートってやつだね。自分でニート宣言するほど恥ずかしいことはないけど、事実は事実だし、それに隠していたとしてもこの後すぐにバレるだろうから……。

とりあえず、その”すぐ”が来る前にやることはサツサとやっておかないと。

僕が一番嫌いなのはニートである自分自身でも、僕を社会に適合させてくれないこの世の中でもない。オカズ探しからオナニーフィ

ニツシユまでのひと時を邪魔されることだ。ニートであることをどれだけ咎められてもいいけど、オナニーの妨害だけは誰であろうとも許さないから。

今日は新しいオカズを探す予定だったけど、僕の目に敵うモノが見つからず時間を食っちゃったから、仕方ないけどお気に入り時間の時間停止モノのAVで我慢しよう。

ティツシユの在庫はOK。ゴミ箱も近くに配置。イカ臭い匂いを誤魔化す用の消臭スプレーも準備完了。あとはベッドに寝転んで、スマホに保存してあるこの動画を再生するだけ。ダメだ、動画の内容を知っているだけに、想像しただけで下半身に血の気が……!! 待って待って落ち着いて我が息子。もうすぐその興奮を解き放ってあげるからね。

さあ、今日も僕を最高の絶頂を――

「おっはよー……っ!!」

「うわあ、あ、あ、あああああああああああああああ!!」

ベッドに寝転がって、動画を再生しようとしたまさにその時だった。僕の部屋のドアが壊れるくらいの勢いで開け放たれ、そこから女の子たちがぞろぞろと乱入してくる。

どうやって鍵のかかっている僕の家に侵入したのか、どうしてノックもせずに部屋に入ってくるのか、もはやそんなことはいつものことだ。でも、今日に限っていつもより早い時間に来るなんて……!!

「ち、千歌ちゃん?! いつも言ってるけどノックしてよ!!」

「えへへ〜ゴメンゴメン。早くニート君に会いたくて!」

「会いに来てくれるのは嬉しいんだけど、事前に連絡するとか、せめて部屋の前で声をかけてくれると嬉しいんだけど……」

こうして、こちらの事情なんてお構いなしに突撃してくるのが千歌ちゃんたちだ。本人たち曰く、『どうせニートなんだし、予定も何もないから暇でしょ』らしい。確かにニートで予定もないから何も言い返せないけど、親しき中にも礼儀ありだ。それに全く予定がない訳でもなく、僕だつてほらそのお……自慰の予定がね?? だつたらその時間をズラせばいいんじゃないかと思うかもしれないけど、僕は昼間のこの時間帯にやるのが好きなんだ。特に平日の昼間は学校や仕事に行っている人が大半で、その人たちが汗水垂らしている時間にオナニーをするのがこれまた爽快感。それに千歌ちゃんたちに合わせて時間を変えちゃったら、それって負けた気分にならない? ニートでもゴミクズくらいのプライドはあるんだよ。

「そういや、今日はみんな来てるんだね」

「ゴメンなさい、突然押しかけちゃって」

「そう言ってもらえるだけでも嬉しいよ、梨子ちゃん」

「千歌さんが連絡を入れたと言っていたのですが、あなたの様子を見ると嘘だつたみたいですね」

「そうだったんだ。ダイヤちゃんに嘘をついてまで、僕にサプライズしたかったのかな……」

「いえ、千歌さんのことなので、私の質問を適当に流しただけかと」

「あはは、千歌ちゃんらしいね……」

こうやって僕のことを考えてくれるのは、梨子ちゃんやダイヤちゃんと言った真面目な子たちだけだ。現に千歌ちゃんを始めとして、曜ちゃんや鞠莉ちゃんは早速僕の部屋に山積みされてるゲームで遊ぼうとしている。アポなしで人の部屋に上がり込んで、しかも部屋のモノを勝手に物色するなんて失礼極まりないけど、これが日常になってるからもう慣れた。だからと言って、アポなし訪問が許されるとか、そういうことじゃないからね?!

「全く、またこんなに散らかして……。洗濯物も溜まってるじゃん」
「あつ、果南ちゃん。掃除は僕がするからいいのに」
「しないから部屋が汚くなってるんでしょ？ ほら、洗濯物貸して。部屋掃除のついでに洗濯してあげるから」

みんなのお姉さんである果南ちゃんは、僕の部屋に来るたびにこうして世話を焼いてくれる。正直に言っ僕は掃除ができない人間なので、部屋をキレイにしたり洗濯するには誰かの手を借りなければならぬ。だから果南ちゃんの好意はとっても嬉しいんだけど、今はちよつとマズいことがあるんだよね……。

とりあえず、この洗濯物だけは何とか死守しないと……!!

「ちよつと、そこにいたら洗濯物が取れないんだけど？」

「い、いやあ今日はまだ洗濯しなくてもいいかなあつて」

「よくないでしょ。どう見ても3日分くらいは溜まってるよねそれ」

「ま、まあニートだから服くらいどうなつても……」

「何隠し事してるのよ、アンタ」

「うひゃあ!?! よ、善子ちゃん!?!」

「ヨハネ!! いいから貸しなさい」

後ろから声を掛けてきたのは、墮天使ヨハネこと善子ちゃんだ。果南ちゃんとの対決に集中し過ぎて、彼女が忍び寄っていることに気付かなかつた。善子ちゃんは既に僕の洗濯物を握りしめており、今にも僕の手から奪取しようとしている。そのことに気付いた時には時すでに遅く、僕が抵抗する前に善子ちゃんに洗濯物をひったくられてしまった。

「全く、ニートのくせに楯突くんじやないわよ——つて、えっ?」

「あつ、やばっ!?!」

「ふえ?」

善子ちゃんが持っている洗濯物の中から、雑誌のようなものが零れ落ち、近くにいたルビイちゃんの足元に散らばる。

やってしまった…と、僕は頭を抱えそうになった。だって、洗濯物から落ちた雑誌はただの雑誌ではなく――

同じく近くにいた花丸ちゃんが、落ちた雑誌のタイトルを読み上げる。

『ロリっ子巨乳JKの時間を停止してやりまくりの日々』、『中二病の女の子を性奴隷に堕とすまで』、『旅館に務める少女と禁断の恋』、『水泳部のスクッ娘を玩具に！』、『催眠日和』……み、未来……ずら？』

『そんな未来あつて堪るか!! アンタねえ……!!』

『よ、善子ちゃん顔近いって!!』

オナネタ探しに夢中になっていたせいで、同人誌を健全な雑誌の表紙でカモフラージュすることをすっかり忘れていた。彼女たちはいつもこの時間帯に來ると分かっていたはずなのに……。やっぱ人間って、性欲に憑りつかれると正気を失っちゃうよね。だからこそこの世に強姦事件が蔓延っているんだろう……なあくんて、冗談を言ってる場合じゃないか。

さつきまで騒がしかった僕の部屋は、一瞬で静寂に包まれた。ゲームで遊んでいた千歌ちゃんたちもこちらに注目し、僕に同情してくれていた梨子ちゃんとダイヤちゃんに至っては引きつった顔をしている。それにルビイちゃんに至っては――

「ピ、ピ、ピ……!!!」

彼女が驚いた時に発する『ピギイ!!』の声も、あまりの衝撃に生まれてのヒヨコのような声しか出ていなかった。顔を真っ赤にして、今にも蒸発しきって気絶してしまいそうだ。

それもそのはず、僕が隠していた同人誌はただのエロ同人ではない。花丸ちゃんが読み上げた同人誌のタイトルからお察しの通り、ど

ことなくどこぞのスクールアイドルを連想させるものばかりだ。そして当の本人たちがそれ見れば、一目で自分たちと似ている立場の同人だと分かる。だからルビィちゃんもみんなも、男の部屋にはエロ本の1冊や2冊くらいあるよねえ〜みたいな軽い気持ちでスルーできないんだと思う。

ちなみに、花丸ちゃんが読み上げた同人誌以外にも、洗濯物から落ちたものがある。敢えてそのタイトルは言わないけど、僕が隠していた同人誌は全部で9冊。そして、ここにいるA q o u r sのメンバーも9人。まあ、これで察して欲しいな……。

しばらく沈黙が続いた後、最初にこの空気を破ったのは千歌ちゃんだった。

「も〜うっ！ そんなことなら早く言ってくればいいのに！」

「へ？ な、なに!？」

「んっふっふ〜そういうことだったんだねえ〜」

千歌ちゃんは悪い笑顔を浮かべながら、僕の両肩に手を置く。女の子特有のいい匂いに思わず打ちのめされそうになるも、彼女がこの顔をする時は決まって碌でもないことが起きると知っているので、何とか正気を保って警戒態勢に入る。

とは言うものの、僕はニートをやっているせいか力がなく、日々スクールアイドルの練習で体力作りをしている千歌ちゃんたちは到底敵わないだろう。だから警戒態勢に入ると言っても、抵抗できるほどのパワーはない。つまり一度こうして捕まってしまうたら、彼女たちのされるがままになってしまうんだ。まあ、こうなるのも毎日のことだからもう慣れたけどね。

すると、千歌ちゃんに気を取られていたせいかな、またしても背後に忍び寄る陰に気付かなかった。

「言ってくれば、私たちが相手したのに」

「ぶっ!? ちょっと、何言ってるの!? って、鞠莉ちゃん!? 耳かじらな
いでよ!」

「相変わらずウブね。男の子なのに、とつてもprettyなんだか
ら」

「耳元で囁かないで! くすぐりたいから!!」

みんなは自分たちをモチーフにした同人誌を見ても嫌悪せず、むしろ卑しい桃色のオーラを放出させていた。妖艶な表情をしている子もいれば、頬を赤らめて如何にも恋する思春期女子のような表情をしている子もいる。例えスクールアイドルと言えどもアイドルの名を背負っているんだから、男に対してそんな表情をするのはどうかと思う。だけど、またこれが僕たちの日常なんだ。

Aqoursのみんなは僕の部屋に来ている時だけ、普通じゃなくなる。ライブの映像を見る限りでは輝かしい清純な乙女たちなのに、どうして僕の部屋だと思回路が逝っちゃうんだろうなあ……。それに普通じゃないのが日常って、なんか矛盾してるような気もするけど……。

するとその時、突然後ろから抱き着かれた。

この肉付きのよい身体と、年相応以上に育った胸の感触は――

――!!

「曜ちゃん!」

「えへへ、あつたりい〜! ていうか、後ろを見てないのによく分かったね」

「そ、そりゃあ……ねえ?」

「私のおっぱい、気持ちよかったでしょ?」

「そりゃもちろん……って、あ、っ!」

マズい、僕が変態だつてバレてしまう!! と思っただけど、散らばった同人誌から余裕でバレバレか。

曜ちゃんはしてやっつたりの顔で、僕をより強く抱きしめる。自分で

胸を強調しておきながら、なおここで僕に押し付けるってことは、もはや恥など感じていないのだろう。千歌ちゃんと鞠莉ちゃんにも囲まれ、女の子たちの妖艶な雰囲気酔って今にも気絶してしまいそうだ。

ふと他の子たちを見てみると、千歌ちゃんの異質な行動なんてさぞ当たり前かのように部屋の片付けをしていた。スクールアイドルとして、華の女子高校生として慎重ある行動を取るとか、そんなことは一切考えていないっぽい。特にダイヤちゃんなんてこの状況を見たら真っ先に怒りそうなのに、何食わぬ顔で散らばったエロ本を片付けているんだから、やっぱりこの部屋に来たAqoursは異質だ。

「ダ、ダイヤちゃん？ 無理してそれを片付けなくてもいいんだよ……？」

「あなたに任せたら一生片付けないではありませんか。私のことは気にせず、あなたはゆっくりしていれば良いのです。家事周りはお私たちがやりますので」

「一生って……」

「それじゃあ私はゴミをまとめて出しに行ってくるね。ルビィちゃん、手伝ってくれる？」

「うん！」

「そ、そんな！ 梨子ちゃんとルビィちゃんの手を汚す訳には……」

「あなたを放っておいたら、一生ゴミ出しなんてしないでしょ？」

「だから、一生って……」

そりゃね、僕だってやる気さえあれば部屋の片づけもゴミ出しも1人でできるんだよ。でもそのやる気を奮い立たせる前に、Aqoursのみんなが全部やっちゃうものだからどうしようもない。1人暮らしたと1日でそこまでゴミは溜まらず、かと言って3日置きくらいに掃除しようと思ったら、その間隔でAqoursが訪問してくる。だから詰みなんだよ詰み。だから一生、僕のやる気は湧き立たず仕舞いなんだ。

自分自身の不幸さを嘆いていると、いつの間にか部屋の入口にいる果南ちゃんが花丸ちゃんと善子ちゃんに声をかける。

「だったら、私たちはお昼ご飯を作ろうか」

「了解！ ニートくんのために頑張るぞらっ！」

「どうして私がこんなクズニートなんかのために……」

「そんなこと言っちゃって、床に落ちてたシャツをチラチラ見てたこと知ってるんだよ？ 何を持って帰ろうとしたのかなあ？」

「もう持って帰るって言ってるじゃないの!! って、そんなことするかああああああああああああああああああああ!!」

「善子ちゃん、顔真つ赤だよ。往生際が悪いぞら」

「相変わらず私だけには辛辣ね、花丸……」

「そういや最近、ちよいちよい僕の服がなくなっているような気がしたんだけど、まさか善子ちゃんが……？ 実は僕が着る服はみんなが自主的に買ってきてくれるので、自分で自分の服がいくつあるのか、どんな種類があるのかは詳しく把握していない。だけど最近は目に見えて服が消えているので、もしかしたら善子ちゃん以外にも犯人はいるかも……？」

「ちなみに、服以外にもみんなが買ってきてくれるモノがある。生活必需品はもちろん、食品や飲料、漫画やゲームなどの嗜好品まで、僕の好みに合わせて持ち込んでくれる。そもそもこの家自体が鞠莉ちゃんのお気遣いで全部タダだ。部屋の片付けも料理も作ってくれるし、そこまでされたらニートにもなるよねえ……」

「そういうえば、この前送った私たちの水着写真、見てくれた？」

「えっ?!? み、見たよ……一応ね」

「僕を右から抱きしめている千歌ちゃんが、何故か目を輝かせながら質問をしてくる。」

千歌ちゃんたちの水着写真。うん、確かに携帯に送られてきたよ。どうやら最近A q o u r sのみんなで海合宿をしたようで、その時に撮ったであろう写真を何枚も僕に送り付けてきたんだ。集合写真を始めとして、個人の写真まで付属していたから、もはやA q o u r sの写真集としてそのまま売りに出してしまえるほどの代物だった。

しかし、問題はそこではなく、かなり際どいポーズの写真もあつたってことが問題だ。肩紐の片方を外したり、オイルを塗っている姿など、アダルトイックな写真に思わず度肝を抜かされてしまった。現代の女子高生は、高度な情報化社会の煽りで性知識が豊富だと聞く。でもそれを考慮したとしても、思春期女子が男子にそんな写真を送り付けるなんて正気の沙汰じゃない。

だけど悲しいかな、不覚にも下半身が立ってしまった事实は揉み消せない。知り合いの女の子の際どい姿を、しかもスクールアイドルのあられもない姿を観察しているという背徳感が、より一層僕の興奮を煽るのだ。もちろん、このことはみんなには内緒だけだね。バレたら最後、悪夢のようなからかい地獄が待ってるだろうから……。

その時、耳元に息を吹きかけられる。

「ふああああんっ!! な、なに?! 鞠莉ちゃん?!

「Oh! 思ったより可愛い悲鳴で、私の方がビックリしちゃった」

「もう、脅かさないでよー!」

「そんなことよりも。何回やったの?」

「うゝっ!?! や、やったって……何を?」

「フフツ、本当は意味分かってるんでしょ? だったらイントネーションを変えてみようか? 何回やったの?」

「そ、それはあ……」

バレてる!! 普段は何も考えてなさそうな天真爛漫キャラなのに、人を追い込む時だけは勘が鋭いのはどうして??

とにかく、みんなの尋問に負けちゃダメだ。さっきも言ったけど、

ニートにだってプライドはある。ニートだからって陽キャにされるがまだまだなんてありえない。ここからなんとか逆転の策を考えないと。逆にこちらがみんなを赤面させて追い込むような、決定的な一手を！

しかし、追い打ちをかけるかのように、後ろから抱き着いてる曜ちゃんが僕の耳元で囁く。

「素直になっていいんだよ。だって私たち、あなたに使ってもらうために水着写真を撮ったんだから。あんな姿、あなたにしか見せないんだよ?」

「つ、使うって……どうやって?」

「もうつ、女の子に言わせる気?」

「あつ、いやゴメン、そんなつもりじゃ……あ、あれ、どうして僕が謝ってるんだ……?」

「ルビイも抱きしめていいですか!」

「えっ、どうしたのいきなり!」

「ニートさんがその、とつても愛おしくなっちゃって……。そんな可愛い顔を見せられたら、ルビイ、悪い子になっちゃいそうです」

「できればマルもお願いしたいかなあゝつて。それにほら、マルの身体は柔らかいから、色々気持ちよくできると思うし……」

「2人共女の子がそんなこと言っちゃダメだつて! それに色々って何!」

どちらかと言えば、花丸ちゃんもルビイちゃんも愛でられる立場の子だ。でも今は肉食系女子と化しており、目がいつもと違って少し怖い。まるで獲物を狙う獣のような、そんな眼光をしている。Aquoursのマスコットである2人が、まさかここまでSつ気を醸し出すとは……。

すると、ゴミ捨てのためにゴミをまとめていたダイヤさんが、僕に包まれたティッシュを見せつけてきた。

「ダイヤちゃん？ それ僕のゴミ箱に入ってたやつだよね……？」
「ばつちいから捨てなさい」

「これ、匂いと香りの残量的に、捨てられたのは2日前と推測できません。そして、その2日前とは私たちの水着写真があなたに送信された日。つまり、このティッシュの使い道は……。さあ、白状してもらいましょう。今自白すれば罪は軽くなりますよ」

「どうしてそんなこと分かるのさ?! 今までみんなを傷付けると思っ
て敢えて言わなかったけどもう言うよ？ 変態だよ!!」

「それがどうしたというのです。あなたにご奉仕できるのなら、そんな罵倒も受け入れましょう」

「開き直らないでよ!! ねえ梨子ちゃんは どう思う??」

「私たちの水着でやったにしては、出してる量がちよつと少ないかな
?」

「僕に何を期待してるのさ!？」

もうAquoursの水着写真でオナつたことを自白したようなもの
のだけど、みんなも思考回路がぶっ飛んでいるせいで僕の失言に気付
いていない。さつきまでは純粹な反応を見せていた子が多いのに、話
が猥談に切り替わった途端にこれだよ。みんなの脳内が突然ピンク
色になるのは今に始まったことではなく、この部屋に来て話題がそつ
ち方面に乱れると、全員キャラが変貌する。どうしてだかは知らない
し、知りたくもないけどね。

女の子にお世話をされるのは確かに嬉しいよ？ 嬉しいけど射精
管理までしてもらおうとは思わない。これはニートの意地ではなく、
男としての最低限のプライドだ。自分の性のコントロールは自分で
したい。このまま性処理まで千歌ちゃんたちに任せてしまうと、本当
に彼女たちの身体でないと絶頂できなくなりそうだから……。

しかし、僕には抵抗しようにも抵抗する力はない。ニート生活をし
てるしてない以前にそもそも身体が小さいので、年頃の女の子でも僕
を簡単に組み伏せられてしまう。この状況、何て言うのか知ってる
よ。

……………詰み。

そんな背水の陣の僕に、前から抱き着いている千歌ちゃんは囁くように呟く。

「別に隠さなくてもいいのに。私たちの写真でたくさん白いのを出しちゃったって」

「そ、そんなことできないよ！ 例え写真であろうとも、大好きなみんなを穢すことなんて絶対!!」

とは言っても、実際のところ白いのを出しちゃったから言葉に説得力がない。でも、みんなを穢したくないというのは事実なんだ。だから、みんなの写真をオナネタにするのは今回だけ。2日前に賢者モードに入った時、そう誓った。

その時、みんなの様子が一変していることに気が付く。

さつきまではピンク色の雰囲気部屋を支配していたのに、今はすっかり元通り。それどころか、部屋の温度が少し上がっているような……？ 見ればみんなの顔が真っ赤なので、部屋の冷房が切れちゃったのかな……？ って、切れてないじゃん。散々僕を弄って遊んでいた千歌ちゃん、曜ちゃん、鞠莉ちゃんもおとなしくなり、果南ちゃんたちは覚束ない手付きで家事をしている。

ど、どうしようこの空気?? 何か女心に触れる失言をしちゃったとか……？

「し、仕方ないなあ〜！ ニート君のために、旅館の娘としての腕を振るいますか!」

「千歌ちゃん!? 急にどうしたの!?!」

「ちゃんと歯磨きしてる? 私がやってあげようか……?」

「梨子ちゃん!? そこまで不清潔じゃないから!!」

「今日はお風呂まだだよな? だったら私が背中を……」

「曜ちゃんが一緒に……!!?」

「ぱそこんを触っていると、肩凝りが酷くなるってきくずら。だからマルが肩揉んであげるね」

「ちよつ、花丸ちゃん力つよつ!!?」

「ルビイは何をすればいいですか？ この薄い本では、ルビイに似た子がニートさんの汚い部分をペろペろ舐めるメイドさんになってましたが……」

「そ、それは忘れて……」

「服、洗濯するわね。か、勘違いしないで！ ニートの服なんて汚くて触りたくもないけど、3日も溜め込んでたら服の方が可哀想だと思っただけだから！」

「そう言いながら善子ちゃん、カバンに僕の服入れたよね今!?!」

「これからニート君の食事は全部私が考えるから。朝昼晩、毎日のおやつも間食も全部ね」

「果南ちゃんのお気持ちは嬉しいけど、ちよつと病んじやってるかなあ……」

「これほどまでにイカ臭い匂いにするティッシュを、普通のゴミ置き場に捨てるのは近所迷惑ですわね。これは黒澤家の専用ゴミ集積場に捨てないと……」

「だくかくら！ 僕の目の前で堂々と盗まないでよ！ ゴミだけだ!!」

「みんなにやることを取られちゃったし、他には……あつ、私のおっぱい飲んでお寝んねする?」

「しないよ!! ていうか、鞠莉ちゃんまだ出ないでしょ!?!」

なんだろう、急にみんなが僕を甘やかしてる気がする……。いや、いつも甘やかされてるんだけど、今この瞬間がこれまでよりも一番甘々だ。

しかし、そんな彼女たちの誘惑に乘せられてしまうのが僕だ。自分でやらなきゃとは思うけど、千歌ちゃんたちの優しさに触れると途端に身体の力が抜けちゃうんだよね。自分がどんどんダメ人間になっ

ていくのが目に見えて分かるよ。まあ、その背徳感が快感なんだけどね。

こうして、今後もA q o u r sに甘やかされる日々が続くんだろうなあと思う反面、みんなと一緒に生活できることに嬉しさを感じてる僕がいた。

ま、人生楽しんだもの勝ちだから、これでいいの……かも??

“私達”

それはとある冬の夜の話し。

年明けの余韻が未だ抜けのない、新年早々のネオン街。辺りを見渡せば新年初売りの広告が彼方此方で目に付く。そんな午後7時半を過ぎた都心の夜道を、少女は早足で歩いていった。少女と言えど、齢は既に20を超えている。正確には、昨年20歳を迎えたというのが正しい。

高校を卒業した後予備校に一年通った彼女は、昨年念願だった都内有数の医学部への進学を果たした。

医者となつて両親の後を追う自分の夢と、スクールアイドルとして頂点を目指し、廃校を阻止するという皆との夢。彼女はどちらも本気で追いかけて、どちらもその手で掴み取った。

高校時代はNo.1スクールアイドルのメンバーとして名を馳せた彼女だが、数年のブランクを挟めば大学での知名度もたかが知れたものだった。掴んだ栄光は過去の物になってしまっても、皆で辿った歩みは彼女の心の中にしっかりと残っている。

そんな真紅の髪を靡かせて歩く彼女——西木野真姫にしきのまきの足取りは軽い。

今日は彼女の大切な仲間達が自分の為に関いてくれた、“成人祝い”の日だった。浪人中は勿論、大学に入ってからもお互いの予定が合わず再会することはなかった、大切に、大好きな“センパイ”達。それを思うだけで真姫の心は羽根が生えたように軽くなる。

が、しかしながら不幸にも、今日は6限に急遽補講が入ってしまった。必修科目故に休むことも出来ず、誘ってくれた“2人”に詫びを入れて遅れて参加する形に変えてもらい、今現在の早足で居酒屋へと向かうに至る。

「いらつしやいませー！」

指定された店内は、平日にも関わらず人でごった返していた。ピークの時間帯だからというのものもあるだろうが、居酒屋特有の熱気と臭いが一気に真姫の鼻腔を擽る。店を予約してくれた「彼女」の名前を出す、やはり既に中にいるようだった。

案内された部屋に向かう足取りは、先程の軽やかなそれとは程遠い。彼女は思い出していた。大切な先輩達と久し振りに会う、ということへの緊張を。個室の入り口の前に立ち、躊躇うこと数瞬。迷いを飲み込んで、真姫は戸を開けた。

「あ、来た！久し振り、真姫」

「もう、センパイを待たせるなんて礼儀がなっていないわねえ？」

数年振りに聞いた、変わらないその声。

優しい笑顔で自分を見つめる2人の姿を見た途端心に押し寄せた安堵に、真姫は思わず涙が溢れそうになった。

「久し振り——絵里、にこちゃん」

彼女が名を呼ぶと、2人は嬉しそうに笑った。

「寒かったでしょう？ぶごめんさい、急がせて」

真姫を慮ってくれたのは、高校生の時から変わらぬ……否、それ以上の大人の魅力を備えた女性へと成長した、絢瀬絵里。高校時代から異性を魅了していた抜群のスタイルは衰えを知らず、3年の月日は彼女に大人の色香を与え、その美貌をより完全なものへと昇華させた。僅かに感じさせていた子供っぽさも抜け、大人の女性となった彼女は、卒業してからも腰近くまで伸ばしていたロングの金髪を、首の辺りまで切り揃えていた。

「元気にしてた？最近連絡返ってこないから心配してたのよ？」

一方、真姫を非難するように見せかけて、彼女を心配する心情が隠

しきれていないのは、高校時代のツイントールを一本のお下げに変えたことで大人っぽさが増した、矢澤やざわにこ。残念ながら体格やスタイルこそ大きく成長することはなかったものの、表情や雰囲気は年齢相応の大人びたものへと変わっていた。高校時代の少女らしい可愛らしさを見事に残したまま大人になった彼女は、あの頃と変わらぬ優しい笑顔を真姫へと向ける。

「ごめんなさい……私も色々と忙しかったから」

「ふうん……なんか素直になったわね、真姫」

「何よにこちゃん、昔は素直じゃなかったみたい」

「違うの？」

「違うわよっ！」

「ふふふ……」

「もう、絵里も笑わないでっ！」

口では憤りながらも、心は嬉しさを感じていた。久々のやり取りは、確かに真姫の心に懐かしさを感じさせるもので、その懐かしさは真姫が長い間ずっと、待ち望んでいたものだったのだから。

—— // 私達 // ——

「真姫は一杯目何にする？」

「えっ、そうね……じゃあ、カシオレにしようかしら」

着て来たコートをハンガーにかけながら、真姫は絵里の質問へと応えた。それを受けた絵里は笑顔を返し、個室に備え付けられていたタッチパネルを使って注文を終える。

「はあ？アンタ何可愛い子ぶったお酒頼んでるのよ私達の前で。真姫ちゃんってばコワイ」

「なっ……いべ、別に大学生の一杯目なんてそんなもんでしょ!?!可愛い子ぶってなんかいいわよ！」

ニヤニヤと笑いながら揶揄ってきたにこに、真姫は強く反駁する。
「そう言うにこちゃんは、一体何飲んでるのよ」

「ビール以外の選択肢ナシ!!」

そう言いながら、ドヤ顔でジョッキを高々と掲げたにこ。そんな
こを見て、真姫は顔を顰めると、大きな溜め息をついた。

「……にこちゃん22歳にもなって、ネットではまだ『にこにー♡』
とか『ラブにこっ♡』とか言ってる割に飲んでるものはジジクサイ
のね。ビールなんて美味しくないじゃない」

「はん、アンタもまだまだお子ちゃまねえ、このキンキンに冷えたビー
ルの美味しさがわからないなんて……って!なんで真姫がそんなこ
と知ってるのよ!」

「だってにこちゃん、毎日SNSに投稿してるじゃないの。『#1日1
にこにー♡』って」

「あ、私もそれ見たことあるわ」

「絵里まで!?!どうして!?!」

「流石に『@Niconiconi—^{やぎわ}830』は裏アカのつもりなら露
骨過ぎ。鍵^{限定公開}アカにもしてないし、隠す気ないんじゃないの?」

「ぬわああああ!!」

頭を抱えながら大きく項垂れたにこ。そんな様子を見て、真姫と絵
里は声を上げて笑った。

「失礼します。ご注文の品です」

そのタイミングで、真姫のドリンクと絵里が適当に見繕ったツマミ
が数品届いた。それらが真姫へと行き届いた事を確認した絵里が、自
分のグラスを持って笑う。

「それじゃあ真姫。遅くなっちゃったし、私達はもう飲んじゃってる
けど……成人おめでとう、乾杯」

「ありがとう絵里……乾杯」

「ちよっと!私とも乾杯しなさいよ!おめでとう、真姫!」

「にこちゃんもありがと。乾杯」

2人との乾杯を終え、届いたカシスオレンジに口を付けた。カシス
特有の酸味と甘味がオレンジジュースに溶け、微かなアルコールと共

に真姫の体へと流れ込む。瞬間、体の奥底がカツと熱を帯びたような錯覚を覚えた。どうやらこの店のカシスオレンジはカシスの割合が強いらしい。その熱さの余韻に浸るのもそこそこに、真姫はにこへと疑問を投げかけた。

「……ていうかにこちゃん、本気でビールが好きなのわけ？最初の一杯とかじゃなくて」

「私んトコの学部、飲み会がビール縛りなのよねえー。最初は飲めなかったんだけどもう四年生だもの。後輩の手前飲まない訳にもいかないし、何より飲んでるうちにクセになっちゃって」

「ふーん……慣れって怖いわね」

「慣れといえは真姫はどうなの？もう大学には慣れた？」

「ママみたいなこと言わないでよ絵里。もう入学して9ヶ月にもなるんだから慣れたに決まってるじゃない」

「ふふ、それもそうね」

卒業から3年の月日が流れても、気楽に話せる関係は変わっていない。その事に、真姫は少しだけ安堵を覚えた。他愛のない話は盛り上がり、そこから話題が絵里とにこの進路へと発展していく。

「……そういえば、2人はもう4年生よね？進路は決まったの？」

「ん……そうね、じゃあ私から話そうかしら」

飲みかけのグラスをテーブルに置き直し、絵里は笑う。

「私の学部は知ってるわよね？」

「ええ。教育学部でしょ？」

「そう。察してるかも知れないけど、無事に採用試験に合格して、春から学校の先生になる事が決まったわ」

「へえ、凄いいじゃない！おめでとう、絵里。何の先生になるの？」

「中学校の理科よ。高校とずっと迷ってたんだけど、在学中に行った実習で漸く決心がついたの」

「なるほどね」

真姫は白衣を着た絵里の姿を思い浮かべる。確かに黒板の前に立って教鞭を振るう絵里の姿はお似合いに思えた。

「でも、絵里が先生だったら、中学生の男子は放つとかないんじゃない

「？」

「えっ、どうして？」

「あなたみたいな美人に教えられて、生徒達が羨ましいってことよ」
「もう、真姫ったら……褒めても何も出ないわよ？」

真姫の褒め言葉に、絵里は恥ずかしそうに頬を染めながら笑った。
彼女は照れ隠しのように手に持っていたカクテルを煽り、ツマミへと手を伸ばす。そんな様子を見てから、真姫はにこへと声を掛けた。

「にこちゃんは？ 確か商学部だったわよね？ 就職するの？」

「ふっふっふ、まずはこれを見なさい！」

自信ありげに行つたにこは、財布から名刺を取り出すと思ひ切りテーブルに叩きつけた。

「ん……これは？」

「私のマネージャーの名刺よ」

「マネージャー……ってええ!? まさか……!」

「その通り！ 私矢澤にこは、芸能事務所に所属することになりましたー!!」

「嘘っ、本当に!？」

「本当の本当、マジ・マジ・マジ・マジローよ」

「……それ伝わる人いないデシヨ」

「でも私の個人的な気持ちとしてはマジ・マジ・マジカって感じね」
「絵里!?! 別にノらなくていいのよ!？」

にこの唐突な宣言に心底驚愕したように驚きの声を上げる真姫。
そして僅かだが酔いが回っているのだろう、普段の絵里からは想像もつかないような発言が飛び出した事にも真姫は大きく動揺したものの、直ぐに気を持ち直し、改めてにこへと祝福の言葉を掛けた。

「……とにかく、凄いじゃないのににこちゃん。遂に夢が叶ったのね」

「まだまだこれからよ。私はやっとスタートラインに立っただけ。事務所には入れたけどアイドルとして活動していけるかはわからないし、そこは私の努力次第だと思ってる。でも」

そこで一度言葉を切ったにこは、稍あつて笑う。

「……事務所に入ることができたきっかけは、μ'sの活動があつた

からだだった」

「μ，sの……？」

「偶々オーデイションの審査員がμ，sの事知ってたみたいで。面接で『ファンだったんです』って言ってもらえた時は、正直勝ちを確信したわね」

「わあ、凄い奇跡……」

「……だから、ありがとう。アンタ達と歩んだ日々が、私の夢を叶える支えになってくれた。私に道を示してくれて、本当に感謝してるわ」

照れ臭そうに笑うにこ。その表情には嬉しさや誇らしさ、様々な感情が込められていることを確かに2人は感じ取っていた。

「ふふ、じゃあ2人の進路も祝って、改めて乾杯ね」

「おお、真姫ってばいつの間になんかいい子に育ったのかしら！」

「誰目線よ」

「そういえば、真姫の方はどうなの？」

「私？」

絵里からの質問に、真姫は目を見開く。にこも同意とばかりにその話題へと食いつきを見せた。

「そうよそうよ。どうなのよ？念願の医学部は」

「そうね……まだ1年生だから何とも。専門が何になるかも決まってるし、大学は6年制だし、まだまだこれからって感じよ」

「へえ……大変そうね、貴女も」

「授業の数も尋常じゃないもの。他の大学の基準がわからないから何とも言えないけど、基本的に週3日は1限から5限までギッシリと授業が入ってるし、残りの2日も4つか3つ授業が入ってるわ」

「げっ、アンタ空きコマ幾つよ」

「週に5つよ」

「はあ？私の授業の数と同じじゃないの！」

「あらア？にこの大学は4年後期になっても5つも授業が入るほど忙しいのかしら？」

「うっ、わ、私にも色々あるのよっ！」

絵里の指摘に、にこは気まずそうに言い返した。そんな話をしながら、飲み会はどんどん進んでいく。因みにこの3人のアルコールへの耐性はというと、意外な事に割と強い部類に入る。強いて言えば、真姫がやや弱いと言ったところだ。

にこは飲む物がビール一辺倒で、見た目に反して度数の高いカクテル系をちゃんぼんしないので、酔いにくい飲み方をしていると言える。酔い方も綺麗なもので、面倒くさい事にもならない。正と一緒に飲みに行つて楽しい人材だと言えるだろう。

絵里は血筋からかはわからないが、滅法酒に強い。が、しかしその分ペースが早い。常人が1杯飲む間に、絵里は3杯目に突入しているなんていう事もザラだ。まさしく、ジュースのように酒を飲む。しかも、ウオツカやウイスキーと言つた度数の高い酒を好むので、酒に強いの酔いが回るのが1番早いというよくわからない事態に陥るのが絵里だ。

真姫はというと、純粹にまだアルコールに慣れてないという側面が強い。飲み会に積極的に行くわけでもなく、家で好んで飲酒するわけでもない。カシオレを選んだのも、先輩にオススメされたそれを偶々飲んで、『あ、なんか美味しいかも』と思つたからにすぎない。飲み方も知らず、自分の酔い方も知らない。正しく無知、それが真姫の現状だった。

そんな彼女達の飲み会が始まつて1時間程。現在の状況というところ……。

「ちよつと絵里っ！私のアイスに勝手にケチャップ混ぜないで!!」

「これは違うのよ、にこに脅されて」

「はあ!?勝手に私を巻き込むのやめてくれる!?!」

——大いに荒れていた。

主に酔いが回つて「イイ感じ」になつてきた絵里によつて。

「まあそんなこと言わないで……」

「わ、ちよつとやめなさいよ絵里！服に手を突っ込もうとしない!」

「あ……ごめんなさい、真姫」

「もう……なんでこんなことするのよ」

「っ」

「ついで!」

絵里の暴走により、場は更に盛り上がっていく。それに連れて、残り2人の酔いもどんどん回っていき、3人は高校時代の昔話や、大学でのエピソード、恋愛関係についてなど様々な話題で笑みを咲かせた。

「はあ、ほんつとに、昔と何も変わらないわね」

酔いが回り、普段よりも僅かに上機嫌となった真姫が呟いた。

「そうね。こうして話していると、高校時代に戻ったみたいだね」

「あの頃も、こんな下らない話で笑ってたわね」

絵里とにこが笑っている。その様子につられて笑う真姫。

しかし彼女は反面——その様子を、どこか遠くから見つめているような錯覚に陥っていた。

嬉しさと楽しさで熱を帯びた心を、冷ややかな風が撫ぜる。心の中に巣食う後ろ向きな感情がもう1人の自分を形作り、語りかけてくるような感覚。

絵里は学校の先生になり。

にこはアイドルへの第一歩を踏み出し。

そして自分は、医者になるための道に行く。

数年前まで同じ場所を目指して歩いてきた自分達は、もう同じ方向へは歩けないのだと、もう1人の自分が囁いてくる。

「……そう、変わらない。変わらないのに——」

普段の冷静な彼女なら、そこから先を言うことはなかっただろう。それを言う事で何かが変わるわけでもなく、誰もいい思いをするわけではない事を、彼女は十分理解していたから。

しかし今の彼女は、それを考えることが出来る程の判断力が欠如していた。

だから、口にしてしまう。決して伝える筈の無かった、彼女の秘め

た本心を。

「——本当に、会えなくなるのね」

その言葉に、今迄とは違う何かを感じた絵里とにこの手が止まる。そんな様子の変わった2人には気付かず、真姫は頬杖をつけて窓の外を眺めていた。

「……アンタ、何言つて」

「耐えられないの、私。皆が居なくなるなんて。絵里と希とにこちやんが卒業してから、私の中の時は止まったままなのよ」

「真姫……」

遠い目をしながら、真姫が頬杖をついたまま、もう片方の手に持ったグラスをクルクルと回す。氷の奏でる甲高い音が部屋中に響き渡る程、今この場には沈黙が訪れていることに、ほろ酔いの真姫は気づいていない。

そして堰を切ったように、彼女の口から誰にも伝えるつもりになった独白モノロークが溢れ始めた。

「……勿論、にこちゃん達が卒業した後、穂乃果達と過ごした日々も楽しかったわ。みんなで学校を守れたんだ、っていう実感も持てたし」
でも。

「——それでも、私の高校時代の全ては、あの場所ばにあった」

朽ち果てた栄光と。

過ぎ去った思い出と。

今はもう無い、それでも嘗ては確かに在った、その宝物の残照だけを胸に抱いて、真姫はこれまでの日々を過ごしてきた。

高校2年生になった4月。アイドル研究部の部室に待つのは、一年前苦楽を共にした、大切な“5人”の仲間。それが全てで、それ以上

でもそれ以下でもない。新しく入った新入部員すらも、真姫にとつては有象無象に過ぎず、消えた「3人」の穴を埋めるには到底足りなかった。あの3人はもう居ないんだと認めたくない気持ちは、何年経っても真姫の心から消え去ることはなくて。

過ぎ去った思い出だと、割り切ることが出来なかった。それほどまでに、あの場所が特別だった。初めて出来た仲間と、心を許せる場所。それが僅かでも欠けたという事実には、頭は理解出来ても、心が追いついてくれなかった。

夢は叶った。勝ち取った。

——じゃあその先は？

そう考えてしまうと、もう無理だった。

3人を居ないモノとして前に進んでいく日々には、価値を感じることはできなかった。

「あの日」の選択が、間違っていたなんて微塵も思わない。『μ, sはこの9人じゃないと意味がない』。その言葉に欠片も嘘はないから。現に残りの皆はそれを受け入れ、アイドル活動を心から楽しんで来たように思える。

しかし真姫は、真姫だけは其処から動けていなかった。

先の見えない道も、この9人でなら怖くなかった、どこまででもいけると信じていた。だが3年生が居なくなった途端、真姫の両足はピクリとも動かなくなった。怯えて竦むこの足では、先の見えない道は歩けない。縦^{よじ}んば歩けていたとしても、真姫はその行為に意味を見出せずにいて。

気づけば真姫は、遠くなつていく仲間達の背中を、ただ見つめることしか出来なくなつてしまつていた。

真姫の中にあるのは、μ, sに入る前に感じていた、無限に広がるような孤独だけ。

得体の知れない、漠然とした黒い霧^{モヤ}が自分の足に絡み付いているような感覚が、何年経っても消えることはない。

自分が進んでいる道は、果たして正解なのか。進んだ先に、望む答えがあるのか。靄はいつも、真姫に問い続ける。

——『お前は何を考えているんだ』と。

そうして気づけば、真姫は練習を休みがちになっていた。作曲も納得できるようなものは仕上がらず、本気でアイドル活動に取り組めないような虚ろな自分が居ても迷惑をかけるだけ。そう思えば思うだけ、アイドル研究部から足が遠のいてしまつて。迷惑を掛けた、心配を掛けた。只々、穂乃果達に申し訳ない事をした。受験勉強を言い訳にして、大切な宝物達から自ら遠ざかる道を選んだ。その後悔は心の奥深くまで根付き、消えないしこりとなつて真姫を苛み続ける。それでも、確かに心に在り続けたのは——。

「——ずっと皆で一緒に居られればいいのに」

ぽつりと、真姫が独りごちる。

その言葉が、真姫の感情の全てだった。

——離れていく。

大好きな皆が、離れていく。

絵里達3年生組は、もう大学4年生になり、あと数ヶ月もすれば学生の身から解き放たれて1人の社会人として歩んでいく。自由な時間は更に減り、会える機会など、より限られたものになるだろう。

穂乃果達2年生組も、就活が始まつている。何時ぞやの氷河期は終わったとしても、それが大学生間で起こる最大の闘争であるという事実は変わらない。人生のモラトリアムは終わりを告げ、社会に向けて飛び立つための準備期間が始まる。

凜と花陽は2人で都外の大学へと進学し、物理的にも距離が離れて

しまった。自分が浪人した故にそれは更に顕著で、様々な面でハードルが高い。尤もそれを感じているのは真姫だけで、合えばどうって事は無いのだろうが。

皆は既に、前を向いている。

思い出は思い出に。過去は過去に。

そうじゃないのは、後ろを向いたままなのは。

間違っているかわかって、このままじゃダメだとわかって、どうすることもできていないのは。

——遠ざかる。

思っ出から、皆が。

それを受け入れられていないのは、過去に醜く縋っているのは、きつと自分だけ。

未練がましいと、嗤って欲しい。

女々しい奴だと、蔑んで欲しい。

最早そうすることでしか、自分はこの鎖を断ち切る事は出来ないだろうから。

「……何を言ってるのかしらね、私ったら」

酔いの回ったトロンとした瞳のまま、真姫は自嘲気味に笑う。

「こんなこと言ったらって、もう何も変わりなんてしないのに……今更戻ることなんて、出来っこないのに」

そこで初めて、真姫は自分の声が震えている事に気付いた。冗談でしょう——泣きそうだななんて。そうは思うものの、酔いで鋭敏になった感受性は真姫の心情を如実に表そうとしている。

「それでもずっと考えちゃうのよ——あの頃に、戻れたらいいのにつて」

無駄な言葉だと解りながらも、意味がないと悟りながらも、彼女の口から溢れ出るのは紛う事無き本心に違いなくて。だからこそ、それを理解している2人はそれを冗談はやめろと一笑する事をしなかつ

た。

と、そこで漸く、真姫は場を満たしている沈黙に気づいた。焦った真姫はわたわたと言葉を紡いでいく。

「ごめんなさいっ、こんなこと言うつもりじゃ無かったのに……変な空気にしちゃったわね」

笑顔を取り繕うも、それはこの場の空気を変えるには至らない。寧ろその気遣いを察した2人に、ぎこちない笑みを浮かばせてしまうほどだった。望まない結果に、真姫は只々焦る。現状を改善しようと思考を巡らすも、焦燥に駆られた思考回路では答えを導くことが出来ず、沈黙を選ぶしかない。

「……そんな風に考えてたのね」

その沈黙を真つ先に破ったのは、やはりと言うべきか、絵里だった。

「絵里……」

「……そうね。私もこも大学を出て更に忙しくなるし、こんな風にまた集まれるかどうかはわからない。私には私の道があつて、貴女には貴女の道がある。それは多分、同じ方角を向いてはいなくて——そしてきつと、私達が同じ道を歩くことは、もう2度と無いんだと思う」

「っ……」

「でも、それでいいじゃない」

「え……？」

「私は先生になって、貴女は医者になって、にこはアイドルを追いかけで。同じモノを頑張つて、同じ道を歩いてきた皆が、別々の道に進んで行く。それが当たり前なのよ。そして、それでいいの。」

だって、進んで行く道は違くても。

——私達が進んできた道は、同じでしょう？」

「！」

虚を突かれたように、真姫は目を見開く。

そんな真姫を見ながら、思い出してみても、と続ける絵里。

「……最初はバラバラだった。各々がやりたい事をやりたいようにやるだけの世界だった。其処から1つの纏まりが出来て、たくさん話して、遊んで、出会って……そうやって、沢山の思い出を作ってきたじゃない。そんな風に皆で同じモノに取り組んで、紡いできた絆は無くなったりしない。これから会えなくなるのは寂しいけど、きっと大丈夫。私達の友情はこれからもずっと続いて行ってくつて、私は信じてる。だってそうやって過ごしてきた日々が、今の私を支えてくれてるんだもの」

絵里が笑う。彼女の言葉の全てが、真姫の中で腑に落ちた。

——そうか、ただ私は。

——寂しかったんだ。

この繋がりを、失うことが。

大切な友人達と、もう会えなくなるのが。

やっとこの漠然とした感情に、名前が付けられた。自分の足に絡みつく、靄の形をした怪物が、『今更気づいたか』と笑っている気がした。そんな真姫に差し伸べられた、2つの掌。

その先で笑顔で待ってくれているのは、8人の大切な仲間達。

——そういうことだったのね。

「……そうね、そうよね」

今度はもう、我慢することはできない。

涙を流しながら、真姫は笑った。

——絵里の言う通りね。

どんなに悲しくても、嫌だと嘆いても。

必ず別れというものは訪れる。

けどそれは、決して今までの繋がりが無くなるというわけじゃない。

どんなに遠く離れていても、もう2度と会えなくなつたとしても。

「創^つってきた^思作^い品^出達が、必ず私達を繋いでくれる。

だから私は——この別れを、受け入れよう。

この別れも、いつか大切な思い出になつて、私を支えてくれる宝物になるはずだから。

その全てを大事に抱えて、私は前に進んでいこう。

「……何よ真姫、泣いてるの?」

「うるさいっ、わよ、にこちゃん……っ」

にこからの揶揄いに反撃する余裕もない程、真姫の涙は止まらない。それは繋がりが無くならない事に気づけた安堵故か、今迄穂乃果達に酷い事をしてしまったという後悔故か、受け入れられたとしてもやはり心を襲う寂寞故か、それともその全てが一緒くたになつた感情故か。

それは誰にもわからない——彼女自身にさえ。

止め処なく溢れる涙を真姫が拭い。それをにこが焦りながら忙しなく宥め続け。更にその様子を絵里が優しい笑顔で見つめ。そんな光景が、数分間も続いていた。

やがて泣き止んだ真姫が、憑き物が落ちたように、今日1番の笑顔で笑う。

「ありがとう。私、2人に会えて本当に良かった」

その言葉に、2人は面食らつたかのように固まっていたが、稍あつて優しい笑顔を返した。

「私達も、貴女に出会えて良かったわ」

「ま、それを高校の時にも言ってくれたら、もつと嬉しかったんだけど

ねえ」

「……ほんつと昔から、一言余計なのよにこちゃんは」

「にこへと皮肉を返せる程には、もう真姫は回復していた。そんな彼女の様子を見たにこが、にんまりと口角を釣り上げる。

「……よっし！真姫の悩みも解決した事だし、今日は飲みまくるわよ！とりあえず生ビール3杯！」

「ええっ!? 私はビール飲まないんだけどっ！」

「なによ、このにこにーの頼んだ酒が、飲めないっての!?!」

嫌がる真姫の頭を、にこがくしゃくしゃと撫でる。そんな様子を、絵里が笑顔で見つめていた。

今、この瞬間を笑って過ごせる。

それこそが、自分達で紡いできた絆を示す、何よりの証で。例え目の前に広がっているのが、行く先の見えない暗がりの道だとしても、後ろを振り返れば、その絆が自分の背中を支えてくれているのだと。そんな単純なことに気づくのに、3年もかかってしまった。

—— “さようなら、ありがとう”

私はもう、自分の足で歩いていける。

そして皆との思い出を、私は絶対に忘れない。

“私達”の関係は、例え会えなくなったとしても続いていくんだと、やっとな確信を持つ事が出来た。真姫は、3年経って漸く前に進めそうな気がしていた。

——それは寒い冬の夜に、大切に大好きな先輩達がくれた、確かな予感だった。

独語、桜散る前に。

これは私の独り言であり、決別であり、独白だ。

桜が咲き乱れている。

今日は三月の最終日。流れる季節は途方に暮れてしまう程に早く、過ぎ去る時間はあくびに比例するほどに一瞬だ。

最近私は”時間”というものが怖く感じる。

皆と居た時間の速さと、一人で過ごす時の時間の速さがとても同じ長さだとは思えない。思いたくもない。

卒業式が終わり、?’sとしてのラストライブも終わった。矢継ぎ早に過ぎる季節は、私たちにはあまりにも残酷過ぎた。

思えば私たちが、九人が?’sとして活動してからの期間は極僅かだ。

男女の平均年齢を併せて、人の一生が八十歳だとする。

一年が十二カ月で、それが八十回。九百六十カ月。その中で私たちが高校生として同じ時を過ごせたのは、たった十カ月。

六月に私と希が加入して、今が三月。

私は最初、反対だった。

生徒会長として、廃校を阻止できるようにどれだけ行動しても報われない結果や実態。

あの時の私は自分で自分を追い込んでいたのだろう。それでも、廃校してほしくない思いは確かにあった。

現実には甘くなく、その思いが良い方向へと動くことは決してなかった。

あの時の私は何と戦っていたのだろう。

仮想敵と、来る日も来る日も戦って、報われないままに終わって。

絶望や挫折と寄り添って、人のことを敵視して。穂乃果達のこと
も、初めは甘い考えで遊びの延長線だと思っていた。

自分がどんなに頑張っても成果が出なかったことに対して、絶対に

できると豪語して実行しようとする彼女たちが眩しくも恨めしかった。

心の雨は止まない。それでもこのまま終わりたくないという気持ちだけは募っていく。

敗北しても、廃校してほしくなかった。今思えばなんで廃校になんて反対していたのか、少し不思議に思ってしまう部分もある。

だけど、それほどまでに私は、私たちは廃校を拒んでいた。つまるところ、私たちの歌はある種のシユプレヒコールだ。

?'s にこが入ってから動きは早かったように思う。

その勢いが余りにも凄すぎて、圧倒されて、私が何をしても駄目だと負い目を感じている間にも勢力を増す彼女たちが眩しかった。

六月。全員が揃って私も一緒に誘ってくれた。隣に居た希も入って、?'s は九人になった。

あの時誘ってくれなかったら、今はない。

結果論でしかないけれど、それでもあの時の選択がすべてで、あの時に戻るとしても私はきつと同じ道を辿る。

廃校を阻止するべく、もう一度と立ち上がった九人。

希望も救いもなかった。あの時のあの場所で、初めて希望が芽吹いた。陰が出来るなら、光が射しているということだ。

ここからが私たちの旅の始まり。穂乃果達は四月から旅を始めていたけど、その列車に私と希を乗せてもらった。乗車した六月。

心に雨が降っていた私に、傘を差し伸べてくれたのが皆だ。現実を見るばかりの悲痛で、雨に打たれていた。

諦めの果てで立ちすくんでいた私に、それでもって声を掛けてくれた八人。

何度も立ち上がる強さを見せてくれた穂乃果。

穂乃果の澆漉な明るさには、すごく助けられた。太陽のような女の子だと私は思う。

いるだけで場が明るくなったり、良い意味で感情が分かりやすかつ

たり。そんな所が年上としては可愛く思うし、リーダーとしての頼もしさも感じた。

誘ってくれたことは今でも感謝してる。この先も。私一人だった静かな部屋が、あなたの試みでとても明るくなった。

どこにも行けない、どこにも行かない状態だった私を、孤独という部屋から連れ出してくれたのは穂乃果。そして皆。

正しさなんて要らないと思った。希望を絶やさないように、皆で少しずつ歩んだ日々。

アイドル経験なんてあるはずもなく、にこはスクールアイドル経験が少しあったけれど、他の八人は素人。

最初は戸惑うこともあった。躍りながら歌うという行為は思った以上に体力がいるし、フォーメーションや曲構成、基礎。覚えることは山のように出てくる。

大変だと思っても辞めることをしなかった。それは廃校阻止という目標があつて、何よりもその日々が楽しかったから。

初めてステージに立った時の緊張は、今でも覚えている。斜光粘膜に囚われたかのような、漠然とした意識の果て。時間があつという間に過ぎて気付けば終わっていた。

残った感情は”楽しい”という想い。皆で歌って踊れることが楽しい。これが大勢の人に見てもらえたら、きつと廃校だって阻止できる。

今思えばあれが奪還の航路が開けた瞬間だった。

でも、それと同時に、終わりへの逆算も始まっていた。

私はアイドルになってから、言葉の大切さを更に理解した。

歌う時の歌詞。?’sのメンバーとの意思疎通する会話。フアンの人へ贈る言葉。日本語は溢れるほどに多くて、どの言葉を使えばいいかわからなくなってしまふこともある。

言葉が持つ力は巨大だ。私たちが飛び乗った?’sという列車は、言葉という名のレールを走っていた。言葉から言葉へ。会話や歌を伝って、先へ。

往復することもなく、何万キロ走ったのだろうか。

その時に歌った言葉、歌には種子をつけて。聞いた人々の心に植えて。いつか、何かしらの形で芽吹いてほしいと願って。

言葉の大切さを強く知れたのは、海未のおかげ。

最初にすべての曲を作詞していると聞いたときは、本当に驚いた。

そしてその曲のどれもが、同じ毛色の歌詞ではなく三者三様十人十色。それぞれ違う色の輝きを持っていた。

歌詞は人の心に残る。好きな歌手の歌は歌詞カードを見てどんな歌詞なのか見たくなるし、街中で流れている音楽も歌詞が素敵で気になることだってある。

人は学生の時に聴いた曲を、生涯忘れることなく口ずさむと聞いたことがある。

それなら私は聴いただけではなく歌って踊ったのだから、一生どころか来世にすら持っていけちゃうかもしれない。

それくらい大切な歌詞で、大切な曲で、大切な仲間。言葉は育つ。自分の中で、時の中で、あなたの中で。

もしも私がこの道を辿ってなかったら、そんなことを最近は考える。ものすごく勉強して、頭の良い大学に行って出世街道を歩んでいた

だろうか。

やりたいことを見つけて、その目標に向かって必死に取り組んでいただろうか。

一人で廃校阻止しようと、躍起になって失敗していただろうか。

たられば話に過ぎないけれど、そんなことも妹の寝顔を見ているとちっぽけな話に思えてくる。

違う道を歩む私がいとしたら、それはもう私ではない誰か。絢瀬絵里という名の、別人。

こんなことを考えても後悔はない。

私は今の私を誇りに思っているから。

こうして写真を見て思い出しながら、ペンを握っている今だけど、見返すだけでその時に飛べるような気がする。

数々の衣装も、?’sを作り上げる大きな要因。それをことりが全て作っていたのだから、作業量は想像もつかない。

曲やイベント毎にコンセプトやニュアンスを変えて、誰が見てもかわいいと言うような、記憶に残る衣装の様々。

ことりは努力を見せない子だ。少なくとも私が知っている限りにおいてはそうだった。

きつと夜も深くまで衣装を作っていただろうし、その笑顔を絶やさない姿も裏では努力をしていたはず。

私以外にも、きつとみんなも気付いている。気丈に振舞うことりは優しさと一緒に強さが同居している人。

そんな姿にメンバーも励まされたし、負けてられないという刺激も貰った。

意識一つで世界が変わる。私も、?’sも、これを読んだ人にもそれが伝わることを願って。

九月は鮮明に記憶に残っている。刻み込まれた夏の行方は、きつと私たちの心の中に。

学園祭のライブで穂乃果が倒れた時は焦りで満たされて、先行きが分からなくなった。

先輩なのにこういう時に先導できないと、自分の小ささを実感する。それでも私たちは前を向けた。

何よりも廃校が阻止できた。悲願の達成とでも言うべきか、私たちは無事目標を成し遂げることが出来た。

それでも壁はまだ立ちはだかつて。ことりが留学することになったり、それを穂乃果が止めに行ったりと落ち着く間もなく九月は過ぎていった。

講堂で行ったライブは満員で、見たことのない景色がそこにあった。

私を、歌を、踊りを見に来てくれた人があんなに沢山いたこと、それこそが夢の世界で現実との隔離。

アイドルは偶像だということを、今なら理解できる。

アイドルとしての一生を、蛍火として駆け抜けた私たち。

”輝きたい”それがいつしか夢から現実へと変わって、踏み切り越しに現実と夢の境界線を見た気がした。

描いた夢が現実が変わっていったのも、メンバーが同じ意識を持っていたから。

共通認識というものは大事で、人と人のコミュニケーションは必要以上に取りないと相手のことが分からない。

海未の作詞事情と同じく、真姫が全曲作曲しているということを知った時は驚きを隠せなかった。

そもそも真姫はアイドルの曲をそんなに聴いているタイプではなかった。

勉強したのだろう。彼女が書く楽曲のどれもがキャッチーで、アイドルが歌うにふさわしいメロディーの数々。

バラード調のものから、テクノ、ポップやロックなどにかく幅が広い。

真姫の曲がなかったら？ sはここまで大きくならなかった。そして真姫がメンバーじゃなかったら、それはもう？ sではない。

少し恥ずかしがり屋で、本音が言えないけど誰よりも？ sを大切に思ってくれてる。そんな真姫。

音楽で人を元気付けれるとするなら、それは真姫と海未のおかげだ。私たちの声と、真姫の曲、海未の歌詞が繋がって？ sの曲として完成する。

音楽は続く。歲月の中で、日々の中で、心の中で。

ラブライブの地区予選で歌ったユメノトビラは今でも鮮明に覚えている。

A|R|R|S|Eと合同で行った地区予選。始めは穂乃果の唐突な思い付きと、チャレンジ精神によって事が進んだけれど、今思い返すと

良い緊張感を持てたと思う。

ユメノトビラは大切な曲。地区予選を勝ち上がったただけではなく、私たちの夢のチャンスを与えてくれた曲。

まさに夢への扉を開いてくれた、道しるべになってくれた曲だ。当時の動画は今でも携帯にちゃんと残っている。見返すことだってある。

そういう時に、私は？'sのことが大好きなんだと実感する。？'sは私に夢を与えてくれた。その扉の開き方まで教えてくれて、先に進む方法まで教えてくれた。

？'sと共に成長してきた、十七歳の終わり。

穂乃果達が修学旅行に行っている時には、ファッションショーでのライブをやらせていただく機会があった。

それまで元気はあっても、意見を持つて前に出てくることはなかった凜が初めてセンターに抜擢されたイベント。

あの時、凜は悩んでいた。女の子としての自信がない凜と、勇気が踏み出せない凜が合わさって壁を作ってしまった。

前の私と似た状態。どうせ私なんかという、固定された概念に囚われた内側の世界。

凜はまだ一年生。それなのに自分を抱え込んで、自分を説き伏せていた。元気な反面内気で、自分を隠してしまいがちな凜。

それでも凜には花陽という友達がいた。二人はいつも一緒に、楽しいことは何でも分かち合うほどの仲の良さ。

穂乃果と海未、ことりの三人も目に見えない絆で結ばれていたけれど、花陽と凜も周りから見て仲が良いんだろうとすぐに理解できる。双子のような二人。

花陽と真姫。二人に背中を押されて、結果的にはセンターに立つことを決めた凜。

私たち三年生はそこを詳しくは知らないけれど、きつと一年生皆で話して、頑張つて決めたんだと思う。

その頑張りを私は称えたいし、凜の自分を変えたい気持ちは嫌というほど分かる。

私は思う。

言葉にならない気持ちこそ言葉にするべきだし、例えようのない事こそ例えるべきだと。

言葉は自身を定義する。言葉は自分を作る。言葉は相手と自分を育てる。

気持ちを押し殺していても、黙っていても何も始まらない。

最終予選で歌ったSnow halationの光景は一生忘れることはない。

穂乃果のソロで橙に包まれた会場は皆の家族も見に来てくれて、多くのファンの方も来てくれた。

まさに夢の空間。アイドルが夢を与える職業というのはよく耳にするけれど、人々に夢を見させてもらっているのもアイドルということが手に取るように理解できた。

アイドルは夢を与えるだけじゃない。夢を与える権利を周りの人にたくさんもらって、その上で成り立つ関係なんだ。

東京予選突破。その影響は大きかった。スクールアイドルが全国的に流行っているとはいえ、こんなにも大きい反響を頂けるとは思ってもいなかった。

私たちの?'sという名前は、多くの人を巻き込み巨大化していた。

私たちだけでは表せない、大きな存在。家族やスタッフ、学校の皆やファンの方。そしてメンバー。全てが合わさって?'sが出来るんだ。

穂乃果が言ったみんなで叶える物語っていう物語は、随分前から始まっていたみたい。

そしてその物語を進む列車に、皆が乗っていた。乗ってきてくれた。

どんどん勢いをつけて、行き先が明るくなって。その代わり、残酷なほどに早く過ぎるのは時間。

私たちの車両には、時間という名の女の子が同乗していたらしい。

ここまで私たちが来れたのは、意識が一つに向いていたというのは本当に大きいと思う。

何を成し遂げるにしても、意見を揃えるのは大切。同調圧力ではない、共通認識。

その部分に置いて、ここは本当に頑張ってくれた。

ここが過去にスクールアイドルをやっていたのは知っている。

周りがここに合わせられなくて、辞めていったことも。

だからここは嬉しかったのだと思う。穂乃果達と同じ歩幅でしっかりとついてきてくれることが。

ここが先陣切って一年生や二年生に教えてくれたから今があるし、この関係が続いている。

家ではちゃんとお姉ちゃんしてるのに、メンバーの前だとちゃっかりアイドル全開になるところも、意識の一つで。

私は妹の前でそういうことが出来ないし、むしろ良いお姉ちゃんとして妹の中で存在できているのかも分からない。

願わくば、私もそうでありたい。

にこみたいに、周りを笑顔にできる存在。”につこにつこにー”という言葉は、今やにこの決め台詞というよりは笑顔の魔法みたいに感じる。

笑顔を届けるのがアイドルだとしたら、私たちは笑顔を届けられるくらいに日々を大切に生きなくてはいけない。

全国大会の最終ステージ。アンコールが巻き起こり、私たちはそれに応えた。

僕は今のなかで。頭の中で感じることは、楽しい感情と感謝の連鎖。

私たちをここまで連れてきてくれた人たち。

支えてくれた家族の方々。

メンバー。

様々な思いが混ざり合わさって、?sを象った。

僕らは今のなかでという曲は、聴けば聴くほど?'sの為にあるような曲だ。

突き進むことの躊躇いのなさ。未来は怖くないという自己暗示にも似た指標。考えるよりも行動すること。

今までの私たちが、赤裸々に書いてあるような気すらして。

私たちを進ませてくれた、勇気の歌。

この歌が、言葉が、メロディーが、聴いてくれた人たちにはどう聴こえていたのだろう。

小説やテレビ、ラジオに映画、インターネット。そして音楽。

友達との会話、親とのひと時。

言われて嫌だった言葉、嬉しくてたまらなかった言葉。

喜びや悲しみ、怒りに安心。

積み重なっていった思い出が、過ぎ行く季節に反射した。

思えば早いものだった。

思い返せば返すほど、夢のような時間で、もう戻っては来ない時間。

この先忘れることはなくて、この先在り得ることのない時間。

卒業式は穂乃果のサプライズに驚かされた。

私たち三年生は皆泣いていた。今までの思い出が溢れ出て、止めどなく空へと流れていた。

希が泣く姿は、あまり見たことがなかった。

私と一緒に、希も自分のことを隠しがちだ。?'sのことが本当に好きだということは伝わるけれど、感情を表に出すことはあまり多くない。

私にとって希は一番の理解者。

私の気持ちをすぐに汲んでくれるし、私だって希の考えていることはなんとなく分かるようになった。

きっとこれからもその関係は続くし、色んな相談をこれからも希にするんだろう。

泣いている私たちが空へと歌った言葉。愛してるばんざい。

学校も、家族も、メンバーも、愛で溢れた卒業式だった。

卒業したという事実は、私たちを先に進ませた。

”卒業したという事実は、私たちを先に進ませた”という事実は何よりも受け入れがたい終わりの始まりでもあった。

アキバドームでの第三回ラブライブ開催決定。

それが私たちに飛んできた、一通の知らせだった。

私たちはニューヨークに行き、ラブライブの知名度を上げるためのライブをすることになった。

急すぎる話で、卒業式が終わった後にすぐ始まったこの話。

三月中は一応私たち三年生も高校生ということで、それに協力することになり？s解散はお預け。

皆で踏み入れた海外は未知で溢れていた。

多少のハプニングもあつたけれど、乗り越えてここに立っている。トレーニングも忘れずに行ったり、勿論観光もちやんとしたりして。

まるで解散なんてなかった事のように物事がどんどん進んで、このまますつと一緒に過ごすかのような空気が流れていた。

そして始まったアメリカでのライブ。

日本の良さが伝わるように、ことりが日本の着物から着想した衣装を作ってくれて海外の方々にも注目を浴びることが出来た。

でも、海外の人よりも日本での反響の方がすごかった。

モニターを通して日本でも放送されていたそのライブを、大勢の人が見てくれていた。

空港では所謂出待ちというものを経験し、自分たちが以前より大きな影響力を持ったということかを否が応でも実感することになる。

私たちは悩んだ。ここまで存在が大きくなってしまった？sを、本当に解散してしまつていいのかということ。

それでも、一度決めたことだから。

私たちは皆で決めて、誓った。それをなかつた事にはしたくない。人気になったから解散をなかつた事にしようとは、思いたくなくなつた。

自分たちの意志が一番大切。それを教えてくれたのは？sだから。

?'sには私たちが一番正直で居たかった。正直に向き合って、正直な最期を迎えたかったから。

私たちは終わることを私たちの手で選んだ。

スクールアイドルは学生のアイドル。私たちはアイドルではなく、スクールアイドルでいたい。

限られた時の中で、輝き続けたい。その輝きは私たちの後に続いて、後世のスクールアイドルが絶やさずに灯し続けてくれる。

?'sが終わることに恐れる事なんて、何一つなかった。

アキバドームのイベントの告知をするために穂乃果が思い付いたのは、全国のスクールアイドルと合同イベントをやること。

全国で活躍するスクールアイドルに声を掛けて、秋葉原の歩行者天国でのライブ。

秋葉原ライブの準備、最終日。私たちは自分の意志で道を決めて、自分の意志で解散を話した。

翌日、弾ける楽しさが溢れた。あの時の景色は壮観だった。スクールアイドルが、心を一つにした瞬間。

そしてアキバドームでのラブライブ。最後のステージ。

事実上の解散ライブだった。

この日の為にことりは衣装を作り、海未と真姫は曲を書き下ろした。

僕たちは一つの光。

?'sのことを歌っていて、それでもついてきてくれたファンのこともちゃんと想っている歌詞。

私たちらしさが伝わる、ありがとうを届けたいメロディー。それ以外例えようがなかった。

今が最高。

それが最後のメッセージ。

私たちは時を駆け抜けた。何かが作用しているかのような、あまり

にも早すぎる時を駆け抜けたんだ。

その中で辛かった事なんてない。いつも”今が最高”だった。

先へ先へと進んで、その方向全てが最高で、あの場所に立っていた。私たちの夢は終わった。

醒めたわけじゃない。夢を見終わったんだ。

廃校阻止という学校単位のことから、世界を巻き込んでラブライブという大舞台でのライブ。

過去の私に言っても、きつと信じてくれない。

この文を読んでも、メンバー以外はピンと来ないかもしれない。

九人で見えた景色を、一つずつ拾い集めているだけなのだから。

隣にいた八人にしか分からないこともある。

それでも私はこれを読んでいる人に伝えたいこともある。

この文章を読んでいるのは、?’sのメンバーだろうか、知らない人だろうか。

それとも誰も読んでいなくて、未来の私への言葉になるのかな。

私はこの半年で感謝しきれないほどの素敵な経験をさせてもらった。

そしてアキバドームのライブで、?’sは解散した。

もう再結成することはない。私たち九人が集まることはあっても、

それはもう元?’sだ。

?’sはもういない。終わってしまった。

終わりにたくなかった。

好きだった。

?’sが大切に。

あの空間が好きで、メンバーが好きで、夢で。

身に余るほどの大役もやらせていただいで、それでも九人でスクラムを組んで乗り切った。

どれくらいかの奇跡が重なって、今ここに立っているのだろう。

溢れてる胸の中に、見終わった夢の模様が溢れる。

そこには絶対的にメンバーの笑顔があつて、そこに私もいる。

奇跡を待ってても何も起こらない。迎えに行かなくては始まらない

い。

捨て身の覚悟でやったなら、報われなくても後悔しないと教えてくれたのは?’s。

泣き笑った顔も、驚いた顔も、弾けるような笑顔も、そのどれもが愛しくて。

この先何があっても、私たちは見えない力で繋がってる。

時を過ごした重みが、言葉を交わした重みが、私たちを作り上げてくれた。

言葉は正直だ。

伝えなければ始まらない、伝えなければ分からない、伝えなければ変わらない。

想いが想いと繋がって、人々を形作っていく。

動き続けた長身と短針は、振り返ってみるといやに短期間。

胸に回想すると、走馬灯のように。

ここからの道は背中合わせの方向。

気持ち紛らわすためのいい方法があるなら、教えてほしい。

こんなにも大きくなってしまった私たち。不覚とまで受け取れる、心を侵食した?’s。

なんでもなかった時間が、いつの間にか何にも代え難い思い出になった。

最後の授業、最後のライブ、最後の卒業。

何か伝え忘れたことはないかな、そう考えてはまた虚しくなって。皆とこのまま一緒にいたいって思ってしまったって。

エンドレスにループして、現実を見て。

先へ進む気持ちと、?’sから離れられない気持ちと同棲している。会おうと思えばいつでも会えるのに、不思議だ。

これを書き終わったら、?’sが本当に終わってしまう気がして。

涙が止まらない。

それでも私たちは、前を向かなければならない。
もう、終わってしまったから。

私たちがソレを選んだのだから。

自分が示した道を進む。

点はいつかきつと線を結ぶ。

明日は必ず今日を含む。

未来を空想しては、また前を向く。

列車はもう止まって、先を急いでいた同乗した時間はもう姿も見えない。
ない。

その姿さえ、思い出せない。

時が過ぎることは怖くない。

前を向くべき時が来たと思えば、何も怖くない。

これで?'sは終わり。私たちは明日から、スクールアイドルではなくなる。
くなる。

向き合うことは怖くない。

それを教えてくれたのは?'sだ。

上手くいくかなんて、誰にも分からないけれど、前を向かなければいけない。
いけない。

私を肯定してくれた家族やファン、そしてメンバー。

それだけで十分だった。

私を肯定してくれるなら、私も私を肯定するよ。

その肯定が、私を肯定してくれた一人ひとりを肯定することになるのだから。

'sは夢。

いつか終わる夢を見ていて、夢を見終わった私たちは解散へと辿り着いた。

その景色はいつまでも忘れることはない。

いつまで経っても、応援してくれた人のことは覚えている。

支えてくれた家族には、感謝しても感謝しても足りないくらいの感謝を。
謝を。

応援してくれたファンには、精一杯の勇気と元気を。
やりたいことがあるなら、諦めないで。夢だと思わないで。きつと
叶うから。

誰にでもチャンスはある。私たちがそうだったように、夢を見る権
利は誰にでもあるんだから。

そして一緒に居てくれたメンバーには、もう思い付かないくらい色
んな感情。

一言でごめんなさい。それでも、これ以外言えることがなさそうだ
から、言わせてください。

だいすき

そしてこれは時を経て、懐かしんで読む私へ。？ s 解散したての十
八歳の私から。

人生は一方通行。どうか、ただ前だけを。

春が外で躍るようにはしゃいでいる。

今年の桜は咲くのが少し早かった。

卒業式の時にはもう咲いていた。今は三週間が過ぎた。

日に日に時は削られていく。

高校三年生。一つ一つに最後がついた年を？ s で過ごさせた事は、私
にとって人生の財産。

改めて、全ての人に伝えたい。最高の時間を、ありがとう。

この先を見据えながら歩き出す、青い春のおわり。

書き始めた時は部屋の窓に写り込んだ桜も、今では違って見える。
だから最後は、書き始めた時の文と揃えてみようかな。

これは私の独り言で、決別で、独白。
伝えたいことは、まだまだ足りないけれど。

もう、桜が舞い落ちる。

ひかりのまち

薄暗く、ヤニの匂い部屋。

それが今の俺の居場所。

「あー……」

闇の中で一際輝くモニターから目を離し、両目をこする。くそ、これ何徹底目だ？

締め切りが近づいているというのにモニターに表示される譜面はほとんどまつさらも良いところ。作っては気に入らずに消して、消してはまた作る、そんな作業の繰り返しで果てに出来上がったのがこの白紙。

昔の俺ならこんな状況に皮肉の一つでも言って自らをあざ笑ってたんだろうが、今はそんな気すら起きやしない。

すり減って余裕がなくなったのか、はたまた成長したのか何なのかは知らないけれど、とにかく俺も歳をとったのは確かだ。

「ちっ……」

舌打ちを一つ、手元に置かれたグラスをあおる。

溶けた氷で薄められ、生温くなったウイスキーで喉を潤し、続いてタバコに火を点ける。

まったく、酒やタバコは偉大だ。一時とはいえ嫌な事を忘れさせてくれる。

「色々、あつたよな……」

ふと、首だけを動かしてみれば、棚に飾られた写真が視界に入ってきた。

満面の笑みを浮かべる9人の少女たちと、彼女達と一步離れた場所で照れくさそうにそっぽを向いた少年。

ラブライブ優勝の記念にとった写真だった。

5年か……

こんな時に限って思い出すのはあの時の事ばかり。それ程までにあの出来事は、あの出会いは忘れられないことなのかもしれない。

かつて出会った9人の少女達。今にして思えばあの出会いは紛れ

もない奇跡だった。

あの子達がスクールアイドルなんて夢を持った時、たまたま、彼女の近くに俺がいた。

たまたま俺は音楽が出来て、たまたま俺はその時夢を諦めかけていて。

そんな偶然の積み重ねが、俺達を引き合わせた……なんてどんな三文小説の出だしだよ。

あの頃は若かった。最近常々そう思う。

巻き込まれては学ばされ、無茶をやらされては笑い合った日々。彼女たちを導こうと躍起になって、逆に彼女たちに導かれたりしてる内に、燃え尽きた心にまた小さな火を灯す事が出来た。

灰色に錆び付いた夢は、また別の色で輝き始めた。

奴らには感謝してもしきれない。四年前は俺もガキでお礼の一つもまともに言えやしなかったが……

「邪魔するわよ……ってタバコ臭っ！」

不意にドアを開く音、それから俺の名を呼ぶ聞き慣れた声。

まったく、俺が考え事してるとすぐにこれだ。感傷に浸ってる暇もありやしない。

「いつも言ってるでしょ？エアコンついてても換気くらいちゃんとしなさいって！」

「へいへい。分かったよ」

吸いかけのタバコの火を消して、伸びを一つ。

座りっぱなしで凝り固まっていた体がバキバキと音を立てる。

「それに何、この大量のカップ麺のゴミ!?!ご飯は体の基本よ?ちゃんとしたもの食べてるの?」

「お前は俺のおかんかよ……」

呆れ笑いを浮かべて振り返れば、可愛い顔に怒った表情を浮かべた女の子が一人。

矢澤にこ。

さつきまで考えていた小娘のうちの一人……いや、今はもう小娘じゃない。

「つたく、お前も暇だな。休みのたびに俺なんかのここに来て」

「は？わざわざこの私が生存確認しに来てあげてるんだから感謝しなさいよ」

生存確認ときたか。

わざとらしく肩をすくめて見せて、大人しく窓を開ける。

締め切った部屋のよどんだ空気が吹き込む風に溶けていき心地が良い。沈みつつある日が目にまぶしい。

部屋の窓から見る夕日に照らされる街は、思わず息を飲むくらいに綺麗に見えた。

「まったく。相も変わらずしょうがない人ね。ご飯まだでしょ？台所借りるわよ？」

「お前、勝手に」

俺が止める間もなく彼女は台所に立つと、買い物袋から、どうやらさつき買ってきたばかりらしい食材を取り出して調理台の上に並べていく。

「このスーパーアイドルにこーが腕によりをかけてあげる。光栄に思いなさい！」

「いや、あのな……」

スーパーアイドル

彼女が昔から事あるごとに言ってきた将来の夢。それは今やただの夢ではなく、現実味を帯びたものとなっていた。

高校を卒業してからも日夜自分を磨き続けた彼女は、今やテレビにライブに、引っぱりだこの売れっ子アイドルだ。

まだ彼女のいうようなスーパーアイドルとはいかないものの、その夢ももう手を伸ばせば届く所まで来ている。

矢澤にこ

5年前に出会った少女。

彼女とは今もまだこうして縁が続いていた。

だが……

「……スーパーアイドル様が休日返上で得体の知れない男の家になんか来て良いのかよ？」

アイドルに恋愛沙汰は御法度。このご時世、下手な事をすればすぐに週刊誌にすっぱ抜かれてあることないこと書き立てられるのには目に見えている。

普通に心配なんだが。

「大丈夫よ。あんたの事はさすがのゴシップ屋もノーマークだから。張り込みなら今私と噂になってる若手俳優さんのとこじゃない？」

ノーマークか。

そりやそうだ。いくら何でも接点も何もない奴のことなんか張り込んでまで調べる物好きはいないだろう。

それはそうなんだが……ん？

「噂になってる、若手俳優？」

「そ。……え？ニユースとか見てないわけ？」

ふと気になって尋ねてみると、にこは野菜を刻む手を止めて俺を振り返る。

「いや、最近俗世に疎くてな」

頭を掻きながら、スマートフォンで検索をかけてみると、なるほどすぐに彼女の言っていた意味が分かった。

画面に出てくる熱愛報道やら彼氏の疑惑など、五月蠅いくらいの恋愛沙汰の記事の数々。

「ああ、なるほど」

これならマークはそっちのお相手の方ばかりにいく事だろう。さすがに文屋共も四六時中にこの事をつけてはいないだろうし、よしんば彼女が外出したのを知ってもお相手のところに張り込みが行く訳か。

しかし……

「あんた、少しは世間にも興味持ちなさいよ……って、どうしたの？」
俺が顔をじつと見つめているのに気がついて、にこが問いかけてくる。

「いや、なんでもない」

適当にはぐらかす。

彼女も五年のうちに随分成長した。

元から整っていた顔立ちはさらに磨きがかかっている。

身に纏う雰囲気も落ち着きを見せ始め、今の彼女はかつての俺が知っていた可愛らしい少女ではなく、美しい女性へと変わりつつあった。

ならば、浮いた話の一つや二つ出てくるのは当然のことだろう。むしろ今の今までそんな話がなかった事のが不思議なくらいだ。

アイドル的にはどうかとも思うが、これはこれで喜ぶべきことなのかも知れない。

……でも何でだ？胸の奥がこう、もやもやというかちくちくするのは？

「しっかし、矢澤ちゃんに浮いた話とはな。だが、余計に良いのかよ？彼氏ほつといてこんなおっさんの所に来てて？」

「……は？」

きよとんとした顔で、今度はにこが俺を見つめる番だった。

あれ？俺変なこと言ったか？

数秒間、謎の沈黙があつたかと思うと、彼女は包丁を片手に持ったままずかずかと俺の前に歩いてきて、

「あだッ!？」

グーで鼻っ柱ぶん殴られた。

「ちよつと！今の話のどこを聞いたらそんな話になるのよ!?!彼氏!?!違うに決まってるでしょ!？」

あれ？そういう話じゃなかったっけ？

思わぬダメージで涙目になりながら首をかしげる。くそっ、こいつ本気で殴りやがった

「あのね！あの人は前にバラエティ番組で共演しただけ！そこから何故か話が飛躍してこんな事になってるだけよ。アイドルに恋愛沙汰は御法度って昔から言ってるでしょ?！」

「お、おう。分かった、分かったから！俺が悪かった!！」

あまりの剣幕にうなずく。

「そ。分かればよろしい」

「ああ、だから……その、なんだ、包丁降ろせ」

「あ、ごめん、うっかりしてた」

はっとしたように彼女は俺の目の前に突きつけていた包丁を降ろした。

全く、何がうっかりだ。そのうちこの子にうっかりで刺されやしないかとヒヤヒヤするぜ。

「ともかく、今回の噂には音も葉もないんだからね！」

言い捨てて彼女は調理に戻る。

そんな執拗に言われなくても分かっているんだが。それとも俺はそんなに信用ならないか？

それはそれでちと寂しいな。

「ぎ、出来たわよ」

丁度俺が部屋の中を片付け終わる頃、美味しそうな匂いを連れてここが台所からやってきた。

ほうれん草のお浸しに、きんぴら牛蒡。サンマの蒲焼き、炊きたてご飯。おまけにわかめと豆腐の味噌汁まで。

まさにお袋の味って感じの献立だ。

「いただきます」

味噌汁を一口。

暖かで滋味に満ちた味わいが五臓六腑に染み渡る。ああ、俺、日本人で良かった……

「美味い……生きてて良かった」

「そんな大袈裟な」

呆れたように言ってくるが、褒められて嬉しそうな顔に出てる。

そんな顔を見ると、つい、からかって困らせてみたくなる。

「矢澤ちゃんは、良い嫁さんになるな」

味噌汁をもう一口すすってぼそりと呟く。

さて、どんな反応が返ってくるか、

「あら。じゃああんたが貰ってくれる？」

「ぶっ！」

味噌汁吹いた。

「汚いわね」

「す、すまん……」

初々しい反応を期待してたんだが、真顔でしれっと返されるとは思わなかった。

昔は……こいつがスクールアイドルやった頃は、こんな事いうと真っ赤になって可愛い反応してくれたものだが、もうこいつもガキじゃないんだな。

「からかうつもりが、とんだカウンターを食らっちゃまった……」

「私をからかおうなんて十年早いーううん、五年遅いのよ。一昨日きなさい」

ふふん、と。満足そうに笑って、にこは俺の前の席に座る。

ちやぶ台を挟んで二人、それぞれの料理に手をつける。

「ん」

「はいよ、っと」

にこが言わんとしていることを察して、お茶を淹れる。

彼女の分と自分の分。

「ん」

「自分で動きなさいよ」

そう言いながらも、俺が差し出した茶碗を受け取った彼女はお代わりをよそい始める。

何故か互いの言わんとしてる事が手に取るように分かる。

いつの頃からだろう。こんなのが当たり前になったのは。

彼女と過ごす時間は、居心地が良くて心地良かった。

料理を平らげて、お茶を一口。暖かい緑茶が体に染みる。

湯呑を手に、そつと、彼女を見つめる。

同じようにお茶をすする彼女の姿に、何故か心が安らいでいった。

平和だ。

そう思う。

これからもずっと、こんな時間が続けばいいのにと、柄にもなくそ

んな風に思ってしまった。

狭いアパート、二人でちやぶ台を挟んでご飯を食べて、あつたかいお茶を飲む。

それが案外、幸せってやつなのかもしれない。

「……何よ？」

「いや、こうして見ると、」

視線に気づいた彼女が首をかしげながらこっちを見てくる。

思わず、本音を漏らしそうになって口をつぐむ。

——こうして見ると、俺達夫婦みたいだよな

「何よ？ああ、私が可愛いって？そんなの当然でしょ」

「ふっ。ちんちくりんが何言ってるやがんだ」

「だ、誰がちんちくりんよ！」

照れ隠しも兼ねて鼻で笑ってやったら、ちやぶ台越しに掴みかかってきやがった！

「あ、危ねえ！食器あんだから暴れんな！俺が悪かった！」

「ふん」

両手を合わせて拝むように謝ると、不満そうではあったが納得してくれたのか手を離してくれた。

危ねえ危ねえ。こういう所は昔から変わってねえのな。

変わっててほしかった反面、こんな所も懐かしくて………愛おしい。

「それで、何を言おうとしたのよ」

「何でもない」

「……」

口が裂けたって言えるもんかよ。

俺達はもちろん夫婦なんかじゃない。

家族でもなければ、ましてや恋人でもない。

だからって、この関係が何なのかと問われれば、返答に困るところではあるのだけだ。

友人、というのとはちよつと違う気がする。

これまでもそうだったように、きつとこれからもこの関係はこのま

ま続いていくんだろう。

……正直な話をする、だ。

俺がこいつの事を――矢澤にこって女の子の事を憎からず想ってるのは確かだ。もつとちゃんと言えば、惚れている、んだろうな。

にこも俺の事を、少なくとも嫌ってはいないと思う。……両思いなんて、自惚れるつもりはねえよ？

でも、俺はこの関係をこれ以上進める事は出来ない。

今の関係を壊す事が怖い。

それに、きつと、今に満足してるような俺じゃ彼女には釣り合わない。

狭いアパート、ちゃぶ台。食うや食わずのその日ぐらし。それを幸せなんて感じる小市民と、輝く道を進む彼女じゃ身分が違い過ぎる。

でも、だけど、それでも……

「そういえば」

「ん？」

お茶を飲み終わった彼女がふと思いついたように切り出した。

「さつき、ちらつと見えたんだけど。私の事務所の募集要項」

「……」

隠してたつもりはないけれど、

「ああ」

小さく、そう答えると。

にこは大きく溜息をついて、

「はあ。なんで黙ってるのよ。これ、私の新曲の募集でしょ？」

「そりゃ……受かってから言いたかったからな」

俺が何日も徹夜してる理由。

その募集を見つけたのは単なる偶然だった。

アイドル、矢澤にこの曲の募集。

こういう大手事務所の募集は大体、有名どころの作曲家の物が採用されるって相場が決まってる。だから普通なら、俺はあんまし積極的に応募しないし、ダメ元でしか送ってない。

それなのに今回、なんでこんな本気になってるかっていうと、だ。

「いい加減、先に進みたいくなってな」

一つとところにとどまり続けるのは確かに気楽で良い。

現状に満足してそこで動くのをやめるのも、一つの生き方なんだろう。

だが、それは俺の生き方じゃない。

もっと先に。もっと上に。求める物があるのならば。

そしたらきつと、この関係も進められる。釣り合いだって、きつと、

「良いじゃない！」

びつくりするような声で、にこは言う。

その顔にはお日様のような笑みが浮かんでいた。

「あんたが曲をつくって、私が歌って躍る。凄い面白そう！」

「そ、そうか？」

「ええ！……ホントの事を言うよね。いつかこんな日がくるんじゃないかって、前から思ってたの」

「前、から？」

思い出すのは彼女達がμ∞sをやっていた時の事。

作曲も作詞も、振り付けまでもみんな楽しんでやっていたあの頃。

「そ。今じゃみんな、別々の道に進んだけれど、あんただけは今でもこうして同じような業界にいるんだもん。折角なら一緒に仕事したいって思うでしょ？あの頃みたいに」

「あの頃みたいに、か」

うーん。

ちつとプレッシャー感じるな。

そりゃ俺もプロの端くれ、流石に技術面じゃあの頃の作曲担当者に負けてはいない……はずだが、才能面じゃ明らかに見劣りする気がしてならない。

「あの子に負けるような曲作ったら承知しないわよ？」

「うッ……」

俺の内面を見透かしたようにそんな言葉を投げかけてくる。

いかん、胃がきりきりとしてきやがった。

「あたり前だったの。俺を誰だと思ってたんだ」

内面とは裏腹に、そんな強い言葉が飛び出した。
意地、プライド、虚勢、見栄。

なんでもいいけれど、口にしたらちよつとだけ元気が出てくるような気がした。

才能が足りないのなら、凡俗がすべきは努力だ。

一の才を下すためには千の努力を。

あれから5年。そのための努力ならば怠った事はない。

「その調子。ちゃんと御飯食べて、あんまり頑張りすぎないように頑張りなさい。あと、それから、」

言うなり彼女は俺の隣までやってきて、顔を近づけてきた。

「な、何だ？」

伸ばした両手で、にこが俺の両頬をぐいっと斜め上に引っ張る。

「笑顔。笑っていなきゃ、幸せは逃げてくのよ？」

「んな、おまじないみたいな事……」

彼女の手をそつと引き離して、しかしそれでも俺の顔はにやけてた。

うん。

きつと、上手くいく。

根拠はないけれど、そう思えた。

いや、根拠ならあったな。

強い思いは奇跡さえ起こせるって、あの時俺は確かに学んだんだから。

†

「くそッ……!」

酒を煽る。

どれだけ頭をひねっても、考えがまとまらない。

強い思いが奇跡を起こす。それは事実だろう。

だが、今のままでは奇跡なんて起こりそうにもない。
なら、何が足りないのか。

努力が足りないのか？これほどまで手を伸ばし続けて背伸びを続けてきて、それでもまだ一の才能に届きはしないのか？

思いが足りないのか？これほどまでに、強く思い続け、狂おしいほどに想い続けてきて、それでも足りないのか？

考えれば考えるほど、心は平穏をなくしていく。

「くそッ！」

テーブルを力任せに叩き、タバコを灰皿に押し付けて消す。
ダメだった。

あれからずっと、ずっと頑張り続けて、そして締切がやってきた。
だが、どうにか出来上がったものは完璧とは言い難いものだった。
敗北なら知っている。屈辱なら嫌ってほど味わってきた。

それなのに。

渾身の、ありったけの力をいれて取り組んだのに、まだ届かない。
輝く道を進む権利は、俺には……

「邪魔するわよ？」

ドアが開く音。

聞きなれた声。今、一番聞きたくない声だった。

今、一番会いたくない相手がやってきた。

何故鍵をかけておかなかったのか。そんな後悔が心を苛む。

「タバコ臭っ！また、換気もしないで……」

つかつかと、近づいてくる足音が聞こえる。

頼むから来ないでくれ。今の俺を見ないでくれ。

心の底からそう思ったが、凡才の願いは天に聞きいれられるはずもなく、彼女は俺の部屋に顔を出す。

「……よお」

「ちよっと、大丈夫？ひどい顔してるわよ？」

「大丈夫だ」

心配そうに問いかけてくるにこに、短くそれだけ答えてみせる。

自分でも、とても大丈夫とは思えない声だった。

「……応募、間に合わなかったの？」

「いや。提出は出来た」

提出は、出来た。

だが、苦し紛れに作っただけの曲だった。

ベストとも言えない、言い訳のしようのない作品。彼女のための作品だっていうのに、そんなものしか作れなかった自分が嫌でたまらない。

これなら出さない方が幾分マシだとさえ思えた。

「そ。……なら、そんな顔しないの。後は結果を待つだけでしょ？」

何かを察したように彼女はそう告げる。

「さ、過ぎた事でうじうじしないの。それよりご飯まだでしょ？何か食べたいもの、」

「いらん。今日は帰ってくれ」

彼女が言い切る前に、絞り出すように言う。

口の中がカラカラに乾いていた。やり場のない、知らない感情が心を満たしていく。

このままでは何をしでかすか分からなくて、それが怖くてたまらない。

これ以上、何かを口にしたら……何かを耳にしたら弾けて、全部終わる。そんな予感がした。

「何言ってるのよ……」

俺の葛藤に、矢澤にこは気がつかない。

当たり前だ。

人の心の中なんて、誰にも分からない。自分でも完璧に分かるもんなんかじゃないのに、ましてや赤の他人の心の中なんて、分かるはずがない。

「何があつたか知らないけど。ひよつとして思った通りのものが出てなかったとか？」

「……ああ」

頷くことしか出来ない。

もつと近寄って、覗き込んでくる彼女と目があつた。

やめろ。俺をそんな目で見るな。

「……努力は、したさ」

弱音が口から溢れる。

何年も何年も、ずっとこうえ続けてきた本当の気持ち。見ないふりして、気がつかないふりして、なかった事にしてきた弱い心。

「何年も、何年も！才能がないことなんて、俺が一番知ってたさ！それでもどうに頑張って、我慢して、やっとここまで来たってのに……結局、どうにもなりやしねえ！くそッ！なんで……」

ぴしやり、と。

乾いた音がした。

遅れてやってきた頬に感じる熱さに、頬を打たれたのだと気がついた。

にこが目を釣り上げて、俺を睨みつけていた。

今にも泣きそうな顔だった。

何でお前がそんな顔をしてるんだ？泣きたいのは俺なのに、

「馬鹿、言ってるんじゃないわよ……！」

語気を荒げて、彼女は言う

「努力なんてのはね！いくらしたって足りないの！そんなの、あんたが一番知ってる事でしょ!?そんなもん誇って、いちいち嘆かないでよ！」

心が、痛む。

彼女が言っているのは正論だった。

「私を、見なさいよ。私がスクールアイドル始めた時……穂乃果達と会う前がどんなだったか、知ってるでしょ？」

ああ。確かに覚えている。

忘れられるはずがない。

頑張って、空回って、ついには心が錆び付いて。

それでも夢だけは諦めなかった。

そんな強く、気高い姿に、俺は惹かれたのだから。

「だから、大丈夫。これが最後ってわけじゃないんだから」
彼女が薄く、微笑んだ。

彼女の行っている事はどこまでも正しい。
それは分かる。

だが、正しいだけじゃ人は救えない。

真っ直ぐに伸びる大樹に、地面を這う苔の気持ちは分からない。
心の中に生じたものに形が定まっていくな。

ダメだ！

残された理性が叫ぶ。

だが、間に合わない。弱音を吐き出しきった心に残ったのは、
赤黒い衝動だった。

「まだ結果だって分からないんだし。プラス思考でいきまし、」
「うるせえー！」

勢いよく立ち上がり、矢澤にこの胸ぐらを掴んで引き倒した。

彼女を押し倒し、馬乗りになる。

何が起こったのか分からずに目を丸くした彼女。

赤く、明るい色をした瞳。

白く透き通るような肌に、触れば折れてしまいそうな華奢な身体。

その全てを汚し尽くしてしまいたかった。

「お前には、分からねえよー！」

心に残ったものは嫉妬だった。

才能があるものに対しての、醜い嫉妬。

強い思いは奇跡を起こす。だが、そのためには僅かでも、ほんの僅かでも才能がなければならぬ。

先立つものを何も持たない俺に、奇跡なんて起こるはずもなかった。

心に残ったものは憎悪だった。

何故、俺はこうなのか。何故、俺じゃなくてこいつなのか。
理不尽で、どうしようもなく悍ましい怒り。

残ったものは、情欲だった。

目の前の女が欲しくてたまらなかった。

「なにをするのーやめ……」

彼女の手を押さえつける。

思った以上に弱々しく、抵抗はほとんど感じられなかった。

好都合だ。煩わしく抵抗するようなら、殴りつけてでも大人しくさせるつもりだったから、余計な手間が減った。

片手を、彼女のブラウスの胸元に伸ばす。

その時、見てしまった。

彼女の頬を伝う、一筋の涙を。

「え……う？」

途端に、頭に上っていた血が冷えていくのが分かった。

俺は、今、何をしていた？

我に返って状況を確認すると、怖気が背中を走った。

頭がががんと揺れて、視界が揺れる。猛烈な吐き気がする。

こんな事をしたかったわけじゃない。こんな形で彼女と、

「どうして……」

涙をいっぱい溜めた目で、にこが俺を見つめていた。

困惑と絶望の入り混じった目だった。

俺が見たかったのはこんな顔じゃない。

彼女に一番似合うのは、お日様のような笑顔なのに。

俺が好きになったのは、彼女のはつらつとした笑顔だったはずなのに。

その笑顔を見るためなら、何だとしてやるつもりだったのに。

彼女から笑顔を奪ったのは、誰だ？

「ち、」

違う。

そう言いたかった。

だが、何が違うというのか。何も違いやしないじゃないか。

「……帰れ」

唸るように、そう言うのが精一杯だった。

「え、」

「いいから帰れって言ってんだよ！」

近くにあったゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。その音に驚いたのかに

こはびくりと体を震わせる。

俺の方を伺いながら、部屋からゆっくりと出て行く彼女。その背中が見えなくなつて、ドアの閉まる音が聞こえた時、体中から力が抜けた。

その場に崩れ落ちて、荒い呼吸を繰り返す。

咳き込んで、胃液を床にぶちまける。

そうしてどれほどの時間がたっただろう。

「……ははっ」

へたりこんだまま、口元を拭う。

こぼれたのは乾いた笑い声だった。

自分が惨めで仕方がなかった。

上手くいかなかったからって、好きな奴に取り返しをつかない事をしでかして、本当に最悪だ。

これ以上ないくらいに、醜くてたまらない。

いつそ、死んじまった方が楽になれるんだろうか？

「そういう訳にもいかねえよな……」

自分で考えておいて、自分で否定する。

ここで首くくつちまえば楽だろうが、そうしたらあの子に余計な迷惑をかける。

いや、ここまで酷いこととして、もう迷惑うんぬん考えるなんて今更な気もするが。

……違うな。それが理由じゃない。そんなお涙頂戴な、いかにも良い人が考えそうな理由、俺の柄じゃない。

あの子の為とかそんな事言つて適当な理由つけて、結局はてめえが死にたくないだけだ。

最低だな。

自分のものじゃなくなつたみたいに重い体をのろのろと動かす。ちらりと。

柵に飾った写真に目をやる。

その中に映る少女は笑っていた。俺が大好きだった、彼女の笑みだった。

もう、彼女に合わせる顔なんてない。
心の中に、空虚だけが残った。

†

「邪魔、するわよ」

あれからしばらく経った。

気まずくて、彼の所を訪れる事が出来ずにいたけれど、今日は意を決してやってきた。

あの時のことは、正直許せない。でも、それ以上にあいつの事が心配だった。

お前には、分からねえよ！

あいつが言ったその言葉がずっと耳に残っていた。

高校生の頃から、ずっと傍にいた。

私が楽しい時は横で笑ってくれて、辛い時は親身になって話を聞いてくれた。その逆の時だってあった。

だから、全部分かってるつもりになっていた。

私達がライブで優勝した時、彼は本当に喜んで、涙を流しながら喜んでくれた。

私が本当にアイドルになった時も、自分の事のように喜んで笑いかけてくれた。

でも、本当は？

私達が成功する影で、彼は何も出来ない自分に苛立ちを感じていたんじゃないの？

私が夢を叶えていく中で、取り残されていく自分をどんな風に思っていたの？

考えれば分かるはずの事なのに、私はあいつの事を何一つ考えてあげられなかった。

今回のことだってそうだ。

あいつがどんな思いで、作曲をしていたのかなんて、知ろうともしなかった。それなのに、私は次があるなんて、知った風な事を言った。それで彼が傷つくなんて、思いもしなかった。

「……入るわよ？」

相変わらず玄関の鍵も、部屋の鍵も開いたまま。無用心そのもので、いつも通り。

壁に染み付いたタバコの匂い。

棚に飾られた私達の記念写真。

でも、あいつの姿はどこにもない。

いつも通りのはずの部屋は妙に片付けられていた。

機材や楽器、パソコンはそのまま置きっぱなし。食器も一通り揃って食器棚に綺麗に片付けられている。

生活感がまるでない。

「ちよつと……どこにいるのよ？ふざけてないで出てきなさいよ！」

嫌な予感がした。

部屋という部屋、といつても安アパートだから部屋なんてないけど全部見て、トイレや風呂場、ベッドの下にクローゼット、全部見ても彼の姿はどこにもなかった。

靴や服もなくなって、コンセントの抜けた冷蔵庫の中は空っぽ。

パソコンのキーボードには埃がうっすらと積もっていた。

「そんな……」

ふと。

ちやぶ台が目についた。

二人で向かい合ってご飯を食べたそこに、食器じゃなくて封筒とCDケースが置かれていた。

これを見たら、ダメだって、そう思った。これを見てしまったら、嫌な予感の中したって事が分かってしまう。

それなのに、心とは裏腹に私の手はその封筒を開けて、中身を広げていた。

癖のある汚い字。懐かしく、落ち着く文字列。

そこには、私への短い感謝の言葉が書かれていた。

それから、ここを出ていく事。ここに残したものは好きにして良いつて事。

それだけだった。

行く宛なんてどこにも書いてない。これからどうするかも書いてはいない。

どうしようもないくらいに分かってしまう。

これは別れの手紙だ。

「そんな……、何で、」

血の気が引いていくのを感じた。

へたりこみそうになるのを我慢して、もう一つの置き土産を手に取りる。

残されたパソコンを起動して、震える手でCDを再生させた。

スピーカーから流れ出す、優しい旋律。

これはきつと、彼が応募した曲。

「何が、失敗よ……!」

ぽたり、と。

熱い雫がマウスに乗せた手に落ちた。

「いい曲じゃない」

視界がぼやける。

「なんで!何で黙っていなくなっちゃうのよ!悪いことをしたって思ってるなら、ちゃんと、謝りなさいよ!」

ぽたり、ぽたりと、堪えきれなくなった涙が溢れてきて止まらない。

もう、彼には会えない。

そんな漠然とした、でも確かな予感があった。

涙で滲む視界の端に、私達の写真が映る。

私達から一步引いたところで、照れくさそうにはにかむ彼の姿。

彼のそんな不器用なところが大好きだった。優しい彼が大好きだった。

でも、もうそれを告げることは出来ないんだ。

そう思ったら、嗚咽を堪える事が出来なくなってきた。

「何で、どっか行っちゃうのよ！これじゃ、あなたの事を許せないじゃない！」

私にも、謝らせなさいよ！

ちやんと、お互いのことを知りたかったのに！

これじゃ、私は、私のことを許せない！

誰もいなくなった部屋に、一人だけの泣き声が響く。

部屋に差し込む西日。

窓に切り取られた夕日に色づく街は、悲しくなるくらいに綺麗だった。

ひとしきり泣いて、ちよつとだけ落ち着いた。

気持ちの整理はまだつかないけれど、とりあえず歩いて帰れるくらいには回復した。

彼の手紙にあった通り、部屋の中から何か楽器でも記念に貰っていかうかとも思ったけど、でも結局それはやめる事にした。

もう二度と、ここには来ることもない。

いろいろと思うところはあられるけれど、それでも私は前に進まなきゃならないんだ。

逃げるように部屋を出て、足早にアパートを後にする。

途中、郵便受けの中いっぱい詰まった手紙の中に、ふと、私の事務所の名前で書かれた封筒が見えた。

少しだけ悩んで、楽器や思い出の品の代わりにそれを貰って行くこ

とにした。

どうせ、彼は二度とここには帰ってこないのだから。
「ちやならん」

小さく、呟く。

さよなら、私の小さな恋。

青春はここで終わる。

想いよひとつになれ（仮）

——それは唐突に起こった。

『記憶喪失うー!?!』

自己主張の激しい日光が窓際から燦々と照りけてくる、浦の星女学院のスクールアイドル部部室。その部屋から7人の少女のそれはそれは愉快的な大声が飛び出してきた。この部室にはいま9人いるのだが、そのうち7人が叫んだのだ。一体全体、どうして彼女たちはこんな叫ばないといけないのだろう。それはある少女が原因だった。

「そう……千歌ちゃん、私たちのこと覚えてないって。今日が休みだったからいいけど……」

ここにいる9人の少女たちはスクールアイドルAqoursとして活動している。その中のリーダー格である高海千歌が記憶喪失になってしまっていた。

「記憶喪失……らしいんですけど、私……千歌って名前しか思い出せなくて……」

「そ、そんな……」

メンバーの一人、桜内梨子が悲痛な叫びをあげる。親しい友人が記憶喪失なのだ。それはショックを受けた顔をしていた。千歌が記憶喪失であることを1番に知った渡辺曜はその場から一時動けなかったほどだった。

「でも、記憶喪失なんて……」

「oh……なんてことなの……」

「ど、どうすればいいんですの……?？」

「ちちちちちちちち千歌ちゃんが記憶喪失うううううううう
!?!?!? どどどどどどど
うしたら……」

「ルビイちゃん、落ち着くずら。本でも記憶喪失ものは読んだことあるけど、流石に対処法は……」

松浦果南、小原鞠莉、黒澤ダイヤ、黒澤ルビイ、国木田花丸は各自がショックを受けたような悲痛な表情を浮かべていた。しかし、こいつは違った。

「記憶喪失……ッ！ それは気分が昂る響きね！」

そう、津島善子だけが、この状況を楽しんでるようだった。

「善子ちゃん、ここはそんな展開じゃないすら」

「いや、ずら丸、それは違うわね。これはチャンスよ！」

『チャンス？』

善子と千歌を除く7人が頭の上にはてなを浮かべた。こんな大変な状況で楽しむ要素がどこにあるのだろうか。

「今の千歌は記憶喪失……。即ちそれは、千歌に自分が都合のいいことを吹き込ませることが可能なのよ！」

『……!!!』

さて、この善子の一言で、一体何人が反応しただろうか。少なくとも2人は反応した。それは誰もが予想しなかった結果。しかし、マンガなどをよく読む善子は違った。善子は考えた。この事実を有効活用し、自らの“リトルデーモン”を増やすのだと。

「そ、それはいけませんわ！ 記憶が戻ったあとの千歌さんにどんな影響が……それに、こんな状況でそんなギャグみたいなもの……許されませんわ！」

「この小説がシリアスになるわけじゃないじゃない!!!」

とんでもないメタ発言をぶっ込んでくる奴である。

「そ、それはそうですけど……」

真面目の化けの皮被ってるだけだったよこいつは。

「そうでしょう！ だからね、こうするの……。千歌……貴女は私のリトルデーモン……」

「り、りとする？ でーもん？」

怪しげな手の動きをしながら千歌に語りかける善子。記憶が無くなりより純粹となった千歌はそれを信じようとするものの、先程の会話により疑心暗鬼になり始めてる。

「それで、私を騙そうとでも……？」

「そ、そんなこと……ない……。ご、ごめんなさい」

善子は千歌の目がマジだったので速攻で謝った。めちやくちや怖かったらしい。

「いやあ、分かればいいんですよ」

だが、そんな目から一変、千歌は無邪気な笑顔を浮かべながら微笑んで、善子の行いを許した。もう、千歌を怒らせまいとそつと誓う善子だった。それと同時にAqoursのメンバーは千歌になにか吹き込むのはやめようと、そつと暗黙の了解を得たのだった。

「でも、本当にどうする？ 千歌ちゃんこのままなの、ルビィ嫌だよ……」

「でも、おらでもこれは流石に治せないずらよ……」

ルビィと花丸がしょぼんとしたように落ち込む。それにつられて部室の空気がどんよりと重くなってきた時、それは訪れた。

「千歌ちゃん」

そつと千歌の隣に立つのは梨子だ。梨子はすうと息を吐くとそのまま相手の頭に直接語りかけるような美しい声色で千歌に話しかけた。

「千歌ちゃん、実は私と貴女は恋人同士なのよ」

『はあ?!?!?』

今度は部室全体が騒がしくなった。それはそうだ。先程善子の1件で嘘を吹き込むというのはまずいだろうと全員で暗黙の了解を取り決めたばかりだった。しかし、こいつには無意味だった。何故か。そんな暗黙の了解、見てもいないし感じてもないのだこいつは。桜内梨子は止まらない。

「え、でも桜内さんは女の子……ん？」

「……ここでは女の子同士でお付き合いをするのが当たり前なのよ」

何言っただこいつという目で見つめるAqoursのメンツ。もはや止められないと悟った面々は静観することにした。誤解は後

からとけばいいや、と。しかし、それが悪手となった。

「そこにいる黒澤姉妹だって、そういうお付き合いしてる訳だし」

「んん!」

突然の爆弾投下。もはやここまで来るとミサイル飛ばしたようなものだろうか。

「え……? ルビィ……さんと、ダイヤ……さんって姉妹……え、だって姉妹……?」

「姉妹だってそういうお付き合いをするのが、ここ内浦よ」

「梨子ちゃん今年の4月に来たばかりだよね!」

千歌は困惑し、梨子がボケ、曜がつっこむ。偶然ながら千歌の記憶が消える前の状況だ。まあ、そんな事、この場ではお茶を濁すことから出来ない訳だが。

「ま、待って! ルビィとお姉ちゃんが!」

「り、梨子さん! 貴女なんて事を! 違いますからね、千歌さん!

ここでも普通に男女のお付き合いをですね……!」

ルビィが困惑しているため、ダイヤが必死に宥めようとする。しかし、現実是非情だった。

「え、ダイヤさんは男の人とお付き合いを?」

「は?」

ここに來て千歌の天然スキルが発動したのだ。記憶を失っても尚その天然さは健在である。

「ダイヤ……いつの間に……」

「Amazing! 驚きだわ!」

「ち、違いますわよ! というか、貴女たちそこに食いつきますの!」

幼なじみの成長にうるつと来ていた果南と鞠莉にツツコミを入れたダイヤは、はあ……とため息をついた。どうやら怒涛の展開すぎて疲れてしまったらしい。

「そっか、私の周りってこんな変な……うっ、頭が……」

「え、なにか思い出したの!? 千歌ちゃん!」

「正直、これで思い出されても私たち複雑なだけどね!」

千歌は頭を抑え、頭痛を訴え始める。それを見た梨子は記憶が戻る

のでは？ と期待している。だが、それ以外のAqoursメンバー（主に黒澤姉妹）はかなり複雑な表情をしている。それはそうだろう、梨子に場を掻き乱されたまま話が進もうとしているのだ。収集のつけようがない。

「思い……出した……」

なんかアニメの主人公みたいなものすごく真剣な表情でAqoursメンバーを見つめる千歌。

「なにか思い出したずらか？」

「は、はい。一部ですが思い出しました」

「い、一体どんな記憶よ」

花丸と善子は千歌からのなれない敬語にたじろぎながらもどんなことを思い出したのかを促す。

「なんか、超高校級って……」

「それ違うやつ!？」

これ以上はいけない。メタ的なやつでダメです。

「……じゃなくて。えつとお……桜内さんの部屋のうすいほ」

「ものは叩けば治ると言うわよね!!」

何かを言おうとした千歌の頭にチョップをかました梨子。乙女の秘密のためなら犠牲は問わないのだ。千歌は犠牲になったのだ。犠牲の犠牲にな。

「ちよ、梨子さん!？」

「WOW! It's chop?」

「結構いい角度入ったねえ」

「冷静に解説してる場合じゃないよね果南ちゃん!？」

「あわわわ、千歌さん大丈夫!？」

「本性現したずらね」

「リリー……貴女……」

各々が個性的な反応を見せる。善子は若干引いてるみたいだ。

「ち、違うのよ! 千歌ちゃんに他の手段で思い出させる方法もあったんだけど、咄嗟にできるのがこれだっただけなのよ! 他にも考えてたのよ! ほ、ほら! μ'sの映像見せるとか!」

梨子はとても焦った様子で弁明を図ろうとしている。だが、最後の発言自体はとて面白い発言をしていた。

「それですわ！ μ sのファンの千歌さんならμ sの映像を流すだけ……いや、高坂穂乃果さんの写真を見せるだけで1発ですわよ！」

ダイヤは非常に興奮した様子で話していた。早速千歌に見せようということになり、部室のパソコンを使用し、映像を流すことにした。曲は『ユメノトビラ』だ。千歌が大好きな曲のひとつだったりする。

「ほのかさん……？ これは……思い……記憶が……記憶が……」

『記憶が!?』

8人全員が身を乗り出して聞く。

「出てこない！」

『ズコー!』

素晴らしい流れだった。もはや新喜劇やった方がいいのではないかと思うくらいな、綺麗な流れだった。それはまるで優雅に煌めきを放ちながら流れ、そして光り輝きながら流れ落ちるナイアガラの滝のようだった。いや意味わからん。

「私は……なんなの？ どこから来たの？」

「ずっと遠くからだよ」

「答えてるようで答えてないよね？ 梨子ちゃん？」

「それじゃSKY Journeyすら」

「すかーい」

「歌うんですか鞠莉さん!？」

なんて言う茶番を繰り広げていた彼女達。そんな時、1人の来客が訪れる。その人物は大きい袋を持って現れていた。リボンの色から察するに2年生だろう。曜達とも面識があるみたいだったのでクラスメイトでは無いかと彼女たちは察する。

「千歌ちゃんここにいた！ 探したんだよ……」

「どうしたのなっちゃん？」

「あ、曜ちゃん。実はね、貰い物でみかんが大量に余ったから千歌ちゃんに渡そうと思ってね。はい、千歌ちゃん」

「みかんだー！　ありがとう！　なっちゃん！」

「うん、千歌ちゃん達も練習頑張つてね！　それじゃ！」

「ばいばーい！」

袋いっぱいのみかんを千歌に渡すとそのまま彼女は帰っていった。

「さて、千歌ちゃんの記憶を戻すにはどうすればいいか……もう1回初めから……」

「私の記憶がどうしたの？」

「うん、千歌ちゃんの記憶がね……。んん？」

曜が千歌の記憶を戻すためどうするかと悩んでいると、先程貰ったみかんを頬張りながら記憶について聞いてくる千歌がいた。

「千歌……さん？　記憶は……？」

「へ？　記憶？　あー、そう言えばなんか昨日の夜にみかん食べようとして足滑らせたところから記憶ないなあ。それがどうかしたの？」

おそらくこの時、A q o u r sのメンバーの思ったことはひとつだろう。彼女達の想いはひとつになった。それは彼女達の言葉となつて放たれる。

『なんじゃそりや!!!』

騒がしくも平和な日常は続いていく。

……これでいいのか。

レディオ・ガ・ガ

「ラグとは、起こるべくして起こるものなんだよ」

「…………千歌、ちゃん。出逢えたんだよ、私達」

遠い残響は、18人で聴いたものなのか、私だけのものなのかは、今もわからない。

2人の穂乃果さんは、引き離されるように消えた。

『富士河口湖町』

遠くで観覧車の光が、田舎の街と湖を照らす。森の中にある『それは、対照的に、光一つ差さない場所。異世界のような、あの世のような、少なくとも千代田区とはかけ離れた場所であった。

「着いたみたいね。ほら皆起きなさい」

「……………ん？寝てらいろお？」

「いや呂律……」

「ここが、ガリバーランド？」

「元、ね。今は一応、誰のものでもないみたいよ？」

「空き地みたいなモンやね」

来た理由、この9人で、というのもあるが、何故この山梨県のクソ田舎に来たかといえば、もともと。そもそも、『元凶』とも言えるのは、矢澤にこが『自動車の普通免許』を取ったことからだった。

カードを堂々と見せて無い胸を張り、自慢話をするにこへ、それに半ば張り合うように真姫がどこかへ皆を連れて行けと言いつつ、私が面白いところを見つけたとガリバーランドの写真を見せ、そこから全員が

ノリと勢いで『キモ試し』の送迎をお願いすることに。

ガリバーランド。とは、ガリバー旅行記という物語をテーマにした、遊園地のことだ。もっともいまは廃遊園地だが。

仕舞いには心霊スポット行きたくない組に行きたい組が土下座をする珍事になった。

「レンタカー代は割り勘ね」

「分かってるよ、そういう所しっかりしてるもんね」

「どういう意味よ！ったく」

「え？節約家って意味じゃないの？」

「……ほんと、えりちって天然やな」

「んー…？」

ポンコツは、決して自分では気付かない。

「何かを乗り越えることで、また強くなれるのです…」

「んみちやー？」

「いぎーっ!？」

「なんで犬の名前？」

「も、もともと私は乗り気ではないのに…何故…」

「押されると弱いよね」

海未、ことり、花陽、真姫は行かない組だったが、それぞれ『押される」と弱かった』『周りに合わせてしまった』『強く断りきれなかった』『自分から連れて行けと言った手前断るのは格好が悪かった』と、結局行くハメになってしまった。

そんなこんなで、心霊スポット『ガリバーランド』行きは30分で決まった。

「全くもうだよ全くもう！凜ちゃん、手繋いでてね！」

「えへへ、かよちゃん大胆にや〜♪」

「んひいつ!?!せ、背中あ！」

「ちよつと希！押さないでよ！」

「えへへ、撥つたいよ海未ちゃん…」

「あ、あんたらしい加減に…わあっ!？」

なんだかんだそれぞれがはしやぎ合いながら入っていく中、私だけ

は、入口の前で立ち尽くしていた。『恐怖』、という感情からのものではない。ここまで来ておもちや屋で駄々をこねる子供のようなことはしない。

『違和感を、感じていた』のだ。

誰も『会話をしていない』ということに。

そもそも、元に戻って話題を見てみるという意味で、『会話』というものを思い出してみよう。互いの言うことを聞き合い、それに応答する。それが、『会話』なのだ。しかし違う。

——皆は、誰と話してるの？

前で8人が、何者かと……接触している。今、私——高坂穂乃果の背中を押している者と、同類なのだろう。

「起きてください!!」

よく漫画なんかである、フェードインするような声ではなかった。同時に、それは聞き覚えもない声だった。

砂地に倒れていたようで、慌てて起き上がる。服に砂がつく、というくだらない心配——たった今、意識が覚醒したばかりであろうと、矢澤にこからすれば一大事なのだろうが——ではなく、ここが何処なのか、今はいつなのかと確認するためだ。

入った……ガリバーランドの門をくぐった所までは覚えている。そう、この何者かも分からない声と、遊園地の入口になかった砂地、そ

して寝ぼけ眼を刺激するこの光。それを確かめるためだ。

「ずら丸、ルビィ、この人……」

「……………だよね……………今はおちおち喜んじやあいられないみたいだけど……………」

「ずら。『矢澤にこ』さん、『絢瀬絵里』さん、『東條希』さん。ずら……!？」

ふと会話の聞こえる方……………自分達の名前を呼ぶ方へと振り向くと、一面、海。砂地というのは、浜辺だったらしい。低血圧特有の気だるい身体を叩き起こすと、3人の……………年下か同い年くらいだろうか、女子高生がいた。

一人は、深紅の髪を2つに結び、気弱そうに手を胸の前で縮こませている。エメラルドのような目は、確かに起き上がったにこ、矢澤にこを見ていた。

一人は、浜辺に何かを書いている、正確には彫っているに近い？ようだった。右上にシニヨンを作っている。ギラリギラリと目を輝かせ、真剣に。

一人は、その横で呆れるように頭を抱えていた。ベージュ、カーキにも似た髪が豊かに流れ、穏やかな眉を顰めている。

視点を180度後ろに向けてやると、希と絵里が並ぶように倒れて……………いや、その穏やかな寝顔は、三徹明けとも日曜日の昼寝とも似つかない、とても落ち着いたものであった。

「後ろの2人も起きるずらー！」

「……………あ、あの。にこさん、で合ってますか？」

「そうよ？私はあんた達を見た覚えなんてないけど。自慢じゃあないけど、記憶力には自信があるの」

「…………………………」

まあ？にこにーに見蕩れるのも無理はないしい？今色紙とマツキーを持っていないのを死ぬ程後悔するっていうのも仕方ないと思うけどおお？

と言っている間にも、矢澤にこは、この場の『異常性』を感じていた。『そんなわけがない』と。そう、そもそもの話だ。私達はここに

る訳が無いのだ。

何故倒れた？ここまでどうやって来た？ここは何処だ？

「にこさん」

「…まあにこさんって呼ぶのはいいけど、あんた達の名前も教えてくれない？ちよつと不公平な気がするわ」

「墮天使ヨハネ。天界出身なのだけれど、薄幸の効か、墮天してしまったの」

「うええっ、く、くろ…黒澤、るるるらゆるゆら、りゅびいでしゅっ」
「国木田花丸ずら。こっちは津島善子ちゃん「善子ゆーな！」。で、こっちは黒澤ルビィちゃんずら」

「……………ここは異世界なのかしら？」

当然の疑問である。

「違うわよ！…ここは静岡県沼津市の淡島！…の、ハズなんだけど……」

「静岡県ア？私達がいたのは『山梨県』よ？」

「そうなんですよ!!」

「え、なに？ルビィ達も？」

「はい、オラ…じゃあなくって、マル達、山梨県の『ガリバーランド』って所に……」

分かったことの数だけ謎が増えていく一方だ。突如、後ろから何か
が、何者が……2人、のっそりと起きてくる。

希と絵里だ。

「ねえにこー…ここ何処なの!？」

「うちら、ガリバーランド入ったはずよな？なしてこんな海辺におるん？」

「それが……………この子達も、そこへ行ったらしいの」

「……………?」

「そりや、まあ。そうなるわよね」

「鞠莉さん！鞠莉さんッ！」

「目覚まして、鞠莉！大変なの！」

「…オーウ…知らない天井……つてええッ!?ベリベリシヤイニー!?」

太陽が真上にある。

私、小原鞠莉が車を出してガリバーランドについた頃は、もう『夜の』10時頃になっていた。

フルーツ公園の夜景と天体観測を楽しむついでに、心霊スポットにでも寄ってみよう、ということ…私達は、『Aquours』は、『ガリバーランド』に来ていたはず。

今、私が寝ていた———というか、おそらく倒れていた場所は、岬とでも言ったところか。昔、漁師が見た話によると、自殺しかけた女を岬の尖った岩がやさしく跳ね返したところから、たまに漁師が大漁、安全の祈願に来る。

「それもそうですが…ここ、『淡島』でしたよね？」

「あ、当たり前じゃん…十何年も見てきた海を、忘れる筈が……つて言いたいとこだけど、さっきまで…私達…」

「…で、何故あそこに『星空凪』『小泉花陽』『西木野真姫』がいるんですの？」

それもそうだ。『いる』、というのは、別にそこらで女子会でも開いている訳じゃあなさそうで、そこに3人が並んで『横たわっている』。いくつも突っ込みたいところはあるのだが、まず、だ。

この人達は、間違いなく…『高校1年生だろう』。

何を隠そう、私だって、*μ's*のファンだ。ダイヤまで行かずとも、だが。しかしおかしい。制服姿だし、1年生のリボンをしているのだ。見た目も当時と変わっていない。少しは化粧していても何も問

題なさそうなのだが。

「どうなっているの?」

「……………起こしましょう」

「そ、そうね。放っておくわけにもいかなさそうだし」

「あ、ああつよく考えたら触れるのすら恐れ多いですわ……………握手券
持ってないのに……………」

「いや言ってる場合か!」

互いが『会話』をしながら:そう、ガリバーランドに足を踏み入れる
直前までのように、会話をしながら3人をゆすつてみる。

「起きて!こんなところで寝てたら風邪ひきますよ!」

「あ、細い…うわ、音ノ木坂の制服ってこんな…じゃあなくて!起き
なくてはぶつぶ!ですわよ!」

「Hey!朝よ!ホテルオハラモーニングコール、出張版アース!」

「……………んにゃあつ」

「ふああ…」

「……………」

それぞれが薄く目を開け、同時に太陽の眩しさに目を瞑り、また
ゆっくり瞼をあけてゆく。

「…昼!?!」

「どうして!?!って、ここ何処よ!」

「み、みんなが居ないにゃー!」

「にこ、希、絵里!返事してよ!」

「穂乃果ちゃん!海未ちゃん!ことりちゃん!…うええ、イミワカ
ンナイにゃー!」

「ちよ、それあたしの…」

「だれか助けてエエ——ッ」

思い思いの混乱と助けの声を出す、かつて女神と呼ばれた——は
ずの女神が、何故。当時のまま。

君にも、考えてもみてほしいのだ。

不思議だとは、思わないか?

「うわー！う、うつわ！うあー!!」

「ひええ〜……はあく……」

「……海未ちゃん？」

「私に振らないでください。解る筈ないでしょう、この状況」

「そ、そうだよね、ごめん……」

「謝る必要はないのですが、とりあえず事情を聞きましょう。すいません、2人とも」

「んひ〜っ……は、はい、なんでしようっ」

「我に帰りましたか。ここは……何処ですか？」

「あ、淡島であります。はいっ」

「貴方達は？」

「私達、スクールアイドルの『Aqours』です！私が渡辺曜で、こっちは桜内梨子ちゃんであります！……でも、今は私達2人しかいないみたいで」

「本当は9人、なんだよね……」

「奇遇ですね。私達も……そして、その9人のうち、7人がいないのも……」

「あ、そうですね。『希さん』も『絵里さん』も……」

「穂乃果ちゃん達、いないね……」

「……探しましょう」

「でもどうやって！」

「海未さん、ことりさん！」

「私達も行きます！人探しは多い方がいいですし、探しているものが余程大切なのは一緒です！」

「それに、この街のことは私たちが1番知っています！」

「……お願いします」

「じゃあ、さ。同盟組んだことだし……質問していい？」

「は、はい」

「君たちは…『何なの?』」

「はい……………はい?」

「私達のこと、知ってるよね。名前呼んでたし、なんかテンション変だったし」

「それはスクールアイドルで…」

「まだ9人になったばかりですよ。夏休みの合宿を経て…ええ、まだ世間には公表していません。希と絵里の名前を知っているのは、おかしいです」

「そ、それも5年前…ッ!?!」

「……………5年前?」

「どういう事なのですか…?」

「5年前……………にや?」

「にわかには信じられないわね。けど…」

「ほら、2018年!」

「私達の、『8年後』。ラブライブ1周年の『8年後』だね」

「凜……………はたち超えてるにや!?!今頃カクテルでも…」

「いや、今頃っていうか…」

「私達のいた淡島、『2015年なんだ』けど」

「はあ!?!」

互いの状況を確認し、 μ , s の1年生と私達はますます混乱していた。

まず、 μ , s の解散、第2回ラブライブ!が終わってから、5年後に結成されたのがAqours。正確には、先代、つまりダイヤと果南と私で結成したAqoursですら、2013年のこと。

次に、この淡島は…いや、この世界、この宇宙は『2018年』。 μ , s がいたのは2010年、私達がいたのは2015年。どうやっても辻褄どころではなく、Aqoursですら、この淡島のことを全て知らないようだ。

妙にリアリティのある夢だな、などと現実逃避をしている場合には
なかった。

仲間が、いないのだ。

たとえ夢でも、それは………あつてはならないのだ。

「とりあえず、仲間がいないのは私達も一緒」

「……あの子達——A q o u r sのみんな——は、ここ……淡島にいる
とは限らない」

「でも、いまは探してみるしかない」

『『同盟』でも組むつもり?』

「だね、一時」

「っし!そうと決まれば案内するよ!」

「墮天使ヨハネに任せなさいッ!」

「この島の景色は千代田区にも劣りませーン♪」

「頑張つて探すぞら!」

「はぐれたらぶつぶー!ですわよ!」

「皆でがんばルビィ!」

「……………およ?」

「あッ!」

「ああ!」

最初に声をあげたのは、ルビィとダイヤだった。

歩き始めた私達の前に、今まさに、私達と同時に歩き始めたような
1年生と。A q o u r sの1年生と、3年生が。μ sの3年生がい
た。

鉢合わせ、と言うには、偶然がすぎた。

「にっ!!」

「真姫ちゃんッ!」

「絵里ちゃん!」

「花陽……!」

「おっ?」

「ずら!?!」

「希ちゃん!」

「凜ちゃん!？」

「あーっ！」

「オーウ……！」

A q o u r s。μ s。双方の1年生、また3年生が集う。μ sの方は互いに抱き合つて喜び、A q o u r sの方は本当に5年前の『彼女達』なのだと言を聞けるばかり。

高坂穂乃果、園田海未、南ことりを除く、μ sが。

高海千歌、渡辺曜、桜内梨子を除く、A q o u r sが。

ここに集つた。

「よかつたね」

「ひゃんっ!？」

「ちよ、二次被害っ……うおあっ！」

耳元で囁かれた希は、珍しく裏声を出して前のめりになり、間一髪で掴まつた絵里のスカートごと地面に突っ伏してしまう。

顔からどんどん身体が赤く、暑くなつていき、仕舞いには足が震えたまま希の頭を踏みつける。

「ご、ごめん絵里ち、ついうっかりぐふっ」

「……………」

「透けてるにや」

「ひも……」

「ビューッ」

「……ジーザス」

「み、見ないでエエエ——ッ!!」

遠くからの足音により、絵里さんの『見えざる場所』から、奥の坂道へと。私達の視線は、ピントは、フォーカスは移つた。そう、写つたのだ。

「ま、待ってくださいー！」

『真姫ちゃん!』こつちでいいんだよね!？」

「早い……追いつけないでありますッ……」

「あ、ああっ!？」

「海未ちゃん、ことりちゃん!」

「曜さん、梨子さん…」

「ね！着いてこれば、私達に会えるって！」

「……真姫ちゃん？」

渡辺曜、園田海未、南ことり、桜内梨子。そして、幼い……西木野真姫がいた。

「ヴェエ!? あ、あたし!？」

本人が一番驚いているようだが。

「穂乃果さん」

「なあに？千歌ちゃん」

「これさあ…」

「うん！」

「どうなってんの!？」

「わっかんないや!!」

私のことを穂乃果さん、などと呼ぶファンは、高海千歌ちゃん。私達、μ'sの影響でスクールアイドルを始めたらしい。

そして私達を囲んで、こぞって写真を撮影したり声をかけたりしている老若男女様々な人は、私と千歌ちゃんを『アニメの中のもの』だと思ってるらしい。馬鹿げてる、とは思う。けどね、ここまで大掛かりなドッキリは、ここ——山梨県が全協力でもしない限り、無理だと思う。

ふふん、冴えてるでしょ。なんて言ってる暇はないけど……。

「あ、時間が——しつれ——しまーす！」

「そ、そうだー！新幹線が来ちゃうのだー！」

『『新幹線なんて山梨には通らないけど？』』

「えッ」

「……にげろっ」

「ちよっ、待って穂乃果ちゃん！」

とりあえず、分かっていることはみつつある。

ひとつ。

この子は、私と同年だ。沼津？の、浦の星女学院ってところの、高校2年生。

ふたつ。

私達は、アニメのキャラだ。『私達のμ's』も、『千歌ちゃん達のAqours』も、ラブライブ！という、プロジェクトの。

みつつ。

ここから逃げて、みんなと会わなければならない。

「東京ー！」

「え!？」

「東京、行くよ！」

「な、なんで！」

「なんとなく！皆、いるかもしれないし！」

「え!?!じ、じゃあ私は淡島へ……?ん……!?!」

「これで、良かったんですか？」

「うん……待ってると思う」

「貴方は、あたしなのねッ?!」

「そだよー!あたし、西木野真姫!」

私は驚きっぱなしだった。

この少女……西木野真姫は、私達の知っている、いや、私達の出会った西木野真姫とは、『すこし違う』。『すこし』、と言っても、『上と下』……という問題ではない。『右と左』、という問題だ。

『パラレルワールド』。

東京行きの機関車は、優しく、私達を揺らす。

「ああ、本当に私は夢じゃあない所にいるの……?」

「現実でもないけどねー。『夢と現実』のハザマ、そこが、ガリバーランド」

「じゃあさ、ちっちゃい真姫ちゃん」誰の『何』が小さいですつてエー——ッ……ち、違う違うッ!このロリロリしてる、パラレル真姫ちゃんのことだからー!」

「フン、紛らわしい言い方しないでよね」

「アンタの早とちりよ!でね?その……『そっちの私達』って、どうなったの?」

「んー…死んじやった」

「ひっ」

花陽さんが、小さく細い悲鳴をあげた。

私の体温がスッと下がるのが、青ざめてゆくのが分かった。この子は、『8歳の頃の姿に戻され』、『10年を1日にされた』。ガリバーランドに入ったのだ、パラレルのμ，sも。

μ，sは……『この子と一緒にいたパラレルのμ，s』は、『死んだ』。

何故とは。

何故か。

今にわかる。

「……ずら丸?さつきから寝てるの?うーんだのなんなの……」

口から垂れる涎をハンカチで吹いてやる。次の瞬間、私もまた、津

島善子もまた、悲鳴を喉の奥から…腹の奥から叫ぶことになる。

私のヴィヴィアン・ウエストウッドの白いハンカチには、刺繍のように、くつきりと。赤い、紅い、明い『血』がついていた。

「…よ……し、こ………ちや………」

「!!」

「花丸さん!？」

「花丸ちゃんツ!!」

「ぐあつ」

「ワツザ!？」

「にやあつ……!」

何が……起きている？

この場で起こっていること自体は、その状況は、理解できた。ラメ入りの黒いスライムみたいな、また天を、空を、宇宙をふさぐ雲みたいな、そんな…車内だった。

触手？ケムリ？それとも、人？分からない。

とにかく、ここから出る方法とは、ふたつある。

「があつ……!」

「こ、この…ツ!」

「……………」

こいつに、『フラッシュ』に殺されるか。それとも…。

『それとも……フラッシュを……』

『…クーツクツク!このヨハネにかかればツ!』

『やめるすら』

「……だ、てん、し……」

小さな真姫さんが、もっと小さく、呟いた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「……………!？」

無言の叫びが、聞こえた気がした。私の手から出た、『黒炎』に反応するように。

肩甲骨と膝に力を入れ、腹の底から。さっきの悲鳴とは違う、雄叫びのようなものをあげる。呪文なんて洒落たものはないのかと、少し

だけ幻滅してしまった。

しかし、良いのだ。

ずら丸が、いや、ずら丸を、助けられた。

「うっそーん……」

「お姉ちゃん、ほんとに墮天使だ……!」

「よよよ、よく分かんないけど、このヨハネにまつかせなさいッ!」

ぶちかますッ。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラ」

「ッ………!?!」

「ま、魔法………!」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

「み………み!みみっ!」

「オラア————ッ!!」

「未来じゆらあああ………ッ!?!」

もうひとつの、ここから、パラレルから出る方法。みんなと元の世界に戻る方法。みんなが、笑顔になれる方法は。

津島善子に、戻れる方法とは。

『フラッシュ』を倒し、思い出の場所に行くことだ。

「こ、コスプレ……かあ………ちよつと楽しそうかも……」

「言ってる場合じゃあないですよ!」

「う、うん、逃げなきゃってことは分かってるけどさあ………!」

「多すぎるでしょおおおおお!!?」

もうダメかもしれない。

ラブライブのファンこと、『ラブライバー』という存在があるらしく、私達から言わせればラブライブだけを好きになるのは不自然なのだが、ラブライブ……というのは、『作品名らしい』。

フィクションになっているのだ。

『私達の物語』と、『千歌ちゃん達の物語』が。

Aqours、とは、私……高坂穂乃果が一応リーダーとなつているμ's解散。つまり第2回ラブライブの5年後。いや、あのアキバライブの5年後、浦の星女学院を廃校から救うため、スクールアイドルで入学志望者を集めるために結成……私達の真似事などと千歌ちゃんには言っているが、こつちからすれば恥ずかしくてそれどころではない。

音ノ木坂、そしてμ'sが5年後も伝説として語り継がれていること。それから、スクールアイドルが増え続けていること。本気で私達を尊敬して、ラブライブで優勝しようと燃えている子がいること。

そしてこれがアニメになった時、こんなにも熱狂的ファンが増えていくこと。偶然逃げてきたココリのアニメイトに入った時なんて、もう恥ずかしさで倒れそうだった。

「今何時?!?ここどこですか!?!」

「し、し……しおやま?あ、えんぎん!」

「アキバまであと何キロ!?!」

「……………ひやくじゅうななきろおおお!!」

「うわあああああ?!丸1日だああああ!?!」

「何時間、経った？」

「分かんない……」

「……………1日くらい、ずら」

「うっそお!?!」

「イツツトウルー。23時間は確実に過ぎてるわ」

「につこにつこにー☆」

「るっびるっびるー♡」

「やっとなる場合かア—— ツ！仲良しか！そこのツインテ2人組
！」

「テンションで乗り切る術は長く続かないわよ……医者の娘が言うの
よ、信じて頂戴」

「まっきまっきまー♪」

「はっ倒すわよ!?!」

危険を感じて機関車の中から一旦降りたはいいものの、そこから歩
き続け、フラツシユを薙ぎ払いながら——ほかのメンバーも、あた
しと同じく魔法が使えないので、鉄パイプなり使って——切り抜け
てきた。

ヨハネの半自動的な治癒魔法にも助けられ、どうにかアキバまで来
られた。

「もう、千代田区……だよ……」

「ここからアキバドームに行けば!」

「うん、皆に会える…はず」

「よし！絶対ここから脱出するわよ！皆一緒に!」

自分でも、周りの皆と『やってしまった』と叫びたくなった。全員、
頭を抱えるなりホリーシートと嘆くなり、思い思いの表情を浮かべ
る。ヨハネはもう、魔法を打つ構えに入っている。

背後に、気配。

「につ……こ、につこ………にー☆……」

「……………!?!」

突如、無言の爆発。

破裂音も、悲鳴も、聞こえない。誰の耳も汚さないような、爆発だった。

「え”っ」

「わ、私…打ってない、んだけど…?」

「ほんと…:…どーなってるの…:…」

驚く暇もなく、ヤツらが次々に仲間の屍を吸い込んで襲ってくる。

「ギャー!? な、何回見ても苦手なおお!!」

「あっち行きなさい! しっしっ!」

「タロットの残弾、あと1ケースや…: 一気に決めるで!」

「背中は預けたよ、ルビィちゃん!」

「凛さん、任せてください!」

「エリーチカさん…: 行きますわよ」

「ふふん、言われなくてもっ」

いざ。

「あばただけだぶらー!!」

「いや空気読んでよ善子ちゃん!」

「ヨハネよ! さ、さっさと行きましょ!」

「うわわっ、ちよ、早いよお!」

私とて、黙っている訳にはいかない。私の決めゼリフこと落とし文句ごと宇宙一スクールアイドルの呪文は、この可愛い可愛いピンクの唇からしか発せられないのだから。

「にっこにっこにー☆」

爆風しか来ない、マゼンタの爆発。一撃必殺にして残弾無限。

「見えてきたよ、ドーム!」

「よし、全力ダーツシュ!!」

「いけー! おせー!」

「突っ走りますわよ!」

長い間、連れ添った街。

Aqoursにとっては、遠い、そして、憧れの舞台なのだろう。

「思い出だ!!」

「これが、私達の!」

「輝きだああ!!」

「不可抗力だった。」

「意識がふつと遠のいた。」

倒れた……いや、地面に伏す直前。フラッシュは何かを、何と云っていたかは聞こえなかった。思い出の中のμ sと、台詞が重なって
いたからだ。

「……………」

「吸い込まれてゆく。」

「突如として意識の消えた、ガリバーランド入りとは別に、少しずつ。」

「……………」

「……μ s?」

「A q o u r s……………」

「わすれない……」

「……うん、忘れないよ……………」

「久しぶり……真姫ちゃん」

「穂乃果……シンガーでもやってるの?」

「まあね。ニューヨークで路上ライブ? ってかんじ」

「相変わらず歌が好きなのね」

「真姫ちゃんもね!」

「……さて、そろそろ『私達のμ s』も戻ってくるわ」

「『いつち』は?」

「もうじき起きるでしょう」

「そっかー。もー、感謝してよね？私と千歌ちゃん。私がいなかったら死んじゃってたし」

「私も疲れちゃったわ……けど」

「また、来たみたいだね」

「彼方ちゃん、ここでいいの？」

「んー。たぶんー？」

「しつかりしてくださいよ！」

「しずくちゃんは元気いいねえ。なんかいい事あった？」

「さて」

「皆で行きますかー！」

「ふふ」

「えへへ」

一度きりの言葉

あの日、あの時、あの場所で。

君と出会わなかったらどうなっていたんだろう。

そのまま何もなく無意味な時間を過ごしていたのかな。それとも違う人と運命的に出会って、もしかしたら恋に落ちて一緒になっていたのかもしれない。

……なんて、それこそ無意味なことを考えてしまうのは昔からの僕の悪い癖かな。

それでも、それでもなんだ。無意味でも何でもない。僕の人生においてもっとも大きな意味を持つものが一つだけあるんだ。

やっぱり僕はどう足掻いても、君と初めて出会った場所に君が現れなかったとしても、その次に偶然違う場所で君に出会えたんだとしたらいい。

その時、僕は必ず君に恋をしていたよ。

君と初めて出会った時、その頃はまだ恋というものを知らなくて何も分かっていなかった僕だったけど、今でも覚えてるよ。

誰も見惚れてしまうような明るくて艶やかな金色の髪の毛のポニーテール。吸い込まれそうになるほど透き通った蒼い瞳。日本人離れしたプロポーション……って言うところとちょっと変な意味に聞こえちゃうけど、それも含めて君は誰から見ても魅力的だった。

何の変哲もないカフェ。

大学の近くにある店でそれこそ社会人や高校生、大学生が多くて僕もよくそこへ通っていた。

時には友人と、時には一人でも行くくらいにはそこでコーヒーの一つでも頼んで勉強や店で読む必要のない本を読んでいた記憶がある。確かその時は僕は一人だった。そこに友人がいたら絶対からかわれてたに違いないからね。

今でもはつきり覚えてるよ。当然さ、忘れるなんて到底できやしない。君と出会ったのはあれが初めてなんだから。

偶然。本当に偶然。君があのお店に初めて来て、トレイに乗せたアイスコーヒーを何も無い床に躓いて盛大に僕の服にぶちまけたこと。

あんなインパクトのある出会いなんて当たり前だけど僕も初めてだったよ。初対面で君が何度も頭を下げながら謝るもんだから周囲の視線も痛かったなあ。

こんなにも綺麗な人が案外ドジだったもんだからそりゃあ笑って

許しちゃうよね。見た目がいかにもクール系だったからギャップも感じたし。人を見かけで判断しちゃういけないって思い知らされたよ。それがきつかけで同じ大学に行ってることが分かって、話す機会も自然と増えていったね。

連絡先も交換して、僕と君の友達も交えて交流もどんどん深めていった。君が高校生の頃にスクールアイドルをやったことも聞いた。

そんな日々をいくつも繰り返してきたある日、僕は気付いたんだ。いつも君といるとき、自分でも気付かないうちに君の顔ばかり見ていた。優しく包んでくれそうな笑顔に、こんな僕の話笑笑って聞いてくれる君にいつしか惹かれて。

どうしようもないほど君に恋をしたんだよ。

……だけど、現実なんてそう簡単に上手くいかないことのほうが多い。僕はまず自分自身に自信を持つことができなかった。

頭も良くて誰が見ても振り向くような美しい君と、成績も見た目も人並みかそれ以下でしかない僕。

他人より秀でているものなんて何もなかった。

自慢できるような成果も誇れるほどの才能も持ち合わせていなかった。

何か一つでも自信に溢れるものさえ存在していなかった。

将来やりたいことや本気になれるようなものも出来たことがなかった。

スクールアイドルをやったくさんの人々を魅了してきた君とは全然違う。

何もなかったんだ。君の輝かしい過去の話を聞けば聞くほど、僕とこの人間の矮小さを感じさせられた。

君の笑顔にはいつも見惚れてしまうのに、心の奥底では何も無い自分に対して何もかもが嫌になってしまう。

どれだけ君が好きでも、どれだけ君に恋焦がれていても、自分と

じやあまりにも釣り合っていないと思つてしまった。

生きてる世界が違つて見えたんだ。僕じや君と付き合えたとして、本当に君を幸せにできるのか。

凡人でしかない自分なんかよりも、君ほどの女性ならそれこそモデルやお金持ちの人のほうが満足させれるんじゃないか。僕より充分なほどに君を幸せにできるんじゃないかって思うとき、どうしても伝えようとした言葉が出てこなかったんだ。

何度も何度も言おうとして、今日こそはつて決めたにも関わらず最後には足が止まつてしまう。

やっぱり釣り合わないから、自信がないから。もし付き合えたとしても、幻滅されて最後には君から離れてしまふんじゃないかって思つてしまう自分があるんだよ。

そして僕は自分の気持ちに蓋をした。

今の関係を壊したくないのはもちろんだけど、それ以上に大切な君を失いたくないから。君の笑顔を奪いたくなかつたんだ。

だから僕はあるとき一人になろうとした。

君を想うことしかできない気持ちをどうにかして抑えるために。つきたくない嘘をついてまで一人になろうとしたんだ。

それなのに、君はそれを許してはくれなかつた。

僕の表情を隠すのが下手だつただけなのか、君が誰かのそういう感情の変化に鋭かつただけなのかは知らないけど、君を避けるようにしていた僕の後ろをずっと着いてきたよね。

所詮僕は君にとって数いる友人の一人に過ぎない。そう思つていたのに、君が僕にここまでする必要なんてこれっぽちもなかつたはずなのに、君の時間を奪つてしまうのに……あんな泣きそうな顔をされたら放つておけるわけないじゃないか。

君の泣き顔なんて世界で一番見たくなかつたのに、それを僕自身がさせてしまったことを今でも後悔してるんだ。

僕のためでもあつたけど、何より君自身の幸せのために距離を置こうとしたのが悪かつたんだって今なら分かるよ。

君の幸せを一番願つていたのに、君を一番悲しませていたのは紛れ

もない僕だった。

だから本当に驚いたんだ。友達だけの関係でいたくて、だけど伝えたい気持ちと一緒にいればいるほど溢れてしまうのが怖くなって離れたのに。最初は信じられなかった。

まさか君から告白されるなんて微塵も思っていなかったんだから。

何で？

どうして？

疑問ばかりが出てくる頭とは裏腹に自分の口からは何も出てこなくて、君の口から放たれる言葉を耳に入れることしかできなかった。僕のが好きだから一緒にいれた。僕のが好きだから避けられるのは耐えられないと。

涙を浮かべながら言う君をその時の僕はどんな顔で見っていたのかはあまり覚えていないけど、嬉しさよりも先に悔しさが勝ってしまった。

勝手に釣り合わない決めてつけて、勝手にあるかもしれないかもしれない希望を捨てて、勝手に自分から君を離そうとした僕自身に。

必死に言葉を紡ぎながら想いを伝えてくれる君を見て思ったんだ。こんな僕でも良いのになって。色々なものを持っている君と何も持っていない僕。不釣り合いもいいところなのに、それでも君は僕を選んでくれた。

人を好きになるきっかけなんて些細なことでもいい。気付いたら好きになってたっていい。

本当に誰かを想える気持ちがあるなら、たったそれだけでも充分誇れることなんだと思えた。

だから決めた。

君が僕を選んでくれたのなら、僕はもう二度と君を離さないよ。

驚いたよ。絶対に叶うはずのない恋だって思ってたのに両思いだったなんて。

しかもお互い大学生にもなって初めての恋人だったってことも。

君ほどの女の子なら彼氏の一人や二人くらいいてもおかしくないと思っただけけど、意外だったよ。

お互いの気持ちも確かめ合えたし晴れて付き合うことになった僕達。そこからの日々は長いように思えてとても早かったよね。

文字通り楽しいキャンパスライフを送って、様々な季節を君と共に過ごしてきた。

アルバイトして貯金もたくさんしたおかげで二人で同じ家に住むこともできた。

大学も卒業して、希望通りの会社に勤めることもできた。
今でも不思議なんだ。

君と出会う前は本当に何もなかった僕。友達と時々遊んだりしながらもどこか輝きのない日々だった。

そこへ君という光が現れてくれたおかげで今の僕がある。
何も誇れるものがなかった僕にそれができた。君がそばにいてく

れるだけで何でも頑張れたんだ。君が家で待っていてくれることを考えただけで仕事にやりがいを持ってたんだ。

これだけは断言しよう。
君のためなら僕はどこまでも頑張れる。

君との未来を想像すれば、君を失う以外なら大体が幸せだった。時には喧嘩することだってあるだろうけど、それ以上に仲直りできる理由を探そう。君との時間が僕の全てだから、僕はそれに命だって掛けるよ。

僕達が社会人になって、僕が君に家事を全部頼んだのも僕が一人でどれだけ君を支えられるか試したかった。

結果的に支えられていたのは僕なんだって家に帰ればいつも思い知らされるんだけどね。君がおかえりと言って笑顔を見せてくれるだけで、疲れなんて吹き飛んじゃうんだ。

二人で同棲を始めてから結構時間もたった。結構良い会社に入れたから給料も良いし休みだつてとれる。

今日は休みをとったけど、それにはちゃんと理由もあるんだ。
いつも君は僕の誕生日だったり記念日にはサプライズで僕を驚か

せてくれた。

本当ならそれは僕の役目なのにいつの間にか君の役割になってるし、でもそれで君が楽しそうに笑うんだからつい任せちゃうんだよ。案外そういうサプライズやいたずらっぽいところもあるんだって新発見にもなつて、また君の魅力を一つ知ってしまった。

そして思ったんだ。君はサプライズをするのが結構好きらしいけど、ならサプライズされるほうならどうなんだろうって。

それを確かめることにしたよ。お互い一緒にいる時間ももう長いし、タイミング的にもそろそろかなって思ってた。

今日、君に伝えることがあるんだ。

今まで『好き』や『愛してる』なんて言葉はたくさん言ってきたけど、まだ言えてない言葉があるんだよ。

雰囲気作りや高級レストランでムードを作るのも必要かなって思ったんだけど、不器用な僕には似合わないから突然だと思うけど許してほしいな。

今君は隣の部屋のリビングで温かいミルクティーを飲みながらテレビを見てる。僕は自分の部屋の机でずっとこうして日記を書いている。

今日のに関しては日記というより決意表明みたいなものかな。君と出会った頃を思い出しながらドキドキしてるんだ。

多分、今日は今までの人生で一番緊張してるかもしれない。口下手な僕が上手く言えるかも分からないし、受け入れてくれるかも分からない。

けど、僕は決めた。

逃げないために店で買っておいた物もちゃんとある。

ノートを閉じてリビングへのドアを開けると、やっぱり君はミルクティーを飲みながらテレビを見ていた。

僕を見るなり優しく微笑みながら同じミルクティーを入れてくれた君を見ると、相変わらず優しいなあって思うよ。

ミルクティーを一口飲むと甘さが口内で広がっていくと共に緊張のせいで鼓動がだんだん早まっていくのが分かる。

どうしたの？ と聞いてくる君の顔も見れずに俯いたまま顔を上げることができない。おそらく今の僕の顔は真っ赤だろう。

君の質問に上手く口では答えられないのに、心の中だとちやんと言えらるんだ。

『好き』や『愛してる』以上の言葉を言うときが来たんだと。

そんな言葉はもう簡単に言えてしまうけど、今日の今日までずっと言えなかった言葉があるんだよ。

君以外には使うことのない、一生涯で一度きりしか使わない言葉なんだ。二度は絶対に言わない。君のためだけに用意した言葉。

勇気を出して店で買っておいた物をテーブルの上に置く。

まだ口には上手く出せないけど、ずっと心配そうにどうしたの？

と聞いてくれていた君が驚いた表情になったのはよく見えた。とりあえずサプライズは成功かな。

あとは僕の口から直接言うだけだけど、困ったな。

あれだけイメージトレーニングとかシミュレーションしてたのに、いざ本番ってなったら全部飛んでしまった。

やっぱり人生最大に緊張してるからかな。

でも、言わなくちゃいけない。これだけは絶対に言わないと何も意味を成さないんだから。

付き合ったときから決めたことがある。

君を一番幸せにできるのは他の誰でもない僕だと証明すること。これからの人生の全てを君に捧げる準備はできているんだ。それが二人の幸せに繋がるのなら僕は喜んで差し出せる。

それでももしこの先に何か不幸なことがあるなら、それは君を失ったときだけだろう。今の僕はさ、もう君が隣にいない未来なんて考えられないし考えたくもないんだよ。

こんなことを思ってしまうほど僕はきつと君に溺れてるのかもしれないね。こんなことを言ったら君は笑うだろうけど、僕の愛は本物なんだって分かるまで伝え続けるよ。

だってもう僕は君を知ってしまった。君のせいで『愛』を知ってしまったんだ。

おそらくこの先引き返すことのない道を君と歩んでいくための感情。君も知っているんだろ？

一緒にいるだけで泣いてしまうこともあった。幸せすぎて苦しいって笑う君を見ていつまでも一緒にいたいと思った。自分のために生きてきたつもりだったのに、いつの間にか君の喜びが僕の幸せになっっていた。

だからそろそろ言わなきゃいけない。

それにしたって正面にいる君がそんな涙を浮かべているのを見ると、やっぱり僕は色々顔に出ちゃうタイプらしい。

僕が不器用なのを知ってるから君は僕からの言葉をずっと待っていてくれる。もう何を言うかも分かっているはずなのに……君はいつでも優しいんだね。

最大限に僕を理解してくれているのは君だけだ。だからこそ僕も分かる。

君から告白されたとき、悔しかったのには他にも理由があった。

それは男として自分から告白すべきだったのに、君から告白させてしまったこと。変な理由をこじつけて自分から逃げていたこと。

僕はずっとそれを引きずっていた。付き合ってから、今も。

だから、今度はもう逃げない。君からじゃなくて、僕から言うために。

ムードも何も無いけど許してほしい。

不器用な僕だけど、この気持ちだけはどこまでも真っ直ぐだから。口を手で覆い隠しながら涙を流す君を見て思う。

あの時は悲しい思いをさせてしまったせいで君を泣かしてしまった。それがずっと嫌だった。

だけど、今の君が泣いている理由は何なのか。今の僕なら分かる。答えなんてもう分かっているけど、僕もこの幸せを零さないように言うよ。

テーブルに置いた小さめのケースを開ける。形のない愛を少しでも形にするための誓いの輪。どこにも見当たらない愛だけど、僕達の間なら確かに感じられるんだ。

捨てるものは君のいなかった過去。孤独だった生き方と引き換えにしよう。

僕はもう覚悟はできた。

君のいない未来にもう未練なんてない。

一生涯で僕が一度きりしか言わない言葉。

君のためだけに用意した言葉。

他の誰でもない、僕が君を世界で一番幸せにするから。

「僕と結婚しよう、絵里」

お姫様達と騎士の夜

これは、夢だろうか

それとも、幻の類だろうか

微睡みのような、酩酊のような、甘い虚脱感の中

僕はその光景を、ただぼんやりと見つめていた

螺鈿を散りばめたような星空の下、篝火に揺れる9つ影

今この瞬間がずっと続けばいいとさえ思う

幻想的で、情熱的で、今宵限りの宴

この出来事を、僕はずっと忘れないだろう

くお姫様達と騎士の夜く

「それでは、ここで少しお待ちください」

従者の格好をした女性に、だだっ広い応接間に通され、僕は首をすくめるように黙って小さく頷く事しか出来なかった。

初めて入るお城の中は、外から見るよりも中はずっと広く、今いる部屋も、下手したら僕の住んでいる家よりも広いのではないかと感じるくらいだ。

羨ましいと思うよりも先に、掃除が大変そうだなと考えてしまうあたり、僕も大概貧乏性だなと思わず自嘲気味に笑う。

革靴越しにでもわかる上質な絨毯の感触に微妙な居心地の悪さを感じながら、僕は今日ここに呼ばれた経緯を今更ながら思い出す。

僕はこの王国に使える騎士だ。

国境の最前線で国を守り、隣国と睨み合い、時には小競り合いをしたりという事を生業としている。

自慢ではないが、生まれつきたまたま夜目が利くので、特に夜間の

行軍で重宝されたり、重要な作戦の主軍を任せられていたりすることがしばしばある。

そして先日、僕の隊が他国との戦争において多大な戦果を挙げた。そのことで、この国の王様から直々にお礼がしたいと、こうしてお呼ばれに預かった訳なのだが……

生まれも育ちも庶民の僕にとって、こういった場所はどうにも落ち着かない。

緊張しているせいかわからない——おそらくこれも高級品なのであろう紅茶で意味もなく唇を湿らせていると、先程の従者が戻ってきた。

「お待たせ致しました。陛下に謁見の前に、ひとつお願いが……」

深いお辞儀もそこそこに、やや困った顔でそんなことを僕に言った。

「実は、姫様方が貴方様にお会いしたいと言って聞きませんで……」

?? ?? ?? ?? ??

この国には、9人のお姫様がいます。

全員もれなく、すれ違えば必ず振り返るほどの美少女達であり、王都では大変な人気を誇っている。

特にすごいのが、王族ながら芸能活動に力を入れておられるらしく、全員が音楽に合わせて歌を歌い、踊ったりするというのだ。

定期的に劇場で開かれているらしい舞台は毎度超満員で、定価の十数倍で入場券を購入する輩までいるそう。

僕自身、すっかりお目にかかったことはなく、前に一度、公務で前線基地に慰問でやってきた際に遠目でちらっと見たくらいだ。

あの時の仲間達の喜び方といったら、泣き出す奴や、手を握ってもらい「もう一生手は洗いません！」と叫んで怒られていた奴もいたりした。

直接会ったとなれば、後でどんなやつかみの文句を吐かれるかわかったものではない。

今日の出来事は胸の内だけに留めておこう。

とてつもなく長い廊下を歩きつつ、どこかへ案内してくれる従者の後ろでそんなことを考えた。

「こちらです」

一体何分歩いただろう、着いた先は、立派な装飾が施された木製の扉の前。いかにもといった佇まいの扉を、従者が控えめに叩く。

「失礼します。騎士様をお連れしましたし——」

「やつと来たにやあ！どこ？騎士様どこ！？」

こちらが開けるより先に、小柄な少女が飛び出して来た。

「貴方が月の騎士様!?会えて嬉しいにやあ！」

さ、入って入って。貴方のお話、たーくさん聞かせて！」

聞き慣れない単語と共に、僕の手をしっかりと握って、部屋に招待

——否、引き摺り込もうとしている。

「姫様!?いくら騎士様とはいえ、未婚の男女で密室というのは——」

「あたし全然女の子っぽくないから平気だつて！さあ騎士様！」

……お姫様って、みんなこうなのだろうか？初めてのことなので、

面食らってしまいどう反応してよいか困ってしまう。

本当にすみません……と言いたげな従者の目線に心配ないと精一杯の目力を返し、手を引かれるまま部屋へと招かれた。

?? ?? ?? ?? ??

月の騎士

王都では僕のことを、夜に現れる事からそんな風に言うらしい。

幾ら何でも名前負けし過ぎだと思う。

嬉しさや誇らしさよりも先に、大仰な呼称に対しての気恥ずかしさや申し訳なさの方が先に来ってしまう。

「そんなことないにや！騎士様とっても素敵だよ！思ったよりもずっと若かったのがびっくりだけど……あたしと歳あんまり変わらないよね？」

そう可愛らしく小首を傾げながら話す美少女は、栗色の髪に蜂蜜色の瞳をしたお姫様だった。

柔らかそうな髪は短く肩の上で切り揃えられ、快活そうな雰囲気と相まって、本当に子猫のような印象を受ける。特徴的な語尾も、この子なら似合うなと納得してしまう。

「王都は貴方の話で持ちきりなんだにや。夜と共に颯爽と現れて、敵国に裁きをもたらす！やっぱりこういう英雄譚がみんな大好きなんだにやあ……」

それがこんな男の子だったなんてねえと、お姫様は天蓋付きのベッドに腰掛けてけらけらと笑う。

長い睫毛に瑞々しい唇。すらりとした華奢な手足。

本人は女の子っぽくないからと卑下していたが、どこからどう見ても麗しいお姫様だ。

「そ、そんなにまじまじ見られると恥ずかしいにやあ……」

赤面して顔を背けた彼女に、不躰な視線を向けたことを慌てて詫びる。

「あ、違うの！怒ってるわけじゃないのにや！そこはむしろ逆というか……いやいやそうじゃなくて！」

ぱたぱたと、慌てた様子で手と首を振る。

「お城の中つとつても退屈でさあ……あんまりお外にも出られないし、みんなといるのはすごく楽しいんだけど……」

椅子の縁にちょこんと腰掛け、脚をぷらぷらと遊ばせながら、お姫様は瞳を輝かせる。

「だから、今日は貴方の話を聞かせて？あたし外のお話が大好きにや！貴方のお話、隣の国のお話、何でも話してほしいな！

他の子達の時間もあるから、あんまり長くは居られないけど……」
そう言つて立ち上がり、膝をついている僕に、手を差し伸べる。

「お話ししてる間、お城の中を案内してあげる！ほんの少しの間だけど、お姫様のワガママだと思って聞いてくれると嬉しいな！

ほら、一緒に行こ？」

そう微笑む彼女は、あどけなきの中に、どこか凜とした雰囲気も

えていた。

?? ?? ?? ?? ??

「こんばんは！初めまして！あの月の騎士様に会えるなんて嬉しいなあ！」

頭の横で結った髪を揺らして、次のお姫様は僕を見つめるなり駆け寄って来た。

お日様のような、温かみのある橙色の髪。僕の手を握りながら飛び跳ねる度に、ふわりと本当にお日様のような良い香りが漂う。

「あの子とどんな事話してたの？私にも色々聞かせて！」

そう言つて蒼玉の瞳を輝かせて僕を見つめるそれは、子供が兵隊の行進を眺めているのを見つめているのと同じくらい——それ以上に期待と憧れを抱いているように見えた。

お姫様という生き物は、先程の彼女と言い、こんなに元気が良くて外の話に貪欲なものなのだろうか。

彼女に手を引かれながら、矢継ぎ早に繰り出される質問に、言葉を選びながら答えていった。

何かを言うたびに目を丸くし、へえー！や、すごーい！とわかりやすく反応を返してくれる。

答えている僕からしてみても、非常に気分が良いものだ。

「わたし、活躍する騎士様の話を聞いて、すっごく憧れてたんだあ！本当はもつとたくさん色々とお話したいのに、次の子も待つてるから……」

珍しい。剣と戦に興味のあるお姫様なんて初めてだ。

まあ、そもそもそれも僕が勝手に「お姫様」というものを決めつけていただけであつて、本当は彼女のようにみんな活発であるかもしれないのだが。

「……それで、騎士様は、どんな女の子が好みなの？」

唐突に、上目遣いでそんなことを聞かれた。

今までずっと鍛錬や前線で戦っていたので、そういったのは考えた

こともない。

どうしてそんなことを聞くのかと逆に尋ねてみると、やや驚いたような顔をして

「え？いや、特に深い意味はないんだけど……」

……ばか、気付いてよお……」

最後の方は、か細くて良く聞き取れなかった。

健康的な肌がほのかに薄く染まり、僕の心臓も少し早くなった。

?? ?? ?? ?? ??

「あ、いらっしやい騎士様〜」

次のお姫様は、花園でお茶を飲みながら僕を待っていた。隣の椅子をぼんぼんと叩かれたので、僕も大人しくそこに座る。大きな琥珀色の瞳に、堅い表情の僕が写っていた。

「ごめんねーみんなのところに顔出してくれて。私もちゃんと会えてとっても嬉しいなあ」

そう言っつてふわりと微笑む彼女からは、どことなく不思議な安心感を感じた。母性と言うか何と言うか、幼い頃に母の腕に抱かれて居た時の温もりというか、そういつた慈しみに近い雰囲気を感じたお姫様だった。

「実はね、私は貴方に一度だけ会った事があるんだあ。ほら、少し前に公務で貴方のいる拠点に慰問で行った時にね。ちらつとだけ見たの」

慣れた手付きで僕の紅茶を淹れてくれながら、彼女は色々な話を話してくれた。

お城のこと、他のお姫様達のこと、芸能の稽古のこと、大変な公務のこと。

先程のまでと違い、僕が彼女の話の聞き、それに相槌を打つような形になっていた。

お姫様と言うのも案外大変な立場なのかもしれないあと、彼女の勉強漬けの日々の話や、様々な稽古がとても大変である話を聞きなが

ら改めてそう思った。

実は大して凄くもない、兵役や戦争の話に過剰な憧れを抱いたりするもの、息苦しい日常からの反動なのかもしれない。

「――それで」

ふと、彼女が半歩身を乗り出して、僕にその綺麗な顔を近付ける。さらりと揺れた髪から漂う良い香りが濃くなって、思わず平行感覚を失いそうになる。

少し潤んだ瞳越しに、戸惑った表情の僕と目が合った。

「……どうかな、私って。どう思う？」

僕に伸ばされる、白磁のような指。置かれている立場も忘れ、思わず握ってしまいそうになる。

「一目見た時から、素敵な騎士様だなあって、ずっと思ってたの」

するりと綺麗な指が頬を撫でて、産毛が粟立つのがわかった。

慌てて我に返り、戯れが過ぎますと席を立った。

彼女は一瞬、呆気に取りられたような顔をして、くすくすと小さく笑った。

「あーあ。ざんねーん。私、結構本気だったんだけどなあ……」

椅子からふわっと立ち上がり、僕に向き直った。

「突然変な事言っでごめんなさい。でもね、私は貴方の事をとっても慕ってるの。」

ううん、私だけじゃない。『私達』全員、貴方の事を想ってるの。

今まで会った事がなくても、話したことがなくても、貴方は私が想像していた月の騎士様そのものだった。とつても嬉しかった」

胸の前で手を組み、切なげな表情を浮かべて、

「だから、今すぐに返事はしてくれなくてもいいの。」

でも……でも、他の人を見ちゃいや……!」

餌を持った親鳥に、大きく口を開いて己を主張することりのようなそんな必死さを不意に感じた。

??
??
??
??
??

「こ、こんばんは……」

次のお姫様は、どこことなく小動物的な印象を受けた。

物陰から頭だけを覗かせ、藤色の瞳をこちらに向けて何故か距離を取っている。

僕も挨拶を返し近付こうとすると「ひゃい!？」と謎の声を発し、物陰に隠れてしまった。

何か悪い事でもしてしまったのだろうか。どうしたらよいかかわからず、声を掛けあぐねていると、

「あうう……す、すみません……」

あの月の騎士様に会えると思うと緊張してしまっ……

暫くして、やがて意を決したように姿を現したのは、ふわふわとした梔子色の髪が良く似合う、可愛らしいお姫様だった。

「うう……」

上目でこちらを潤んだ瞳で見つめてくる姿は、何とも言えない庇護欲をそそるものがある。

どうしたら彼女が笑ってくれるだろうか、そんなことをつい考える。

「そ、そしたら取り敢えず歩きながら話しましょ——ひゃわっ!？」

くるりと振り返って歩き出そうとして、自分の足に引つかかった。

そのまま地面にうつ伏せに倒れそうになった彼女を、咄嗟に後ろから抱えるように支えた。

羽でも抱いたかと思う程の軽い感触。

そして、何だかとても柔らかな感触が——

「あ、ありがとうございま——ぴやあああああああ!？」

助けられたのも束の間、礼を述べている最中に何処に触れられているのかに気付き、顔を真っ赤にしながら叫ぶお姫様。

下手をすれば即刻打ち首

そんな言葉が脳裏を過ぎり、僕は頭を地面に擦り付けてひたすらに謝った。

「も、もう大丈夫です……私もついびつくりしてしまつて……
と、とっても恥ずかしかつたですけど、怒つたりしてるわけではあ
りませんから……」

支えてくださつてありがとうございます」

案内されるまま、着いたここは食堂だろうか。小さな椅子と机が何
組か、小ぢんまりとした空間に並べられている。

この時間はとってもお腹が空くんですーと、何故か彼女におにぎり
を握ってもらいながら、僕はまたお姫様と取り留めもない会話をす
る。

ほんわかとした雰囲気彼女は、まさに僕が想像していたようなお
姫様そのものだった。

緊張が溶けたせい、優しく笑いながら喋る彼女を見ると、こ
ちらまで嬉しくなる。

「はい、どうぞ。他の子達と違って何も出来ない私だけど、これだけは
ちよつとだけ自信があるんです」

そういつておにぎりを出してくれた。

礼を述べて手を伸ばすと、時計の鐘の音が2人だけの食堂に大きく
響く。

「あ、もうこんな時間。そろそろ次の子の番になつちやう……」

明らかにがつくりと肩を落として、彼女は寂しそうに笑う。次に向
かう場所を僕に教えながら、お姫様はおにぎりを包んで僕に持たせて
くれた。

跪いて礼を言つて、僕は食堂を後にする。

「あ、あのっ！」

呼び止める声が背中にかかる。

振り返ると頬を染めた彼女が、小さな拳を握りしめていて、

「その、ただの私の我が儘なんですけど——」

他の子達の方がずっと可愛いし綺麗だけど、

最後は、私だけを見て、欲しいな、なんて……ご、ごめんなさいっ
！」

陽だまりの花のような少女が見せた、芯の強さの片鱗である我欲。

儂げな見た目との違いに、僕の心は大きく動いた。

?? ?? ?? ?? ??

「初めまして、月の騎士様。貴方の評判は良く聞いていますわ。その実力もね」

次に向かったのは、お城の中でも端の方にある、近衛兵の練兵場。そこで待っていたのは、甲冑を身に付けたお姫様だった。

美しい金髪を頭の後ろで束ねて、優雅に一礼をするその姿は男装の麗人そのもので、余りの美しさに僕は一瞬息をする事も忘れてしまった。

「今までの子達とはずつとお喋りしてきたんでしょう?」

そろそろ飽きてきた頃合いだと思って、私は少し趣向を変えてみたわ。

——さあ、貴方も構えなさい」

おもむろに腰の刺剣を抜いて、その剣先を僕に向ける。

流石にお姫様相手に真剣で打ち合うのは……と躊躇った瞬間

彼女が視界から消えた——

「——シッ!」

視界の端で剣尖が閃く。反射的に、上半身を捻って身を躲す。髪がはらりと何本か切られて宙を舞った。額に冷や汗が浮かび、背中のど真ん中を寒気が貫く。慌てて後ろに跳んで距離を取った。

「宮廷の道楽剣術か何かだと甘く見ないで欲しいわね。」

月の騎士様と言えど、簡単にあしらえる相手ではないという自負があるわ。

——さあ、構えなさい」

紺碧の瞳に情熱を滾らせ、刺剣を身体の前で構える。その姿には付け焼き刃ではない、剣に対する自信が滲み出ている。

お姫様だからと、心の何処かで侮っていた。

とてもじゃないが、手加減できる相手ではない。

ひとつ、深く深呼吸をして、僕も腰の剣を抜く。

白銀色の刃身に、空に浮かぶ月が写り込んでいた。

「——くっ、やはり私では叶わないわね……降参よ」

それから打ち合うこと数合、叩き落とされた刺剣を悔しげに見つめ、お姫様はゆつくりと両手を挙げた。僕は剣を収め、彼女に駆け寄ると差し伸べられた手を掴み、引き起こす。

甲冑の汚れを手で払いながら、お姫様の表情はどこか晴れやかだった。

「これでも殆どの近衛にも負けないのだけど、やはり月の騎士様は本当にお強いよね……益々気に入ったわ」

そう話す彼女の反面、僕の内心は終始冷や冷やだった。万が一顔に傷でも付けてしまったらどうしようかと気が気ではなかった。だが、加減して戦えるような相手ではなかったのが尚更に疲れた。

「ねえ貴方、前線基地の駐屯兵は辞めて、私の直属の騎士にならない？ この国は生まれの身分は関係ない実力主義だし、ゆくゆくは私とだって……」

冷や汗を拭っている所に、さらりとんでもない事を宣われた。

見ると、先程のように自信に満ちた姿で、挑戦的な眼差しを僕に向けている。

——ただ、頬がほんのり赤い気がするのは、身体を動かした後だからだろうか？

少し考えたあと、自分には守りたい仲間や部下がいること、あの場所には自分を必要としているので、簡単には辞めて離れたりすることは出来ないことを伝えた。

「——そう、貴方はそれでいいのね？」

少し目を見開いて、彼女は再度尋ねた。僕はそれに対し頷く事です。

「……わかったわ。貴方が簡単に首を縦に振らないことも知ってたけれどね。」

……ただ——

後悔、するわよ——？」

そう微笑む彼女の大きな瞳から、ひとつだけ雫が溢れた。気の強そうなお姫様が見せた涙——その光景に僕は胸が一杯になった。

前に部下が口にしていた事を思い出す。

男は、女が見せる意外な一面に特に弱いのだと。

もし彼女の側近として仕えられたのなら、

その凛々しい顔を崩して、おかえりなさいと笑顔で迎えてもらいたい。

そんな事を、つい考えてしまった。

??
??
??
??
??

「やあやあ騎士様！改めてこうやって見ると、ほんっといい男やんなあ……」

さあ、もつと近う寄りいや」

そうして迎えてくれた次のお姫様は、静かに楽器の演奏が流れる迎賓の間で、手を叩いて僕を呼んだ。

「ここはな、普段は舞踏会や演劇を鑑賞したりする時に使う場所なんやけど、今日は無理言つて貸し切りにしてもらたんよ。折角の月の騎士様との逢瀬やさかい、誰にも水差されたくないしな！」

桔梗色の長い髪を緩く二房に纏めて、特徴的な言葉遣いをするお姫様は、悪戯っぽく笑つて僕の腕に自分のそれを絡める。吐息ですら感じ取れる程に密着して、悩ましいほど蠱惑的だ。

「窓からさつき仕合うてるところ見とったよ。やつぱり噂に違わず本当にお強いんやなあ……あの子、廷内では本職を負かすくらいの腕利きなのに、益々惚れてまうやん？」

自分の匂いを染み付けるかのように、僕の胸にぐりぐりと頭を押し当ててくる。今までの子達とはまた違ったいい香りにくらくらしてくる。思わず肩を抱きそうになった瞬間、お姫様はするりと僕の腕から抜け出して、翡翠色の瞳を楽しそうに細めた。

「戯れはこれくらいにして……今日はあんさんを困らせよう思っ
てここに呼んだんや。」

剣には滅法強い月の騎士様、踊りの方はいかが？」

衣装の端を摘み、腰を折って僕を誘う。彼女の目論見通り、僕は大いに困った。

仲間内で騒いだりする事はあるが、こういった場合は全く慣れていない。

当然、異性と踊った経験もない。

「大丈夫や。うちが手取り足取り教えたるさかい。もしかして初めて？」

へえ……うちが騎士様の初めてを……」

僕の手を取りながらにやにやと笑う。気恥ずかしさを覚えつつも、彼女が本当に楽しそうにしているので、別にいいかなと思えてしまう。

流れている曲が変わった。お姫様は僕の腰に手を当て、耳元で囁く。

「ほら、楽しもっ！」

僕のぎこちない足捌きを見ながら、長年の望みが叶ったかの様に、嬉しそうにけらけらと笑う。

こうして二人だけの舞踏会は、瞬く間に時間が過ぎて行った。

?? ?? ?? ?? ??

「……ふーん、あんたがああの月の騎士？」

話には聞いていたけど、思ったよりずっと若いのね。幼いと言った方が正しいかしら？」

次のお姫様は、瀟洒な椅子に腰掛け、腕と脚を組んだまま僕を迎えた。

董色の吊り目はやや剣呑の色を浮かべ、燃える様な赤毛の先を指で遊ばせている。

今までのお姫様達と違って、歓迎してくれている雰囲気あまりな

く、かえって新鮮な感じがした。

御伽噺にたまに出てくる、いかにもという雰囲気の高飛車なお姫様そのものだ。

なぜああいう人が許されるのだろうか、子供ながらによく考えたものだったが、ようやく正解がわかったような気がした。

ただ顔が抜群に美しいだけで、みんなそれで許してしまうんだろうなと独りごちた。

「……何か今失礼な事考えなかった？」

不意の質問にどきりとし、慌てて首を横に振った。

「そう……」

「……………」

そしてこちらを見たまま、ずっと押し黙っている。

何か機嫌を損ねる様な事を、知らぬ間にしてしまっていたのだろうか。

おずおずと尋ねると、やはり不機嫌そうに、

「……別に、あんたが悪いわけじゃないわ」

と、ぷいとそっぽを向いてしまった。

そのままずっと黙ったままなので、どうしたら良いかわからず困っている、沈黙に耐え兼ねたのかお姫様が、

「……ああもう！だからあんたの所為じゃないんだってば！

とっても楽しみだったの！月の騎士様に会えるって！すつつつごく楽しみにしてたの！

でも他の子達が連れ回すから随分遅かったじゃない！もうあんまり時間残ってないんだもの！話したいことだって沢山あったのに！

だからもうそんな泣きそうな顔しないでよ！こっちまで悪い事した気分になるじゃない！

騎士ならお姫様のご機嫌くらい取りなさいよお……っ！」

涙目で、顔を髪と同じくらい真っ赤にして、僕に叫んだ。

分不相応に、思わず可愛いと、思ってしまった。

ぐすぐすと鼻を鳴らす彼女に丁重に詫びを入れて、こんな自分でも出来ることはないかと尋ねる。

「……………て」

涙を拭いながら、お姫様は頬を染めたまま、ぼそりと何か呟いた。しかし、良く聞こえない。

「……………しを、……………上げて」

少し耳を近付けて、再度尋ねる。

彼女は茹だつたような顔で、怒鳴るように言った。

「……………っ、私を、抱き上げなさいって言ってるの！」

こんな恥ずかしいこと何度も言わせないでよばかあ!!」

僕は呆気にとられ、本当にそんな事でもいいのかと聞いた。

「わ、私がいいって言ったらそれもいいのよ。

早くしなさいよお……………」

今にも泣き出しそうな表情の彼女に近付き、背中と膝の下に腕を通してふわりと持ち上げた。

「あつ……………」

一瞬びくりと身体と強張らせたが、直ぐに力を抜いて、僕の身体に腕を回してきた。

「もう少しだけ、もう少しだけこのままで……………」

絵巻物に憧れたお姫様と、少年騎士の夜は、そうして静かに過ぎて行く。

??
??
??
??
??

「御機嫌よう。良い夜ですね。お待ちしております」

読みかけの本から視線を僕に向け、次のお姫様は僕にそう挨拶をする。

次に案内されたのは書齋だった。実際に脚を踏み入れた感想としては、広過ぎてちよつとした図書館のようだなと思わざるを得なかった。

「ご存知ですか？王都では、貴方のことが童話として本になっているのですよ」

理知的な山吹色の瞳を楽しげに細めて、彼女はさつきまで読んでい

た本の表紙を僕に見せてくれた。

「おひめさまとつきのきし」

鮮やかな色彩で、どうやら僕であるらしい鎧を着た騎士と、お姫様が9人描かれている。

「お読みになったことは？」

読んだことはおろか、本になっていたことすら知らなかった僕は、当然首を横に振る。

「それは良かった。では、どうぞ私の隣にお座りください

騎士様に、どんなお話か読んで差し上げようと思ひまして……」

そういつて、隣の椅子を勧められた。

「むかしむかし、あるところにひとりのきしがおりました。

かれはよるでも、ものをみることができ、ねむらなくてもすすぐすこ
とができることから、『つきのきし』とよばれておりました——」

本を捲る手を止め、上質な藍染のような髪を指で梳いて耳にかける。

その動作が何故かとても艶かしく、僕は思わず息を呑んだ。

そんな僕の心情を知ってか知らずか、彼女はふっと微笑むと目線を本に落とし、読み聞かせを続けた。

「——」『おお、つきのきしさま。ありがとうございます。わたし
たちはあなたさまを、たいそうおしたいもうしております』

そうしてきしは、おひめさまがたから、かんしやのくちづけをたま
わりましたとき。めでたしめでたし」

そこで、彼女はぱたりと本を閉じた。

「いかがでしたか？ 私はこの本がとても好きなのですが……」

感想を尋ねられても、僕自身夜目は効いても寝なければ当然きつい
し、ところどころ過剰に美化され過ぎてて何とも言えない。苦笑いを
して、首を竦めることくらいしかできなかった。

「あまりお気には召しませんでしたか……」

私を書いたお話の中でも特によく書けたと思っていたのですが
……」

驚愕の事実が発覚し、至近距離で顔を見合わせてしまう。慌てて取り繕おうとするも、彼女は笑いながら僕を制した。

「いえ、いいんです。私の想像の中での騎士様なのですから……現実の貴方と多少は乖離して当然です。」

別に気を悪くしたりはしてないので、そんなに慌てないでください」

くすくす笑う彼女に、僕は頭を下げる事しか出来なかった。

「——それはそうと、ひとつ聞きたいのですが……」

貴方は、誰かと接吻したことはありますか？」

不意の質問に、僕の思考が止まる。

「本の最後に、騎士が姫と口付けをする場面がありましたよね？」

実はあれ、想像で書いてしまっているんです。

どんな感じなんだろうなあって……もしご存知でしたら、私に教えて頂けませんか？」

当然、僕にだってそんな経験はない。彼女の期待や、何か大きな感情が入り混じった視線が居心地が悪く、思わず目を逸らしてしまった。

恥ずかしいが取り繕わず、正直に伝えよう。

そう言っただけ彼女に向き直ろうとした瞬間。

唇に、柔らかく、暖かい感触がした。

頬に微かに触れた、絹のような髪の感触。

どこからか、潮騒が聞こえたような気がした。

「本当に、鈍いのですね……」

踊るようにくるりと回りながら離れたお姫様は、そう言っただけで困ったように微笑んだ。

今日ここであつた出来事は、僕と彼女だけの秘密だ。

誰に話すこともなく、記憶の海に留めておこうと思う。

??
??
??
??
??

「……随分遅かったわね」

最後に待っていたお姫様は、今まで見てきた彼女たちの中でも最も小柄な身体を尊大に逸らして、実に不機嫌そうな顔で、膝をつく僕を見下ろしている。

「とりあえず入んなさいよ。」

……と言いたいとこだけど、もう謁見の時間ね……

頭の両端で結ばれたつ艶やかな黒髪が、僕の視線の先でぴよぴよこと揺れるので、思わず目で追ってしまった。

「……それで、こんなにあたしを待たせたのは、他の子達とよろしくやってたつてことでもいいのよね？あの月の騎士様とはいえ、いいご身分ね？」

大きな緋色の瞳は半目に伏せられており、じつとりとした視線を僕に向けている。

よろしくも何も、僕はただお姫様方をお願いされるままに会っていただけなのだが、それもあまり気に食わないらしい。

暫く睨み合う様に視線を交わしたあと、彼女は長い睫毛が縁取った瞼を閉じて、寂しそうにため息をついた。

「……悪かったわよ。そうよ。全部あたしのせい。」

噂で聞いたことあるでしょ？

9人のお姫様は、全員賢くて美しい

——ただひとりを除いて」

小さな姫は、椅子の上で膝を抱えた。

「そうよ。9人いる姫の中でも、私は特に落ちこぼれよ。」

頭もみんなの様に良くないし、武に秀でてる訳でもない。

食事だつても私が一番最後だし、貴方に会えるのだから、私が一番最後。

もう時間なんて殆ど残ってないのに……」

最後の方は、少し涙声だった。

彼女だつて、他の姫達と同様、僕なんかと会ってくれる事を楽しみにしてくれていたのだ。

このお姫様にだつて、他の子達のように

肩を震わせる彼女を見て、僕は手を差し伸べて、一緒に王様の所へ

行こうと提案した。

「……いいの？」

まだ私と一緒に居てくれるの？」

涙で大きく揺れる瞳を真っ直ぐに見つめ返して、僕は大きく頷いた。

「んっ……えへへ、ありがと！」

小さな手が僕の手を握り返し、彼女は初めて、笑顔を見せてくれた。いつも暗い顔の末席の姫が、初めて見せてくれた花のような笑顔。その顔があまりにも素敵だったから、

僕は誰かに、この少女の笑顔を見せてあげたいと思った。

??
??
??
??
??

王様への謁見の後は、お姫様達の芸能を初めて見せてもらう事が出来た。

城の屋上、篝火が焚かれた舞台の上で、9人のお姫様達が扇を持って舞い踊る。

さつき話をした人達と同じ人物とは思えないほど、舞台の彼女達は別人のように輝いて見えた。

僕はその光景を、不思議な気持ちでぼんやりと見つめていた。

これが、僕が護っている国のお姫様——

熱っぽい視線を向けてくる彼女達を舞台の下から眺めながら、僕は一層、この国を精一杯護つていこうと心に誓った。

そうして、夢か幻か、騎士とお姫様達の今宵限りの夜は更けていく

??
??
??
??
??

「えーそんな夢見たのお？」

「趣味わるーい」

「はははは破廉恥ですあんまりですー」

「でも悪い気はあんまりしないかも……」

「ちよつと抜け駆け……じゃなくて、そんな気色悪いこと言うの辞めなさい！」

「不思議なこともあるもんやなあ……」

「お姫様……姫……うへへ……」

「ほら、馬鹿なことやってないで練習始めるわよ！」

「はーい！ほら、そこでしっかりみてね！」

願いを言葉にするからこそ、意味がある

それは学校が冬休みになる少し前のある話から始まった。

μ、sとして活動して二度目のライブの最終予選が終わり、無事に本戦への出場が決まった年末の部室での会話だった。

「ねえねえ！ 来年の一月って流星群が来るらしいよ！」

μ、sの九人が練習を終えて、部室で帰るまでのひと時を過ごしていると、高坂穂乃果はそんなことを言い出した。

サイドポニーを揺らしながら楽しそうに可愛らしい顔を笑顔に変えて、穂乃果は部室にいる全員にそう言っていた。

穂乃果を除く八人のメンバーが彼女の話に呆気にとられた。しかし穂乃果の話を少しして理解した一人が彼女に問い掛けていた。

「えっと……確か最近ニュースでやってた流星群の話？」

思い出すように考えながら、南ことりが穂乃果に訊く。

穂乃果と幼い頃からのかけがえない友人、そして幼馴染である。柔らかな表情が綺麗な、いつも穏やかな笑みを浮かべることりも唐突に穂乃果が突拍子もないことを言い出したことに僅かに呆れた顔を作る。

しかしそれもいつものこと。穂乃果はそんなことりの内心も知る由もなく、彼女は楽しそうに頷いていた。

良い意味で天真爛漫。悪い意味で自分勝手。しかしそんな人柄でも皆に愛される人間が——高坂穂乃果という人間だった。

「うん！ ことりちゃんも知ってたんだ！」

「前にお母さんとテレビ見てる時にそのニュースを見てたから、確か流星群って流れ星がたくさん見えるんだよね？」

「そうらしいんだ！ 穂乃果、たくさん降る流れ星なんて見たことないからどんなのか気になるの！ ことりちゃんは見たことある？」

穂乃果の興味津々な様子に、ことりは圧倒されていた。

μ, s を結成した時のように、興味のあることに一直線に進む穂乃果に今回も振り回されると——この時、ことりは思った。

そんな穂乃果の言葉に、ことり自身も実のところ彼女の話に興味がないわけではなかった。

「私も見たことないかな？ テレビでちよつと見たくらい？」

ことりも、穂乃果が話した流星群というモノを実際に見たことがなかった。

流星群については聞いたことがある程度、そしてテレビなどの映像で見たことがある程度の知識しかことりは持ち合わせていない。

「流星群ですか？ そういえば……そんな時期ですね」

そんな穂乃果とことりの会話に、また一人加わった。

お淑やかな、少し古風な雰囲気を感じる少女——園田海未は窓から見える外の景色を見ながらしみじみと呟いた。

「海未ちゃん、流星群見たことあるの!?!?」

そんな海未に、穂乃果が目を輝かせる。

しかし海未は穂乃果に対して、小さく首を横に振っていた。

「見たことないですよ。私も知識で知っている程度です。この時期になると大きな流星群が二つあるのは知っている程度で……」

「ほんとうっ!?!?」

海未の話を遮って、穂乃果が驚いた声を出す。
話を遮られて驚く海未だったが、いつものことと思うと少し呆れた
笑みを浮かべていた。

「確か今月の下旬にふたご座流星群というのがあつたらしいです」
「がーん……もう終わつてるよお」

絶望感を漂わせた穂乃果が部屋のテーブルに力なく倒れこむ。
今の日付は十二月の下旬。つまり世間で騒がれたふたご座流星群
は既に終わっていた。

「あとひとつが来年の一月にあるらしいですよ」

「まだあるの!?!」

「ええ、確か名前は……」

そう言つて、海未が考える素振りを見せる。

しかし海未は考える様子を見せるだけで一向に口を開こうとしな
い。

ふたご座流星群というのは世間では有名なのだが、この時期にある
もうひとつの流星群の名前が海未は思い出せないでいた。

先程から穂乃果が言っていた流星群は、その海未が思い出せない名
前の流星群だと海未は思った。

しかし海未は、その名前が思い出せない。困つたように眉を少し寄
せると、海未は申し訳なさそうに口を開いた。

「申し訳ありません。忘れてしまいました」

「ええええ! そんなあ!」

穂乃果が残念そうに口を尖らせる。

しかし海未も思い出せない以上は答えようがない。

残念そうにしている穂乃果に、ことりと海未が顔を合わせて苦笑い

する。

携帯電話で調べてみようか、海未とことりがさう思うと——今まで椅子に座っていた一人が口を開いていた。

「——しぶんぎ座流星群よ」

穂乃果と海未、ことりが声の方を向いた。同じように話を聞いていた他のメンバー達も、同じように。

その流星群の名前を言った少女は、肩まである赤みのある髪の毛先を指で退屈そうに触りながら退屈そうに言っていた。

「真姫ちゃん、知ってるの!?!」

「知ってるも何も……私の趣味よ」

視線を逸らしながら、言いづらそうに西木野真姫が穂乃果に答える。

綺麗な顔立ちに、手入れの届いた肩までの髪。不思議と気の強そうな印象を受ける少女。

そんな真姫は、内心思わず穂乃果に答えてしまったことを少しだけ後悔していた。

昔から真姫は天体観測が好きだった。空に輝く綺麗な星や惑星を見るのは、いつから好きになったのかを忘れるくらいに昔から好きだと答えられる。

それと同じように、その綺麗な光景を写真に残るのも好きになっていた。

天体観測と写真。数少ない真姫が持つ趣味だった。

「真姫ちゃんって天体観測が趣味なん?」

そんな真姫に興味を持って、一人の少女が問い掛けた。

二つに結ったおさげの髪。おっとりとした優しい顔立ちの少女――

―東條希が部室の端に座る真姫に訊く。

真姫は予想通りと思いながら、先程の後悔の念を更に強くした。こういう話には自分を含めて九人もいるのだから、必ず興味を持つ人が一人はいるに決まっている。

ただでさえμ_sには騒がしい人が多い。こと新しいことには目がない人達が多いのだ。

真姫は訊いてきた希を横目に、渋々答えた。

「ええ、そうよ。ふたご座流星群も見に行つたわ」

「真姫ちゃんも意外とロマンチックやね〜」

にひひと笑みを見せる希に、真姫は少しムツと顔を歪ませた。

からかわれているのは嫌でもわかる。特に希はそう言ったことを好んでする人間なのは、短い付き合いだとしても良い意味でも悪い意味でも分からされた。

「別に希には関係ないでしょ。私にだって趣味の一つくらいあるわよ」

「そんな怒らんといてよ〜」

真姫の反応から、希も彼女が天体観測を心から好きなことと理解したのだろう。

希は少し拗ねた真姫に近づくと、目の前で両手を合わせていた。

「真姫ちゃん、許してな?」

「別に……怒ってるわけじゃないわよ」

謝罪する希をチラリと見て、真姫が居心地が悪そうに毛先を弄る。そして真姫は照れ臭そうに、希から目を逸らしながら答えた。

「綺麗なモノを見るの、好きなのよ」

真姫がここまで素直に答えるのは、希には随分と珍しいと感じた。いつもは素直にならずに遠回しな言い方をすることが多い真姫がここまで素直に答えるのは、希にはかなり意外だった。つまり真姫が本当に星を見るのが好きなんだと理解するのに、希はそこまで時間は掛からなかった。

「流星群ってそんなに綺麗なん？」

そんな真姫を見て、希が思わずそう訊いていた。

希自身も、流星群は見たことがない。希もことりと同じようにテレビの映像などでしか流星群は見たことがない。

天体観測、というより星について詳しい希も流れ星自体を見たことはあるが流星群を見たことはほとんどない。

だからこそ、真姫がこんな反応をするモノに希も次第に興味を持っていた。

真姫が希の顔を見る。希の顔は素直に気になると言いたげな表情をしていた。

コトツと小首を傾げる希に、真姫は素直に答えていた。

「……綺麗よ。すごく、こんな綺麗なモノがあるんだって思えるくらい」

その言葉を口にして、真姫は小さく微笑んだ。

真姫を除く八人のμ sメンバーはその顔を見た途端、思わず見惚れていた。

綺麗な笑みだった。

楽しそうに笑う表情などではなく、心から好きと分かるような柔らかい笑み。

真姫のそんな表情を見たことがほとんどなかった全員は、そんな彼女の表情に心を惹かれた。

あの真姫に、そこまで言わせた流星群というモノに、全員が興味を持つのはある意味必然とも言えた。

「真姫ちゃんがそんなに好きなら凧も気になるにやー！」

そしてその気持ちをいの一番に伝えたのは、ショートカットの少女だった。

活発そうな、元気な姿が似合う少女——星空凧は、真姫の膝元に行くくと彼女を見上げて訊いていた。

「真姫ちゃん！ 真姫ちゃん！ 凧も見たい！ 流星群！」

「えっ……？」

流石の真姫も、凧から言われるとは思ってなかった。

凧は芸術を見たりするタイプの人間ではない。動いたりすることが好きなアウトドアな人間だ。

家で読書をするよりも、外で走り回るのが好きなタイプの人間。それが真姫が思う凧の特徴だ。

そんな凧が自分から綺麗なモノを見てみたいと言い出したことに、真姫は素直に驚いた。

「凧ちゃん、ずるい！ ウチも見てみたい！」

「穂乃果も忘れないでよー！」

そして希と穂乃果が同時に真姫に詰め寄る。

凧と希、穂乃果の三人に詰め寄られながら、真姫は反応に困りながら眉を寄せた。

このままでは埒があかない。真姫は目の前の三人が次第に鬱陶しいと思いき、突き放そうとする。

「三人とも、真姫が困ってるわよ。とりあえず離れなさい」

しかしそこで、三人を窘める声が聞こえた。

金色の髪を一つに結ったポニーテイル、日本人離れした綺麗な容姿から外国人の血が入った顔立ちの少女——絢瀬絵里は真姫に群がる三人に呆れていた。

「流星群の話は良いけど、それは真姫から離れて聞きなさい」

「ええ〜！ だって穂乃果気になるんだもん！」

むくれる穂乃果に、絵里は頭を抱えてため息を吐きそうになる。

しかしそんな穂乃果の気持ちは、少しだけ絵里も理解できる。

だが穂乃果と同様に凜と希も同じようにむくれている姿に、この三人が全員歳下に絵里は見えそうになった。

実際のところ、希以外は歳下なのだが……二年生の穂乃果も一年生の凜と一緒に扱われるのはいかななものかと思う。三年生の希も大概なのだが。

μ、sの中でもダントツで騒がしい三人のメンバーに、絵里は思わず肩を落とした。

「でも三人が興味持ちちゃうのもわかるな。私も見たことないから……」

「かよちゃんもそう思うでしょー！」

肩を落とす絵里の隣で、凜に「かよちゃん」と呼ばれた少女——小泉花陽は呟くように言った。

凜は花陽の話に大きく頷いて、真姫の方を向いた。

「真姫ちゃん！ そのなんとか流星群って一月のいつ見れるの!?!?」

「あ！ それ穂乃果が訊こうとしてたのに！」

「あなた達は私の話を聞いてなかったのかしら……?」

凜と穂乃果が真姫にまた群がって行く姿に、絵里は深く溜息を吐いた。

自分に群がる二人に、真姫は心から先程の口から出た言葉を後悔していた。

真姫が顔を苛立ちで少し歪ませて二人の肩を掴む。そして真姫はそのまま二人を引き剥がすと、

「二人とも落ち着いて！　ちゃんと話すわよ！」

そう二人に言い放っていた。

ムツとした顔で真姫が凜の方を向く。

「凜！　しぶんき座流星群は来年の年始に見られるわよ！　しぶんき座流星群は三大流星群のひとつで年の一番最初に始まる流星群！」

続いて、真姫が穂乃果の方を向いた。

「穂乃果！　見たいなら徹夜よ！　今回の流星群は深夜に始まるの！　あなた起きてられるの!?？」

怒涛に言い放つ真姫に、凜と穂乃果が呆気にとられるが二人が互いに顔を合わせると揃って頷いていた。

「穂乃果頑張るもん！　流星群見る！」

「凜も真姫ちゃんが綺麗って言った流星群見るにや！」

揃って答えた二人に、真姫が諦める気がないと察して頭を抱える。毎年、真姫は一人で天体観測をしていた。来年も、年始に一人で家のベランダで見たいようと思っていたくらいだ。

しかし話がここまで進んだ以上、おそらく真姫が思う通りに話が進むと察してしまった。

「決まりやね。今年の年始は、みんな流星群見に行こっか？」

真姫と凜、穂乃果のやり取りを見て希は満足そうに頷いていた。真姫を除く八人が希の発言に満更でもないような反応を見せる。

その光景を見て、真姫は肩を落とした。

来年、初めて見る流星群は一人では見れないらしい。

来年の密かな楽しみを奪われたような気がして、真姫は穂乃果に少しだけムツと顔を顰める。

それくらい許されても良いだろう。そんなことを思いながら、騒いでいる穂乃果に口を尖らせていた。

「たまには、そういうのもええと思うよ。真姫ちゃん？」

隣で希がそんなことを囁く。

真姫はそんな希の言っている意味が、よく分からなかった。



気づけば、年を越していた。

今日の日付は、一月四日。正月の三が日が終わり、年が明けてから既に四日目になっていた。

と言っても三日から四日に日付が変わっただけで、今の時計の針は四日の深夜三時を指していた。

息を吐くと、白い息が出てくる。いくら自分達が住む地域に雪が積もらないと言っても、気温が低いことには変わりはない。

厚着をして更にコートとマフラーを着けていても、顔に直に感じる寒さは確かに今は冬なんだと感じるのには十分な冷感だと感じられた。

「ううゝ寒いにやゝ！」

「凜ちゃん、カイロは貼ってる？」

「貼ってるけど全然足りないにやゝ！」

視界の隅で騒いでいる凜を宥める花陽を眺めながら、持参していた折りたたみの椅子に座っていた真姫は首に巻いているマフラーの中に顔を半分隠した。

マフラーから感じる温もりにずっと包まれていたいと思うこの季節が心底寒いと思いつつも、真姫は思いの外嫌いにはなれなかった。

結局のところ、μ sメンバー全員で流星群を見ろという名目の天体観測会はしつかりと実行されてしまった。

集合場所は真姫達が今いる国立音ノ木坂学院の屋上。深夜の学校に立ち入る為に、影でこもりが活躍していた。

本来、冬休み中に深夜の学校に生徒が立ち入るなど不可能だろう。本当なら真姫の家の庭で行う予定だったのだが、それは絵里と海未から却下されてしまった。

静かに見るならまだしも、μ sメンバーには必ずと言っていいほど騒ぐメンバーがいることを察した二人の真姫への配慮でもあった。

真姫の家は住宅街にある。深夜の寝静まった時間に高校生が騒いでいるともなれば、近所迷惑でしかない。

流石の真姫も絵里と海未にそう言われて渋々納得した。しかしそれなら当日の深夜に天体観測をする場所はどうするのかという話になる。

深夜に公園に集まるのは、勿論却下された。未成年である女子高校生九人が深夜に集まって良い場所ではない。

μ sメンバー全員の家も住宅街やマンションなどから真姫の家同様に選択肢に入らない。真姫の別荘などの意見もあったが、三年生組のアルバイトの関係で彼女の別荘に行くことができない。

そんな話し合いで九人が考えられる限りの場所を探してみたが、結局は天体観測ができる場所が見つからずいた。

それこそ九人で見る天体観測という計画が頓挫するとすら思われていたくらいだ。

しかしその後、ことりがあることをしていた。

ことりはあるうことか自身の親に「そのこと」を去年の内に相談していたらしい。周知の事実だが、ことりの親は真姫達が通う音ノ木坂学院の学園長であった。

天体観測で深夜に流星群を見る。そのことをことりが親に相談すると、割とすぐに快諾されたらしい。

保護者同伴もなく、生徒だけで深夜の学校を使用することに事前申請書なるものを提出することを強いられたが……たったの一枚の紙でそれが快諾されるならμ、sのメンバーにとっては安いものだろう。

そうしてμ、s全員は、今日に行われるしぶんき座流星群を見るための天体観測に、運良く学校の屋上を使えることになったのだ。

名目上の保護者として三年の絵里と希が名前を挙げ、こうして九人のメンバー全員が一同に集まれる場が出来たわけである。何故、矢澤にこだけ保護者として名前が無かったのかは、真姫には知る由もない。むしろある意味真姫自身も知りたくなかった。

「ふあ……眠い」

「穂乃果ちゃん、さつきまで海未ちゃんの家で寝てたのに……」

「穂乃果は寝過ぎなんです。いつまで経っても起きないんですから」

「えへへ……だってお布団が気持ちよくて」

欠伸をする穂乃果に、ことりと海未が少し呆れている。

真姫はそんな穂乃果を見て、本当によくこんな時間に全員が集まれたと思った。

穂乃果辺りなら、寝ていて来ない。なんてことも十分に予想できたのだが。

しぶんき座流星群の天体観測。その当日の予定は、三日の日付を跨いだ四日の深夜二時に一度集合して、その後に全員で学校に向かう流

れだった。

三年である絵里と希、にこの三人は三が日の神社でのバイトを終えて、各人一度自宅で仮眠を取ってから集合。

一年生の花陽と凜は、花陽の家で仮眠という名のお泊まり会をしてから集合している。

二年生は寝坊に定評がある穂乃果を心配して、海未の家でこもりを交えて三人で仮眠を取って集合していた。

真姫に関しては、深夜の天体観測は過去に何度もしていることだったので夕方の時点から仮眠を取り、十分に朝まで起きていられるようにしていた。

この分なら、朝まで起きていても何も問題ない。どうせ自宅に帰ったら思う存分に真姫は寝るつもりでいる。

たった一年に一度しか見られないしぶんき座流星群。そんな機会を寝ていて見られなかったなど真姫には考えられなかった。

毎年違った綺麗な星空を見たいと思える自分が誇らしいと、真姫は密かに胸を張りたいくらいだった。

「どうして私もこんなところに……」

「なに？　にこ、ノリ気じゃなかったの？」

「別に興味がないわけじゃないわよ。わざわざ集まって見る必要もないんじゃない？」

「にこっち、そんなこと言ってえ〜！　そんなにこっちにはこうしてやる〜！」

「ひゃあああ!??　冷たいっ！　なに私の首をその冷え切った手で触るのよ!??！」

「にこっちが悪いんやもーん！」

「なにがよっ!??！」

にこをからかって遊んでいる希と絵里を見て、真姫は一年から三年生まで歳が離れてるといえど、ああいう風に騒ぐ姿はあまり変わらないなと思った。

真姫はそんなことを思いながらカバンからポットを取り出し、保温していたココアをカップに注いだ。

温かいと主張している湯気を見つめながら、真姫はゆつくりとココアを啜る。

そして星空を見ながら、また一口啜る。少し肌寒いと感じながら飲むココアはやっぱり良い。この時期にしかできないことだ。

本当なら一人でのんびりと楽しんでいたはずなのだが、本当に今日は随分と騒がしい。

「穂乃果、寒くないですか？」

「ううん！ カイロたくさん貼ってるから大丈夫！」

「温かいしょうが湯を持ってきていますが、飲みますか？ 温まりますよ？」

「ほんと!?!? 飲む飲む！ 穂乃果もお茶持ってきてるんだ！ 海末ちゃん、交換しよ！」

「ことりも紅茶持ってきたんだ〜！」

仲良く持参した飲み物を交換している二年生達。

一年から三年生まで、それぞれが楽しそうに過ごしていた。

去年の今頃の自分なら、まさか今こんなことをするようになってるとは思ってもみないだろう。

思えば、一人でいることが多かった。別に友達が少ないというわけではなかった気がするが、特別仲が良い友達がいたかと訊かれれば……真姫には正直微妙だった。

音楽——ピアノを弾いていれば退屈ではなかったし、将来医者になるために勉学に勤しんでいたら、いつのまにか今の自分になっていた。それだけの話だ。

だからこういう全員がいる場で、自分がどういう風に立ち回れば良いのか真姫にはよく分からない。むしろ一人でいる方が気楽だと思うくらいだ。

しかし去年、μsに参加した時から一緒にいる友達の凜や花陽と

過ごしている内に、たまにだが少しだけ一人でいるのが寂しいと思える時が真姫には気づけばあるようになった。

少しずつ、自分は変わっているのだろうか？

そんな疑問が、稀に真姫は思う時がある。

ふと空を見上げれば、街並みの光が消えた空で綺麗に輝く星達の景色が広がる。

同じ星空がいつもあるわけではない。今も見ている空で、星は変わっている。

それと同じように、自分も変わっているのだろうか？

星空を見るたびに、そんなことを真姫はぼんやりと考えるようになった。

こんなことを考えるようになっただけで、十分に昔より変わっていると思うのが普通かもしれないが。

「真姫ちゃん。なにを考えてたん？」

そんな時、いつの間にか希が真姫の隣に立っていた。

空を見上げていた真姫が、少しだけ首を動かした。

「別に、なんでもないわよ」

ぽつりと、素っ気なく真姫が答える。そして彼女はまた空に視線を向けた。

希は「ふーん」と相槌を打つと、真姫と同じように空を見上げる。

真姫は唐突に自分の隣に来た希に、思わず訊いていた。

「……絵里達のところに行かなくていいの？」

「別にええよ。二人とも穂乃果ちゃん達のところにいるみたいだから」

空を見上げていた真姫が希にそう言われると、そつと視線だけ動か

した。

確かに穂乃果達三人がいる場所で、絵里とにこが五人で楽しそうに話してあるのが見てた。

「希も行ってくれば良いんじゃない?」

「ええよ。ウチは別に」

「なによ? なんでわざわざ私のところに来るわけ?」

「なんだか……少し寂しそうに見えたんよ。今日の真姫ちゃん見てると」

突然希に言われた言葉に、真姫は少し目を大きくした。

この人は本当によく人のことを見ている。それを改めて真姫は実感した。

「そんなわけないでしょ。希の勘もたまには外れるわね」

しかし真姫は素直に頷かなかった。

人からよく言われることが多くなったことだが、素直になれない真姫の分かりやすい返事だった。

希はそんな真姫が小馬鹿にしたような顔を見て、少し呆れたような、困った顔を作っていた。

「相変わらず、素直になれないところは変わらんね……面倒な人やな」「……希に言われたくないわよ。あなたもでしょ?」

真姫の返しに、希が「そうやね〜」と苦笑いした。

ここ最近知ったことだが、希は面倒な人だ。

少し前にμsでラブソングを題材に新曲を作ろうとμsメンバーに促して、自分の本当の気持ちを隠していたことがある。

それをキツカケに、真姫は東條希という人間は割と面倒な人だと知った。

以前に希から面倒な人と言われたことを思い出して、真姫はふてくされたように鼻を小さく鳴らした。

「ウチな。今日、こうやってみんなと集まれて良かったと思ってるんですよ」

また面倒なことを言い出したのかと真姫が希を一瞥する。文句のひとつでも返してやろうかと。

しかし希の顔を見て、真姫は少し反応に困った。

真姫を見る希の顔がいつも見るおちやらけた様子はなく、そこには時折見せる大人びた表情があったからだ。

「……別にいつでも集まれるじゃない」

そんな希の表情に、真姫は咄嗟に答えていた。

今日が最後、そんなわけがない。離れるわけでもなく、μ、sという仲間として共にいるのだから、集まろうと思えばいつでも会える。

真姫の答えに、希は少し悲しそうな顔を作った。そして「そうだけど……」と言い、しばらく間を開けてから希は口を開いた。

「真姫ちゃん。μ、sとして集まれるのは、が抜けとるで」

「あつ……」

その言葉を聞いて、真姫は希の表情の意味に気づいてしまった。いや、気づいていたが気づかないようにしていた方が正しいかもしれない。

目の前にいる希は三年生。つまり、今年の三月には卒業してしまう。

スクールアイドルの全国大会の「ラブライブ」を終えたら、その先は卒業が待っている。

今からあと二ヶ月もない。そんな僅かな時間しか、真姫は三年生と

一緒にいることができない。

「だから、こうやってみんなと遊べてウチは嬉しいんよ」

それをよく知っているからこそ、希は今こうして部活関係なく友達として、そして“μ”“s”として集まれている時間が、希には貴重な時間なんだと真姫は理解してしまった。

思えば、μ“s”が九人になってから文字通り“遊ぶ”ことをした覚えはほとんどない。ほぼ毎日を練習に費やしていたので、休みの日に集まって遊びに行くなんてことは数えたくらいしかないだろう。

そんなこと、いくらでもできる。しかしμ“s”として集まり、遊ぶことができる期間は……今年の三月までしかなかった。

μ“s”は、三年生が卒業すると同時に解散する。つまりもう残された時間は本当に少ない。

しかしライブの本戦は三月なのだから、それまでは練習に明け暮れるだろう。

だからμ“s”として“遊ぶ”という名目で集まることは、おそらくこれからほぼない。

「こういうことをウチが言うのはダメやと思うけど、みんなと練習関係なく集まってるとうちは思うんよ」

「……なにをよ？」

「時間っていうのは、有限なんだって。いつまでもこの時間が続くわけじゃないから、終わってから色々気付くんだったらうなって」

そして希は真姫から視線を外すと、空を見上げた。

「あの時、あの話をしておけば良かったとか。話したり、してみたことが沢山あるはずだけど……今は分からないんだって、だって今が楽しいから後悔してない。だから終わった後に後悔するんだって」

星空を見上げ話す希に、真姫は返す言葉が見つからなかった。

それはきつと、自分もなのだろうと真姫も思ってしまったからだ。こうやって仲間と一緒にいる時間が楽しいと思つて、きつと終わった後、真姫自身も後悔する時が来るかもしれない。

やりたいこと、話したいこと、あれこれと言えばキリがない。そしてそれに気づかないまま、μ、sを終えた後に——気付く。

三年生が卒業後にすれば良いだけの話だが、μ、sとして出来るのは今年の三月が最後。だから終わってからでは、遅い。

μ、sでできなかったこと。それを後悔して、ただ胸の中で握りしめて、しわくちやにしてしまひ込む。

これからも、この九人の関係は続く。だけど、μ、sとしての関係は今だけしかない。

だから今に後悔はない。だからこそ、終わってから後悔するんだと。

「あつ！ 流れ星にや！」

希の話を聞いていると、ふと凜が大きな声をあげていた。

咄嗟に真姫が空を見上げると、そこにはもう流れ星は見えなかった。

「えっ！ どこどこ!?? 穂乃果は見えなかったよ!??」

「私は見えましたよ？」

「海未ちゃん見えたの!??」

「はい、ちょうど空を見てたら見えました」

「ええええ!!? 海未ちゃんズルい！ 穂乃果だつてにこちゃんここにーしてなかったら……!」

「穂乃果！ にこの所為にしてもらつたら困るんだけど！」

「にこちゃんが夜空にこにーとか変なこと言うから！」

穂乃果とにこが口論している間に、真姫が夜空を眺めていると——

またひとつ、星が流れていた。

「また来たわよ。流れ星」

「えええ!?? 絵里ちゃん、どこどこ!??」

「……また見逃したわね、穂乃果」

「そんなあ、まだ穂乃果ひとつも見れてない……」

肩を落としている穂乃果だったが、絵里は苦笑いして空を見上げているとそこに見えた光景を見た瞬間——穂乃果の肩をそつと掴んでいた。

「穂乃果、空を見て」

「えっ? なに……?」

絵里に促されて、穂乃果が空を見上げる。

そして穂乃果の目に映った光景に、彼女は息を呑んだ。

「始まったみたいやね」

「ええ……いつ見ても、この光景は綺麗だわ」

希の言葉に、真姫は空を見上げて頷いた。

星々が輝く夜天の空に、ひとつの光が流れる。

それに続くようにひとつ、またひとつと光が流れていく。

光という星達が、夜空を駆け抜けていくその光景はまさしく——流星群の始まりだった。

しぶんぎ座流星群が始まる。流れ星が駆け抜ける光景に、真姫はただ見惚れていた。

「トップアイドルになれますように! トップアイドルになれますように!」

「ラーメンがたくさん食べれますように! ラーメンがたくさん食べ

れますように！ ラーメンがたくさん食べられますように！」

「体重が減りますように！ 体重が減りますように！ 体重が減りますように！」

「あの……三人とも、なにをしてるんです？」

そんな流星群が降り注ぐ最中、にこと凜、穂乃果が両手を合わせて三度願いを早口で言っている姿に、海未は顔を思わず顰めていた。

「なにつて願いに決まってるじゃない！」

「いや、それはわかりますが……」

にこの勢いに海未が苦笑いする。

そしてにこは拳を強く握りしめると、海未に言い放っていた。

「流れ星が流れるまでに願いを三回言おうと願いが叶うのよ！ これだけたくさん流れ星があればひとつくらい叶えてくれるわ！」

そう言つて、にこはまた両手を合わせて何度も願いを早口で呟きだした。

海未はにこを可哀想な人を見る目で見つめると、そつとにこから視線を外すことした。

「なにやってるんだか、あの三人」

「別にええやん。流れ星に願うのは自由やん？」

「それならラブライブ優勝くらいにしてあげばいいじゃない」

「それは神社の神様に願ったから大丈夫やと思うんよ」

くすくすと笑う希に、真姫が呆れた笑みを浮かべる。

希はそんな真姫に視線を向けると、面白そうに笑みを作った。

「真姫ちゃんもなにか願い事、言ってみたら？ 叶うかもしれんよ？」

「そんなわけないでしょ」

そんな無粋なことを真姫はする気はなかった。

この綺麗な光景を、ずっと見ていたい。それだけで十分だった。

人の手で作られたわけじゃない。空の神秘で作られたこの綺麗な空を目に焼き付けるだけで、真姫はそれだけで良かった。

「願い事っていうのは、願うだけで十分なんよ」

流星を眺めていると、希の声が聞こえた。

横目で真姫が希を見る。彼女も真姫と同じようにずっと空を見上げていた。

「星に願うと、いつか叶うって言うけど……そういうのは言葉にするからこそ、意味があると思うんよ」

随分とロマンチストなことを言ったなと真姫は思った。

そう言われて、真姫は別に悪くない考えだと思ってしまった。

「本当に綺麗だね。海未ちゃん」

「ええ、ことりの言う通りです。テレビで見るよりも、ずっと綺麗です」

「穂乃果ちゃんも……って、まだ願い事言ってる」

「放っておきなさい。私達は私達で見えていますよ。どうせ飽きたら穂乃果もこっちに來ますよ」

まだ願い事を早口で言っている三人に、海未とことりが呆れていた。

「本当に綺麗ね。おばあさまのところで見えた星空と同じくらい綺麗だわ」

「あれ？ 絵里ちゃんも流星群見たことなかったんじゃ……？」

「私も流星群は見たことないわよ。昔、おばあさまのところまで夜空を一緒に見たことがあるの。その光景がとても素敵だったから、それと同じくらい今見てる空が綺麗だわ」

「そんなに綺麗なら私も見て見たいな、絵里ちゃんがお婆ちゃんと見た星空」

「ふふっ、いつか花陽に見せられる日が来ると良いわね」

絵里と花陽が空を見上げて楽しそうに話していた。

それぞれが楽しそうにしている声を聴きながら、真姫はマフラーで口元を隠した。

寒いからではなく、不思議と……勝手に口元が綻んでいた。それに気付いて、真姫は咄嗟にマフラーで隠してしまった。

「一人で見るよりみんなで見るのも、たまには悪くないでしょ？」

希の諭すような言葉に、真姫はあえて反応しないことにした。

希からすれば、それが答えとも言える反応なのは真姫には知る由もない。

口を綻ばせた真姫を見て、希は穏やかな笑みを浮かべていた。

「真姫ちゃん！ 真姫ちゃん！ 凜と一緒に流星群見よー！」

「って凜?!? いつの間にこっち来たのよ?!?」

そうしていつの間にか、凜がそう言って真姫の目の前に来ていた。

凜は真姫の返事に不思議そうに小首を傾げたが、気にせずに凜は座っていた真姫の手を取っていた。

「こんなところに座ってないでみんなと一緒に見よーよ！ 流星群っ

てこんなに綺麗なんだって真姫が教えてくれたし！」

「私はここで良いわよ。凜こそ、みんなで見てくださいよ」

「やーだ！ 凜は真姫ちゃん達みんなで見ろの！」

「ちよつと！ 無理に引つ張つたら！」

「良いからー！ こつち来てよー！」

そう言つて凜が真姫の腕を引つ張る。それに思わず真姫は凜に引かれるまま立ち上がってしまった。

凜の強引なところは相変わらずだ。真姫は強引な凜に溜息を吐きなくなる気持ちだったが、渋々頷くことにした。

「あら、希と真姫もこつちに來たのね」

「凜に強引に、よ」

強引に凜に全員が集まったところまで連れてこられた真姫を見て、絵里は驚いた表情を見せた。

絵里の意外そうな笑みに、真姫は肩を竦めて答えた。

「真姫ちゃんが一人でいるのがいけないにや！」

真姫の呆れた発言に、凜は少し不満げに口を尖らせた。

腕を大きくあげて、身体を使って不満を表している姿は子供のように見えた。

そうして凜はハツと何か思いついたような顔を作ると真姫の手を取つて、満面の笑みを浮かべていた。

「真姫ちゃん！ 凜ね！ 真姫ちゃんと流星群見れて良かったと思つてるんだ！」

そして凜は真姫から離れて、少し離れたところに小走りで行くと空に両手を広げていた。

凜を除く全員が凜の行動に小首を傾げる。

全員が見守る凜が両手を広げたままその場で一回転すると、嬉しそ

うな表情で真姫に向かって叫んだ。

「だから凜も星空好きになったよ！　〃星空〃凜だけに！」

全員、一瞬理解するのに時間が掛かった。

数秒後、ようやく凜の言ったことを理解した全員がたどたどしく「おお……」と声を揃えた。

「なに馬鹿ごとやってるのよ」

「ええ〜！　凜、上手いこと言ったと思ったのにく〜！」

真姫の反応を見て、凜はつまらなそうに頬を膨らませた。
そんな凜の態度に、真姫はつい笑みをこぼした。

「ふふつ、何言ってるんだか」

「あつ！　笑ったにや！　真姫ちゃんがデレたにや！」

「なっ……!!??　デレてないわよ！」

「顔赤いよ？」

「これは寒いだけよ！」

怒った真姫を見た凜が「真姫ちゃんが怒ったにや〜！」と言って笑いながら逃げて行く。

凜が逃げて行った先で穂乃果に飛び掛っている光景を見ながら、真姫は疲れたと言いたげに肩を落とした。

「ねえ、真姫ちゃん。良かったらこっちで一緒に見よ」

肩を落としていた真姫に、彼女の近くで座っていた花陽が隣に手を置いて座るように促していた。

「花陽？　まあ……そこまで言うなら良いわよ」

「うん。こつち、クッション下にあるから座っても寒くないよ」
「……ありがとう」

花陽の凛とは違った物静かな雰囲気。真姫は個人的に好きだった。物静かなというより、大人しいというのが良いかもしれない。

自分は凛のように騒ぐタイプではない。勿論、友達としては十分好きだが、真姫的には花陽の方が一緒に居て落ち着くと思っている。

花陽が用意した隣に置かれたクッションに真姫が座る。

真姫が隣に座った後、花陽は空を見上げながら楽しそうに呟いた。

「空、本当に綺麗だね」

「ええ、綺麗でしょ？」

「うん。まるでひとつひとつが宝物みたい」

こういう可愛いことを平然と話す花陽が、真姫にはとても可愛らしく見えた。

花陽と同じように、空を見上げて真姫も星を眺める。

空に輝く星。流れ星が流れている空を見て、花陽の言葉が真姫にはとても印象に残った。

「空にある星くらい私達も思い出でが作れたら素敵だな」

「……思い出？」

思わず真姫が訊き返した。

花陽は真姫に少し恥ずかしそうにすると、照れながら答えていた。

「私達もこれからたくさん思い出が作れたら良いなあって、今日の天体観測も……私には大切な思い出になるから」

花陽らしい例えだと真姫は思った。

夜空の星が宝物で、そしてその星達の数だけμsで思い出が作り

たい。その考えはとても花陽らしい。

「なら……私にとっても、大切な思い出よ」

つい、真姫はそう呟いた。

花陽がそれを聞いて微笑む姿に、思わず真姫は視線を逸らす。

花陽がこうして自分と一緒に星を見に来ていることを大切な思い出も言うなら、それは真姫自身にとっても同じだ。

μ、sでの練習の日々も、笑いあったり、悲しいことがあったり、くだらないことがあったり、色んな日々が真姫には大切な思い出。

決してそれを口にすることはないが、真姫は心からそう思っていた。

「星が思い出、か」

だからこそ、ふとその言葉が真姫の口から出ていた。

星が思い出というなら、

「なら流れ星はなんなのかしらね？」

一人で、真姫は小さく呟いた。

輝く星が思い出ならば、流れる星はなんだろうか。

消えていく星。それは思い出が無くなることだ。

消えていく思い出。それは本当に良いのか。

綺麗に流れる星。それか思い出なら、悲しいことだ。

そう思っただけなら、不思議と悲しい気持ちになつた。

まるで涙のように、容量を超えた器から溢れる水のように、悲しいほど綺麗に流れて消えていく星という名の思い出。

そうやって記憶の中で思い出が色褪せてなくなること、真姫はどうしようもなく悲しくなった。

「じゃあ、また作ればええやん？」

真姫の後ろで、そんな声が聞こえた。

「星が流れてくなら、また新しい星を作るだけ。色褪せた思い出があっても、また新しい思い出を作れば良いんよ。そうやった積み重ねで、ウチらの星空を作れば良いだけやん」

真姫と花陽が振り向くと、希が優しい笑顔で空を見ていた。振り向いた真姫が希の話に、呆気にとられて苦笑した。

「随分とクサイこと言うわね。希らしくない」

「そう？　ウチ、割と“こういう”タイプなんよ？」

「……冗談でしょ？」

あつけらかなとして答えた希に、真姫が目を大きくする。

しかし希はそんな真姫の隣に座ると、どこか悲しそうな表情を見せた。

「μ，sとしての思い出。私にはすごく大切な思い出だけど、きっと色褪せる日が来るかもしれない。何年後、何十年後かわからないけど……楽しかったってことしか覚えてない日が来るかもしれない」

花陽と真姫が、空を見上げて語る希の話を黙って聞いていた。

その顔は、これから卒業する三年生だからこそできる。学校を立ち去る人間だからこそする顔なんだと、真姫達は分かってしまったからだ。

「だからこれから先に仮にμ，sが無くなっても、私達はその時に作れる思い出をたくさん作れば良いと思うんよ。悲しいこと、楽しいこ

と、色んなことを一緒に分かち合える^μ。sが、私は好き。みんなと一緒にいるこの時間が好きなんよ」

そう言っつて、希が真姫と花陽に笑みを向ける。

その言葉に、真姫と花陽は返す言葉に困ってしまった。

卒業する三年生に向ける言葉が見つからない。

「なに柄でもない^μと言っつてんのよ……希っ!」

そんな時、にこが顔を顰めながら座る希の後ろに立っていた。

そしてにこが自分の手袋をしてない手で希の首を思い切り掴んでいた。

「ひゃっ^{!!?}? にこっち何するの^{!!?}?」

「希が珍しいこと言うからよ! あとはさつきやられたお返しよ!」

「にこっちく〜!」

「なによ! やるっつているの^{!!?}?」

希とにこが隣でじゃれ合い出したことに、真姫と花陽が揃って苦笑いしてしまった。

正直、にこが来てくれて良かったと二人は思っていた。あの時の希の言葉に、返す言葉がなかったから。

「二人とも、あまり考えないようにして良いわよ」

にここと希が互いの手を顔に押し当てているのを横目に、絵里が二人に声を掛けていた。

絵里はにここと希を一瞥して、困ったように苦笑しながら言った。

「私達三年が卒業しても、別に疎遠になるわけじゃない。そんなことで私達の関係が終わるわけないでしょ?」

そう言つて絵里が「この手の話をするのは本当はルール違反だけだね」と続けた。

真姫がそこでふと思ひ出した。卒業を控えた三人が学校から居なくなる話は、μsではラブライブが終わるまで禁止にしていた。

「希が珍しく感情的になったみたいだから、こういう希は珍しいわね」

呆れた表情で絵里がじゃれ合うにこと希を見つめる。

その顔も、真姫からすれば先程の希と「同じ顔」のような気がした。

「私達の関係はこれからも続くに決まつてるんだから、そういうのを気にしても仕方ないわ。だから今を大事にすれば良いのよ」

今を大事に、その言葉が真姫には妙に重く感じた。

花陽の隣に絵里が座る。そして絵里は和かに笑っていた。

「流星群、見ないとともったいないわよ？　こんなに綺麗なんだから」

そう言つて、絵里は空を見上げた。

その横顔が心なしか寂しそうに見えたのは、きっと気のせいではないと花陽と真姫は揃つて思っていた。

「ねえねえ、さつきからみんなで何の話してたの？」

「凜も混ぜてよー！」

しかしそんな時に限つて、一番騒がしい二人が真姫達のところに来ていた。

穂乃果と凜。二人が真姫と花陽の気も知らずに、呑気に来ていた。

「別に大した話はしてないわ。流星群が綺麗ねって話よ。ね？ 二人とも？」

絵里が穂乃果と凜に答えて、真姫と花陽をチラリと見る。

うまくごまかしてくれるらしい。花陽と真姫はそれに気づくと、揃って絵里の話に頷いていた。

「うん。絵里ちゃんの言う通りだよ、凜ちゃん」

「別に大した話はしてないわよ、凜」

「なーんだ。つまんないにゃ」

楽しい話をしていると思っていたらしい凜が口を尖らせる。

そして凜はそんな顔をしていたが、すぐに笑みを浮かべると勢いよく花陽と真姫に向かって飛び掛かっていた。

「ちよつと凜！」

「凜ちゃん!?!?」

「じゃあ凜は真姫ちゃんとかよちんの間で星を見るにゃ！ 星空だけに！」

花陽と真姫が座っていた間に、凜が無理矢理入り込む。

真姫は「くだらないこと言ってんじゃないわよ！」と言いながら凜と間を開けようとするが、凜は真姫の腕を抱きしめるように掴んでいた。

「いーから！ 真姫ちゃんもここに座ってよー！」

「暑苦しいのよ！ まったく！」

「寒いからこれぐらいが丁度良いにゃ！」

「凜ちゃん、おしくらまんじゅうじゃないんだから……」

そして凜が花陽の腕を右腕で掴み、真姫の腕を左腕で掴んでいた。

先程まで三年生達とあったしんみりとした雰囲気はどこへ行つたのか分からなくなるくらい、騒がしくなっていた。

真姫と花陽は間で笑っている凧を見て苦笑したが、二人が顔を合わせると、いつものことかと納得してしまっていた。

こういうところが、凧の良いところなのだろう。二人は揃ってそう思った。

「なになに!?? おしくらまんじゅう!?? 穂乃果もやるー!??」

「絶対に違いますよ! 穂乃果!」

「じゃあ私もー!」

「ことり!?? なにをして——あつ! コートを引っ張ると!」

凧と花陽、真姫がおしくらまんじゅうをしていると勘違いした穂乃果が凧に飛び掛かる。

それに続いて、ことりも海未の腕を掴むと穂乃果を追うように凧達に飛び掛かっていた。

一年生と二年生、六人が押し合う形になっていた。その中で三人は、望んでしているわけではなかったが。

「にこつち! ゴー!」

「はっ!?? あんなのに混ざりたくない——ってなに押し込もうとするのよ!??」

にこを強引に六人のおしくらまんじゅうに押し込めた希が、続いて自分自身もその中に入っていく。

「みんな、なにやってるのよ……」

「絵里ちゃんも来るにや! あったかいよ!」

「私は良いって——ちよつと穂乃果!??」

そして最後に絵里が穂乃果によって、八人の中に追加されてしまっ

た。

九人が詰め寄って押し合う状態に、真姫が頭が痛くなってくる。確かに温かい、というより暑苦しい。

早くこの場から出ようと動くが、凜の腕が絡んでいる所為でその場から離れられなかった。

「これでみんなで見たら温かいにや！」

九人が押し合っている時、凜が笑いながら叫ぶ。

その言葉を聞いて、全員が動くのをやめていた。

凜の子供のように楽しそうな笑みに、全員が顔を合わせて頷いた。確かに、一人で居るよりも暖かかった。

「動きにくいですね。これ」

「でも、意外と悪くないわね」

海未と絵里が、動きにくそうに身体を動かす。

しかし全員が不思議と離れることはしなかった。

「あつ！　また流れ星にや！」

そうして凜が空を指差すと、全員がその方向を向いた。

確かに、そこには流れ星があった。

「綺麗だねえ」

穂乃果の眩きに、真姫はふと訊いていた。

「ねえ、穂乃果。今日……来て良かった？」

「うん！　真姫ちゃんのおかげだよ！」

「そう……なら、良かったわ」

笑顔の穂乃果の返事に、真姫は小さく微笑んだ。

そして真姫も、みんなと同じように空を見上げた。

黒い空に輝く小さな星々。その空に、流星が落ちる。

流れ星がひとつ、またひとつ流れていく。

星が思い出というなら、星のひとつひとつが宝物だと花陽は言った。

輝かしくて、空に滲むように光る星の思い出。

そしていつかそれは流星になって消えていくかもしれない。

儂い光が最後に輝き、消えていく。

それが思い出なら、悲しいことだろう。

それが流星なら、悲しいほど綺麗な光に違いない。

だからこそ、新しい思い出を作れば良いと希は言った。

悲しい思い出も、楽しい思い出も、些細なことでも、ひとつずつ増

やして自分達の星空を作れば良い。

色褪せて消えても、最後に涙のように消えるのなら新しい思い出を

たくさん作れば良い。

「今日、来て良かったわ」

その光景を見て、真姫は本当に小さな声で呟いた。

μ sとしての時間は、残り少ない。

μ sが続いたとしても、三年生は居なくなってしまう。

この九人ができるμ sは、今しかない。

だから今日、花陽の言葉を借りるなら新しい思い出という星が出来たのだろう。

今までのことを振り返るように真姫が目を閉じる。

μ sに入ってから今まで色々なことがあった。それは確かに大切な思い出と言えるものだ。

色んなことを思い出して、思わず真姫は笑みを浮かべた。

そして目を開けて、真姫は星空を眺める。

この時間が、とても煩わしくもあり、愛おしい。

この時間が、みんなという時間が続けば良いのにと思ってしまうくらいに。

星に願うと、願い事が叶うらしい。

迷信過ぎて、子供の頃にしか真姫はしたことがない。

しかし、希が言っていた。

願うことに意味がある。言葉にするから意味がある。

——たまには、希の言葉に乗ろうじやない

心の中で、真姫はそう思う。

このμ、sの時間が終わらないように、ずっと続いてと願って。

空を見上げて見える数々の流星に、流れる思い出の光に向かって、

叶うことはなくても、叶ってほしいと願いながら。

真姫はそつと……誰にも聞こえない声で告げた。自分のワガママな願い事を。

それが例え、叶わないと知っていても——関係ないと。

願いを言葉にするからこそ、意味があるのだから。

「この時間が、終わりませんように」

星がひとつ流れる。

「みんなとの時間が、ずっと続きますように」

また、星が流れる。

「μ、sが私の大切な思い出になりますように」

そしてまた、星は流れた。

三度目はない

わたくしには、幼馴染がいる。

初めての出逢いは、保育園。教室の片隅で、塗り絵がうまくできなくて泣いている子——それが、彼だった。わたくしにも、泣き虫の妹が当時はいたから、いつものように慰めようとしたら手をはねられた上に暴言まで吐かれたのを今でも覚えています。わたくしもそれで怒ってしまつて、喧嘩になつて先生に叱られたわね。後にも、そして多分先にも、黒澤ダイヤと言ひ合ひの喧嘩をしたのは彼だけ。本当、昔から生意気な子だったわ。

それからというもの、昨日の敵は今日の友——は、ちよつとニュアンスが違うかもしれないけれど、子どものコミュニケーション能力つて凄い。あつという間に仲良くなつていった。

小学校に入つてからは、わたくしが習い事に通い始めたから一緒に過ごす時間こそ減つたけれど、一緒に帰れる日を見つけてくれたり積極的に遊びに誘つてくれたりというのもあつて、関係は途絶えることなく続いた。そのころから、果南や千歌ちゃんたちも交えて関わるようになっていった気がする。彼はやんちゃだし、わたくしよりも果南たちのほうがソリが合うのではないかという心配も、彼のおかげで杞憂で済んでいた。それは、ずっと変わらない。「ダイヤといるのが一番気が楽」——彼の決まり文句。美しい景色は幾度見ても、美しい。それと一緒にね。たとえ聞き慣れた言葉でも、嬉しいものは嬉しい。

そして、A q o u r s という、わたくしに変化をもたらした存在。自分の意思で始めたわけではないが、一度決めたことは絶対にやり遂げる——それが、わたくしなりのポリシーだ。

全力で向き合っていたら、歌う自分や、内浦という町、周囲の人々のことが好きだと気付けた。わたくしにも、そういう気持ちがあつたんだと、気付けた。

でも、中には認めたくないものもあつて。なんでって——恥ずかしいからよ。目を逸らしたいのほろが、正しいかしら。しかし、一度意識してしまったことは、否が応でも思考に介入してくるから、厄介だ。

しかも、事が事だから、あまりにも頻繁にわたくしを邪魔をしてくる。本当、いつまでも生意気——なんてのは、ただの責任転嫁ね。だって、これはわたくしが悪いもの。

そんな紆余曲折があつて、いつそ受け入れたほうが楽になれるのかもしれないわねと諦めたわけです。

わたくしは、彼に惹かれてるんだ——つて。

*

「12月かあ、はやいなあ」

吐く息は白く、吸う息はカラツとしている、そんな季節になった。冬の空気は澄んでいるとよく言うけれど、肌にベタつく湿気がないのが、そう感じさせる要因なのかも——とか、なんとなく思考を巡らせたりする。

「オジサンみたいなこと言うのね」

「18歳のオジサンにとつて、寒さは天敵ですよ」

「それならわたくしも、もうすぐオバサンになつてしまうのかしら」

「まだまだ18歳でしょ？これからだって」

「矛盾してるわよ」

細くした視線は、「コトバの綾だよ」という軽口で躲された。海風が、髪をなびかせ、呆れ混じりのため息を流していった。彼の舌は今日も好調らしい。いつも通りでなによりねという皮肉を、今度は吐き出すことなく飲み込んで、通学路に歩みを進める。

「でも、ダイヤも来月は18歳なんだよね。実感湧かないや」

「ずっと一緒だと、そんなものじゃない？」

「そうなのかな？果南とかは成長したな——つてなるけど」

果南が成長しているけど、わたくしが芳しくないこと？何かしらと即興で思い当たることを探してみるが……

「……あなたは、どこを見てそう言ってるのでしょうか？」

「いやいやいや、身体のことじゃあないよ。ましてや、胸部のことなんて」

「わたくしはスタイル悪くないのだけど？男はすぐそうやって大きい方に行くのね、そういうところが嫌いだわ」

「大丈夫、俺はダイヤのほうが好きだよ」

「……厳密には？」

「ダイヤのスタイルのほうが好きだよ」

「最低。あっち行ってちょうだい」

我ながら、今までで一、二を争う低い声が出た。大人げないことをしたと反省はするけど、これはほとんど彼が悪いから仕方ない。無知は罪。わたくしの恋愛感情を知らないからと言って、「好き」というフレーズを軽々しく使われたら、弄ばれている気分にもなるわよ。正直なところ、拗ねてる。

とはいえ。やり過ぎたと感じたのか、彼も本気で謝ってきたので、許してあげることにした。わたくしも、「嫌い」とか「最低」は言い過ぎた気もするし。……こうやって簡単に事を済ませてしまうのも、好きになった弱みというやつなのかな。

しばし、さざなみと登音きょうおんの二つのみがわたくしたちの間で鳴り響いた。彼は多弁。でも、沈黙は結構好きだと前に言っていた。落ち込んでいる様子もないから、今もそうなんだろう。だけど、切り替えの早さは長点とはいえ、少しは引きずってもいいんじゃないと思うのは、わたくしの我儘かしら。

「日が沈むのも早くなったねえ」

静かな世界で、先に口を開いたのは彼だった。

確かに、帰宅時に月が綺麗に見えるなんてことも多い。生徒会とAoursの練習を掛け持ちしていると、どうしても遅くなりがちなのだ。

「そうね。いつも、帰ろうとしたら真っ暗」

「つい最近まで、夕焼けに照らされる海がいいなーとか思ってた気がする」

「思うというか、ずっとそう言ってたもの。飽きないの？」

「好きな本は何度でも読み返しちゃうじゃん？そういうこと」

「春まで『月に照らされた海がいい』って言い続けてそうね」

「あー、凶星になりそう。ちょうど考えてた」

伊達に人生の半分以上を共にしていない。彼は、海が好きだ。ことある事に海を見つめては、ポツリポツリと感想を落としている。わたくしが言ったのも、彼が去年言っていたことをそのまま引用した物。彼は本当に、変わらない。

視線には、長浜のバス停が入る。つまり、もうわたくしの家がすぐ近くだということ。にもかかわらず、彼はこんな提案をしてきた。

「ねえ、ちよつと浜に出ようよ。久々に砂の上歩きたい」

三津の浜のことだろう。バスなら一駅だけど、歩けばまあまあ長いという微妙な場所にあるから、少し悩んだけれど、まあいいかとすぐに妥協してしまった。

「いいけど、遅くなりすぎない程度にね」

わたくしの返事を聞いて、露骨に嬉しそうにする彼の姿は、子どものとときと同じ。性格が幼い彼だけど、学校の成績はかなりの高水準で、負けることもしばしば。その度に、性格のせいか他の人の数倍は悔しさが滲むので、タチが悪い。

よほどな時間帯まで外にいたら話は別だけど、少しは長く居ても問題ないはず。何か言われても、適当な言い訳をつければいいか——なんて、すぐに帰るのが前提じゃないあたり、黒澤ダイヤという人間は、わたくしが思っている以上に単純なのかもしれない。

*

彼に振り回されて海にやって来ることも、年を追う毎に減っていた。家業に介入することが増えれば、プライベートの時間も削られるから仕方がない。黒澤家の長女として、やらなければならぬことだから。それに、わたくしの意思で始めたことではなくても、やり通すことで見えてくるものもあるから、それほど悲観的ではない。

しかし、彼への恋が自明になったときから、一抹の寂しさというものが自分の中にあるのを感じていた。一人はむしろ好きな方なのに。割り切っても、欲は出てきてしまう。以前の自分からは想像もで

きないけど、ルビイの行動力や、彼の自由奔放な様に感化されたのだ。だから、今こうして砂浜で隣合って散歩していることが、結構幸せ。彼には絶対に言わないけど。

「海風が気持ちいいねえ。今更だけど、靴の中汚れちゃうかも」

「多少なら平気よ」

「そっか。……脚、寒そう。タイツ貸そうか？」

なんで男子からタイツを借りないといけないのよ……本気で言ってるのか、それとも笑いを取りに行ってるのか、絶妙な線を攻めてくるのはやめて欲しい。おそらく後者なのだろうけど、彼なりに心配もしているのは伝わってくるから、それなりに丁寧に返す。

「お気遣いはありがたいけど……そもそも、持っていないでしょう？」

「あるよ」

「案件によつては通報します」

「早まらないで、俺は変態じゃない。ほら、文化祭のときに使った、あの青いタイツ」

「それは全身用よね？絶対に着ない」

「似合いそうだけどなあ……ブフツ」

「似合うという言葉がこれほど不快だったことはないわ」

判断を間違えたらしい。軽くあしらっておけばよかった。彼の言ってるタイツは、わたくしが文化祭のときに許可を出すか否かで悩んだ代物だった。A q o u r s の衣装は素材が良いからなんでも似合う自覚はあるけれど、アイドルが真っ青な全身タイツを身に纏うとか、ただの罰でしかないでしょう。わたくしが何の罪を犯したというのだろう。真面目に対応したのが馬鹿らしいわよ、本当に——とか内心悪態をついてみるけれど、表情筋は緩んでいるから、わたくしもこのやり取りを楽しんでいるのだろう。

「いやあ、面白いなあ。でも、本当に寒かったら言ってね。タイツじゃなくてコート貸すから」

「大丈夫よ。わたくしは冬生まれですもの、寒さには強いわ」

後ろは本当。夏も嫌いではないけど、日差しと暑さが苦手だ。ただ、彼は夏生まれだけどわたくしと性分が一緒だから、実際のところ

生まれた季節は関係ないので、前は嘘。取り留めのない虚言なので、彼も指摘することなく、お互いの意識は景観の方へ。

三津海水浴場として賑わいを見せている夏とはまるで正反対に、灯りも少なく、静寂という言葉がよく当てはまる空間になっていた。まだ星を多く窺えるほどの闇ではないけれど、月明かりは徐々に眩しさを増し、深藍の海は、月の真下だけ白く輝いている。

「座る?」

「もう散歩はいいの?」

「疲れちゃった」

「なら、そうするわ」

砂の上の腰を下ろすと、冷たさが冬服を通してよく伝わってくる。氷のように凜とした冷たさではなく、じんわりと染み入るようなものだから、じきに慣れるだろう。わたくしは体育座り、彼は胡座をかいていた。

「二人きりなものも、あんまりなかったよね」

彼が呟く。

「確かに、A q o u r s の誰かしらがいることが多いかも」

「うんうん、今年知り合った人だと小原さんとかね」

「結構話してるわよね」

「なんかね、気に入られてるっぽい。仲がいいに越したことはないし、ありがたいね」

感謝の意を示している割には、随分と浮かない表情をしている彼。彼は裏表がないから、表情から意思を汲み取るのはさほど苦労しないし、冗談は言うけれど嘘はつかない人だ。だから、今の彼が何を考えているのか、さっぱりわからない。

そこまで考えたところで、「でも」という逆接が、わたくしを切った。「ダイヤとだけの時間が減ったのは、寂しいなあ」

——彼の声は、今までの何倍も大きく、何度も反響して聴こえた。周りの静寂によるものなのか、受け取った人間に原因があるのか、またはいずれもか——わからないまま、今はただ、彼の言葉を反芻する。そうか、わたくしだけじゃなかったのか。彼も、こういう時間を求

めていたんだ。

少しの沈黙の後、彼は続ける。

「仕方ないんだけどさ。ずっと一緒に居たからなのかな。どうしても、独占欲っていうか………ごめん、生意気なこと言って」

「そんな、謝らなくても」

「だって、こんなこと言ったってダイヤを困らせるだけじゃん。ダイヤみたいに大人になれてないんだなって、いつも思う」

……わたくしが、大人？まったくもって、そんなわけがない。

むしろ、今のわたくしは、幼くなつたと言える。以前までやけに達観的だったのは、諦めていたからだ。でも、秘められていた『好き』を知ってから、傍から見ればさほど変化がないかもしれないけれど、黒澤ダイヤは真に自分の意思を持つようになった。それは、彼のおかげでもある。彼の『子どもっぽさ』に影響を受けたのは、紛れもない事実だ。

「わたくしも、あなたみたいに思うことがあるわ」

「……え？」

「A q o u r s に入って、自分の中の『好き』に気づけて、そこから色んな感情がどんどん派生して……黒澤ダイヤは決して大人じゃないし、あなたと同じれっきとした『子ども』よ。だから、気にすることはありません」

「そっか……ダイヤも、俺と一緒に」

表情が窺えないくらいには辺りが暗くなっていて、顔色はわからなかったけど、彼の声色はいつも通りに近づいた気がする。

——暗闇という、雰囲気ある情緒に吞まれていたのだろう。後から思い返せば、自分でも呆れてしまうけれど、彼にこんな発言をしたのだ。

「わたくしも寂しかったのよ。……あなたという時間は、誰よりも特別だから」

我ながらとんでもないことを言っていることに気づいた頃には、時

すでに遅し。こんなもの、告白も同然じゃない。あまりの恥ずかしさに、顔に熱が帯びていく。表情があまり見えないのが、せめてもの救いだった……のだが。

「俺もそう思ってるよ、ダイヤは大切な幼馴染」

……わたくしの幼馴染は、あまりにも察しが悪かった。いや、助かったには助かったのだが、こっちが身構えてる中で的違いな返事をされたら、腹が立ってしまうのは仕方がないだろう。

なになに「俺もそう思ってるよ」ですか。本当に生意気。さっきのこと、ちつとも反省してないじゃない。女心を理解しなさいよ、空っぽの頭。

このとき、わたくしは顔ではなく頭に血が上ってしまったていて、絶対に意識させてやろうと意気込んでいた。我ながら、らしくない。おそらく、いつも振り回されている仕返しをしたいという気持ちも混じっていたから、余計に——という部分もあった。

「はあ………いい？ 今からわたくしが言うことを、しっかりと受けとめなさい。意味もちゃんと考えて。三度目はないから」

鈍感な彼にも伝わるように。でも、直接的な言葉は大胆すぎて、下品だ。だから、典型的だけれど趣のある台詞を抜き出した。最近、夏目漱石が言ったというのは後付ではないかという意見もあるらしいけれど、わたくしはこの日本人らしい婉曲的な表現が、結構好き。

「ねえ」

隣に居る彼に向けて、告げたのは——

「——月が綺麗ね」

「え——ちよ、ちよっと待って。月が綺麗って……そういう意味？」
「言ったでしょう、三度目はないって」

凜と咲く花のよう

小鳥のさえずりと暖かな太陽の光で一人の少女が目を覚ました。この小泉家にとって一人の少女が目を覚ますこと自体別段珍しいというわけではない。それも生活リズムが正しい小泉花陽にとっては当たり前のことだった。目を覚ました花陽は窓の外を一度だけ見てからベッドから降りる。一度大きく伸びをした後、その少女は口を開いた。

「……珍しいな。今日はボクなんだ」

普段の花陽とは違う少し低音気味の声の花陽の口から聞こえてくる。普段、花陽の一人称は私か自分の名前。ボクという一人称を使うことはない。

「一体何があつたのかな？　最近ボクが出てくるようなことはなかったはずなのに」

明らかにいつもの小泉花陽という人物ではない。それもそのはず。今表に出ているのは小泉花陽の中にいたもう一つの人格。つまりは、小泉花陽という人物は多重人格者であった。そして花陽の心が弱った時にだけ表に出てくる花陽を支える存在。最近花陽自身が傷ついて引き籠るような状況がなかったため出てくることはなかったが昔から花陽と一緒にいた姉弟のような関係だった。

姉弟。そう。このもう一つの人格は花陽の弟のような存在。名前を陽よゆうと言い、小泉家にとって大切な家族のようなもの。陽も主人格の花陽のことは少し手のかかる姉のように思っている。

花陽と陽。同じ体を共有している2つの人格はそれぞれの記憶の共有ができる。そのため陽はなぜ自分が出てきたのかを花陽の記憶から呼び起こそうとした。

「って……。アハハハハハ!!　なんだよ、花陽と凜ちゃんはそんなことでケンカしたの?」

(だって、凜ちゃんが好きなのはわかってるけど、それを自分も好きになれるわけじゃないし……)

「まあ、ケンカする理由も分かるけどさ、流石に意地になりすぎだっ

て」

陽は花陽の記憶から何があったのか理解した。ケンカの原因は本当に単純でしようもない事。それでもケンカしたときの2人は真剣そのものだった。だからこそ鬼気迫る言葉の掛け合いで仲直りしたとは思っていてもなかなか声を掛けずらい状況に陥ってしまったのだろう。おそらく幼馴染でずっと一緒にいた2人のことだ。何もしなくても仲直りすることは出来るのかもしれない。それでも、2人にとつてとても久しぶりの大きなケンカ。派手に言い合ってしまった分仲直りには時間がかかってしまうだろう。現に今、陽が表に出てきているというのが仲直りに踏み込めない花陽がいるからなのだ。だから陽がやることは凜と花陽が安心して仲直りできる状況を作ることだけ。

「幸いにもボクと花陽の記憶は共有できるし、後押しくらいは問題なく出来そうだ」

陽ができることは実のところあまり多いわけではない。出来て凜を説得したりくらいだ。それでもできる範囲で何とかやろうと決めている陽にはこの程度の問題解決は別段難しいことではなかった。それに、久しぶりに表に出られたのだ。楽しまなければ損であろう。「じゃあ、さっそく動いていきますか!! 久しぶりの外、楽しませてもらうよ。花陽」

(うん。……楽しんできてね。ちよつと花陽は凜ちゃんと顔合わせるのが気まずいから寝てるね)

陽は大きく頷いた後、身支度を始める。いくら人格が変わっていたとしても陽の恰好は花陽のまま。この恰好のまま凜と接触するわけにはいかない。気まずく思っているのは凜だって同じだ。それに、陽は花陽ではない。陽というしつかりと存在する1人の男の子なのだ。だからいくら花陽の体だったとしても陽には陽の姿というものがあつた。久しぶりだから時間はかかるけど、それでも陽は着々と準備を進めていく。

花陽の女の子らしく成長していた胸をさらして押さえつけて平らにして、白いTシャツを着て黒いジャケツトを羽織る。ズボンにジュー

パンとあまり肌を露出させないようにして体格が女の子であることを隠していく。その後には黒髪のウィッグを付けて帽子をかぶる。これで洋服の準備は終わった。そして最後にカラーコンタクトを少し明るめの花陽の瞳を隠すように黒色を選ぶ。

結果としてこの場にいるのは小泉花陽ではなく小泉陽という一人の存在に見た目と人格2つの意味でなったといえる。

着替え終わった後、陽はそのまま家を出た。

「確か凜ちゃんはこういう時あそこにいたよね」

最近はなかったとはいえ、ちよくちよくケンカをしていた凜と花陽。その度に凜と陽が話し合っていた場所がある。初めて陽と凜が出会った場所。陽は記憶に残っている場所に足を向けた。

陽が初めて生まれた時、凜と花陽はすでに大ゲンカをしていた。あの時は花陽を虐めていた同級生を懲らしめようとした凜とそれを止めようとした花陽がそのまま凜と言い合いになってケンカに発展してしまっただけ。お互いがお互いのことを想って、交わることのないような平行線。凜と花陽の人生初めての大きなゲンカ。花陽も当然凜を傷つけようとしたわけではなく、ただただ凜のことを大切に想っていただけ。そしてそれは凜も同じ。だからこそケンカになってしまったときの気まずさが出てくる。

お互いがどういう気持ちで自分にそう言ってきたのかを理解できなくなってしまっているからだ。でも、気まずいと思っていたとしても仲直りしたいという気持ちは2人の中に確かに存在している。あとは2人が素直になれば問題は解決1歩手前までたどり着ける。

今回だってほとんど同じようなものだ。だから陽はその時と同じように行動する。

陽が向かったのは大きな木がある公園。ここが初めて凜と陽が出

会った場所。細かく言うのならこの公園のドーム状の遊具の中で凧と陽は出会ったのだ。

あの時の2人は小学生だったが今は高校生。ドームの穴から凧の姿が少しだけ見える。凧のことを見つけた陽は近くに開いている穴に顔を入れて凧に話しかける。

「やあ!! 久しぶり! 元気にしてた?」

突然顔を出した陽に驚きをあらわにする凧。それでも陽の顔を見た瞬間懐かしそうに笑顔を浮かべた。

「あ、陽君……。うん。元気にはしてた、かな?」

力なく笑う凧。懐かしいとは思っているのだろうがそれを喜ぶ余裕がないのが見て取れる。それを見て陽は凧の隣に並んで座った。

「それにしても元気そうに見えないんだけど、何かあったの? 良かったらボクが話を聞くよ?」

「あはは……。陽君はすごいな。凧が悩んでる時にいつも来てくれる」

弱い微笑。その表情は絵に描いたように悩んでいることを物語っていた。

陽自身、凧と花陽に何があったのかは知っている。だけど、凧があの時どう思っていたのかはわからない。凧があの時どう思っていたのかを知るためにも話を聞くことが重要だった。

「実は、かよちゃんとケンカしちゃったんだ……」

「へえー、またケンカしたの。全く……で、原因は何?」

「昨日の話んだけど……」

そうして凧からケンカの原因を聞いた。

簡単に話をまとめるとケンカの原因はラーメンを食べるときのご飯の食べ方らしい。凧にとってラーメンのご飯は付け合わせのような存在で、ご飯を食べるときもラーメンのスープに浸して食べるようにしている。しかし花陽はどっちもメインのようなものでラーメンとご飯はそれぞれで食べたいらしい。傍から見ればどうでもいいような言い合い。それでも好きなものを譲れないのは人間誰しもある感情だ。もちろん2人はお互いの考えを潰そうなんて言うわけで

はなく、自分の好みを理解してほしいと思っっているから今のケンカに繋がっている。

この話を聞いて、陽は一つ大きく息を吐きだした。

「君たちは本当に仲がいいんだね」

「ケンカしたのにな？」

陽の呟きに凜はそう反応する。ケンカしているのに仲がいいと言った陽に疑問を覚えたようだ。

「そうだよ。よく言うでしょ？ ケンカするほど仲がいいって。ケンカできるのも仲良くないとできないんだよ。だから凜ちゃんと花陽は仲よし」

もちろんこれが全てという訳ではない。けど、ケンカして相手のことを考えて悩むのならそれは仲が良くないとできないこと。凜は気がついていないようだけど、2人の仲の良さは傍から見れば嫌というほどわかる。

「けど、凜の好きなものがかよちゃんにわかってもらえないのは辛いよ……。いつも一緒だと思っただのに……」

「じゃあ、このまま花陽とはギスギスしたままですつと過ごすの？ 知ってもらえないことに納得できないんだよね？」

今回、初めてお互いの好きなことでケンカになったからなのか、自分自身の好きをわかってもらえないことに悩んでいる凜。そんな凜にある意味、酷なことを陽は告げた。

このままでいいのかわからない。もちろん凜がそう思っていないことはわかっている。だからこうして悩んでいるのだから。しかし、理解してもらえないことに納得がいていないのなら関係はこのままになることだって十分に考えられる。

「それは嫌だ!! 凜はかよちゃんと仲直りしたい!! ずっとこのままなんて……」

心からの拒絶。けど、陽にとっては待つていた一言。凜の気持ちが知れたことでニヤリと陽の口角が上がる。

「なんだ。ちゃんと言葉にできるじゃん。だったらあと少しだ」

凜は自分の気持ちを言葉にすることができた。であれば、あと一歩

でこの問題は解決できる。

「あと少し……？」

陽の言葉に首をかしげる凜。ポカンとしながら陽を見つめる様子を見ていると陽の言葉を理解できていないのが分かる。

「そう。凜ちゃんは仲直りがしたいって言葉にできたんだから、あとは花陽の気持ちを考えてあげればいい」

「かよちゃんの気持ち……」

「さつき凜ちゃんは自分の好きなものが理解してもらえないのが辛いつて言ってたよね？」

陽はあと少しに凜を屈けるために言葉を紡いでいく。点と点を線でつなぐようにそこを凜がしっかりと歩いていけるように。

「うん……。だって好きなものは好きでいてもらいたいと思うでしょ？」

「確かに好みが一緒なものもいいかもしれないね。けど、お互いに噛み合わない好みだってあるんだよ。それがどんなに仲のいい2人でも、ね？」

いくら仲がいいとはいえ、自分と相手は他人同士。親友だからとか幼馴染だからとかは関係ない。一人の別の人間なのだから好みが違うのも当然の事。凜はそれをあまり理解できていないのだ。これは、わかっていてもやってしまうミスがあるのと同じ。

「……でも、わかってもらえないのは……」

自分と他人の好みが違うことをわかってほしいのに、いまだに凜はしよぼくれた様子で呟く。そんな様子を見てしまったからだろう。陽は呆れたように一つ大きなため息を吐いた。

「……あのね。花陽は凜ちゃんじゃないんだよ？」

「そんなの、わかってるよ」

陽の言葉にすぐに反応する凜。けど、その答えが本当の意味で正しいのかと言えば正しくはなかった。わかっているのなら先ほどのような言葉は絶対に出ないからだ。

「ううん、分かってない。じゃあなんでそんな言葉が出てくるの？」

「え……？」

陽が指摘すると凜は気の抜けた返事をする。凜自身わかっているつもりでいるため陽がなぜそんなことを言うのかよく分かっていた。なかった。

「凜ちゃんは花陽に自分の好きなことをわかってほしいんだよね？」

「じゃあ、なんで凜ちゃんは花陽の好きなことを理解してあげようと思わないの？」

「あ……」

陽の言葉を聞いてようやくわかったらしい。自分が好きなことをわかってもらえないことが辛いように、花陽だってそう思っている。少し考えれば分かることだけど、ケンカ中の凜にはできない考えだった。

「もうわかったね？ 凜ちゃんがそう思っているように花陽もそう思ってるんじゃない？ 何も好きなことが共有できるから友達になってるわけじゃないでしょ？ 好きなことが合わないときだって当然ある。ボクもそういう時は結構ぶつかったりしたんだ」

「好きなことが合わない……」

今まではお互いがお互いの好きなところに干渉することはなかった。凜と花陽。今まではうまく具合にお互いの好きなことに干渉することはなかったように、今回のケンカでお互いの好きなことが違うことを知った。そしてそんなときの解決方法なんて一つしかない。「そう。それにそういう時は無理矢理好きになることもない。多分そっちの方が花陽に失礼だと思うし」

花陽が熱心になっていることを気まぐれに軽い気持ちで我慢して好きになるのは花陽にとって最大の侮辱になる。無理矢理自分を変えれば楽なのかもしれないけど、それでは相手を傷つける可能性だけであるから好ましい選択ではない。

「じゃあどうすればいいの？」

「それは凜ちゃんが決めなきゃいけない。相手の好きなものを好きになることは出来ない。じゃあどうするか」

ここからは凜自身が決めなければいけない。今後のためにも凜自身のためにも。

「かよちんの好きを好きになれない……。……。わからない。わからないよ……」

体育座りをしていた凧が自分の足を強く抱きしめ顔をうずめる。

「そっか。じゃあヒントをあげる。人の好きが好きになれなくても理解してあげることが出来るんだよ。それが好きなんだってね」

相手の好きを好きになれないのは当たり前。好みには自分に合うもの合わないものがある。それでも相手が好きなものを理解……。わかってあげることがそう難しいことではない。

「好きが好きになれなくても理解してあげられる……。あ、そっか!! かよちんの好きが好きになれなくても好きだってわかってればいいんだ!!」

ほとんど陽が言った内容と変わらないが、それでも自分の答えに辿り着いたようだ。自分に合わないことは好きになることは出来ない。それでも相手が好きなものを理解してあげることがそう難しいことではない。あとはお互いにその領域に干渉でいけばいいだけ。今回のケンカの原因はそれだけで解消される。

「うん。そういうこと。それにね、こういうことも考えられるんだよ。花陽が好きなものが凧ちゃんの嫌いなものだったら花陽にあげればいいし、凧ちゃんの好きなものが花陽にとって嫌いなものだったら貰えばいい。ギブアンドテイク。お互いがお互いを支え合うのは当然の事でしょう?」

実際、好きなものが被っている場合は物の取り合いになる可能性が出てくる。それは仕方のないことではあるがそれが分かかっていて無理矢理好きなものを合わせるのでは本末転倒だ。そう考えると食べ物の場合、嫌いなものをお互いに消費できればお互いにハッピーな気持ちになれる。

「……そうにや。確かにそうにや!!」

陽の考えが気に入ったのか陽の手を強く握って上下に大きく振った。そこには先ほどまで落ち込んでいた凧の姿はなく、元気で明るいいつも通りの凧に戻っていた。同時に一つ、戻ったものもある。

「ようやく元に戻ったね。いつもの猫語がずっと抜けてたよ?」

普段、凜は常につけているという訳ではないが話しているとき語尾に『にや』とつける。しかし、今日は陽と話している今この瞬間までは一切出てこなかった。凜自身キャラを作るために猫語を付けている訳ではないにしても本気で落ち込んでいたため無意識に抜けていた。それが元に戻ったのならもう安心だと思えることができるだろう。「そうかにや?」

「うん。でも戻ったってことは悩みは無くなったってことだよな? じゃあどうすればいいのか、もう凜ちゃんはわかるよね?」

原因が分かったのであればあとは解決する手段を見つけ出すだけだ。そしてこの問題を解決する方法はそう多くないし、難しくもない。凜の様子を見ていればもうその解決方法を思いついているようなそんな気もしてくる。

「うん。ちゃんとかよちに謝る。そしてもう、凜の好きをかよちに押し付けるようなことはしない。好きなものを好きになってくれるのは嬉しいけど、どうしても合わないこともある。陽君が言いたいことってこういうことなんだよね?」

原因が分かって、陽のヒントを聞いた凜は自分なりの答えを導き出した。謝るというのは最も簡単な仲直りの方法で、それでいて行動に移すのが最も難しい方法の一つだ。それでも凜は謝るという選択を取り、次からはこういうことが起こらないように直すべき場所をしっかりと理解した。この言葉を聴けばもう凜は大丈夫だということが伝わってくる。

「そう。本当に大丈夫そうだね。じゃあボクはもう行くね」

隣に座っている凜にそう言っただけで陽は立ち上がった。

凜が大丈夫そうだとすれば、もうここに陽がいる理由はない。ここに陽が来たのは落ち込んでいた凜を励ますため。それにいくら花陽の肉体が健康体であったとしても久しぶりに体を動かした陽にとつてはハリハビリのようなもの。涼しい顔をして凜と話をしていてもかなりの疲労がたまっていた。

「ええ〜!? 久しぶりに会ったんだから遊ぼうよー」

「ごめんね。ちよつとこの後用事があるんだ。大丈夫、また会えるよ」

まだ時間はお昼少し前。年頃の娘なら遊びたいと思うのも分らない。それが久しぶりに会った友人であればあるほど。凜自身この後は遊ぼうと心のどこかで思っていたのだろう。だからその不服の声。

凜の言葉は次会えるのがいつになるかわからないから。であれば、次会える機会があると凜にわからせてあげればいい。花陽と陽は一心同体。いつでも出てくること自体は出来ないことではないのだから会おうと想えばいつだって会える。

「絶対に約束だよ!! あ、そうだ。せっかくだから陽君の連絡先しりたいにゃ!」

今どきの女の子らしい発言が凜の口から漏れる。陽からしたら凜の連絡先は知っているのだが当然凜は陽が花陽でもあることは知らない。

「あ、そのくらいだったら全然いいよ」

陽は花陽とは別の携帯端末を持っている。だから交換すること何の不都合はない。陽は携帯を取り出し、やたらハイテンションな凜とSNSアプリの一つを交換した。交換した瞬間に陽の携帯に1つの通知が来る。『星空凜にゃ!』というメッセージとともに凜らしい猫のスタンプが一つ押される。

陽も名前だけを送った後、目の前にいる凜に向けて口を開いた。

「ただ、いつも連絡を返せるわけじゃないから、それだけは覚えておいてね」

「わかったにゃ!」

連絡先を交換してからというものの凜の頬は赤く上気し、飛んで跳ねるように喜んでいる凜。若干瞳は潤んでいるようにも見える。

「じゃあまた今度」

「うん!」

そんな凜に陽は軽く手を振って公園の出口に歩いていく。そんな陽に向かって大きく手を振る凜。その時の凜の表情はどこか乙女のような笑顔のように感じた。

凜と別れた後、誰にも見られていないことを確認して陽は自宅に帰ってきた。すぐに花陽の部屋に戻って、陽である見た目を花陽に戻していく。

体が陽から花陽に戻った後、ベッドに横たわる。

「ボクの役目もコレで終わりだね」

（……いつもありがとう。陽君。私も凜ちゃんの好きを理解していくよ）

「何？ さっきのやり取り見てたの？ 全く……。花陽、凜ちゃんの事よろしく頼むよ」

（うん）

「久しぶりに動いたから疲れちゃった。花陽、おやすみ」

陽はそう言って瞳を閉じた。

「おやすみなさい、陽君」

そのすぐあと、今まで陽だった声が少し高めに戻る。今、陽が眠りについて花陽が起き上がった。記憶は共有される花陽は陽がやってくれたことに涙を浮かべながら感謝していた。大切な友達を失わずに済みそうだということに安心した花陽からは不安の色は見られない。きつとこれなら陽が望んだ、理想の仲直りができるだろう。

翌日。花陽は学校に行くために外を出た。いつも凜と待ち合わせをしている場所に駆け足で向かう。するとそこには一昨日、ケンカした相手の凜がいた。電柱に寄り掛かって花陽が来るのを待っていたようだ。

花陽が凜のもとにやって来たと思っただけなら急に凜は手を合わせて頭を下げていた。

「かよちゃん、この前はごめんなさい!!」

開口一番凜は花陽に謝った。昨日、陽に言ったことを実行したのだ。

でも、謝るのは凜だけではなかった。

「ううん。私の方こそごめんなさい」

凜と同じように頭を下げて謝る花陽。

「いやいや、謝るのは凜の方だつて!!」

「私の方だよ!!」

2人は一昨日にあったことをただ謝りたいだけなのに、お互いが自分のほうが悪かったと言い合いになる。やがて謝っていたはずなのに睨むようにお互いの顔を見つめていた。

しかし、何がおかしいのか突然2人が笑い出した。

「なんで仲直りしようとしてるのに言い合いが始まるんだろうね」

笑いが少し収まると目尻に溜まった若干の涙を指で拭いながら花陽は言う。

「本当にや〜」

凜も花陽と同じように涙を拭いてもう一度真っ直ぐ花陽のことを見た。

「この前はごめんなさい」

「私の方こそごめんなさい」

お互い握手をしながら謝る。そこにはくだらないことでいがみ合っていた時の2人でも自分が謝るべきと考えていた2人でもない、いつも通りの普通の幼馴染の関係に戻った2人がいた。

仲直りをした直後だからだろうか、手を繋いだまま他愛もない会話をしながら花陽と凜は学校に登校していた。まるで子供の時のように、初めてケンカした後、仲直りをしたときのように2人はゆっくりと歩いていった。

きっとそこで思い出したのだろう。凜がこうして謝る勇気を出せた原因を作った人のことを。初めて花陽とケンカしたときに出逢っ

た一人の少年のことを。

花陽との登校中、凜は赤く頬を上気させながら少し立ち止まった。

「ねえ、かよちん。凜ね、好きな人ができたよ」

花陽にとつて唐突な凜のカミングアウト。

「えええええ!!? どんな人なの、凜ちゃん!!」

驚いたのもある。しかし、女の子というもの特に仲のいい友人の恋の話にはとても強い興味があった。それが今まで男の色を見せてこなかった凜だったのだからなおのことだ。

「うん！ 陽君って言うんだけどね！ いつも凜のことを助けてくれるかっこいい男の子なんだく!! 多分、ずっと前から好きだったんだと思う」

凜は好きな人の名前を言った。でもそれは叶うことのない恋なのかもしれない。陽という一人の男の子は小泉花陽という一人の女の子でもあるのだから。

この時、花陽がどう反応したのかはまた別のお話。

(……………めんね。凜ちゃん)

スウェットの僕と朝焼けの君

かつて、世間を賑わせたアイドルが居た。

国立音ノ木坂学院のスクールアイドル・μ, s。そう、世間を賑わせたのは、学校のアイドルなのだ。

そんな彼女たちは、二〇一六年の三月。三年生の卒業とともに終わった。最後にはデツカイドームでライブをやって、美しい伝説と成って。

俺も、彼女たちのファンだった。アイドルなんかハマるなんて思ってもいなかったのに。多分、年齢も近かったから親近感みたいなモノが湧いたんだと思う。

μ, sが終わった年の四月。地方から都内の大学に進学した俺は、慣れない一人暮らしに苦戦しながらも、上手くやっていた。

友達も出来て、彼女だって出来て、別れを経験して。まさに普通の大学生活を送っていた。年を重ねるごとに、少しずつ余裕すら出てきた。

そして、二〇一八年四月。

大学三年生になった俺は、楽に単位が取れる講義を優先的に履修するなど、こなれた大学生活を今年も送ろうとしていた。

そんな時、絢瀬さんに出会ってしまった。

☆☆ スウエットの僕と朝焼けの君 ☆☆

◇ Spring

三年生になって初めての講義はどれもこれもつまらないものばかりだ。友達と一緒に受けたところで、講義中に話すわけでもない。だったら一人で受けても変わらない。そう思って、今回は周りと相談せずに適当に履修届を提出した。

水曜日の二限。初めて履修する講義は、大学のイメージとはかけ離れた狭い教室だった。

(…人いないのか?)

俺の不安は的中。人氣が一切ないそれには、教授のゼミ生を含めて十人程度のシヨボい講義だった。

「この講義を履修した君たちも、変わってるねえ」

時間五分前に入ってきた教授は、自虐するように笑った。

笑い事ではない。人が少ないということは、それだけ単位が取りづらい講義ということだ。参ったなあ……。考えているようである。考えている俺は、クルクルと右手でペンを回していた。

すると、後方のドアが開く音がした。これで全員かと勝手に思っていたが、なんとなく振り返ってみると、手から力が抜けていく。ペスが机の上に落ちる音が教室に響いた。

(……………え?)

入ってきたのは、かつて俺が夢中になっていたμsのメンバー……らしき人物だった。

開いた口が塞がらないとはこのことだ。自分でもこの状況がよく

理解できなかった。

その人は、俺の右斜め前に座った。

薄手のコートを羽織り、大学生には少しだけ背伸びしたような革の鞆を肩から下ろしている。

何よりも目を引いたのは、綺麗な金髪だった。そこら辺のギャルのような汚いものではない。純粹で見惚れてしまうほど綺麗な髪。ポニーテールも、俺の記憶の中にいる彼女と同じだった。

(え、えりち……？ いやまさか……)

久々に「えりち」という単語を出した気がする。それだけもう終わった存在だったということだろうが、一瞬で蘇るということは、きつとそれだけ大きな存在だったのだろう。

小汚い茶色に染まった教室で、明らかに彼女の存在は浮いていた。かと言って、周りが反応していると聞かれれば、そういうわけでもない。あの彼女がここにいるというのに。

講義が始まって、俺は彼女の後ろ姿をひたすら眺めていた。客観的に見れば、ただのヤバイ奴である。でも憧れの存在が目の前にいるのだ。鼻息も荒くなってしまうのはある意味自然じゃないか。

クソみたいにつまらない講義は一瞬で終わり、居眠りを終えた大学生たちは各々教室を出て行く。

「……あの」

「は、はい」

想像もしていなかった展開。彼女は振り返って声をかけてきた。驚きすぎて声は裏返っても、彼女はクスリともしなかった。

「何か私の背中に付いてますか？」

「い、いえ！ なにも」

「講義中、ずっと視線を感じていたので」

冷たい声色で彼女は話す。観客の前では聞いたことが無いほど、その声は冷たかった。触れると火傷するドライアイスのように。ただこの距離であれだけ見つめていれば、そりや気づくよな……。

「す、すみません…。あの……絢瀬絵里さんですよね？」

「ええ、そうですけど」

「やっぱり！俺ずつと、sのファンだったんです！」

「どうやらこの女性は、sの絢瀬絵里で間違いないらしい。なんとなく安堵する自分がいた。」

「ありがとうございます。では」

「え、あのー！」

「……まだ何か」

「よかつたら握手してくれませんか？」

「完全にここが大学ということを忘れていたオタクの図である。気づけば、教室には俺と彼女の二人だけになっていた。」

「……いいですよ」

あ、絶対嫌なやつだ。作り笑いが辛い。

「お礼を言いながら、彼女の右手を握る。細く、柔らかいソレは、少し力を入れれば壊れてしまいそうな。……相変わらず彼女は作り笑いを浮かべているが。」

「……それでは」

「あ、ありがとうございます」

教室を出て行く彼女の後ろ姿を眺める。

「講義は終わったと言うのに、再び椅子に腰掛けてしまった。一気に力が抜けたような感覚だった。」

「同じ講義を履修してるということは……。また来週も会えるのかな。」

「クソつまらない講義が、一週間で一番幸せな講義になるのではないか。世の中本当にわからないものだ。」

「それから一通りの講義を受けて、水曜日の二限が前期一番の講義になると確信した。早起きは辛い、彼女に会えるのなら意地でも早起きしてやる。」

「そもそも、同じ大学に通ってたことすら知らなかった。少なからず有名人であることには違いない彼女。もう少し噂になってもおかしくないはずだが。」

そんな疑念を抱きながら、毎週水曜日の二限のために生きてきた。毎回毎回彼女に話しかけるもんだから、俺に対する態度も少し慣れてきたのか、いい加減になってきていた。

◆？

季節は五月の半ば。水曜日の二限目。例に漏れず彼女は教室にやってきた。教室は三人がけの席がズラリと並んでいる。先に来ていた俺は、彼女が座った席の一つ隣の席に移動した。

馴れ馴れしく「ゴールデンウィークは何をしてたんですか？」と問いかけると、彼女は面倒臭そうに「友達と旅行です」と答えた。

「へえ、どこへ？」

「大阪です」

革の鞆からテキストを出しながら、俺の問いかけに答える。無表情で声ですら感情がこもっていない。相当面倒なんだろうな。俺という存在が。

でも無視していないところを見ると、心底嫌というわけではないか？ いずれにしても、この一カ月で俺が知っている絢瀬絵里という女性のイメージは儂くも崩れ去っていた。

冷静沈着でクール。ファンの前で見せたあの輝かしい笑顔は心の奥底に沈んでしまっていた。

最初は浮き足立って興奮気味にえりちに会えると思っていたが、一カ月もこの態度をとられれば必然的に、えりちから絢瀬さんに印象が変わってしまうのも仕方なかった。

「大阪で何したんです？ 観光？」

「そうですね。ブラブラ歩いただけ」

素っ気なさすぎる彼女に、少しだけ嫌気がさした。別に付き合っているわけでもない。かといって、友達というわけでもない。ただ単に、受ける講義が一緒の同窓生ということだ。

そう考えると、彼女の態度は至極真つ当なものなのかもしれない。

「あの、今さらなんですが」

「なんででしょうか」

「お友達になりませんか？ 僕と」

「……お友達に？」

それまで俺の方を見なかった彼女が、そこで初めて俺と目があつた。その蒼く美しい瞳を、点のように丸くして。そこまで想像もしていなかったのだろうか。

二人の間には、僅かな沈黙が続いた。

そして、彼女が口を開こうとした瞬間。教授が教室に入ってきた。

「あつ」「あ」

二人して前を見ると、教授と目が合う。

「今日は二人だけ？ ……まあいいか。始めますよ」

その言葉を聞いて、俺は教室を見渡した。教授の言う通り、ここには俺と彼女しか居なかった。

「はは……」

思わず、乾いた笑いが出た。

人が居ないことが可笑しいわけじゃない。そんな講義に自分が出席していることが面白おかしいのだ。普通だったら、俺だってこんな講義サボっているに違いない。

それなのに、何故俺はここにいるのか。

チラッと彼女に視線を送る。彼女も俺を見ていて、少しだけ微笑んでいた。

「初めて笑った顔見ました」

「……嘘ですよ。あなたはμ sの頃を知ってるはずですよ」

「知ってますけど、今のあなたの笑顔は初めてですよ」

「……そうですね」と口元を緩める彼女。何となくだけど、心の底からの笑顔なんじゃないかな。何となくだけど。

「さっきの質問ですけど、お友達、なつてくれますか？」

「その前に一つ質問」

「なんででしょうか」

「あなたのお名前は？」

◇ Summer

今年の水曜日はひと味違う。

水曜日の二限。俺にとって、大学生活で一番楽しみな時間となっていた。

そんな前期の講義は今日で最後。来週から前期試験なのだ。そのせいで、彼女と会えるのも最後ということだ。

まあ、ただ一つ言えるのは、別に全く会えなくなるわけではない。彼女も俺と同じ大学に通っているのだから。

それでも、彼女のこの講義以外で会ったことは無かった。

見かけたことすら無い。本当に彼女はこの大学の学生なのだろうかと疑いたくなるほどに。

「何ボーツとしてるの?」

「ああ、絢瀬さん」

講義が始まる三十分前にも関わらず、彼女は教室にやってきた。

いや俺だって大概だが、彼女も大概だ。側から見れば、クソつまらない講義に気合いを入れるただの変わり者だ。

「やけに早いね、今日は」

「早く着きすぎちゃって。することないし、ここで時間潰した方が効率的でしょ?」

「まあ、そうだね」

彼女はなんのためらいもなく、俺の隣に腰掛けた。

あの日から、なんだかんだでお友達になった。連絡先まで交換したものの、これまで一回もやり取りをしたことがない。俗に言う、たまに校内で会えば「お疲れ」と声を掛け合う「おつ友」のような関係。

それでも、俺は講義を無視して彼女に話しかけるし、真面目な彼女も俺の話に付き合ってくれる。そう考えれば、おつ友以上の関係なのかもしれない。

「あのさ、一つ聞いてもいいかな?」

「なにかしら」

「絢瀬さんって、本当にこの大学の学生なの？」

彼女は、俺の方を向く。瞳を点にして。

「何言ってるの？ だからここに居るんじゃない」

「いや、この講義以外で会ったことないから」

「まあ、確かに。あなた、学部は？」

「経済」

「私は文学部。それなら会わないわね」

「ああ、それで」俺は納得したそぶりを見せた。

冷静に考えてみれば、確かにこの講義は対象学部が多かったはず。それでか。他の講義で会わないのも納得できる。

「学校でも見かけたことないけど」

「私はあるわよ」

「え！ マジで!？」

「そんなに驚くことないじゃない」

いやそりゃ驚きますよ。

俺からすればマジで見かけないし、妄想と現実の区別がつかなくなったのかと思える。いや、そんな妄想しないんだけどさ。

「それなら声かけてくれればいいのに」

「……まあ、そうね」

「あーいや。そんな無理しなくていいから」

嫌悪感に近い表情をされると、そう言わざるを得ないわ。うん。少し傷つくなこれ……。

ていうか、俺ってあの絢瀬絵里と話してるんだよな。

なんだろう、話してみれば想像していた彼女と違いすぎて、普通の女友達のような感じだ。俺の中にある、あの伝説のスクールアイドルという第一印象は、すっかり薄れていた。

同時に、教授が教室に姿を見せた。

俺は教室を見渡してみると、前期最後とあってか、おそらく履修者全員が出席していた。

「最後になって全員出席ですか。ま、最後だけ聞いても意味ないです

がね」

教授はそう皮肉る。申し訳ないが、完全に同意してしまった。

◆？

最後の水曜日が過ぎ去った。その週の金曜日。俺は大学内の売店でその日の夕食になるであろう調理パンを漁っていた。大学内の売店とはいえ、品揃えはそこそこ良い。学生からも人気があった。

時刻は夕方の五時を回っている。マンモス校ということもあって、昼間は学生で埋め尽くされるが、今の時間になれば少なくなっていた。売店の中は、それこそ数える程度しか居ない。

「……何してるの？」

「え………つて絢瀬さん!？」

「な、何。そんなに驚かなくても」

物色中、横から声をかけてきたのはなんと絢瀬さんだった。

予想外の展開に、俺は掴みかけたパンをつい棚に戻してしまう。

ああ、焼きそばパンが。

すっかり暑くなつたせいとか、白のノースリーブにジーンズの格好をしている。相変わらずスタイル良く、大学生感があまり感じられない。それでも、目の前にいるのは間違いなく絢瀬絵里だ。

「どうしたの？ いきなり」

「い、いきなりって……。あなたが言ったじゃない」

まさか、この間のことを言ってるのだろうか。だとすれば、なんとまあ律儀なこと。つい口元が緩んだ。

「確かに言っただけど……。って、今日も一人？」

「……ええ、まあ」

「そっか」

少し落ち着きを取り戻した俺は、棚に戻してしまったパンを再び手に取る。彼女は店内を眺めてはいるが、俺の側を離れようとはしなかった。

側から見ればまあ、釣り合わない二人だ。

身長は辛うじて俺の方が高いが、彼女は圧倒的にスタイルが良い。俺の隣にいるべき人間ではなかった。

「それって、まさか晩ご飯?」

「そうだけど」

「自炊しないの?」

「しないな。面倒だし」

手に持った調理パンを見て、彼女は蔑んだような視線を送ってきた。自炊なんて一人暮らし始めてやったこともない。面倒すぎる。別に料理が趣味なわけでもないし。

「身体に毒じゃない?」

「俺にとつたら、自炊する方が身体に毒だな」

「どれだけめんどくさがり屋なの:」

「別にいいだろ。そう言う絢瀬さんは、自炊するの?」

「ええ。少なくともあなたよりはね」

何というか、すごい見下されている気がした。が、それを言ったところで俺に言い返せる言葉はない。そのまま飲み込むことにした。

「絢瀬さんって、一人で居ることが多いの?」

「……そうね。いろいろあつて」

「いろいろ?」

「そう、いろいろ」

彼女は含みのある言葉を放った。

今更だが、彼女は俺とは違った世界を生きる人間だと思ってる。クラスでは引つ張っていく存在のように。

実際、音ノ木坂学院時代には生徒会長を務めていたと聞く。あの女子校をまとめ上げたのだから、それ相応のカリスマ性があるのだろう。まさに、俺とは違う。

そんな彼女なのだ。大学入学後もいろいろあつたに違いない。サークルや友人との人間関係がゴタついていても何ら不思議ではなかった。

「大学って色んな奴いるからね。大変だと思うよ」

「まだ何も言っていないじゃない」

「言つてないけど、そういうことですよ？」

彼女は何も言わなかった。つまりは、そういうことなのだろう。久々に自分の予想が当たった気がした。

手に取った調理パンを、三度棚に戻す。店側への申し訳なさが少しだけあるが。彼女も俺の様子を観察していたが、売店を出ると後を追うように店を出てきた。

「買わなくていいの？」

「ああーいや。なんというか」

せつかくの機会なのだ。思い切つて聞いてみるのも手。そう思うと、不思議とスラスラ言葉が出てきた。

「ねえ、絢瀬さん」

「なに？」

「この後、時間ある？」

彼女は少しだけ戸惑った表情を見せた。それでも、チラツと腕時計を確認して小さく頷いた。

「よかつたら、晩ご飯一緒に食べない？ 学食だけど」

夕方とは言え、別に晩ご飯を食べていてもおかしくない時間帯だ。試験が終われば夏休み。後期は会えるかわからないのだ。もう失うものは何もなかった。

「学食は嫌。近くにいいカフェがあるから、そこに行きましょう」

「カフェかあ。一人なら絶対入らないな」

「せつかくの機会じゃない。もちろん、ご馳走してくれるのよね」

「ええ、エスコートしますよ。絢瀬さん」

「柄じゃないこと言わないでよ」と彼女は優しく微笑んだ。本当に綺麗な笑顔だった。

言つちや悪いけど、俺たちはそんなことを言い合えるような仲ではない。でもそんなことを言うつてことは、本当に嬉しいのだろう。

それだけ、彼女はこの大学生活を楽しめていないのではないか。俺の中でそんな疑念が湧いてくる。いや、きつとそれは事実なんだろうな。さっきの含みのある言葉といい、今といい。

俺たちは大学を出て、本当にすぐ近くのカフェにやって来た。

一人では絶対に入らないであろう、お洒落な雰囲気のお店だ。店内はよく冷房が効いていて、蒸し暑い外とはまるで別世界だった。

「絢瀬さんの行きつけとか？」

「そうね。よく来るわ」

女性の店員に案内され、俺たちは向かい合うように座った。あのμ、sの絢瀬絵里と二人でご飯。ファンからすればマジで殺意案件ものだ。いや、俺もファンなんだけどさ。

メニューを開いても、そこら辺の定食屋とは違う。とりあえず、サンドウィッチを頼むことにした。

「サンドウィッチでいいの？ パスタもあるわよ」

「パンの気分だったから」

さつきまでパンを食べる気でいたせいか、胃袋がソレを欲していた。パスタも確かに美味しそうだが、今はサンドウィッチが食べた
い。

彼女もメニューを見ていると思っていたが、何故か俺の顔をジッと見つめていた。

「…なに？」

「あなたってμ、sでは誰が好きだったの？」

「ああ、推しね。ことりちゃんだよ。南ことりちゃん」

「…そう。じゃあ私はこのパスタにするわ」

そう言って指差したパスタを見ると、値段がなんと二五〇〇円もするふざけたものだった。

「ちよつと高くない？ なに？ 八つ当たり？」

「いいじゃない」

「いや良くないから。大学生の財布はカツカツですよ？」

俺の呼びかけも虚しく、彼女は店員を呼んでサンドウィッチとそのパスタを注文した。ああ、三〇〇〇円超の出費はデカイよ。

そもそもこの人はこんなキャラだったのだろうか。イメージとしては、真面目で優しい人だと思っていたのに。これが裏の顔というやつか。

「ねえ」

「……なんでしようか」

「誘ってくれて、ありがとう」

急に真顔になって、そんなことを言われると、俺としても何を言え
ばいいのかわからない。とは言っても、無視するつもりにはなれな
かった。

「別に気にしないですよ。そんなつもりで言ったんじゃないんだから」

「久々だから。こうやってご飯食べるの」

「そうなんだ」

いやあ、拗らせてるなあ。

でも入学当時はかなりの有名人だったはず。それだけにミーハー
な人間どもが集つてきたのかもしれない。そして、そいつらの裏の顔
を見たのかもしれない。これは有名人にならないとわからない感
覚だと思うが。

でも、彼女が入学したことをついこの間まで知らなかったのだか
ら、そうとも限らないということか。

「それならさ、やっぱり割り勘にしない？」

「ソレとこれとは話は別よ」

「…そうですか」

◇ Autumn

紅葉が見頃を迎えた十一月。あと一ヶ月ちよつとで今年が終わる
というわけだ。

もうすぐ訪れる本格的な冬を前に、すっかり外の空気はひんやりと
したものに変わっていた。

「本当にわからないわね…この講義」

「それは前期で証明済みだろ」

水曜日の二限。俺は前期と同じ教室で講義を受けていた。

講義は前期の続きで、教授もあのクソつまらない人。受講者はいよいよ一桁じゃないかってぐらい少ない。

そんな講義であるにも関わらず、俺と彼女は再び履修していた。

前期は二人とも無事に単位を取得。普通なら後期まで取る学生は居ないだろう。

俺だってそうだ。でも、彼女に会える可能性がある講義はこれだけ。正直、これまで取得した単位数には余裕があるから、捨てても良いと思ひ履修した。

するとまさかの展開で、彼女も履修していたのだ。いや、別に話し合えば良いじゃないかと思うかもしれないが、そこまでするのも何となくアレだ。

「逆に何で履修したんだ？」

「しつかり対策しておけば、問題ないからよ。試験問題は意地悪じゃないし」

「それは確かに」

「あなたは？」

あなたに会えるから、とは言えなかった。

いや別に隠してるわけじゃないんだが、講義中にそんなことを言うのも可笑しな話だ。適当に彼女と同じことを答えて誤魔化した。

そうは言っても、*μ*、*s*で好きだったのはことりちゃんだけだね…。本人の前で言ったらまた金銭的に痛い目に遭うから二度と言わないでおこう。

「もうすっかり秋ね」

「どうした？ 急に」

「ほら、紅葉」

そう言っつて、視線を追う。すると、それは窓の外に向けられていて、美しい木々の紅葉がこの教室には不釣り合いだ。

それはそうと、俺たち以外には三人ほどしか今日は出席していない。それでも教授は気に留めることなく延々と話している。どういう神経してるんだか。

「せつかくだし、今度紅葉狩りにでも行かない？」

「今そうしてるじゃん」

「違うわよ。山に見に行くの」

「俺、インドア派だからさ」

「なによそれ」と彼女は鼻で笑った。

「別に可笑しくはないだろ。アウトドア派に見えるか？」

「うーん……見えないわね」

「それなら笑わないでよ」

二人小声で話してはいるが、話しているうちに声のボリュームが大きくなっていったらしく、教授はひとつ咳払いをして俺たちの方を睨んだ。

それを察して、俺ら二人は黙り込む。さすがにはしやぎすぎたようだ。

結局、この日は講義が終わるまで会話を交わすことは無かった。そのせいも、終わるまでの時間が長いこと長いこと。彼女が居なければ絶対に履修しなかったな、こんなモノ。

「疲れたわね」

「それな。ただ睨まれたら話せないだろ」

「そうだけど。会話が無いあの講義さすがに堪えるわね」

教室を出て、そのまま学食に向かう道中。そんな会話をしていた。他愛もない会話だ。

ただやはり、俺と彼女が並んで歩くのは中々珍しい光景なようですれ違う女子が怪奇的な視線を投げかけてくる。ほっとけ。

「その……ごめんなさい」

「え、なにが？」

「私と一緒に居ると、あなたまで変な目で見られて」

「なに言ってるの？」俺は少しだけ強めにそう言った。

すると彼女は立ち止まって、戸惑いの表情。別に戸惑うことでもないのよ。

「俺は別にそんなこと気にしたことないぞ。ていうか、変な目で見られるなんて知らなかったし」

「そ、そうなの…」

「むしろ、何かあったの？」

俺はずっと気になっていたことを、漸く問いかけた。

春に出会って、友達になって、校内で見かければ話しかけるような仲になって。そして、この秋までずっと。俺は彼女がほかの学生と一緒に居るところを見たことがなかった。

いつも独りだった。俺が見る彼女は。

俺が見かけた時だけ、なのかもしれない。でもそれは彼女にしかわからないことだし、俺がどうこう言ったところで何もわからない。だから、彼女の口から聞くしかないのだ。

それが、今。本来なら、こんな人が大勢居るような場所で聞くことではない。でも、流れの中でそうなってしまったのだ。仕方がない。

「それは……」

「あのさ」

「……」

「今週末、飲みに行こうよ」

♣？

俺は初めて、彼女を飲みに誘った。出会って半年が経って、初めてだ。金曜日ということもあって、駅前はかなり賑やかだ。

時刻は夜の七時。すっかり辺りは暗くなって繁華街の明かりが見事に映えている。

「お待たせ。待った？」

「いや、全然。今来たところだよ」

茶色のダツフルコートを纏っている彼女は、繁華街の光に負けないほど輝いている。そんな彼女が俺に話しかけてくるもんだから、周りの目は何となく冷めているのようにも思えた。

合流した俺たちは、全国チェーンの居酒屋に向かった。

大学生である以上、決して贅沢は出来ない。安くて旨いんだから、むしろ俺はそれで十分だった。彼女はどうかかわらないけど。

店に入ると、すでにサラリーマンだったり大学生で中々繁盛していた。金曜日だからそれもそうか。

予約しておいたおかげで、俺と彼女は個室席に通された。周りの雑音を気にせずに話が出来た。それが彼女の望みだったのだ。

俺がビールを注文すると、彼女も「私もそれで」と店員に告げる。

「そういうえば絢瀬さんって、お酒飲めるの?」

「普段は飲まないけど、飲める体質よ」

よくよく考えてみれば、彼女はロシア人の血が入っている。勝手なイメージにしか過ぎないが、何となく強そうなのはわかる。

「ちなみに、ことりはかなりの酒豪よ」

「え、そうなの?」

「ええ。この間集まった時、焼酎をロックで飲んでたわ。それも平気な顔でね」

「そんなこと聞きたくなかったです」

天使だって焼酎ぐらい飲むに決まってる。うん、別に可笑しいことではない。ない……はずだ。いずれにしても、聞きたくもない話を聞かされてしまった。

ちようどその時、俺たちが注文した生ビールとお通しのキャベツが運ばれてきた。

「じゃあ、乾杯」

「乾杯」

コツン、とジョッキが合わさる音が互いの間に響いた。

それを合図に、俺と彼女はビールを喉に流し込む。学生の間だと、ビールが苦手な人も多いが、俺は好きだ。別に味がじやない。ただ単に喉越しが好きなんだ。

それは彼女も同じようで、一口飲み終わると「ビールは喉越しが好きなの」と洩らした。

「奇遇だね。俺も同じこと思ってた」

「そう。奇遇ね」

お通しのキャベツに先に手を付けた俺は、彼女に食べ物の注文を促した。すると彼女はメニューを開いてあつという間に決めてしまっ

た。

店員が来ると、注文内容を伝えて俺に内容の確認をする。咄嗟に俺は、「唐揚げを一つ」と伝えた。特に理由はないが。

「……こういう居酒屋に来ることもないの？」

今日の本題について、俺は遠回しに聞いてみた。ストレートに聞くには、まだまだ酔いが足りない。ジャブを放って、それが後々効いてくるはずだ。

「無いわね」

「そつか。でも、μsのメンバーとは今でも会ってるんだ？」

「ええ。一年に四〜五回は会ってると思う」

彼女によると、自分と同じ年の東條希と矢澤にこはそれぞれ別の大学に進学したという。後輩の高坂穂乃果、園田海未、南ことりの三人も大学生に。そして西木野真姫、星空凛、小泉花陽の三人は今年音ノ木坂学院を卒業する。

注文したものが少しずつ運ばれてくるが、彼女は話を止めなかった。

大学に入学した当初は、男女問わず自然と人も集まってきたという。そりやそうだろうな。だってスクールアイドルを全国的な存在にした張本人なのだから。

ただその中で。純粹に彼女と友達になりたいと考えていた人間は一人も居なかった。要は、あの絢瀬絵里と仲の良いというレッテルが欲しかっただけなのだ。そいつらの気持ちはわからないでもないが……別に仲良いからって自分の人生が変わるわけでもない。

結局、自分が周りからチャホヤされただけなんだよな。「あの絢瀬絵里と友達」というフレーズを言いたいだけなのだ。

だが、彼女はそれを見破った。しばらく一緒に居た友人もどきに対して、ハッキリとその意思を伝えたという。するとアレだ、一気に周りから人が居なくなったらしい。

「ホント、犯罪でも犯したのかって思うぐらいね。周りから人が居なくなっただけ」

彼女は苦笑いを浮かべているが、俺なら絶対心折れていると思う。

そんな時、支えてくれたのはμ、sのメンバーだった。

電話だったり、メールだったり、それこそ直接会ったり。それが無かったら、きつと大学を辞めていたと彼女は笑っている。

「そのまま三年生。もう大学生活は正直疲れたわ」

「何というか、意外だね。絢瀬さんって。もつと上手くやる人かと思ってたけど」

「私の今があるのは……μ、sのおかげ。廃校問題があった時も、生徒会長の私は何も出来なかった」

気づくと、俺と彼女のジョッキは空になっていた。

互いに二杯目のビールを注文して、運ばれていた料理に手を付けた。

「どうだろう？　そもそも廃校問題だって、生徒がどうにかする問題じゃないと思うし」

「それはそうだけど……」

「それに。今、絢瀬さんが通ってるあの大学には、μ、sのメンバーは居ない。だから、このままだといつか潰れるんじゃないか」

「あと一年なんだから、それは無いわ」

「でも」と俺は食い気味に答えた。

「それなら俺を頼ってもいいから。ようやく友達になれたんだから。俺たち」

「……そんなことを真顔で言わないでよ」

「ニヤついて言うよりマシでしょ」

彼女は笑った。優しい、柔らかい笑顔だ。「それもそうね」とお酒のせいで少し紅潮した頬を緩ませる。お酒は飲めるが、すぐに顔に出るタイプなのか。色白で綺麗な肌に、紅潮する頬がよく映えている。

やがて、二杯目のビールが運ばれてきた。それと同じタイミングで、彼女は口を開いた。

「ねえ」

「なに？」

「あなた、恋人居ないの？」

「居たら女の子と二人でご飯なんて行かないよ」

「そう。真面目ね」

「真面目なくらいが丁度いいって」

これは個人的な考えだが、チャライよりは真面目な方がいいだろ。男にしても、女にしても。

彼女はお酒のせいか、笑う頻度が多くなったように思える。学内で話す時は、あまり頻繁に笑った顔を見ない。そのせいか、彼女の笑顔は新鮮だった。

「逆にさ、絢瀬さんも恋人とか居ないの？」

「居ないわ。あなたと同じで、居たら来ないわよ」

「へえ。何だかんだで俺たち、考え方似てるね」

「…口説いてる？」

「なんでそうなるのさ」

いやほんとに、どんな奴らが彼女を取り巻いていたのだろう。そんなつもりで言ったつもりは一切ないのに。

そんな俺の気持ちに反して、彼女は綺麗な箸づかいで、丁寧に料理を口に運んでいく。見た目は本当に日本人離れているのに、そのギャップについて見惚れてしまった。

「な、なに？」

「あ、いや、ごめん。箸づかいが綺麗だったから、つい」

「…やっぱり口説いてるでしょ」

「口説いてないから」

ふと気づいたが、彼女と話しているとお酒が減るペースが早い。それだけ会話が盛り上がっているのか、俺が緊張しているのか。そのどちらかだな。

彼女はどうかだろうか。見た限り、俺と同じぐらいのペースでお酒が減っている。あれだけ口説かれてるかどうかを気にしてるくせに、よくわからない人だ。

まあ、またジロジロ見ると余計な疑惑をかけられかねない。俺は手元の取り皿に移したサラダを一口で頬張った。

結局、俺たちはそのまま二時間話しっぱなしだった。

彼女の過去、そして俺の過去。お酒も入り、今までで一番会話が盛り上がった。ただ結構飲んでしまったせいも、徐々に酒に浸かった感覚だった。

店を出ると、一気にひんやりとした空気が肌にまとわりつく。酒で火照った身体にはそれが途轍もなく心地良かった。

「ちよつと飲み過ぎた…」

「大丈夫？ 戻しそう？」

「いや、そこまでじゃないから大丈夫」

「ならいいけど」

「むしろ絢瀬さん酒強くない？ 俺と同じぐらい飲んでたよね？」

「そんなことないわよ」と彼女は視線を逸らした。

「もう一軒行こうと思えば行けるでしょ？」

「そ、それは…まあ」

「やっぱり。あんた強いわ。なんならこのまま一緒に朝焼けでも見ない？」

「酔っ払いに言われても嬉しくないわね」

「仕方ないよ。酔ってるんだから」

酒のせいだついでついでなことを言ってしまった。これは口説かれたと言われても仕方ない。ただ、全て酒のせいだ。酒のせい。

「今日は帰りましょ」

「今日は、つてことはチャンスあるのかな」

「……最低ね」

「別にただ単に朝焼けを見ようって話なのに。なにを想像してるの？」

「はいはい。早く帰りましょ、寒いから」

◇ Winter

年が明けて二〇一九年。後期の試験も終わって、長い長い春休みを

迎えていた。

春休みといつても、まだ二月。全然寒いし、なんなら雪が積もつて
るぐらいだ。

特にすることのない俺は、暖房の効いた自宅で一人音楽鑑賞をして
いた。アウトドアではない俺にとって、貴重な趣味の一つだ。何の苦
痛でもない。むしろこんな雪の日に外に出る方が不健康なんじゃないか。

彼女との関係も相変わらず続いていた。

関係と言つても、ただの友人だ。秋の日、初めて飲みに行った日以
降、彼女の俺に対する態度が一気に慣れた感じになった。それだけ効
果があったということか。

今年の後期試験で、必修の単位は全て取得。卒業に必要な総単位数
も無事にクリアした。四月から四年になる俺は、いよいよ就活、そし
て大学に行く機会は一気に減ることになる。

そうなれば、彼女と会う機会も当然無くなる。あの絢瀬絵里との繋
がりも今年限りかと頭をよぎった矢先、俺のスマートフォンが鳴つ
た。

「……絢瀬さん？　どうかした？」

電話の相手は、その彼女だった。

壁時計を確認すると、時刻は夜の十時を過ぎている。滅多に連絡し
ない彼女から、そんな時間の連絡。あまり良い予感はしなかった。

「いきなりごめんなさい。いま、家？」

「うん、家だけど」

「一人暮らしよね？」

「そうだよ」

「今から、行ってもいい？」

「は？」と素っ頓狂な声が出た。彼女は続ける。

「本当にごめんなさい。実は…家の鍵を落としちゃって」

「え、どこに？」

「排水溝の中。取り出せないし、今日日曜日でしょ？　鍵の再発行も
明日になりそうです」

ああ、今日日曜だっけ。長期の休みだと曜日感覚が無くなるから困る。

っていうのはさておき。さて、こういう場合はどうすればいいのか。自宅に女の子を招いたことはあるが、彼女でも何でもない子を招いたことはない。なんというかその……いいののか。

「それなら違う子の家に行ったら？ 一応俺、男だし」

「メンバーの家に行こうかとも考えたけど、電車も止まってて。近くで頼めそうなのはあなたしかいないの」

「ていうか、今どこにいるの？」

「…私の家の前」

「家の前で鍵を落としたのか…」

自宅前で中々そんなことはないと思うが…。それでも彼女の声は、少しだけ怯えているようにも聞こえた。

ああもう、仕方がない。

「わかった。俺の家知らないでしょ？ 大学前のコンビニに居て。迎えに行くから」

「…ごめんささい。迷惑かけて」

「いいって」

すでに風呂に入ったせいで、寝間着のスウェット姿だった。が、特に着替える気にもなれず、そのままPコートを羽織って部屋を出た。火傷しそうなほど冷たい風が身体を縛り付ける。

俺の自宅は大学の近くにある学生マンションだった。友人が泊まりに来てもいいように、布団はもう一つ準備している。それを使えばいいか。

約束のコンビニまでは、歩いて数分の距離。雪は少し弱まっているが、それでもまだまだ止みそうにない。これじゃ電車も動かないのも当然か。

慎重に歩いたせいで、普段なら五分ぐらいで着く距離も、今日は十分近くかかってしまった。若干の申し訳なさを抱えてコンビニに着くと、お洒落な紙袋を片手に、約束の相手が立っていた。

「ごめん、待った？」

「全然。むしろ私の方こそごめんなさい」

「いいえ。行こうか」

雪の中とはいえ、普段より慎重に歩いたせいも、少し身体が火照っている。一方の彼女は、しっかりと防寒対策はしているものの、身体の芯から冷えているように見える。俺に対する申し訳なさもあるのだろう。

二人とも傘をさしている。絶妙な距離感だった。

「中で待ってても良かったのに」

「なんか申し訳なくて」

「風邪引いたらどうするの。そんなのいいから。友達だろ？俺たち」

「……ありがとう」

何というか。本当に真面目なんだな、この人は。

友達の家に泊まること自体、よくあることだ。男女の違いはあれ、別に女友達が男友達の家に泊まることだってそうだ。……ただそういう関係を持ってしまふパターンもあると聞かす。少なくとも、俺はそんなことをする勇氣も無いし、気持ちも無い。

滑らないようにゆっくりと歩き、十分。俺の住むマンションの前に着いた。

「……」

「そ、そう」

「……緊張してる？」

「……うん」

「いや何も無いから。安心して」

そう言っつて、自宅の鍵を回す。夜も遅いせいか、ガチャリという音がよく響いた。

ドアを開けると、慣れた匂いが一気に押し寄せる。彼女がどんな反応をするのか気になったが、少し恥ずかしくなって顔を見ることは出来なかった。

適当に座っていいと促すと、彼女は遠慮気味に床に座った。部屋の中は暖房をつけっぱなしにしていたおかげで、充分に暖かかった。

「そーいや風呂とか……入る？」

「その…着替えもないから、大丈夫」

「そ、そうだよな」

やばい。なんかお互いに意識しちゃってる。別に風呂入るのは普通じゃないか。何も恥ずかしがることはない。ないけど、やっぱり気まずい。

夜の十時半ということもあって、もう寝るぐらいしかすることはない。それもあって、俺は空いているスペースに余っている布団を敷いた。

「絢瀬さんはここで寝て。遠慮しなくていいから」

「あ……うん」

俺もコートを脱いで歯磨きを済ませる。彼女はというと、布団の上に座ったまま横になろうとはしなかった。ただうつすらとメイクをしていたようで、それを落としているようだった。

一方で、ベッドの上で横たわりながら、枕元に置いている電気のリモコンを握る。さつきまでは夜更かし出来ると思っていたのに、彼女を迎えに行くだけで一気に疲れが押し寄せてきた。

「電気、消していい？」

「……ちよつと待って」

「なに？」

「……これ」

彼女がそう言うから、上半身だけ起こす。彼女は顔を上げたまま何かを差し出していた。意味も分からずそれを受け取ると、綺麗に包装された箱。外気に触れていたせいか、まだ少し冷たかった。

「なに、これ？」

「チョコレート」

「チョコ？ そんな別にいいのに」

「違う」

彼女は真っ直ぐと俺の顔を見て、言葉を否定した。

「じゃあ、なに？」

「今日バレンタインでしょ。それで」

「ああ、バレンタイン………え」

スマートフォンを確認すると、確かに日付が二月十四日。世間で言うバレンタインデーだった。

相変わらず彼女は真っ直ぐとした瞳をむけている。それに対して、ベッドの上で胡座をかく俺。何というシニールな光景だろうか。

「これは…本命チョコ？」

「どうしてそう思うの？」

「いや、なんとなく」

「…そう。それはご想像にお任せするわ」

「なんだよそれ」俺が一言文句を言うと、彼女は少し緊張が解けたような笑顔を見せた。そして、彼女は大人しく布団に横になった。起こすだけ起こしておいて、勝手な人だ。

俺はチョコレートをそのままにするわけにもいかず、冷蔵庫に入れるため立ち上がる。

そして電気と暖房を消し、ようやく横になることができた。部屋が暗闇に飲み込まれた中、彼女が話しかけてきた。

「私、あなたに出会えて良かった」

「さっきからなんなのさ」

「そう思ったの。そうじゃなかったら多分、今頃大学辞めてたかもしれないから」

いつの日か飲みに行った時、その時は「そんなことない」と言っただくせに。やっぱり、あの時はまだ強がってたのだろうか。

そんな彼女がようやくやく見せた本音。

今ようやく、本当の意味で壁が無くなったような。

「それってさ、俺に対する告白？」

「ち、違うわよ。どうしてそうなるの」

「側から聞くと、相当なモノだよ」

「…そうね」彼女は何故か納得したように呟いた。ただ、それ以上は何も言わなかった。

「…しっかり毛布被りなよ。寒いから」

「うん、ありがとう」

そんな会話の後、彼女はスツと眠りについた。

彼女の方こそ、色々と疲れていたのだろう。それからすぐに優しく柔らかい寝息が聞こえてきた。人の家では眠れない人かとも考えたが、それは杞憂に終わった。鍵を落として自宅に入れない。まして、この大雪だ。テンパるに決まってる。

俺も目を閉じて、考える。彼女と出会った日、それはまあ、つまりない水曜日の講義だった。

ある意味、俺はすごい運が良いのかもしれない。

あの、絢瀬絵里が俺の家に居るのだ。無防備に眠りにについている。そんな状況を、誰が予想したか。できるわけない。

なんて答えのないことを考えていると、結局、俺もそのまま浅い眠りに落ちた。

◆？

翌日。午前七時前。驚くほどスッキリと目が覚めた。

上半身を起こし、布団を剥ぐと冷たすぎる冷気が暖まった身体を刺激する。

「寒っ……」

思わずもう一度布団を被りそうになるが、なんとか耐えて立ち上がる。昨日の突然の訪問者は、まだ眠っている。起こさないように、台所でお湯を沸かした。

カーテンを開けると、冬の凍えた空気に橙色に焼けた太陽が姿を見せていた。もう雪は止んでいる。それでも、外はまだ銀世界のまま。地面に積もった雪も朝焼けを美しく彩っている。

「……綺麗ね」

「起きてたの？」

「ええ。ちょうど目が覚めたわ」

眠っていたとばかり思っていたが、彼女はスツと起き上がる。

冷たい空気に触れたせいかわ、両腕を絡ませる。そういえば、暖房を入れ忘れていた。

「起きたなら暖房入れるね」

入れ忘れていた、と言いたくなくて。ついそんな嘘を吐いた。彼女は特にリアクションせず、俺の隣で朝焼けを眺めはじめた。

「これなら、あなたが口説き文句に使っても不思議じゃないわね」

「あれは酒のせいだから」

「そうかしら?」

「そうだよ」

深く思い出さなくなかったから、俺は適当に誤魔化した。

それに納得していないのは彼女の方で、「へえ」とニヤついている。髪を下ろしている彼女を見たのは、初めてだった。

「髪、下ろしてるの初めて見たよ」

「寝る時は下ろすわよ。お風呂入れなかったから、ベタついてるけど」

「それでも、綺麗だと思う」

「……そう」

今のはさすがにクサかったかな。

でも本心であることには変わらないのだから、別に気にすることも無いけど。

火にかけてたヤカンから甲高い音が響き渡る。

「ああ、忘れてた」

俺はそう呟いて、彼女の隣から離れた。ガスを止めると、何故か彼女は俺の方を向いていた。綺麗な顔をしている。それこそ、見惚れてしまうほどに。

「紅茶でも飲む?」なんて聞いてみた。でも彼女は、何も言わずにただジツと俺の顔を見つめている。

「……どうかした?」

恥ずかしくなって、続けて問いかけてしまった。

「……優しいよね。あなたって」

「そうかな。初めて言われたよ」

彼女は微笑んでいる。出会った頃の彼女からは想像できないほど、それは柔らかく、輝いて見えた。

後ろでは、綺麗な朝焼けが空を橙色に染めていた。でもそれは、も

うすぐ終わる。今日の空は、綺麗な青色に染まるのだろう。それはそれで、好きだ。

でも今だけは……この時間が終わってほしくなかった。

「また、来なよ。綺麗な朝焼けを見に」

カッコつけて、そんなことを君に言ってみた。

それなのに君は「全然カッコよくないわよ」と笑ってる。

自分でも顔が赤くなるとわかる。そんな俺を見て、君はさらに微笑む。

「…口説いているのかしら？」

そんなことを言って強がってる君も、暖房のせいで雪より白い頬が綺麗に紅潮しているというのに。

「うん、君を口説いてる。心の底から」

顔を隠すように、君は背を向けた。でもそれは一瞬で。ふう、と呼吸を整えるとすぐに振り返った。俺は、朝焼けに染まる美しい君に、ただただ見惚れるしかなかった。

「あなたに口説かれるのは、案外悪くないわね」

ああ、やつぱり。本当に綺麗だ。君の顔も、君の心も。

朝焼けよりも、それはとても澄んでいて。俺なんかモノにしちやいけないような。

スウェットなんか着るんじゃないかった。もつとカッコつければ良かった。そんなことを言っても俺は、彼女に釣り合わない。

それはわかった。それでも。

「こんな俺でも、君を好きになっていいかな？」

ヤンデレ♡真姫ちゃん

——西木野真姫。国立音ノ木坂学院に通う生徒であり、地元で大きな病院である西木野総合病院の娘である。

真つ赤な髪色に紫色に輝く吊り上がった目。それは彼女をプライドの高い女性へとイメージさせるのには十分な材料であり、そのイメージは決して間違っておらず、成績は優秀。

そしてその性格のせいでもともと友達はおらず、本人は自分に相応しい人間がいなただけだとかなんとか言っているが単純に友達の作り方がわからないという致命的な問題を抱えているだけである。

「……ねえ、ねえつてば」

そんな彼女を変えたのは音ノ木坂学院スクールアイドル、『μ s』の結成である。当校の入学希望者減少による廃校を阻止するために結成されたアイドルグループ。彼女はそのメンバーの1人である。

ピアノのできる彼女は作曲を担当し、ライブというスクールアイドルの大きな大会を制するための曲を何個も作っていた。もちろん、他のメンバーの頑張りも誇らしいものである。

結果、μ sはライブで優勝。廃校は免れ、彼女達の目的は達成出来た。

その後、μ sは解散。彼女達は最高の形でスクールアイドルを終えることが出来たのだ。

そして現在音ノ木坂学院は春休み期間に入り、新学期に向けた準備を進めるのであった。

「ちゃんと返事しなさい！」

「いでっ！ ちゃんと聞いてるって真姫！」

「……嘘ばかり。私が何回も呼びかけてるのに……私の事嫌い？」

「そんな事ないって、大好きだよ」

「……ふふん。私も大好き」

そんな彼女は僕の幼馴染であり、一応恋人のような関係である。

元々家の親と真姫の親は兄妹の関係にあり、家から離れた音ノ木坂

学院に入学する事になったのを期にお互いの親がどうせならうちに住めば良いと言ったのだ。

初めは僕は遠慮すると答えた。真姫は僕と同じ歳でそういうのを気にするはずだし、何よりプライドの高い彼女がそれを良いと言うとは思えなかったのだ。

それがどうしてそうなったのかそれを聞いた真姫が泣いてしまっただけらしい。

その事に驚き、罪悪感に駆られた僕は真姫の家同居、という形で生活することを決め彼女の家へと向かった。

そして、家に到着した日、真姫と再開した瞬間に抱きつかれた。

「久しぶり……！ やつと、また会えた」

「久しぶり、真姫」

真姫のお母さんから聞いた話、どうやら僕は何か勘違いしていたらしい。真姫は僕の事を嫌っている訳ではなく、プライドの高さが素直にさせてくれなかっただけらしい。

小さい頃からよく遊んではいたし、彼女が性格が中々友達を作れず、仲良く話せるのが僕しかいなかったらしい。なら、僕と一緒にいたがるのも無理はないのだろうと理解した。

それから毎日彼女は僕にベツタリである。……昔はこんなことしなかったんだけど、一体彼女の過去に何があったのだろうか。

あとすごく嫉妬深くなっていた。一緒にいるのは当然、当たり前と言われてしまったし、他の女の子と近くにいただけで凄く怒ってくる。

特に酷かったのは……ああ、あれだ。

「ねえ、葉山くんって、西木野さんと仲良いの？」

「……うん。一応幼馴染だしね」

「へえ、普段の西木野さんってどんな感じなの？」

それは学校の休み時間。僕はその時クラスの女の子達に真姫の事について話しかけられていたのだ。いくら真姫がプライドが高いと

はいえ、その優秀さはみんな知っていた。

中にはそれでも仲良くなりたいたい人もいるはず。だから彼女達は僕に真姫の事を聞いてきたのだと思う。

——バアン！

「ヒイツ!？」

そんな時目の前にある僕の机の前に紙の束が勢いよく、大きな音を立てて叩きつけられる。

これをした張本人である真姫は一瞬怖い顔を見せた後すぐに笑顔になる。

「……葉山くん？ これを運ぶの手伝ってくれないかしら？」

「……は、はい……」

その笑顔はとても怖いものだったと言っておこう。

「……だって、あの時の涼。凄く嬉しそうだった。それが嫌だったのよ！ 涼が私以外の女にうつつを抜かすとか本当に許さないんだから！」

「いや、別にうつつを抜かしていなかったし、そうだったとしてもあんなに大きな音を立てなくても良かったじゃないか」

僕は膝に座ってきた真姫を後ろから手を回すように抱きしめながらあの時の話をする。

これくらいに真姫は嫉妬深い。彼女は常に僕と一緒にいたいのがための手段は問わない。

現に今も彼女の胸元近くに置いてある手をずっと握って離そうとしない。

「……僕は真姫の事を思ってたんだよ。あの人達、真姫と仲良くなりたいて思ってるよ。ただでさえ友達居ないんだから……」

「友達居ないは余計よ！ それに私は友達が居ないんじゃないよ……あつ！ 涼は友達を超えて夫だからね！」

「あゝはいはい」

僕はそんな事を言う真姫を軽くあしらひ、頭をぽんぽんと撫でる。

「……なに？ 私と結婚するの嫌なの？」

「全然そんな事ないよ。というか真姫が本当に僕と結婚したいって言うなんて思わなかったよ。小さい頃だけの約束かと思ってた」

「そんな訳ないじゃない。私の事を深く理解してくれるのは貴方だけ。私の夫は貴方以外ありえないんだから」

「……実は男友達が僕しかいないから選択肢が僕だけだったりして」

「……は？ 私がそんな出来たばかりの男友達にホイホイついて行く軽い女だと思ってるの？」

「……いいえ」

暗く濁った彼女の瞳の視線が僕の顔に突き刺さる。こういうのにも怒るからほんと怖い。

「全く。光栄に思いなさいよね。こーんな成績優秀で優等生な私と結婚出来るんだから……」

そして僕はそれ以上何か言う真姫を黙らせるかのように自分の唇で彼女の唇を塞ぐ。

「ん……ちゅっ……ちゅぽっ」

「……ん、もう、ちゅっ……私の話を……んちゅっ、遮ら……ないで」
そう言う割には彼女も舌を入れて深いものを絡めてくる。もう唇の周りは唾液だらけ。それに真姫も出来上がったかのように顔を火照らせ、瞳はうるうる歪ませている。

「……その割りには嬉しそうじゃないか？」

その言葉に真姫はゆっくりと頷く。本当に、可愛いやつだ。真姫は。

……こんなに可愛い子と幼馴染で良かった。愛されてよかった。こんな関係になれて本当に良かったと心の底から思える。

「涼……私……もう」

「……そろそろ飯にしよう。時間もいい時だしさ」

僕はその先はせず、晩御飯の準備を行うためにキッチンに向かう。期待していたのかは分からないけどお預けを食らった真姫は怒られ

た子犬のようにしよぼくれた顔をしていた。そんな顔も可愛い……
どんな顔も可愛いよ。

「ふく。お風呂上がったよ、真姫」

晩御飯も食べ終わり、先に風呂に入られせてもらい、パジャマに着替えたあとリビングに戻った。

そして、僕の目の前には真姫が立っており、鋭い眼光でこちらを睨んでいる。

彼女の手を持っていたスマートフォン、それは自分のものではなく、僕のものだった。

画面はメッセージアプリのトーク画面を開いているように見える。

「……涼？ これは何かしら？」

「……ん？ ああこれか」

僕が見せられたのは思った通り、アプリのトーク画面だった。内容は僕達のクラスメイトで、μ'sのメンバーの1人である小泉花陽ちゃんとの会話であり、特に問題のある所は見当たらない。なのに彼女は怒っているように見えた。

「なんで、私が知らない所でこんなに花陽と仲良くなってるの？」

「なんでって……それは同じクラスメイトなんだから当然じゃないか。別に僕だって彼女に対してやましい思いはないし、真姫だってμ'sのメンバーの仲間じゃないか」

「そ、そうだけど……やっぱいいや。涼が私以外の女の子と仲良くしてるなんていやよ。もし、花陽が涼の事好きだったら……私、どうにかなりそう……」

とても不安そうな顔になる真姫。僕はそんな彼女を安心させるように頭を撫でる。

「大丈夫だよ。僕の傍に一緒にいてくれるのは真姫だけだ。僕は真姫以外の女の子についていく気はない。真姫が僕の事を思ってくれ限りね」

「……じゃあ、許してくれる？ こんなにわがままな私を」

「うんうん。許す許す」

「ほんど!?」じゃあ、私が涼の部屋に勝手に入つてあれな本を全部処分したのも、涼が着た服を勝手に新しいのに変えてそれを私が行為に使つてるのも許してくれる!? それからそれから……」

あ、えつと……そこからはもうやばいから許したくはない気がするなあ。

「……私が涼が寝てる間に勝手に中に出して貰ったのは……許してくれる?」

「……はっ!?!」

おい、今、なんて言った……? 中につて……。

「え? それつて、ゴム付けてないつて……」

その言葉に恥ずかしげに真姫は頷く。それを見て僕は身体全身の力が抜け、枯れたひまわりのようにぺたつと倒れる。

「う、嘘だろ……」

一応僕達はそういつた事をやってはいる。けどそれはちゃんと避妊をしてだ。まだ学生の時に妊娠なんて冗談じゃないし、真姫や僕の両親になんて顔を見せればいいのかわからない。……それなのに、彼女は。

「あつ! で、でもちゃんと避妊薬は飲んだから大丈夫! 涼が思つてる様なことにはならないから!」

……なら、良いんだけど。今の真姫だと本当か嘘か分からないんだよなあ。

「……でも、なんでそんなことしたのさ……」

「それは……涼、最近私に構つてくれなかつたじゃない。他の女子とばかり話してて。」

……それに、私は涼が思つてる以上に我慢できない人間なの。……だからね」

真姫は座り込んでいる僕の顔を両手で持ち、微笑みながら、身体を密着させながら口を開く。

「……足りないの。もっと、涼が、涼の全てが欲しいの……!」

だからキスした時、あんな風になっていたのか。そうか、僕はまだ

真姫の事を考えてやれなかったのか。

あんな事をさせる原因にもなってしまったのか。

「……分かった。僕の部屋に行こうか」

「……！ えへへ、やった……！ じゃあ行こう！ 早く早く！」

それを待っていたのかと言わんばかりに彼女は飛びつきりの笑顔になつては凄いい力で僕を引きずつて部屋へと連れていく。

もしかして僕、嵌められた？

それからは夜が明けるまでやっていったような気がする……。それが曖昧になるくらいにやっていた。

それはもう避妊をちゃんとしていたのか分からなくなるくらいにね。どんだけ真姫体力あるんだ。μ sでのトレーニングがああなったのか？

とは言つても、将来的にこうなるのは分かっていた。それほどまでに真姫が僕に想いを寄せている、僕が彼女に想いを寄せているのも。僕は一緒にベッドで隣で優しい寝息をたてている真姫の頭を優しく撫でる。お互い、生まれたばかりの格好で、周りには乱れ放題の使用されたゴム。それはその夜がとても激しかったものを思い出させるには充分だろう。

……本当に中に出してないよね？ それだけが心配だ。

「……んん、りよ……う……」

真姫は何か寝言を言っている。まだ何か変な夢でも見てるのだろうか。

「……もう、私が、いないとダメ……なんだから。もう……どこにもいないよね？」

……そうか、真姫はずつと僕を待っていたんだね。なのに僕は気づけなかった。幼馴染だから、真姫はああいう性格だからって。

でも違かったんだ。彼女は寂しかったのだ。ずつと誰かを求めていた。それが僕だったのだ。

なら僕も、彼女の傍にずつといえよう。もし、彼女が学生として居ら

れなくなつたとしても僕はずっと君のそばに居る。責任は全て僕が取る。

それでも無ければ彼女の今までの寂しさを受け止めることはできないだろう……。

「おはよう、涼。まだ早いけど、どうせ結婚するんだから早く婚姻届は書いて方がいいわよね？」

僕の目の前に叩きつけられたのは婚姻届。……あの、まだ結婚出来ないんですが。

「大丈夫。なんとかなるわ。それにパパとママからね、早く孫が見たいなって言ってたわ。それは貴方の両親も同じ事言ってた」

……どうやら僕が学生として居られるのは数日だけになるかも知れません。

100%の表情

その子と初めて出会ったのは小学生の時だった。転校生として入ってきた女の子だったからよく覚えている。その子は明るくて笑顔が大好きだった。屈託と何も無い100%の笑顔だった。

気がつけばそんな女の子に不思議な感情を持つようになっていた。今思えばそれは恋というものだったのかもしれない。

だがその子との別れは唐突だった。1年もしないうちにあつという間に転校してしまった。皆とお別れ会もしたが最初に見たときの笑顔、大好きだった笑顔は何処にもなかった。

結局、その子に自分の気持ちを伝えられずに初恋は終わった。時が経つに連れて同級生達からの記憶からも薄れ始めていく。

髪の色は、好きなものは、どんな性格だったか、名前は一体…

2回目の出会いは中学生の頃、偶然の産物だった。野球部に入部後にあつた遠征試合の時に部活か何かの帰りだったのだろうか、その子と再会をはたした。とは言え再会といってもバツタリと出会っただけだった。

「ひ、久しぶり…」

「…うん」

とっさのことで挨拶しかできなかった。それでもその子は自分の事を覚えていてくれたようで笑顔で返事を返してくれた。

だがその笑顔は違った。何か別の感情を隠しているような複雑な笑顔、自分の好きな子の、大好きだった笑顔なんかではなかった。

3度目の出会いは高校生の時だった。帰りの電車に乗るために駅へと向かっていた。その駅へ向かう道の交差点での待ち時間、その子を偶然見かけた。遠くから見てもその子に間違いないと思っていた。だが、近付いて声をかけようとしたとき言葉は喉元辺りでピタリと止

まっってしまった。

笑顔なんてものはどこにも感じられないのだ。口角はまるで無いように感じ、目も緩まずつり上がりならず、何を考えているのかもまるで分からないまさに無表情だった。明るかったはずの性格も何処かで真逆になってしまったかのように暗くなってしまうていた。

不意にその子がこちらを向いてきた。正面から見るとその子の変化が嫌でも分かる。本人には間違いないのだ。本人であることに間違いないのだが、別人のようにしか捉えられなかった。

しばらくするとその子は口を開いて声をかけてきた。

「ああ…久しぶりやなあ…？」

自分は涙を流していた。彼女のあまりの変貌を認めたくなかった、認めたくなかったのに認めざるを得なかったのだ。

自分の知っているこの子は屈託のない笑顔が可愛い女の子で関西弁なんて喋るわけがない。その子に似ているだけの子だと思いたかったのに、声をかけてきた。中学生の時よりも複雑になってしまった笑顔で声をかけてきたのだ。

こんな笑顔じゃない

こんな喋り方じゃない

こんな暗い子じゃない

分かっているはずなのに認めざるを得ない、相手は自分の事を知っているのだ。自分自身もこの子の事を間違ひなく知っている。ただ、その事を認めたくなかっただけだった。

「…いえ、人違いだと…思います」

気がつけばそんな言葉を口にしていた。人違いなんかではない、間違ひてなんかいらない、知っているのだ。間違ひなく知っている。

「そう、か…。そうやったんやね、ごめんなさいね…」

やめてくれ

そんな悲しそうな目で見ないでくれ
間違っでなんかいない

出会っている

人違いなんかではない

謝らないでくれ

俺は知っている

お前の事を知っているのだ

信号は青になると一斉に人々が動いていく、ちよつと目を離した隙にその子はあるという間にいなくなってしまった。

嘘つき人間だ、自分は嘘をついた。知っているのに知らないと言った、自分が初めて好きになった女の子に対して嘘をついたのだ。それが悲しくて悲しくて仕方なかった。

その日を区切りに再びその子を見かけることはなくなった。高校でも野球部に所属した自分はその後に寮で生活をするようになったのだ。

その為、家に帰ることや遊びに行く機会もメッキリと減っていった。そう言った機会が減っていけばあの子と会う機会も減っていく。そこで自分は覚悟を決めた、あの子の事は忘れてしまおうと。そして彼女との時間は完全に停止した。

それから2年の時が過ぎた、高校野球最後の年の3年生。自分はチームの纏め役となってひたすら甲子園を目指し続けていた。

そんなある日の事だった。寮に帰ると後輩の何人か、とある話をしていた。野球とはまるで関係ないアイドルの話だった。寮の中での話題は基本自由なので注意することでもないが別にそんなものに興味はなかった。普段であればその場からさっさと離れて行くのだがそれはどうも普通のアイドルとは違っていたのだ。

スクールアイドル、女子高生達が学校直属のアイドル活動を行っているというモノだった。そしてそのスクールアイドルの台風の目となり始めているのがμ、sという音ノ木坂学園のスクールアイドルとのこと。廃校になりかけていたところから再び存続のために活動を始めたという背景があり、一部からは支持を集め始めていたのとだった。

アイドルという言葉を聞くと可愛い女の子のイメージが出てくる。そんな自分の中で出てくる可愛い女の子は皆同じだった。2年前に忘れよう決めていたあの子だった。

(あの頃の笑顔なら間違いなくアイドルだって出来るだろうな)

気がつけば自分はその日を境にμ、sの活動について調べ始めるようになっていた。μ、s、音ノ木坂、そんな事を調べているうちに音ノ木坂の制服の写真を見つけた。その制服に見覚えがあった。

(この制服…あの時！)

2年前のあの日、間違いなくあの子はこの制服を着ていた。もしかして、そんな期待を込めてさらに調べるがその子の名前は何処にもなかった。仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。それでも期待していただけにショックもあった。

それからまた少しした。都大会が迫ってきた時、風の噂で耳にした事があった。

μ, s に新メンバーが2人入った。

練習終了後、急いでサイトを調べるとそこには間違いなくあの子の名前があった。あまり大声を出しては怒られてしまうのであるべく声を出さないようにして喜びを爆発させた。その日からは再び毎日のようにμ, s について調べるようになった。

忘れようとしても忘れられなかった。この2年、歯がゆかった思いもあつたが忘れることができなくて良かった等と思うのは初めてだった。

心配もあつた。果たして彼女は自分の知っている頃のようになったのか、それとも別人となつてしまったのか。そこが心配で仕方なかった。

だが、そんな心配も杞憂だった。写真やSNSで拡散されていくμ, s の写真、その中にはかつて自分が好きになつた笑顔が写つていた。その笑顔を待受にして苦しいとき、限界を感じたとき等に勇気をもらつた。

甲子園の夢が絶たれたのは都大会の決勝戦、あと一步のところだった。甲子園を目前にしていただけにショックも大きかった。

そんな傷心を癒してくれたのもやっぱりμ, s だった。野球部を引退してからは進学を考えて勉強をし始めた。無論、μ, s の活動をも調べつつである。

ライブがあればすぐにチケットを買いに行き、イベントがあれば参加する。そこで養つた英気を勉強等に注ぎ込んでいった。

無論、μ, s も全てが上手く行っている訳ではない。

中でも学園祭でのライブ中にリーダーが倒れて中止、大会そのもの

を辞退と時は応援している側からしてもショックは大きかった。

きつと彼女達の無念の方が応援している自分達よりもずっと大きかったはずだ。そんな苦難を乗り越えながら戦い続けたていた。

そんな時こそ、応援し続けるのがファンである。μ、sに救われた事は少なくない、だからこそ微力ながらもμ、sを、μ、sメンバーである彼女を支えたかった。

そして無念の辞退から半年後、再びμ、sはラブライブへ帰って来た。絶対的王者とも言えるA—R—I—S—Eを予選で倒して本選へとたどり着いたのだ。

本選の当日、死ぬ気でチケットをかち取った自分は会場へと向かった。案の定本選は超満員で熱気に溢れていた。高校野球の甲子園、いや下手すればそんなものではないかもしれない。こんな空間で彼女達は戦うのかと思うと気が気でない。

様々なスクールアイドル達が華麗に魅せてくる、全国というだけあってレベルは非常に高い。だが、μ、sも負けていない。絶対的王者を倒した実力は本物のはずだ。その実力を信じるしかないのだ。

いよいよ彼女達の出番が来た。その瞬間会場の空気は一気に変わった。ボルテージが最高潮に上がったとでも言おうか、やはり一番の注目度を誇っていた。あちらこちらから歓声が飛び交う中、密かにあるタイミングを狙っていた。

それは自分の声がステージまで届き、かつ邪魔にならないタイミングだった。2年前の嘘を謝る意味合いも込めて、培ってきた声で届けたかった。

「のぞみiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

その声は誰の声よりも大きかった。その声は誰よりも存在感を表す声だった。

返事を返さなくても良い、俺はここにいる、俺はお前の事を知っているんだ。

そんな思いも込めた声、伝わらなくても良い、やり遂げた気持ちすらあった。そんな心持ちのなか、顔をステージにあげると彼女は見ていた。間違いなく、真っ直ぐ、こっちを見ていた。

—そして笑ってくれた—

ずっと見たかった、この現場で、その場で、10年近く前に見せてくれたその笑顔、屈託のない笑顔を見せてくれた。何も混ざっていない純度100%の笑顔、限界だった。

自分も笑って返したかった、それなのに涙が止まらなかった。2年前に流した後悔の涙なんかではない嬉し泣きである。涙を流しながら、目を潤ませながらもその勇姿をしっかりと見届けた。

そしてしばらくの月日が流れた。4度目の出会いはそれから少しした4月、大学生となった桜が咲き乱れる春のことだった。互いの格好はランドセルを背負っていた私服からスーツと着物に変わっていた。

「久しぶり…やね？」

彼女は確認するように声をかけてくる。その顔は控え目ながらも可愛らしい笑顔だった。

間違いない

もう間違えない

もう嘘はつかない

もう後悔はしない

「ああ、久しぶりだな！」

その返事が全てだった。それ以上は何も言わずとも理解しあえた。自分も返した100%の笑顔に彼女は、東條希もまた100%の笑顔で返してきた。

止まっていた時間が再び動き始めた瞬間だった。

再開する女神達と歩んだ軌跡

秋が深まった晴れた日。秋葉原の街中に高坂穂乃果、園田海未、南ことりはいた。

彼女達が此処にいる理由、それは解散したμ'sメンバーに寄る女子会の為である。スクールアイドルの活動を終えた9人はそれぞれの道を歩んでいった。

それ以来、彼女達は会う機会も減って疎遠になってしまふ。しかし今日：10年ぶりに9人が揃う事になったのだ。皆と会うのが待ち遠しいのか、穂乃果はそわそわして、落ち着かない。その様子を見て、傍にいた海未が溜まらず声をかけた。

「…穂乃果。少し落ち着きなさい。いい大人がみつともないですよ」「うっ、ごめん海未ちゃん。でもさ…皆と会うのって、10年ぶりなんだよ。昔は毎日の様に会っていたけど、今は全然会ってないだもん。そう思うと何だが落ち着かなくて〜」

「そうだよ。私も同じだよ。昨日からずっとドキドキしてるもん」「まあ…気持ちちは分かります。だけど、二人がそれでは皆に気を使わせるだけですよ」

「そうよ。海未の言う通りね。変に緊張されると私も困るわ」

落ち着かない二人を嗜める海未に賛同する言葉が聞こえてきた。一体、誰だと三人が振り変えると居たのは西木野真姫、小泉花陽、星空凛の後輩組三人であった。彼女らの姿を見た途端、穂乃果は駆け寄ると真姫達に思いつきり抱き付いた。

「真姫ちゃん!! それに凛ちゃんと花陽ちゃんも…。うわあ〜 皆久しぶりだね」

「ちよつと穂乃果!?! いきなり何をするのよ。危ないじゃない」

「あ、ごめん。真姫ちゃん達を見たら…我慢出来なくて」

「全く。貴女は先輩なんだからしつかりしてよ」

「う、真姫ちゃんか冷たいよ」

「自業自得です。だけど、今は私も…えい」

「うん。私もそれ」

真姫のきつい一言に泣き真似して、穂乃果は海未に助けを求めるが…彼女は突っ撥ねた。しかし、その後で彼女もまた穂乃果と同じく真姫達に抱き付いた。海未に続くことりも。思わぬ行動に三人は驚いたが…ふと込み上げた懐かしさから真姫達は笑みを溢し、穂乃果達もまた笑みを浮かべた。

「何か…こんな事をするのも久しぶりだね。昔はよくやってたけど…」

「そうだね。てか、かよちんの言葉。少しおばさん臭いよ」

「そ、そんな事は無いよ。…無いよね」

「ごめん。花陽。私も少しそう感じたわ」

「えええ!! そこは否定しようよ」

「なーにやってんのよ。揃いも揃って。私達を差し置いて盛り上がるなんてご法度よ」

かつての様なやり取りをする穂乃果達を咎める声が響いた。聞き慣れた高い声。もしやと思って全員が声の方へ向けば…立っていたのはアイドル研究部の部長であった矢澤にこだった。その後ろにはこと同様に支えとなってくれた二人の先輩。東條希と絢瀬絵里の姿もある。そして怒った表情で穂乃果達を睨んでいたにこは、パツと笑顔を見せると彼女達にあの挨拶をしてきた。

「にっこにこにー 何はともあれ…お久しぶりね。皆、元気そうで良かったわ」

「そうやね。うちらもこの日が来るの楽しみやったんよ。おかげで昨日は寝れへんかったわあ」

「希は意外にシャイなものね。こういう所は昔と変わって無いのよね」

「むく、にこつちだつて昔と変わってないやん。まあ…何処がとは言わんけど」

「…何よ。意いたい事があるならハッキリと言いなさいよお」

「二人共、そこまでよ。折角、全員が揃ったのだから喧嘩はやめましよう。それに周りの迷惑にもなるわ」

「そうね。確かに会って早々に喧嘩なんて馬鹿らしいわね。希、揃って悪かったわ」

「ううん。うちもごめんな。それに嫌な事を言ってしまったし…」

「気にしてないと言えば、嘘になるけど別にいいわよ」

揃えられた事にムツとしたのか。にこのある部分に視線をやり、彼女に反撃した。当然の事ながらにこも黙ってはおらず、怒りを露わにして希へ食って掛かった。あわや喧嘩になると思つた六人だったが、そうなる前に絵里が間に入って二人を宥める。幸いにも絵里の説得で事無きを得た。

「さて、穂乃果。漸く全員集まつたし、移動しましょう。女子会をやる場所は貴女が決めるって言つてたわよね」

「うん。それなら大丈夫。もう場所なら抑えてあるから。早速、行こう」

そう問い掛ける絵里に穂乃果はすんなりと答えた。その様子に絵里は内心、驚きを隠せない。昔ならうっかり忘れる事が多く。その度に周りから叱られる。そんなイメージが強かった。無論、やる時はやる。その事も自分は分かっている。だが、あれから10年近く経つのだ。変わっていない人間がいる訳が無い。絵里はそれを実感する。

すると笑っていた穂乃果は…困った顔をして絵里に言葉をかけてきた。

「もしかして…絵里ちゃん。私が場所取りを忘れてると思つてた？」

大事な日にそんな失敗はしないよ」

「そ、そうよね。ごめん穂乃果。実はちよつと思つてたわ。ほら、昔はよく忘れては海未に叱られていたでしょ」

思つていた事がどうやら顔に出ていたらしい。剥れる穂乃果に絵里は謝つた後で弁明をした。そういう穂乃果だったが、本人も怒つている訳ではない。膨れっ面から笑顔に変わる。ああ、こうして彼女が見せる笑顔。これだけは変わっていない。流れる時と共に訪れる変化の中、変わらないものがある。絵里はそれがとても嬉しかった。

にん9

「もう、絵里ちゃんってば、酷いよ。私だつてあの頃のままじゃないよ。まあ、三日前に慌てて予約したけどさ」

「うん？ 何か言つたかしら？」

「え？ あ、ううん。何でもないよ。じゃあ、場所に案内するね。皆も付いて来て」

その直後、ぼそつと呟く穂乃果。言つた事が聞き取れず、絵里が尋ねると穂乃果は手を振つて誤魔化した。正直、気にはなつたが：敢えて突っ込む事もあるまい。皆を先導して移動を開始した穂乃果の後を付いていった。後ろでは希はクスリと笑い、にこは苦笑いを浮かべていた。

この二人もきつと私と同じ事を思っているのだろう。絵里はそう感じていた。

それから9人は久しぶりの秋葉原の街中を歩いていた。過去に在った店が無くなつていたり、また見た事のない店が出来ていたり、時の流れを皆はひしひしと感じていた。そんな中、にこは以前に鼻屑していた店が在った場所を見て、ぽつりと呟いた。

「あそこに在ったアイドルグッズ店。今は喫茶店になつてるのね。流

石に10年経てば…店も消えるか。分かっていたけど、いざ見ると寂しいものね」

「うん。私を通っていた洋服店も閉まってたもん。寂しいよね」

「そうやね。うちも良く行ってた焼肉店は…あ、まだやっとなるね。良かったわあ〜」

「希…。嬉しい気持ちは分かるけど、少し空気読みなさいよ」

「ごめんなく二人共。だけど、うちはしみりした空気が嫌なんよ」

「そうですね。確かに希の言う通りです。それと穂乃果、貴女が予約した店はまだ着かないんですか？ まさかとは思いますが、迷ったなんて事は無いですよね？」

漂う空気を変える為、砕けた様子で話をする希ににこが叫ぶ。無論、にこも希の機転には感謝していた。それに乗っかる様に海未も話題を変えようと穂乃果に話を振る。

「うーん。スマホの地図では…店はこの辺りなんだけどね。何処だろう…あ、在った。あそこだよ。私が予約したお店」

地図を見て、唸っていた穂乃果だが目的の店はすぐに見つかった。彼女が指差す方にあつた店は大きい角を生やした牛の看板がその存在感を放っていた。

「何よこの店。見た所、飲食店っぽいけど…」

「真姫ちゃん、正解。此処は今人気の焼肉店だよ」

「焼肉店!?! 確かに看板からしてそんな感じだね」

「うん。それにしても、あの看板の牛。何処かで見た記憶があるよ」

「あれはミノタウロスね。店名にも書いてあるわ。でも…この店が本当に人気あるの?」

「本当だよ。とにかく入ろうよ。予約の時間も迫ってるからさ」

「そうやで。時間はきっちり守らなあかんよ。ほらほら、えりちもにこつちも早く早く」

店を前にして、入る事に躊躇していた一同だが、目を輝かせた希が渋るにこと絵里の背中を押していく。強引な行動を取る希に抗議する二人だったが、こうなった彼女は止まらない。なす術も無く、店内に消えていった三人を見て、残った穂乃果達も店に入る事にした。

希達を追って、店内に踏み入れると穂乃果達を迎えた光景に驚いていた。壁は緑豊かな森、天井は青く済み渡った空、そして床に色鮮やかな花畑が広がっていた。外の看板にも力が入っていたが、内装にも力を入れているのが分かる。何だか妙な店だと、全員が呆けているとカウンターの奥から女性の店員が姿を見せた。

「いらつしやいませ！ お客様は何名でしょうか？」

「人数は9名です。それと先日、此処を予約した高坂といいます」

「ご予約された高坂様ですね。今、確認しますので少々お待ち下さい」

穂乃果の話聞いた女性店員は丁寧なお辞儀をして、カウンターの奥に下がり一冊のファイルを手に戻ってきた。手にしたファイルをペラペラと捲った後、女性店員は穂乃果に笑顔で話しかける。

「大変お待たせしました。高坂様のご予約。ご確認致しました。それでは席の方へご案内いたします」

案内する女性店員に付いて行くと、奥の一室に通される。そこは多人数の部屋なのだろう。9人全員が入ってもスペースに余裕がある広さだった。中は畳が敷かれており、部屋の入り口に靴を脱ぐ場所もある。

「こちらは予約されたお客様専用の部屋でございます。メニューの方は備え付けのタブレットからご覧になれます。ご注文の方もタブレット、又はテーブルのボタンからも出来ます。それとお冷はセルフとなっております。お手数ですが壁にある機械からお汲み下さい。

では、私はこれで失礼します。どうぞ。ごゆっくり…」

部屋の説明を終えた後、女性店員は立ち去ると皆はそれぞれの場所に腰を下ろした。個室での焼肉が珍しいのか。穂乃果達は座ったまま、部屋の中を見渡していた。この静寂を破ったのは、意外な事に花陽であった。

「ねえ皆。折角だし、メニュー見てみない？ このままぼーっとしていても、時間が勿体ないよ」

「そうですね。じゃあ、私は皆のお冷を汲んできます」

「私も手伝うよ。一人じゃ大変だもん」

「ありがとう。ことりは汲んだ水を運んでください」

花陽の言葉に賛同し、海未とことりが動く中。穂乃果達はタブレットに手を伸ばした。適当に操作していると希があるメニューを見て口を開いた。

「なあ皆、注文はこれにせえへん？」

彼女が指差すメニュー。それは鳥肉がメインのコースであった。見れば、当店で女性に人気があるコースらしく、脂っこい物が苦手な人でも食べやすいと書かれていた。またがつつり食べたい人も満足できる様。肉の量も決める事が可能と細かい配慮もされている。希のチョイスは焼肉に慣れてない絵里にとっても幸いだった。だけど、皆の意見も必要だと絵里は穂乃果達に聞いた。

「鶏肉三昧コースね。確かに良さそうだけど…皆はどうする？」

「私は構わないわよ。花陽と凜はどうなの？」

「うん。私もそれでいいよ。あとごはんが欲しいかな」

「凜もかよちんと同じで」

「真姫達は賛成ね。穂乃果達は？」

「私達も平気だよ」

「そう。最後はにこだけね」

「私もそれでいいわ。他はこの野菜スープを追加して」

「分かったわ。じゃあ、注文するわね」

一通り皆に聞いた後、注文する品が決まっつて絵里が注文をした。数分して先程の女性店員が台を押して肉を運んできた。

「お待ちせしました。鶏肉三昧コース三人前と野菜スープ。それとライスが二つです。他にご注文はございませんか？」

「はい。今は大丈夫です」

「畏まりました。それでは失礼いたします」

流れる仕草で運んだ物をテーブルに置いた後、女性店員は追加注文の有無を尋ねたが、絵里は大丈夫だと答えた。それを聞いて女性店員は笑顔で退室していった。

「ほな、早速焼くよ。まずはこれからや」

運ばれた肉を希は慣れた手付きで次々と網に乗せていく。するとじゅーと焼ける音が響き、肉が放つ匂いが皆の食欲を刺激した。その後、程よく焼けた肉を希は皆の皿に分けていく。全員に渡った所で、箸で肉を摘まみ頬張ると皆に衝撃が走った。

焼けていても非常に柔らかく、また鳥肉特有の匂いもない。付いて来た店特製のタレや塩が一層、旨みをひき立てていた。全員は何か憑かれた様に暫くの間、鶏肉を頬張る事に夢中となっていた。

大方、食べ終えた後。皆は満足した顔を浮かべていた。喉を潤す為、水を一口飲んでから穂乃果が思った事を口にする。

「そういえば、皆は今何をしてるの？ 音ノ木坂を卒業してからは、皆

と連絡を取る事も減ったし、気になってたんだ。海未ちゃんところりちゃんは知ってるけど…絵里ちゃん達が何をしてるか。詳しくは知らないからさ」

「私は大学に進学してそこを卒業してからロシアへ行つたわ。今は祖父母と一緒に住みながらバレエの講師として活動してるの」

「へえ。今はバレエの先生なんだ。そういえば、昔やってたと言つてたわね」

絵里がやっている仕事に真姫が感嘆の声を上げる。彼女が幼少の頃、賞が取れずに辞めた過去を知っていた。だけど、今は乗り越えて苦い思い出がある物に取り組んでいる事が素直に凄いと思っっている。

「ええ。あの時、私は諦めて辞めてしまつたけど…もし諦めずに続けていたら。そう思った事もあるわ。だけど、今の私があるのも穂乃果のおかげよ。貴女から最後まで諦めない。それを教えてもらったもの」

「うーん 何だか恥ずかしいね。そ、そうだ。真姫ちゃんはどのような？」

絵里の言葉に恥ずかしくなったのか。話を逸らす様に穂乃果は真姫へ問い掛けた。最初はキョトンとする真姫だが、彼女はすぐに穂乃果の問いに答え始める。

「私？ 私はセラピストをやっているわ。音楽で人の心を癒す。父とは違った方法で人を救う道を選んだのよ。当初は医者になるつもりだった。でも…音ノ木で皆とスクールアイドルをやつて、自分の音楽が終わつてない事に気付いた。だから音楽家の道も行こうと迷つていたの。だけど、父の期待も裏切る訳にいかない。悩んだ結果、導き出した答えがさつき言つたセラピストよ。勿論、反対はされた。それでも進みたい道だから私も退かなかつた。じっくり話し合つて最後は認めてくれた。皆も何かあつたら私の所へ来て頂戴。私の馴染み

という事で割引にしてあげるわ」

真姫は当時の事を思い出しながら、自分が進んだ軌跡を語った。この答えに辿り着くまで彼女が如何に悩んだのか。それは穂乃果達には分からない。だけど、真姫が心に宿す信念の強さだけは穂乃果達にも伝わっていた。それだけ彼女が多くの人を癒して来た事も…。

「私が気になるといえば、花陽と凜ね。貴女達は何してるのよ?」

自分の話が終わった後、真姫は同年代の二人に質問した。思えばこの二人の事が真姫は気になっていたのだ。突然、話を振られて驚く花陽と対象に凜は意気揚々と話し出した。

「凜は九州の方で龍王というラーメン屋に努めてるんだ。最近、実力が認められてスープ作りを任せてもらえる様になったんだ。皆が九州に来たら食べに来てよ」

「へえ…。凜がラーメン好きなのは知ってたけど、まさか仕事に選ぶとは思って無かったわね。貴女、男性が苦手じゃなかったの?」

真姫の疑問は尤もだった。確かに凜は男性に対してある種のトラウマを持っている。無論、それは小学生の時に起きた事だが、小さい頃に負った心の傷は時間が経っても完全には癒える事はない。

「うん。最初はそうだった。何度も怒られたり、馬鹿にされたりもしたよ。その度に昔の事を思い出して逃げたくなった。でもね。同じ店で働く女性の人が凜を励ましてくれたおかげもあって、凜は逃げずに頑張る事が出来たんだ。それにかよちゃんがあの時に言ってくれた言葉。今でも凜の支えになってるんだよ。まだ遠いけど、いつかは自分の店を持つのが目標なんだ」

「そうなの。嬉しい反面、少し恥ずかしいよ」

「凜も大分、変わったわよね。それで花陽は?」

凜は笑顔で花陽を見つめて、そう言った。思わぬ凜の言葉に花陽は照れた様子で笑みを浮かべる。そして真姫は改めて、花陽に今の様子を尋ねた。

「私も凜ちゃんと似たようなものかな。今は田舎のおばあちゃんの所で米作りをしてるんだ。元々、そっちの道に進むつもりだったし：何よりおばあちゃんの後を継いで美味しいお米を作りたい。それが昔からの夢だったから。まあ、これは今初めて言う事なんだけどね」

花陽は自分の目標を力強く語った。その姿は以前の彼女と違って、自信に満ち溢れていた。それは真姫と凜も同じで自身がやりたい事や目標。これが三人を大きく変えたのだろう。話を聞いていた皆はそう感じていた。

「それで穂乃果達や希とにこちゃんは？ 私達の事を聞いておいて、自分の事を話さないってのは無しよ」

次に真姫が尋ねたのは穂乃果達の事であった。この話の言い出しっぺは穂乃果である以上は話さない訳にいかないだろう。別段、隠す必要も無い。そう思って、穂乃果は自分の今を口にする。

「私は当然、家の穂むらを継いだよ。今は雪穂と一緒に店を切り盛りしてるんだ」

「雪穂ちゃんと一緒か。姉妹で頑張るのって、楽しそうね」
「うん。大学に行けと言われたけど：特にやりたい事もなかったからね。だったら、家業に専念するのが良いと思ってさ。和菓子作りの勉強は大変だったけど、雪穂も助けてくれてね。時々、和菓子作りと接客。交代しながらやってるよ。継いだ当初は上手く行かず客足が減った事もあったけどさ。最近では穂むらに来るお客さんも戻って繁盛してるよ」

聞く限りでは苦労したのだろう。だけど、それをさらりと話せる所が穂乃果という人の強さであり、魅力である。こういう所はやはり変

わっていない。続いて口を開いたのは海未であった。思えば、彼女が何をやっているのか。実の所、皆も興味があつた。何においても優秀な海未が進む道は多いだろう。それ故、彼女がどんな道を進んだのか気になつていた。

「私ですか？ 私は…音ノ木坂で国語の教師をやっていますよ。大学卒業後に地元の企業に就職をしたのですが、自分のやりたい事がこれなのか？ 暫く考えて見つけた答えが今の職業だったんです。最近、私が入っていた弓道部の顧問も任せてもらつて、毎日がとても充実しています」

満面の笑みでそう口にする彼女の表情は、幼馴染の穂乃果やことりも見た事は無い。海未が選り進んだ道は、彼女に大きな遣り甲斐を与えた様だ。海未の話が終わると、次はことりが口をひらいた。

「予想が付くと思うけど、私は服飾の道を進んだよ。大学を卒業した後、アメリカに渡つて服飾の勉強をしてたんだ。一時は私の我儘で断つたから、もう取り合つてくれないと思つていたけど…先方は快く迎えてくれて沢山の技術と知識を私に与えてくれた。日本に戻つた後、私は夢だつた服飾の仕事に就いたの。学んだ事を生かして、今は通信販売のみだけど、自分の店を持つ事が出来たんだ。ヴァネッサって名前で検索すれば、すぐ分かるよ。良かったら、皆も利用してね。注文して作る形式だから、サイズや模様とか細かい所もお客さんが決められるし、少しずつだけでも人気も出てきてるんだ」

「自分の好きな服を作ってもらえるのは良いわね。今度、私も利用させてもらうわ」

「うん。皆からの注文。私も楽しみにしてるよ」

この話には皆も夢中になつて、耳を傾けていた。ことりが作る洋服がどれも素晴らしい物であるのは、この場にいる誰もが知つている。そんな彼女が知識を深め、技術を向上させて作り出す服。それは言葉

に出来ない一品になる事だろう。

楽しみが出来た余韻の中、凜が希とにこへ視線を向けた。未だ話していないのはこの二人だ。凜に釣られる様に残りの7人も二人に視線を送る。有耶無耶にしようと思んでいたが、この空気では無理そうだと、二人は深い息を吐くと話す事にした。

そして先に口を開いたのはにこであった。

「私は今やってるのは…：保母さんよ。偶然、大学でその求人を見つけね。不運な事にどの会社からも内定が取れなくて、この際やってみようと思つたの。そうしたら予想以上に向いてると自分でも分かつてね。この仕事に決めたのよ。まあ、家でも妹や弟の面倒を見てたからね。この経験が生きたのもあるわね」

「そうだったんだ。私、にこちゃんはアイドル関連の仕事に就くと思つてたよ」

「私もそうしたかったけど、現実には優しくないもの。願いが叶う事は無いわよ。それでもアイドルが好きだから、趣味としてグッズ集めはしてるけどね」

「へえ…：にこっちの保母さん姿。うちも見てみたいわあ」

「はいはい。あんたが子供作って、私が勤めてる保育園に来れば見れるわよ」

「う、うちの子供って…：にこっち、何言うんよ」

此処で希はにこを揶揄おうとしたが、思わぬ反撃を受けて希は赤面した。普段は斜に構えて彼女だが、意外と初心な一面があった。これを好機と見て、にこは更に畳み掛ける様に言葉を続けた。

「そんな事より、最後は希だけよ。あんたは何をしてるのよ？」

「へ？ ああ、ウチは観光専門の雑誌を作る会社で記者をやってるよ。思えば、親の都合で全国に行つたけど…：塞ぎ込んでたから各地の名所

とか全然知らなくてね。偶然、お父さんから風景写真が送られて来てね。それが切っ掛けとなって興味を覚えたんよ。仕事の一環で以前に行った場所に足を運ぶ事で新しい発見がある。これが一番楽しいんだ」

目を閉じて希は自分がやっている事を話した。数えきれない転勤で友達も作れず、辛い記憶でしかなかった。けれども…そんな過去があつたから今の自分がある。それもまた事実であつた。すると話を聞いていた穂乃果が目を輝かせて、希に話しかけてきた。

「記者さんか。という事は誰かをインタビューしたりとかするの?」

「ううん。そういうのは無いよ。まあ…地元の人に尋ねるだけで、穂乃果ちゃんが思ってる記者とは別だからね。ウチが取材するのは、あくまで観光に関する内容だから」

「記者でも色々あるんだね。ねえ、希ちゃんが撮った写真…見てみたいけど、今持つてる?」

「ウチが撮った写真かあ。残念やけど、今は持つてないんよ。でも、三日後にウチの写真が掲載した観光専門の雑誌が発売するから、それを買えば見る事が出来るよ」

「そうなの? それってどんな名前の雑誌?」

「ああ、ごめんね。雑誌名は名所探訪って言つてね。単に名所を紹介するだけでなく、余り知られてない場所も紹介するから、意外と好評なんよ」

饒舌に雑誌の事を語る希の姿は、いつもより楽しそうであつた。引つ込み思案な所がある彼女は自分の話をする事はない。だが観光記者としての仕事希の気持ちに変化を与えたのは一目瞭然だ。9人全員共、自分が進んだ道で大きく変わっていった。

「ねえ。皆…この後、まだ時間はあるかな? 良かったら、皆で街を廻ってみない?」

皆の話が終わった頃、穂乃果はある提案を思い付き。それを皆に進言した。8人は穂乃果の言葉に考え込む仕草を見せた。もしかしたら、駄目かな？そう思った時、皆は笑顔を浮かべて首を縦に振った。

そして会計を済ませ穂乃果達は街へと繰り出した。10年の時間を埋める様に遊んだ後、陽も暮れて楽しい時間はこうして終わりを迎えた。

9人は来年も会う事を約束し、別れを告げてそれぞれの道へと戻っていった。月日が経ち、多くの時間が過ぎて彼女達が変わったとしても、この絆は綻ぶ事は無い。それだけは確かである。

あれから三年

雨上がりの夜道を歩く一人の青年がいた。所々にシワのある黒のスーツが街頭によって照らされる。その視線はただひたすら足を見つめていて、重い足取りが一定のリズムを刻んでいる。

はじめはたくさんあった人通りも、何度か曲がり角を曲がるにつれて少なくなっていく。やがて、人気の全くない小道に抜けた。

小道をまっすぐ進んでいると、青年の進む先に大きな水溜まりが出来ていた。青年は避けるような素振りを全く見せず、その水溜まりに右足を踏み入れた。足元を見て歩いていたはずなのに、まるで水溜まりの存在に気づいていないかのように、自然な足取りで歩を進めている。

ズボンに跳ねた水も気にする様子はなく、青年はただひたすら下を向きながら進んでいく。

青年は二階建ての古びたアパートにたどり着いた。階段を上がって二階の廊下を進み一番奥の部屋に鍵を回して入っていく。

ワンルームの部屋は薄暗く、物があちこちに散らかっている。青年はここで一人暮らしをしている。

キツチンを抜けて奥の室内へと進んだ青年は部屋の電気をつけなのまま、部屋の中央にある机の前に腰を下ろした。机の上には読みかけの小説がひとつ置かれている。部屋には大きな本棚もあり、たくさんの小説で埋め尽くされていた。しかし、それらの小説には少しばかり埃が積もっている。

青年は小説が好きだった。数百頁に詰め込まれた物語に触れるのが好きで、高校時代には文芸部に入り自分でも小説を書いていた。中でも青年が好きだったのはハッピーエンドの物語だった。

三年前、青年は高校卒業後すぐ就職をして働き始めた。就職というひとつの節目を迎え、青年の物語が新たに始まった。

しかしその物語に待ち受けていたのは、理不尽な展開の数々だった。

た。毎日夜遅くまでの残業、パワハラ上司。とてもハッピーエンドになんてたどり着けそうにない毎日。やがて青年は心を失くし、枯れた植物のような日々を過ごすようになった。

小説好きの青年はいつしか、小説に触れることを忘れていた。

この日も仕事を終えて帰ってきた青年。帰宅しても特にやりたいことは無く、青年は退屈しのぎにとテレビをつけた。ディスプレイから漏れ出す光が室内に広がり、青年をぼんやりと照らし出す。ただ突然とテレビを眺めるその顔は生気を失っていて、瞳は色を失っていた。

テレビではアイドルの特集番組が放送されているようで、左上のテロップには番組の内容が表示されている。

「ラブライブ8周年記念スペシャル特番！

μ's & Aqours が一夜限りの復活ライブ!!」

μ'sそしてAqours。どちらも一世を風靡した伝説のスクールアイドルだ。テレビには当時より成長して大人になったアイドル達が笑顔で映っているが、青年は興味が無いのか全く反応を示さない。

アイドルに全く興味が無いというわけではない。むしろ青年はたった今テレビに映っているμ'sとAqoursの大ファンだった。

青年は忘れてしまった。自分が彼女達のファンだったこと、彼女達を心の底から愛していたことを。過酷な日々の中で青年は心をすり減らしていき、彼女達に向けていた愛情はいつの間にか枯れ果てていた。

彼女達の記憶を失くした青年はチャンネルを変える様子もなく、本当にただぼんやりとテレビを眺めているだけだった。

テレビにはμ'sとAqoursのメンバー計十八人が映ってい

て、トークが進められている。

『みなさんの現在の職業だとか、どんな生活を送っているのかを教えてください』

マイクを握った司会のアナウンサーが、彼女達に次の質問をした。スクールアイドルだった彼女達は今アイドルを引退し、それぞれの道を歩いている。

彼女達は次々と、それぞれの今を答えていく。

「穂乃果は今、実家の和菓子屋を継いでます」

家族と共に道を進む人。

「みんな知ってると思うけど、芸能界でアイドルをしてるにこっ」

ひとつの道を進み続ける人。

「マルは大学で勉強しながら、サークルの活動で小説を書きはじめた
ずら」

新しい道に進み始めた人。

「私は……今は色んなことに挑戦して、やりたいことを探しています
！」

新しく輝ける道を探す人。

かつて志を同じくしスクールアイドルとして活躍した彼女達も、グループが解散した今はそれぞれ別々の道を歩んでいる。それは何も悲しいことではない。それぞれに個性があり、それぞれの人生がある。

ただ、Aqoursが解散してから三年という時間が経っただけ。時間の流れの中で少し疎遠になった人達もいれば、変わらず親交がある人達もいる。

そんな中で今日は、μ'sとAqoursのメンバー全員が集まった。進む道が違って、高校時代のように顔を合わせることは無くなっただけれど、たまにはこうして集まる日がある。

だけど彼女達がアイドルとして再び、そして同時にステージに立つことは、まさに奇跡と言っつていいだろう。そんなライブがこの後に控えている。

その後も様々な質問からトークが繰り広げられ、番組は進行していく。

そしていよいよ、彼女達のライブが始まる。CMが終わって番組が再開されると、ステージの上に九人の女性が華やかな衣装姿で立っていた。

『今夜限りのスペシャルライブです。まずはμ'sで、【僕らは今のなかで】「ユメノトビラ」二曲続けてご覧ください』

司会のアナウンサーがそう言うと、ステージが証明で彩られていく。曲が流れ始め、μ'sの九人が歌い踊り出した。

そんな特別なライブが目の前のテレビで流れているにもかかわらず、青年は微動だにしない。膝を抱えながら、ただ前を向いているだけのようだ。

ステージの前の観客席では色とりどりのサイリウムを持った観客達が、曲に合わせたコールで盛り上がっている。おそらく今このライ

ブをテレビで見ている人達も、μ☒sのライブを見て盛り上がっていることだろう。

曲がサビに入ると、観客席は更なる盛り上がりを見せる。ステージと客席が一体となって、ライブはその熱を増していく。

すると、青年に変化が現れた。

これまでライブに一切興味を示さなかった青年は、若干ではあるが前のめりになってテレビに視線を向けている。μ☒sが歌い、踊り、笑顔を見せるたびに、青年の肩が小さく震えた。

ライブは進行していく。次の曲「ユメノトビラ」が始まった。

スクールアイドルとして活動していたμ☒sは、多くの人々の記憶に今なお色褪せずに残っている。

一生懸命な彼女達の姿に励まされ、勇気付けられ、希望を抱いた人が数多くいた。青年もかつては、μ☒sからたくさん感動を受け取っていた一人だった。

一夜限りの復活ライブ。彼女達が好きだった人にとってそれは、奇跡のような瞬間だった。

そんな奇跡が、ひとつの小さな奇跡を生み出す。

無気力にテレビを眺めていた青年が、気がつけば身を乗り出しテレビに釘付けになっている。

ステージで歌い踊るμ☒sを見つめるその瞳には、失われていた色が僅かに宿っていた。色は徐々に大きさを増していき、やがて青年の瞳に光が灯る。

その瞬間、青年は思い出した。

自分が彼女達の大ファンだったこと。

小説が大好きだったこと。

青年の忘れていた記憶を、μ×sが思い出させてくれた。大切なものは記憶の奥底に鍵をかけ、扉を閉めていた。

その扉はμ×s——記憶の女神——によって、たった今こじ開けられた。

しかし青年の顔は未だ生気を失ったまま。記憶が戻ったとはいえ、枯れた心までは届いていなかった。

一方テレビでは、μ×sがライブを終えていた。

『μ×sのみなさん、ありがとうございます！ さて続いてはAqoursで【君の心は輝いてるかい？】【ユメ語るよりユメ歌おう】二曲続けてご覧ください』

ステージにはμ×sに入れ替わってAqoursが立っていて、曲が流れると同時に歌い踊り出した。キラキラと輝く笑顔を、青年は色彩を帯びた瞳で見つめている。

スクールアイドルAqoursが解散してから三年。彼女達の名前、そして学校の名前は今でも多くの人々の記憶に刻まれている。

μ×sに憧れたスクールアイドルは沢山いた。Aqoursもその中に入っていることは、ファンの間では有名なエピソードだ。

今日のライブ、そのAqoursがμ×sからバトンを受け取った。盛り上がらないわけがない。誰もが待ち望んだ夢の共演がそこにある。

それは青年も同じだった。彼はAqoursのファンでもあった。青年はそのことを、つい先ほど思い出した。

色を取り戻した瞳で青年はライブを見つめている。曲はサビへと突入し、輝きで満ちたステージからAqoursが問いかける。

すると、青年に再び変化が現れた。

テレビを見つめる青年の枯れ果てていた顔が、少しずつ生氣を取り戻していく。まるで時間を遡行するかのように再生する。

一切の輝きを失くしていた青年だったが、三年ぶりのAqoursのライブによって輝きが蘇っていく。青年のもとに奇跡が運ばれた。

歌は魔法だ。聴くと元気付けられたり、励まされたり、いろんな力が宿っている。

萎れた花に水をやると復活するように、青年の枯れた心に歌という水が与えられ、本来の輝きを取り戻した。

Aqours——水の歌姫——によって。

ライブは一曲目が終わり、次の曲「ユメ語るよりユメ歌おう」が始まる。

青年は輝きを取り戻した。ライブを見始める前とは別人と見違えるほどに、死んでいた表情が今は生きている。ライブを食い入るように見つめる青年の顔は、とても楽しそうに輝いている。

彼女達のライブを見ていると、全身にゆつくりと温もりが巡っている。今の今まで忘れていた、忘れる前までは当たり前だったものを、青年は取り戻すことができた。

輝かしい笑顔でAqoursは夢を歌う。青年の心にも、三年間忘れていた夢がふつふつと蘇ってくる。

青年は小説が好きだ。

物語が好きな青年の夢は、自分だけの物語を作ること。

青年はいてもたってもいられず、テレビの前を離れ机の前に座った。埃の積もったノートパソコンを起動させ、ひたすらにキーボードを叩いていく。

ただ夢中になって、青年だけの物語を描いていく。

青年はテレビで流れているライブを気にも留めず、文章を書き進めていく。

夢を語る言葉があるから、夢を叶える物語を綴っていく。

『それでは最後にもう一曲、μsとAqours一緒に歌っていたいただきます！ スクールアイドルといえばこの曲！ μsそしてAqoursで、【SUNNY DAY SONG】です!!』

あれから三年。古びたアパートの一室から出てくる、一人の青年の姿があった。

前日に降っていた雨も上がり、空は晴れ渡っている。とても気持ちのいい朝だ。

日曜日。私服姿の青年は、これから高校時代の友人達に会いに行く。三年前まで生気が感じられなかった青年の顔は、すっかり元気な姿を取り戻していた。

これから久しぶりに友人と会うとあって、青年は楽しみで仕方がない。青年は軽い足取りで歩みを進めていく。

すると青年の進む先に大きな水溜まりが出来ていた。どうやら昨日降った雨が作ったものだろう。青年は一度立ち止まった。

しかし次の瞬間、青年はその水溜まりに向かって走り出した。

そして水溜まりの一步手前で、青年は大きく跳躍する。まるで走り幅跳びのように青年は水溜まりを飛び越えようとしているようだ。

勢いよく飛び出した青年。その両足は、見事水溜まりの先に着地した。

三年前は水溜まりの存在にすら気づかず踏み抜いていた青年だったけれど、今日は水溜まりを飛び越えてみせた。

着地した水溜まりの先、青年はふと空を見上げた。

以前の青年は下ばかり見ていた。だけど今は上を見る余裕がある。

見上げた先にはどこまでも続く綺麗な青空。

その中に、綺麗な虹が咲いていた。

高校時代の文芸部仲間との集まりで、僕はカラオケに来ていた。僕以外の仲間は同じ大学へと進学し、大学でも文芸サークルで小説を書いているという。

今日は十人以上もの人が集まっていて、僕以外は同じ大学の文芸サークルに所属している。カラオケはかなりの大部屋なのだが、それでも人数が多すぎて密度が高い。集まった人の多くは僕と同じ高校の文芸部出身だが、中には僕の知らない人もいる。

「……うむやい、すげえ」

小さくボソツと呟いたのは、国木田花丸さん。A q o u r s のメンバーだった彼女がなぜこのような推しへの愛を叫ぶカラオケに来ているのか。

なんと国木田さん、彼らと同じ大学の文芸サークルに入っているのだという。あいつら国木田さんのいる文芸サークルで活動していたとか。羨ま死い……じゃなかった、羨ましい。

友人への嫉妬はこれぐらいにして。僕は気づかれないように国木田さんを盗み見る。

先ほど手を止めて僕だけに聞こえるぐらいの音量で毒を吐いた国木田さんは、未だに叫んでいる彼らの存在を無視するように、頁を捲る手を再び動かしていた。

国木田さんは今、この騒がしいカラオケボックスの中で小説を読んでいる。そして彼女が読んでいるのは、僕が久しぶりに書いて今日この場に持ってきた短編小説だ。

僕はA q o u r s のファンでもある。その中でも推しだったのが、今日の前にいる国木田さんだ。推しに自作小説を読まれているこの状況、素直に喜ぶべきなのだろうか。

心情としてはもちろん嬉しい。推しが同じ空間にいて、僕の小説を読んでもらっている。普通に考えれば嬉しい状況であるはずなのに、どうしてだろう胃が痛い。

久しぶりに書いた小説だ。もちろん今の自分のベストは尽くしたし、良いものが書けたという自信はある。

だけど国木田さんの感想がそうとは限らない。もしかしたら面白くない駄作だなんだと罵倒されるかもしれない。それはそれでご褒美ですありがとうございます。

罵倒だけで済めばいいのだが、もしかしたら国木田さんに嫌われるかもしれない。推しに嫌われるのだけは本当に避けたい。

そしてカラオケで騒がしい彼らとは対照的に、僕と国木田さんの間

には沈黙が流れている。その沈黙に耐えられなかった僕は、勇気を振り絞って彼女に話しかけてみる。

「そ、そういえば国木田さん大学の文芸サークルなんだよね？ 国木田さんも小説書いてきたの？」
「ずらっ」

そう言いながら国木田さんは首を縦に振った。なにその可愛すぎる返事しんどい。

「そうなんだ。よかったら、国木田さんの小説もあとで読ませてほしいなー……なんて」
「ずらっ」

小説を読むことに集中しているのだろうか、国木田さんはもう一度首肯と口癖だけで返事をしてくれた。

国木田さんと初めての会話。推しとの会話は緊張したけれど、それ以上に嬉しい感情が大きかった。そして後で国木田さんの小説を読むことができる。こんなに嬉しいことはない。

国木田さんはどんな小説を書くのだろうか。読むのがとても楽しみだ。

カラオケは「僕たちはひとつの光」が終わったみたいだ。歌い終わった彼らはゼエゼエと息切れしているが、とても満足気な良い顔で笑っている。

そして次は僕が入れた曲だった。

その曲はデュエットで歌う曲で、僕の大好きな曲のひとつだ。そこで僕は、再び勇気を振り絞って国木田さんに尋ねてみる。

「国木田さん、よかったら一緒に歌わない？」

「いや、でもマルは……」

「お願い！ 国木田さんと一緒に歌いたいんだ！」

「…………分かったぞら」

少し恥ずかしそうに了承してくれた国木田さんは、小説を読む手を止めてマイクを握った。

本当は文芸部仲間の一人と一緒に歌うつもりだったのだけれど、せっかくだから国木田さんと一緒に歌ってみたくなった。

国木田さんはA q o u r sの中で僕の推しメンなのだ。推しと一緒に歌える機会なんて、この先二度とやって来ないだろう。このチャンスを見すみす逃すわけにはいかない。

そして、国木田さんの歌を間近で聴いてみたかった。

最初の返事で国木田さんがどうも僕たちに気を遣って遠慮しているように感じた。だから僕は少し強引ではあったけれど、国木田さんを誘ったのだ。

……いや、この理由は後付けかもしれない。

あなたの歌を聴かせてほしい。

あなたの小説を、読ませてほしい。

あの人を眺めて

「であるからしてこの公式は——」

とある大学の数学の講義。今日もこの教授の話は長い。理系科目が少し苦手な僕にとってはこの講義は苦痛でしかない。でも必修だから取るしかない。でも、こんなつまらない講義にも楽しみがある。

目立つ金髪、その魅力に誰もが目を向けてしまうこの学校の有名人。ついこの前まであの伝説のスクールアイドル μ sに所属していた、絢瀬絵里さんだ。

僕はその人がいるからこんな講義に出ていると言ってもいい。 μ sに入っている時からこの絢瀬絵里という人に惹かれていた。

——久しぶりに、自分は恋をしたのかもしれない。

気づいたら目が絢瀬さんを追っていた。男友達にも茶化される始末だ。それに、「あんな美人に恋人がいないはずないだろ」と言われたが、確かにそうだ。

色々気になって僕は今日もあの人を追っている。

「そしてこの年に中大兄皇子は——」

絢瀬さんは友達が多い。講義の前だって友達と話しているし、数人で固まって講義を受けている。僕もあんな自然に話せたらなと思いつつながら教授の呪文のような言葉を聞き流す。どうせ言っていることはレジュメに書いてあることだ。

絢瀬さんは正直僕なんかと住む世界が違う。僕なんか声をかけてはいけない。だから僕はあの人その後ろ姿をただ眺めるだけ。でもちゃんと教授の顔を見ているようにしている、抜かりは無い。

でももし絢瀬さんと話せるようになったら、きっと僕の大学生活は薔薇色になるだろう……

——お昼。学内の食堂にて

「あ、絢瀬さん。こんにちは」

「こんにちは。あなたもお昼？」

「そうなんだ。一緒でも大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫よ」

食堂に行くとき珍しく絢瀬さんは一人で座っていた。僕もちょうど一人で、今日は絢瀬さんと2人でお昼を食べることになった。たまに一緒になることはあるけど、2人つきりというのは初めてかもしれない。いつもは2人とも仲のいい人達と一緒にいるから、一緒になっても6人ぐらいのうちの2人になってしまおう。今日は僕の仲のいい友達サークルのミーティングがあるらしいし、絢瀬さんの方も同じ理由で今日は一人で食べるつもりだったらしい。そう考えるとちよつとラッキーなのか？

「そういえば、数学基礎の課題終わった？」

「ううん全く。基礎っていう割に中々高難度だよ、あれ」

「そうかしら？私は案外簡単な方だと思うけれど」

「絢瀬さんは流石だなあ……」

絢瀬さんは頭が良い。まだ基礎の講義が多いけど、教授がする質問には必ず正解の解答をして、講義後も教授と中々に専門的な会話をしている。それもあってか、絢瀬さんは教授からの人気も高い。

「あ、そうだ！今度友達と喫茶店で課題しようってなってるんだけどあなたも一緒にどう？」

「えっ……!?!」

もしかして僕、絢瀬さんに誘われた……!?!

女軍団の中に僕が……

「もちろん、あなたのお友達も一緒にね」

知ってた

「そうだね。みんなにも声をかけておくよ」

「ありがとう。わかったら連絡してちょうだ……あつ」

「どうかした？」

「そういえば私達、連絡先交換してないわよね？」

「そ、そうだね」

「こ、これは、まさか……!?!」

「良かったら連絡先交換しない?」

そう言つて絢瀬さんがスマホの画面を僕に見せてきた。その画面には大体の人がしているメッセージアプリのQRコードだった。これを読み込めば絢瀬さんとはそのアプリ上で言う”友達”になれるわけで、それで……

「喜んで!」

とかなんとか考える前に反射的に僕は絢瀬さんと連絡先を交換していた。それからしつかり登録出来ているかの確認のスタンプが送られてきた。

「スタンプ来たかしら?」

「うん、来たよ。ありがとう」

「こちらこそ。何かあつたらそこに連絡してね」

「了解」

それから少し談笑してお昼を食べ終わり、次の講義の教室が同じ建物にあるので一緒にその建物まで向かった。

「あ、じゃあ私こっちだから」

「わかった。……じゃあまた」

「ええ、また」

『また』の後は使う場合省略されがちだが、案外その意味というのは相手に伝わっている。この場合、『また会いましょう』や『また今度』や『また後で』などそういう感じの意味だ。つまり何が言いたいかというと、絢瀬さんとの関係は今日この時限りではないということだ。

「……今日は赤飯かな?」

今日の晩御飯のメニューが決まった瞬間である。

—— 3 限目の講義の教室にて。

教室の後ろのドアから入ると、すぐ近くの席に友達3人が座っていたので俺は空いていた席に座った。

「オツス……って、なんかいいことでもあった?」

「えっ、わかった?」

「そりゃあそんな幸せそうな顔してたらな」

「顔に出てたか……」

「それで、何事?」

「聞いてくれるか友よ。実は——」

僕はさっきの昼の出来事を自慢気に話した。そしたら隣に座っていた友達に肩をポンと叩かれた。

「……大丈夫か?」

「なんで!?!」

「いやいや、お前がああの絢瀬絵里さんと連絡先を交換なんて有り得ないだろ」

「おう喧嘩か? いいぜ、表に出ろ」

「まあまあ。信じられないなら証拠を出せばいいんじゃない?」

「確かに。えっと……はい」

僕はメッセージアプリを開いて絢瀬さんの連絡先を表示してみんなに見せた。すると3人とも信じられないという言葉を顔に出しながらその画面を見つめていた。

「疑ってすまなかった」

「グツジョブ」

「正直信じてなかったけど、良かったね」

「え、酷くね?」

それから少し話して、3人とも絢瀬さんが話していた集まりに参加することが決まったので早速絢瀬さんに報告した。絢瀬さんからは「OK」というスタンプと、追記のメッセージが送られてきた。

『あと友達と話してて、喫茶店で課題するだけじゃつまらないから、そのあとカラオケとかゲームセンターに行こうって話になったの。それも確認しておいてね』

僕はそのメッセージに返信して、みんなにそれを伝えた。なんか、

これって友達と遊ぶ約束をしている時みたいでワクワクする。というか、友達なのか……!?

「レジュメ配るから後ろにまわしてください。足りなければ前に余りがあるので取りに来てくださいね」

幸せな気分浸っていると講義が始まった。絢瀬さんの後ろ姿を眺めることがルーティンのようなものになっていたのか、やっぱりこの講義はいつもよりやる気がわかない。まあ、大学生の本業はアルバイトでも遊びでもなく勉強だ。しっかり単位を取らないといけない。なので僕は講義に集中する。

「そしてこの日に信長は熱田神宮に——」

意識が薄れてゆく……眠い。隣の友達は興味深そうに話を聞いている……凄いな。僕はもう限界、だ……

「——おっい、起きろ〜」

僕は誰かに軽く体を叩かれて目を覚ました。どうやら僕は眠ってしまったていたようにまだ頭がぼーっとしていて、軽く頭痛もする。

周りを見まわすともうみんな教室を出だしていたり、出る準備をしていた。教授は質問などして来る生徒の対応や片付けをしていた。

そうか、講義は終わってしまったんだ。またガッツリ寝てしまった。

「はあ……起こしてくれてありがとう」

ついついため息が出てしまう。

「どういたしまして。……あとヨダレ出てるぞ」

「はっ!?!まじか」

友達に囁くように指摘された僕は素早くハンカチで口周りを吹いた。僕はどれだけ爆睡してたんだろう。

「よく寝てたよな。まるで催眠術にかかったみたいだったぞ」

「まあ、あの人の話し方は眠くなるけどな」

「ははは、確かに」

まだ教室に教授がいるのによくそんなことを話せるなど感心しながら教授の様子をチラツと確認したけど、どうやら席が後ろの方でさらに話し声も小さかったので聞こえていなかったみたいだった。とりあえずは安心した。

「とりあえず昼飯食いに行くか」

「そうだな」

「やつと飯だ〜」

この講義が終われば待ちに待った昼休み。

今日は朝時間があつたので簡単な弁当を作ってきた。メニューは玉子焼き、ウインナー、ポテトサラダ、ご飯だ。なおそれでは足りないのでも売店でプラスで何かを買っている。ちなみに僕は実家暮らしだ。

昼休み、そんな目立ったイベントもなく時間は過ぎていった。それに3人とも次の時間の講義があるが、僕はないので何をしようか迷っていた。図書館に行くか、食堂でゲームをしているか、適当に辺りをぶらつくか。サークルにも所属していないから暇つぶしの方法が困る。やつぱり入るべきなのか？でも面倒くさそう。

——図書館。

悩んだ末に、僕は図書館で本を読むことにした。古典文学に興味があるのと、とりあえず竹取物語を読んでいる。現代では「かぐや姫」という物語で広く知られている。

図書館の雰囲気は好きだ。静かだし、本を読んでいると自分だけの世界に浸れる気がする。

「何読んでるの？」

「ああ、これは『竹取物語』だよ。教科書にはほんの一部分しか載っていないけど、こうして全体を読むと中々面白いんだよ」

「そうなのね。また私も読んでみようかしら」

「オススメするよ」

つて、僕はなんでこんなことを考えてしまうんだ。そんなこと有り得るはずがないのに。集中だ、集中……

『君つて本を読む時つてそんな顔するのね』

——ダメだ、集中できない。とりあえず読むのを辞めて外のベンチに座ろう。

外にあるベンチに座っていると自然と落ち着く。特に大きな木下のベンチは格別だ。風が木を揺らしている音を聞きながら当たる空気はなんとも気持ちいいものだ。そこは僕のオススメスポットだ。

「ん、あれは……」

そんなベンチに座っている僕の目の前を通り過ぎたのは絢瀬さんだ。ひと目でわかった。でも、いい匂いしたなあ……あれが美人の香りつてやつかな？

でもどこに行くんだろう……気になる。

気付いたら僕は絢瀬さんを追うように自然に歩き出していた。動作もトイレに行く人を装つて、すっかりトイレの方向には向かった。じゃないとただのストーリーカーになるからね。

あ、でもどうやら絢瀬さんは図書館に用事があつたみたいだ。よく見たら腕に本を抱えていた。なので僕はそのままトイレに向かった。

「ふう……」

トイレを済ませて手を拭きながらどこかで休もうと食堂とはまた別の、机や椅子が沢山あるスペースに向かった。その途中、図書館前で絢瀬さんが何やら女の人と話しているのが見えた。

あの人見たことあるぞ……確かこの大学のチアリーディング部の部長さんだ。ということは勧誘？絢瀬さんがチアリーディングかあ……確かに似合うかも……

——揺れるポンポン、揺れるミニスカート、揺れる2つの膨らみ。その姿に誰もが目を奪われる。

『フレ、フレ、頑張れ！』

うん、いい。

あ、チアリーディング部の部長さんが帰っていく。あの様子じゃ断ったんだろうか。

絢瀬さんはやれやれという顔を浮かべている。きつと色んなところからスカウトを受けているんだろう。容姿端麗、成績優秀、そしてあの絢瀬絵里だし、どこのサークルも欲しいと思うのは当たり前だろう。

講義の終わりを告げるチャイムが鳴った。そろそろ教室に行かないと。

——夕方。

僕は今日の講義が全て終わって帰路を歩いてきた。今日も疲れたなあ……というか大体の講義で寝てたから講義を受けた気がしない。

帰ったら復習でもしとくか……

「あつ、絢瀬さんだ」

絢瀬さんは帰り道の途中にあるカフェで飲み物を飲んでいた。時々周りをキョロキョロとしているし、誰かを待っているのかな？

もしかして、僕だったりして……？

「あ、いたいた。待ってたのよ」

「ごめんごめん」

「はい、あなたのコーヒー頼んでおいたわよ」

「ありがとう、絢瀬さん」

「ふふつ、もう名前でいいわよ？友達なんだから」

「そ、そう……？え、絵里、さん」

そんなわけないよね。つてこっち向いた……!?まさか本当に僕を……!?

「やあ、お待たせ」

と、絢瀬さんに声をかけたのは僕の横を通っていった男の人だった。あらずやだイケメン。

てか誰なんだあの。絢瀬さんとあんなに仲良く話す人なんて大学にいたかな？

それに絢瀬さんのあの顔……あれは誰にでも見せるような顔なんかじゃない。あんな顔をする絢瀬さん初めて見た。

——ああ、そうか。あの、絢瀬さんの恋人なんだ。

わかっていた。絢瀬さんみたいな美人に恋人がいないはずなんてないんだから。あんな人が独身ならこの世の誰もが独身だと言っても過言ではない。

叶うはずもない恋が終わった僕は、絢瀬さんから視線を外して帰路をまた歩き始めた。

次の日から僕は絢瀬さんを見つめることはなくなった。偶に目で追ったりはするけど、前ほどではない。友達からは調子が悪いのかと心配されたけど、事の始末を話したらご飯に連れて行ってもらえた。しかし、何もやる気が出ない。正直もう講義なんてどうでもいい。前までは絢瀬さんを眺めると理由で来ていたに等しい。だけどその理由がなくなったら今、多少なりとも大学に来る意味を見失いかけている。

「はあ……」

小さくため息をついてしまった。

腕を動かしたらその拍子に消しゴムが転がってしまった。後で取ればいいかと別の消しゴムを用意した。

「ねえ、落としたわよ」

その時だった。斜め前の席の人が消しゴムを拾って声をかけてくれた。

「あつ、ありがとうございます」

僕はその人の顔が見えるように視線を上げてお礼を言った。でも、その人の顔を見た僕は不覚にも言葉を失ってしまった。

「いえいえ」

その人は何食わぬ顔で僕に消しゴムを手渡すとまた前を向いて教授の話聞いた。

僕はしばらくぼーっとしてしまった。何故ならその人は、憧れ続け、いつまで経っても話しかけることが出来なかった絢瀬さんだったから。

絢瀬さんは誰にでも優しい。絢瀬さんと同じ大学に通っていると知ったその日、絢瀬さんは道に迷っているおばあちゃんに道案内をしていた。そこから僕は絢瀬さんを目で追うようになった。決して見た目だけで判断した訳では無い。絢瀬さんのそういう所に僕は惹かれた。

μ, sに所属していた時は、ただ絢瀬さんの歌に、姿に魅了された

だけだった。でも僕はμ、sの絢瀬絵里だから好きだったのではない、絢瀬さんだから好きだったんだ。きつと絢瀬さんの恋人も僕と同じ気持ちなんだろう。

人の心というのは簡単で、いいことがあるとすぐ機嫌が良くなる。例え嫌なことがあつてもだ。なので僕はそこから講義に集中できた。そして僕はこの時決めたことがある。

恋を叶えようとすることは諦めよう。でもこの好きという気持ちは胸にしまっておいて、普段通りの自分でいよう。

そしたらきつといつか……絢瀬さんと友達になれるかもしれない。

「絢瀬さん、さつきはありがとう」

「ど、どうして私の名前を……!?!」

「驚くことじゃないでしょ。だって絢瀬さんはこの学校の人気者だからね」

「……………」

「ど、どうしたの?」

「あつ、ごめんなさい。私のこと、元μ、sの絢瀬絵里って見てくる人が多いものだから」

「ああ、確かにそれもあると思う。僕もμ、sは好きだったし。でも、ここにいるのは僕と同期の絢瀬さんだからね」

「ふふっ、嬉しいわ。ありがとう」

決してこれは恋への一歩じゃない。

でも、それでいい。絢瀬さんには心に決めた人がいるし、僕は絢瀬さんと知り合いになれたから。当面の目標は、絢瀬さんと友達になることかな。

僕は今日も視界に入ってくる絢瀬さんの後ろ姿を見てしまっている。帰り道も同じ方向だからか、毎回絢瀬さんが恋人という姿も見える。眺めることしか出来ない悔しさもある。

でも、その悔しさは決して苦ではない。絢瀬さんの好きな笑顔は恋人と一緒にいる時しか見せないあの笑顔だし、絢瀬さんを眺めることが幸せに感じるから。

——僕は、ずっとモブで構わない。

園田海未最強決定戦

「あ、なんだか無性に最強を決めたいですね」

校門をくぐる寸前のことだった。

なんの前触れもなく、なんだか急にそんな事をしたくなった園田海未。

呟いた言葉のニュアンスは、まるでお使いを思い出したかのような、そんなアクセントであった。

「それでは最強を決めにいきましょう！ 具体的に何の最強を決めるかは分かってませんがとにかく行きますよー！ ラブアロツ！」

その時の様子を見ていた生徒たちは皆、こうコメントした。

——あれ？ 園田さん消えた？

海未が消え、立っていた地面は抉れていた。両の脚を素早く動かせばそれだけ早く動ける。そして、足裏をなるべく地面から離さなければ可能な限り無音へと近づく。

そう、ここまで言えば頭の良い読者諸君はもうお気づきであろう。

——SURIA S H I。

武道少女の基本にして、淑女の嗜み。海未レベルのSURIA S H Iならば無音かつ高速、否、光速で校舎入りすることも容易いのだ。全国レベルの者達ならばおそらく、SURIA S H Iから放たれるソニックブームでガラスが割れるのは火を見るよりも明らか。土なんて一部畳返されている。

「校舎の中に入りました！ 目標、視界に入ったμ sメンバー！ 行きますよー！」

第一の獲物を求め、園田海未。まずは音楽室へと飛翔する！



「かくかくしかじか——ということで最強を決めるため、私は真姫、貴方に戦いを挑みます」

急に最強を決めなくなつた——その理由を説明すると黙つて座つていた真姫はおもむろに立ち上がり、ピアノへと近づいた。

「音楽勝負よ!!」

「随分ノリが良いですね!」

「ええ! さつさと戦うわよ! 海未!」

自分から仕掛けておいてなんだが、海未は困惑していた。だが、その困惑する時間はすぐに消え失せる。

「初戦! 園田海未対西木野真姫! 勝負内容は音楽! 二人共準備はいい!」

「希!? いつの間に!? そしてそのヘンテコな仮面は何ですか!? ひよつとこ!」

「ウチは希やない! 今のウチは流離いの勝負見届け人ノゾミンや!!」

ひよつとこ仮面ノゾミンはそう言い、まずは真姫の先手を宣言する。

何がどうなつて先手を決められたのかが良く分からなかったが園田海未は心得ている。

「私のピアノに酔いなさい!!」

口が早いか手が早いか。真姫の長く細い指は鍵盤の上を踊りだす。曲は聞くまでもない。『愛してるばんざーい!』。真姫の得意中の得意と言つても過言ではない決戦曲であつた。

腕と、内容は改めて評価するまでもない。最高中の最高。これ以上ない仕上がりと言つて良いだろう。

海未は聞き惚れていた。

だが、すぐに首を振り、意識を高めていく。これは戦いなのだ。

一瞬といつていいだろう、至福の時間は終わり、真姫がドヤ顔を浮

かべる。

「——どう!？」

「ええ、素晴らしい演奏でした。なれば私も全力でつかまつるのみです」

そう言いながら、海未は懐を探る——が重大な事に気付いてしまった。

(しまった……扇子を忘れてしまいました! これでは日舞を出来ない!)

いつもなら懐に入れている扇子をこんな時に忘れるとは。園田海未一生の不覚。

「……忘れ物をしたみたいやね。だけど、それだけが海未ちゃんはやれなくなるの?」

ノゾミンはそう言い、ふわりと笑みを浮かべる。

この言葉で海未は自身の心の内に揺れていた波が引いていく感覚を覚えた。

「ええ、ノゾミンの言う通りですね。扇子が無くても、私の心は音楽を奏でられるのですね」

呼吸を整え、手を差し出し——そして徒手にてつかまつる!

「確かに凄いとは思いますが、音楽勝負にはなっていないわよね」

真姫の言うことももっともであった。

素人目から見ても、確かに凄い。圧巻と言っても差し支えないだろう。

だが、それだけである。

『音楽勝負』という話では、これは些か——。

「いいや違うで真姫ちゃん! 耳を澄ましてみい!」

「どういうこと……? ハッ!？」

常人よりも恵まれた真姫の聴力は間違いなく捉えていた。

「これは……風を切る音?」

動かしている手は既に視認することは難しく、ただ鋭利かつテンポ

の良い風切り音が聴こえてくる。

気づくことの出来た真姫の肩に、希の手が置かれる。

「そうや。そして海未ちゃんの顔を見て、何か気づかへん？」

「えらく楽しそうってことくらいしか。……ん？ 風切り音。楽しそう。——まさか!？」

「そのまさかや！ “音”を出し、それを“楽”しむ。これすなわち音楽。海未ちゃんは自分自身が“音楽”となったんや!!」

真姫は忘れていた。園田海未とは、追い詰められれば追い詰められるほど、真のパフォーマンスを発揮できるといふ人間だという事が。忘れていたことに気付かせてくれる。今自分が見ているモノは、そんなメッセージが込められているように感じられた。

「くっ……！ まさか私が海未に——海未に！」

初戦！

園田海未対西木野真姫！

結果！

園田海未！ 大勝利！！

「貴方に足りなかったのは日舞。たったそれだけの差なのですよ」

「私も日舞を習っていればもつと……！」

「いいえ真姫」

「海未……」

「身体一つあり、手を動かせばそれだけで日舞となりうるのです」

「NICHIBUって……すごいのね！」

友との語らいもそこそこに切り上げ、海未は走り出した。

この初戦の壁を乗り越えた海未にはもう勢いしか存在しなかった。

「待ちなさい海未！」

「その声は……にこにこ！」

廊下によく響く声と共に、黒髪ツインテールを揺らしながら現れた

のは矢澤にこである。その眼にはただただ闘志しか宿っておらず。

「聞いたわよ！ あんたが最強を目指しているって！ だったらこの銀河最強アイドルである矢澤にこにーに挨拶が無いのはおかしいんじゃない!？」

「ふ、もちろん貴方の元に馳せ参じるつもりでしたよ。私は最強を決めたいのですから!!」

「だったら、勝負といこうや!」

ひよつとこ仮面——もとい、ノゾミンが海未とにこの間に立つ。

「にこつち！ 勝負は何や!？」

「愚問ね！ アイドル勝負よ!! 私と来たらこれしかないじゃない!!」

「引き受けましょう」

「第二戦！ 園田海未対矢澤にこ！ 勝負内容はアイドル！ 二人共準備はいい!？」

ぴりつと、空気が緊張に包まれる。互いに視線を交わすその様はまさに龍と虎。今にも噛み合っても何ら不思議ではない。

「まずは私からよ!! にっこに——」

白目で呆けていたらいつの間にか、にこのターンが終わっていた。毎度毎度聞かされているので、今ではソラで言えるほどに記憶している。

「どうよ海未！ この銀河のにこにーに対して、これ以上のアイドルを見せることが出来る!？」

「くっ……確かにアイドルの板のつき具合はにこの方が一枚上手。ですが……」

「だけど海未ちゃんにはアレがある！ だよね、海未ちゃん!」

ノゾミンの後押しを受け、海未は構える。

「あんたの繰り出す技は知っているわ！ 出るのね——ラブアローシユート!」

武道少女海未の第二の人格、アイドル海未が繰り出す絶殺の一撃、銘をラブアローシユート。

普段とのギャップが織りなす威力は非常に高く、悶死は不可避。

矢澤にこは確と見届けるべく両脚に力を込める。

「行きますよ、にこ……!!」

脱力する海未。ここから繰り出されるラブアローシユートは絶妙の域へと突入するだろう。

迸る気迫が違う。にこは思わず唾を飲み込み、身構えた。

(なんて凄み……! まさかこの私がビビらされるだなんて!)

左腕を突き出し、右腕を引く。この実にシンプルな動作はラブアローシユートへの布石。

力は十二分に蓄えられた。

園田海未、つかまつる——!!!

「ラブアローシユートオ!!!」

「ニゴオ?!?!」

鳩尾一発。

まるで弓を射るかのような流麗かつ鮮烈な一撃。これが演劇ならば拍手喝采。

ゴロゴロと転がり、やがて壁にぶつかり気絶するにこ。念入りに確認した海未は拳を天へと突き上げる。

第二戦!

園田海未対矢澤にこ!

結果!

園田海未! 大勝利!!

「貴方も弓道をやっていたら、少なくとも気絶することはなかったでしょうに……」

「……あれ? アイドル勝負は?」

「アイドルは体力勝負です。アニメ序盤でも言っていたではありませんか。あれくらい耐えられないようであればまたトレーニングメニューを増やさなくては……」

健やかな身体に熱意のあるトレーニング。そして弓道。これさえあれば強靱な肉体なぞすぐに出来上がる。

刹那！ 海未の第六感が嘖さえずった！

「何奴!？」

咄嗟に掴んだのは、なんとおにぎり。しかも握りたて。

時代が時代ならば飛び込んできたのは矢だったのだろう。

「これは……」

米の一粒一粒に醤油で文字が書かれていた。海未が持つ超視力でなければ見落としていたほどの細かさ。

米にはこう書かれていた。

——海未ちゃん。家庭科室で待つてるよ！ 花陽より。

挑戦状。よもや一刻の猶予も許されていなかった。時を置けば置くほど花陽の有利な陣地と化してしまうことは火を見るよりも明らか。

おにぎりをぺろりと食した後、海未は家庭科室目掛け、走りだした。



「とうとう着きました、家庭科室へ」

「待ってたよ海未ちゃん！」

「その声は!？」

エプロン&三角巾、 “家庭的” という概念を具現化した存在なのが、きつとこの少女なのだろうと海未は思い直す。

「今日もお米が美味しいね！ 小泉花陽！ さあ海未ちゃん！ 花陽の挑戦、受けてくれる!？」

「もちろんですとも！ 勝負の内容は!？」

「おにぎり作り対決でどう!？」

「引き受けましょう!!!」

「第三戦！ 園田海未対小泉花陽！ 勝負内容はおにぎり作り！ 二

人共準備はいーい!？」

海未と花陽の首肯を確認したひよつとこ仮面ノゾミンが試合開始を宣言。

動いたのは、ほぼ同時であった。

まずは米を研ぎ、水を入れ、そこから出たものを捨てる。この繰り返しで、米はまるで刀の如く研ぎ澄まされるのだ。あとは、炊飯器に入れ、その瞬間を待つ。

ここまではとても楽しい段階である。

しかして両名は心得ていた。

この「次」が死闘なのだ。

「おにぎりを握るのはスピード！ 触り過ぎず、触り続ける！ この二律背反がたまらないよー!!」

小泉花陽、動く。一心不乱。されど握る動作は精密に。

実際、花陽のおにぎり製作技術は絶妙の域へと達していた。こればかりはいくら海未でもその領域までは手が伸びぬ。

だからこそ、海未に求められているのはその一歩先なのだ。

「私も更に気合を入れるしかないようですね！」

「海未ちゃん！ その動きは!!!」

圧縮。

米を圧縮。

ただただ圧縮。

だがこれは決して自棄になつたわけではない。

園田海未の最大限を今、この米に凝縮しているのだ！ ……おまけに調味料を一振り。

数分の時が過ぎ、両雄のおにぎり、並び立つ！

「両者、出そろつたようやね！ ……だけど」

ノゾミンは二人のおにぎりを見て、些か怪訝な表情を隠しきれな

かった。

漫画やアニメの世界で出てくるような形の良いおにぎり、ただの“米一粒”となっていたおにぎり。

——これは花陽ちゃん勝ちかな？ ノゾミンはそう思っていた。実際、誰でも思う事だろう。しかしそんな見た目のハンディキャップを物ともしない姿が、園田海未にはあった。

「まずは私から！ 食べてみて希ちゃん！」

「えらい自信満々やね花陽ちゃん。ではでは……はぐっ」

非常に形の良いおにぎりを手に取り、口に運ぶ希。

その瞬間、光に包まれた。宇宙の真理。お米のおいしさと生きることの意義を理解する。

これは食事であり、食育なのだ。気づけば涙を流していた。

「比べるまでもあらへん！ 勝負は——」

「待ってください！ ノゾミン！ 私のも食してから決を!!」

「自信が、あるんやね。米一粒サイズで」

「無論です。米一粒サイズで」

海未の威風堂々とした態度に後押しされ、とうとう希はその米一粒サイズ大のおにぎりを口に運ぶ。

「——っ!？」

脳が揺さぶられる。米が何十、何百と凝縮され一つになればそれだけ甘みと旨みが強くなる。噛めば瑞々しい果実のように米の味が溢れ、呼吸をすると金の畑が目に見え浮かぶ。

気づけば、そのおにぎりは口から溶けて消えていた。

その事実にも、気づいた希はついつい口に出していた。

「おかわりは……」

「ありません。あれつきりです」

「……あれじゃ良く分からなかったからもう一個だけ」

海未は口元を半月状に歪ませる。この言葉を出させた時点で、海未の作戦は成功したのだ。

「となれば言うことは決まっていますね？」

「も、もちろん！」

第三戦！

園田海未対小泉花陽！

結果！

園田海未！ 大勝利！！

「花陽のおにぎりの完成度は私の目から見ても、中々に強敵と見えましたが。だからすごく美味で、すごく量が少ないおにぎりを作るしかなかった。そうなればもう、後は求めるしかないのです。夏草や兵どもが夢の跡……」

「う、うう……自信あったのに、海未ちゃんに負けちゃった。でも、おめでどう海未ちゃん！」

健気。これほどまでに真つすぐ言われたら流石の海未も搦め手を使ったことに罪悪感を感じなかったと言える、それは嘘になる。

しかし園田海未は進むしかないのだ。

「ありがとうございます、花陽。今度おにぎり食べ放題へと連れて行ってあげます」

「えええ!!? ほんと!? ありがとうございます海未ちゃん!! 楽しみにしているね！」

「あ、あの海未ちゃんおにぎりは……」

「そんなものはありません! さらば!」

ノゾミンを振り切り、海未は次の戦場を求め走り出す。

次で折り返し地点となる四人目。まだまだ先は長いが負けるわけにはいかない。

溢れんばかりの弓道があれば、全ては上手くいくのだ!



「モノローグと共に走っていたら……どこに来てしまったのでしょうか? つと、あれは……」

いつの間にか外に出ていた海未はプールに辿りついていた。

時期外れなのに、何故かプールには水が溜まっている。

だが、海未にはその理由について考える暇は与えられなかった。

「次は凧の番だにや!!」

「その声は凧!? しかも競泳用の水着ということは一!」

「そう! 凧との対決は水泳五十メートル対決だよ!! これなら海未ちゃんにも勝てる可能性が高いにや!」

「第四戦! 園田海未対星空凧! 勝負内容は水泳五十メートル対決! 二人共準備はいい!?」

そこまで来て、海未は自分の恰好に気づく。

運動能力的には五分と五分。だが、水着があるのとないのとは、その速度には天と地の差がありけり。

——どうする海未!? 退くか、征くか!!

「切るしかないようですね。必勝への鯉口を」

「え、海未ちゃん着替えなくてええの?」

「それだと凧が勝ちちゃうよ? 勝ちちゃっていいのかにや?」

「無論、負けるつもりはありません。そして着替える必要も無いのですよ」

その溢れる自信に、流星のノゾミンも止める訳にはいかなかった。

武士の背を押さずして何が日本女兒なのだ。既に号令の為の右手は天へと屹立していた。

「よーい! ドン!」

「海未ちゃんに絶対勝つにやー!!!」

高校生の水泳大会における五十メートルの平均タイムは二十七秒くらいとのこと。

星空凧、その類まれなる身体能力から繰り出されるクロールはプールの水を掻き分け、魚のようにすいすいと進んでいく。

(ふふふ。泳ぎにも自信があるんだよね! それに海未ちゃんは制服! どうするつもりかは分からなかったけど、これなら海未ちゃんも簡単には……!)

などと言っている間に星空凧、残り二メートル。否、たった今ゴールをした!

「はあ……はあ……」

水から上がった凧はまだ泳いでいるであろう海未の方へ振り向いた。

あんな泳ぎにくい恰好では一体どこを泳いでいるのだろうか。その口元には少しばかりの笑みがたたえられていた。

「——水の方を見てどうしたのですか凧？ 私はここです」

仁王立ちをしながら園田海未はそこにいた。

予想外の事態に、凧は戸惑いを隠せない。

「え!? 海未ちゃんが……もう上がっている!? で、でもきつと泳げなかっただけで凧の泳ぎを見ていただけなんだよね?」

第四戦!

園田海未対星空凧!

結果!

園田海未! 大勝利!!

「なんでー!? 何でなの希ちゃん!?」

「騒いではいけませんよ凧。それに、私はちゃんと勝利条件を満たしました!」

「うっそだー! そもそも海未ちゃん濡れてないにやあー!」

「なるほど。つまり、私が濡れずに勝利条件を満たした泳法を見せれば納得してくれますね?」

こくんと頷いた凧を確認した海未は早速もう一度泳ぐための準備を始める。

軽く体操。特に腕を柔軟にほぐす。

深呼吸をし、全てを整えた園田海未——仕る!

「キエエエエエエエ!!!」

気合一閃。

振り下ろされた手刀はその余りの速度に音と動作があべこべのままプールの水へと着弾する。

その瞬間、星空凧は奇跡を目の当たりにする！

「プールの水が割れたにゃー!!!」

手刀の空圧はプールの水を押し退け、やがて底まで見えてしまった。

「これは……もしかして」

その光景を凧は確かに知っていた！

——モーセ。

今しがた海未が起こした出来事は世界的にとても有名なかの聖人モーセが海を割ったことと全く同じだったのだ。

「ここからですよ凧！ シャウオーワオツ!!!」

そこで呆けている海未ではない。全力ダツシユ。すぐさま二十五メートルまで行き、タツチ、そして折り返す。

園田海未の持つ優秀な運動能力を以てすれば、瞬きしている間に五十メートルを「泳ぎ終える」ことなど朝飯前である。

海未、高く飛び上がり、悠々と凧とノゾミンの間へ着地した。

「まあ、こういうことですよ凧」

「すごい！ けど、これは水泳じゃないような……」

「いいえ凧。私は確かに水泳をしました」

「嘘！ 泳いでいないにゃー!!」

子に言っただけ聞かせる母のように、海未は優しく諭す。

「私たち人間は人生という荒波を泳いでいる。そして私は今、制服で凧、貴方に勝つという波へ挑みました。これ以上の「水泳」は果たして——あるのでしょうかね？」

効いた。今の一言は星空凧の胸を確かに打った。

これ以上はもう、勝敗や方法について追及しようとも思えないほどに。

「凜の……負けだにや」

「結局制服でガツチガチに装備している凜ちゃんに勝ったんやね、海未ちゃん」

「上手く事が運んで良かったです。正直こればかりはもうちよつと追及されたら殴らなければいけませんでしたので」

「海未ちゃんって結構武闘派なんやね」

これで残りは四人。少しばかりの呼吸が乱れてしまったが、まだやれる。

この程度で弱音を吐く園田海未ではないのだ。

「……ついアテもなく歩いてしまっていますね」

次の獲物を求め、海未は再び校舎内を闊歩する。

五人目は既に決めている。後は「彼女」を探すのみ。

「見つけたチカ！」

「このシベリア永久凍土のような声は！　とうとう来ましたね！　絵里!!」

絢瀬絵里！

かしくくて、かわいい最強無敵の元生徒会長の姿が、そこにあった。

何やらとてつもなく自信満々の様子。

「聞けば色々とやらかしているようね！　この絢瀬絵里が引導を渡してくれるわ！」

絢瀬絵里と言えば、ファンが少なからずいるという超有名人。にして、女子が好きな女子ランキングナンバーワン。

そんな彼女の口から飛び出るには些か荒っぽい気がするが、そこはあえて聞き流す。

肝心なのはこの後の勝負の流れとその展開。

「第五戦！　園田海未対絢瀬絵里！　エリち、勝負内容は何!？」

「ちよつと待ってください！」

「え、どうしたの海未ちゃん？」

言うや否や、海未は絵里を呼びつける。

流石の彼女も突然の海未の行為に、何も考えることなく素直に近づいた。

「どうしたの?」

「いえ、ただ勝負をする前に、絵里に言っておかなくてはならないことがあります」

「言っておかなくてはならないこと……?」

「ええ、実は亜里沙と今週の日曜日、買い物に付き合う約束をしていたのですよ」

「亜里沙と? へえ良いわね。それがどうかしたの?」

その瞬間、海未はともうら若き乙女がしてはいけない顔をしていたことを、ノゾミンは確かに見ていた。

「そんな私が絵里。貴方と戦って万が一にでも負けたとあれば、私はきつとシヨックを受けるでしょう」

「言っていることが、見えないわね」

「その結果、私はもしかしたら亜里沙に大変悲しい思いをさせてしまうかもしれません」

「なあっ!?!」

—— O D O S H I .

日本古来の由緒正しき W A B I S A B I が、そこには確かに存在していた。

園田海未は何だかんだで絵里相手には苦戦を強いられると予想している。もちろん最後には勝つつもりしかないのだが、万全を期せるなら期すのが武士の作法であろう。

「ひ、卑怯よ海未!」

「卑怯!? そんな人聞きの悪いことは言わないでください! 私は真剣に喋っているのですよ! 反省してください!」

「……ごめんなさい」

「よろしい。それで、絵里はどうしたいのですか? 私と戦うか、私と戦うことによって亜里沙を悲しませてしまうのか」

傍から聞いていたノゾミンは冷汗が止まらなかった。

こんな二択があつてないような選択肢は選択肢ではない。

「うう……私はどうしたら」

この手のODDISHIに関しては考えるまでもなく“NO”を突き付けてやるのが正しい選択である。だが、出来ない。あろうことに身内を人質に取られてしまえば、そんな選択は出来ないのだ。

「失礼。底意地が悪かったですね絵里」

「海未……」

優しく絵里の肩に手を置く海未。

絵里から見れば天使のように見えたのだろう。だが、ノゾミンから見れば質の悪い悪魔にしか見えなかった。

「私は別に絵里や亜里沙を傷つけるつもりなど毛頭ありません。ただ、一言負けましたと言ってくれただけで全てが済むのです」

「あれ、これ勝負してるんだよね？」

ノゾミンの言葉には一切聞く耳持たず、海未は畳みかける。

「一緒に言ってみましょう。一度だけ。一度だけで良いですから」

「一度だけ、なら……」

「ありがとうございます！ では、行きますよ。せーの——」

目を合わせ、タイミングを合わせ、“二人”は言った。

「負けました」

「はい!!! 聞きましたね!? ノゾミン!」

第五戦！

園田海未対絢瀬絵里！

結果！

園田海未！ 大勝利！！

「ええ……これでいいの海未ちゃんは」

「無論です。勝利宣言を聞ければ私は大満足なのですよ」

「鬼すぎる……」

「引いてる暇はないですよノゾミン。次の相手はもう決まっているの

ですから」

目と目が合い、ノゾミンは得心した。

「ふ、なら三十分後にまた現れるで！」

「ふ、やはり分かりますか。お待ちしますよ。」

絵里に何か言われる前に、足早にそこから去った海未は第六の戦場へと足を運んだ。

舌戦に持ち込まれたら不利なことこの上ない。相手の有利な戦場に持ち込まれる事これすなわち敗北と同義なのだ。

邪な心で動いているのではない。園田海未は真の武士道で動いているのだ。

——待つこと三十分。別に場所を教えた訳ではないのに、彼女は現れた。

「今まで勝負を見届けていたひよつとこ仮面ことノゾミンは仮の姿！

今のウチは東條希!!! さあ勝負や海未ちゃん！」

ひよつとこ仮面を脱ぎ捨て、意気揚々と現れたのは、*μ* s の名付け親である東條希。

その背から吹き出る威容はさしもの海未でさえ身構えさせる。

「ウチの勝負は——」

「あ、待つてくださいい希。勝負内容は決めなくていいですよ」

「へ？ 何で？」

「ほら、私つてどうも希のペースに巻き込まれやすいというか、乗せられやすいと言いますか」

「え、あ、うん……？ それがどうしたの？」

「そういう訳なので——」

海未は拳を固めることで希への返答の締めくくりとした。

「殴ります」

「……ごめんもつかい言って」

「殴ります」

「もう一声」

「めちやくちや殴ります」

「何でやー!?!」

世の中は非常なのだ。言外に含ませ、海未はにじり寄る。

「ストップストップストープ!」

「どうしたのですか? なるべく楽に沈めるつもりなので安心してください」

海未の拳に浮かぶ幽鬼が、希の瞳にはしかと視えていた。

「ちよつと待ってよ! それじゃ正々堂々とした勝負じゃないよね!?!」

「へ?」

「へ? じゃないよ! 良い海未ちゃん!? それじゃ『ひきよーもの』になつちやよ!?!」

うっかり「標準語」になっているのにも気づかないまま、希は「正々堂々」という視点での命乞いをすることに一縷の望みをかける。

そんな必死の希の言葉に対し、海未は疑問符を浮かべていた。

「……ひきよーもの、という言葉が良く分かりませんし、希は恐らく思い違いをしています」

「どういうこと?」

「私は最強が決まればそれで言うことは無いですし、そもそも一言も『正々堂々』なんて言つてませんよ」

超音速、いや光速で希は今までの記憶を掘り起こす。言っているはず、言っているはず……言つて、なかった。

希は海未と視線を交わしたまま沈黙する。

「……えへー!」

「うふふ」

再度沈黙。

しばらくした後、希は自分の白いハンカチをシャープペンシルに括り付けた。

「どうか命だけは助けてください」
「よろしい」

第六戦！

園田海未対東條希！

結果！

園田海未！ 大勝利！！

「うう……海未ちゃんを見誤っていたわあ……」

「これも全て弓道のお陰ですね。勝負強さを発揮してしまいましたか……」

去り際の海未の背中に希は声を掛ける。

「海未ちゃん！ 気を付けて！ 次の相手は——」

「私だチュン!!!」

謎の羽毛が舞い吹雪き、中から現れたのは園田海未が二大親友の
翼。

南 ことり！！！！

圧倒的な戦気が風となり、闘気は嵐となり、海未の肌を撫でる。

気を抜けたばあつという間にくず折れてしまいそうな心細さ。だが、確かに園田海未は両の足で地面を掴み取り、天を仰ぐ。

「穂乃果ちゃんを求めて三千里。いつでもどこでもチュンチュンチュン。音ノ木坂学院二年、南ことり見参チュン!!」

「現れましたねことり！」

「真姫ちゃん、にこちゃん、花陽ちゃん、凜ちゃん、絵里ちゃん、希ちゃんがやられちゃった。そしてあとは私とハノケチエンだけ。ハノケチエンはいまいち何が起こっているのか分かっていないみたいだけど、私が最後の砦になればそれで良いよね！」

ことりが自分の後方を指さした。

「この先はもちろんどこか分かるよね？」

「ええ、アイドル研究部の部室です」

「そこにハノケチエンがいるよ！」

「ならば私はそこへと征きます。ことり！ 貴方を倒して!!」

「それでこそ海未ちゃんだよ！」

海未へと忍び寄る気配！

だが、その正体を海未は確かに知っていた！

「第七戦！ 園田海未対南ことり！ 二人共準備はいい!?」

希こと再びノゾミンへと姿を変えた勝負の見届け人が海未とことりの間へ立つ。

「もう突っ込むことはしませんが、頼みましたよノゾミン！」

「任しとき！ さあ勝負の内容は!?」

返答の代わりに、右拳を突き出すことり。その所作に海未は最上級の警戒をする。

これから起こるは血みどろの戦いとも言うのだろうか、心なしかことりが邪悪な笑みを浮かべたようにも見えた海未。

——さあ、勝負の内容は!?

一言一句を聞き逃さぬよう、海未はその瞬間を待ちわびる。

「じゃんけんで勝負だよ！ 恨みつこなしの一回勝負!!」

「引き受けましょうその勝負！」

じゃんけん。単純にして明快。これほど白黒つく勝負は無い。海未にとつて、願ってもない内容だ。

互いが半歩下がり、片手を構える。

シン——と廊下が静寂に包まれる。まるで降り積もる深夜の雪の中に立っているようだ。

勝負の瞬間を待つ二人はさながら侍の決闘。どちらかの刀に血を吸わせなければ終わらぬ背水の陣。

「ようし……」

腕まくりをすることり。その仕草へ海未は気迫を表情へ乗せる。

「ことり敗れたり!!」

「な、何で!？」

「腕まくりは一世一代の勝負への意気込みにして緊張をほぐすもの。対する私は普段通りにリラックスしている。——ことり! 貴方はこの時点で私に臆しているのです!!」

「確かに海未ちゃんの言う通りなのかもしれない……けど私は!」

無言。だが、勝負への意識は確かに燃えている。

南ことりは無心となった。

一点の曇りもない鏡のように。ただ静かに。

——明鏡止水!

齡十六にして、南ことりはその境地へと辿り着いたのだ!

次の瞬間、戦いの火蓋は切って落とされた!

「最初は!」

「グー!」

『じゃんけん! ぽん!!』

見届け人である希の瞳に、神速の攻防が飛び込む——!

三十六回。たった十秒で繰り広げられた『あいこ』の数である。

互いの手の内を読みつくしたかのような打ち合いに、希は気づかない内に流れていた汗を拭った。

(なんて速度!! 見落とささないようにするのがやっとな……!!)

文字通り、瞬きすら許されない。現在——五十六回目の『あいこ』。

「もう諦めて海未ちゃん!」

「いいえ、諦めるのは貴方ですことり! 私には秘策があります!」

「どんな秘策だろうと、私は負けな——!」

「穂乃果の例の写真、格安で譲りますよ?」

「私の負けチュン。参りましたチュン。チュンチュン」

園田海未グー、南ことりチョコキ。八十三回目での決着であった。

「弓道で腕を鍛えていなければ——負けていましたね」

第七戦！

園田海未対南ことり！

結果！

園田海未！ 大勝利！！

「これでことりも倒しました、か」

「ついにここまで来たね海未ちゃん」

「ええ。残るは——」

「行つてあげて海未ちゃん！ そこで海未ちゃんの長い旅が終わるんや！！」

「皆の屍を乗り越えて、私は征きます！」

「死んでないけど頑張つてな——」

七名全てを葬つた海未は走つた。後ろを振り返る事はない。強敵と書いて友達との戦いを越え、彼女は旅の到達を感じ始める。

「着いた」

ついに辿り着くは部室。ここに「あの子」がいる。彼女を越えてこそ、真の最強。最強イズ最強なのだ。

「さあ残り一人！！ 穂乃果！！ いざ私と尋常に——」

「あ、海未ちゃん！ ちょうど良かった！」

μ s最後の一人にして、リーダー。益荒男が女体化した存在とも言える戦乙女——高坂穂乃果。

彼女が笑みを浮かべて海未を見る。

尊さが過ぎる!!!

たったそれだけで海未は尊さの波に溺れそうになり、それはそのまま心停止一步手前という惨状を引き起こしかける。

「っはあ!! はあ……はあ……!!」

「海未ちゃん!? 大丈夫!?」

「ええ。大丈夫です。少しばかり心の臓が止まりかけたくらいなので……」

「それ大丈夫じゃないよね!？」

「だ、大丈夫です。ほんと大丈夫です。ところでちょうど良かったとは?」

「あ、そうそう! ちょっと待ってて!」

そう言うなり、穂乃果は自分の鞆の元へと歩みより、探り始めた。その背中を見ながら、海未は決意を新たに拳を握り締める。非情になりきらなくてはいけない。

これから自分は最強を証明するためにこの親友と一戦を交えるのだ。笑つても泣いても、これが最後。

七人。七人の屍メンバーを乗り越えてきたのだ。今更引きようもない。

穂乃果が戻ってきたその時こそ雌雄を決する時——!

「はいこれ!」

弓矢か鉄砲か、はたまた爆弾か。様々な先制攻撃を意識していたが、海未の瞳に飛び込んできたのは『ほむまん』であった。何を隠そう大好物。

だが、何やら少しばかりいつもの『ほむまん』とは違って見える。

「最近、海未ちゃん疲れてるかなーって思つて。お父さんに教えてもらいながら作つたんだよ!」

「手作り……私に、ですか?」

「さつきもそう言つたじゃーん! ほら、食べよ食べよ! じゃなきゃ、私が食べちゃうよ?」

「あつ、待つてください! 食べます! 食べますとも!」

「じゃあ早くこつちおいでよー! 一緒に食べよー!」

そう言つて笑う穂乃果。その顔を見た海未の中には既に戦意はなかった。

いや、戦意を抱く必要はもうなくなったのだ。

何せ——。

「……ふふ、全く。私はやっぱり穂乃果には——」

最終戦！

園田海未対高坂穂乃果！

結果！

園田海未！

完 全 敗 北 ！ ！ ！

その宣言を待っていたかのように、生徒会室にぞろぞろとメンバーが入って来た。

「あ、いた！ ちょっと海未ーだいぶやってくれたわね？」

真姫が半目になり、

「海未ちゃん、もう落ち着いた？ よかったあ……えへへ」

花陽が笑い、

「海未ちゃん海未ちゃん！ 今度プールの水の割り方教えてにや！」

凜がワクワクし、

「はあ……時折訳分からなくなるわよね海未ったら」

絵里がクールに決め、

「ああ、居たわね海未ィ……今すぐニッコニコシテヤルカラオモテデロニコー」

にこが半ギレになり、

「海未ちゃんにこんなのが出とるよ？ 復活を意味するタロット『審判』。今の海未ちゃんにピッタリやね！」

希が彼女を見据え、

「もー海未ちゃん！ 皆に迷惑かけちゃだめだよ！」
「ことりがプリプリと怒る。」

「皆、すいません。つい最強を決めたくなくなってしまっ……」

ですが、と海未は穂乃果へと視線をやる。

「私は恐らく、一生最強になれることはないようです」

その笑みを見た穂乃果以外のメンバーは全てを察し、静かに微笑み合った。

ほむまんを肴にした宴が始まる。

これは卒業式を寸前に控えた、午後のうたた寝の最中に視る夢のような出来事。覚めたらそれでおしまいの一瞬の泡沫^{うたかた}。

だが、あつたのだ。確かに。そこには。

忘れる事の無いたった一日の乱痴気騒ぎ。

愛おしく、それでいていつまでも抱きしめられる思い出。

「海未ちゃん！ このままじゃ海未ちゃんの分無くなっちゃうよー！？」

「分かっています！ 分かっていますから！ ちゃんと残しておいてくださいー！」

物思いに耽るのはこれでおしまい。

——さあ親愛なる親友の、とつてもおいしいほむまんを思う存分食べましょうか。

——ほむまんの味ですか？ 言うまでもありませんね。

巡り合わせてくれた

いつからこんな人生になってしまったのか。

僕はこんな人生を歩みたかったのだろうか。

人間は皆、こんな人生に夢を見ているのだろうか。

高校を卒業して就職、地元市図をかを離れその後上京して、3年の月日が経とうとしている。

朝は満員電車で揺られ、会社では上司に怒鳴り続けられ、1人最後まで残業。帰りは終電に駆け込む生活。

小中と野球をやり、高校では最高の仲間と出会い軽音でバンドを組んで青春を謳歌していたあの時とは遠くかけ離れた今の僕。

全ての物が日々新しく、毎日輝いていたあの日々。そう遠くない記憶はずなのに何十年も昔に感じる。

野球時代のチームメイトのプロ野球球団へ入団、バンドメンバーのメジャーデビュー、結婚。同級生が出産。毎日毎日、地元に残っている人たちは吉報たちで溢れている。

もう合わせる顔も無くて実家には上京してから1度も帰っていない。

僕も地元に残っていればこの輪の中に入れたのだろうか。

でも、

何故…

何故…

何故僕だけがこんな目に遭わなければいけないんだ…

そうして僕は部屋のベットで1人、仰向けの状態で泣いた。

涙が乾いているうちにもう朝が近づいている。

胃には何も入っていない。何か入れておかなければと思うが、何か作る気も起きない。最後に最後に冷蔵庫の中身を開いたのなんていっただったかも覚えていない。そうならばどの道何も食べる物なんて無い。このまま寝てしまおう。

そろそろ寝なければ明日に響く。明日は会議だ。

明日こそ上司に怒鳴られること無く1日を終えられればいいな。

そう思いながら僕は瞼を閉じた。

朝日が眩しく僕を照らす。

… おかしいな。帰ってきてからカーテンなんて開けてない。いつも眩しさよりも目覚まし時計の音で起きるはずだがそれも鳴らない。

色々とおかしい。寝坊して誰かが叩き起こしに来たのかな…。

「起きてください！… 僕！… 起きてください！学校に遅刻してしまいますよ！」

あれ… この声どこかで聞いたことあるような…。

僕は重い瞼を開け声の主を確かめる。

「やっと起きましたね…。早く顔を洗って、歯を磨いて、朝食を食べて、着替えて、準備をして学校に行きますよ」

凛々しい目と顔付。体は足の先までスラリと細く綺麗だ。そしてなによりも特徴的なのが腰まで伸びている長い髪。

「そうだ、これは夢なんだ…。僕はきつと疲れているんだ…。もう

ひと眠りしたら夢から覚めるさ…。」

僕は彼女を知っている。

国民的アニメとまでなった『ラブライブ!』に登場するキャラクターの1人園田海未そのだうみその人である。

遂に二次元の夢まで見るなんてな。これまで居るはずもない彼女がキスで起こしてくれたら、エプロン姿で朝食の準備をしてくれるなど色々な夢を見てきたがこんなの初めてだ。今日の会議は体調がすぐれないと会社に伝えよう。

「こら!折角起きたのに寝ないでください!… 私が毎朝起こしに来るなんていつもの事でしょう…。どうしたのですか今になって…。最近では穂乃果も1人で起きているのですよ。貴方ももう少し意識を高く持ちなさい」

「…。」

いや、夢に決まっている。だって僕は、僕は…。

僕は…?。

「本当に体調が悪いのですか?熱はありますか?」

そう言っただけ彼女は僕のおでこに自分のおでこを当てて熱を測っている。

とても顔が近い

「…熱はなさそうですね…。他にどこが悪いところはありますか?」

「・・・そうだった!!」

「ひゃッ!」

「ああ・・・ごめん・・・」

急に僕が立ち上がったので海未ちゃんがよろけてしまった
今起こしてくれた海未ちゃんが僕と幼馴染。

仕事の関係で海外に滞在している両親の代わりに毎朝僕を起こし
に来ている。

そして今日は僕が日直の日だ!

急いで学校に行かないと!

なんで僕は夢なんて考えていたんだ。

「朝食はテーブルの上に置いてありますよ。まだ時間には余裕があり
ます。ゆっくり食べてくださいね」

こうして僕のために朝ご飯まで用意してくれている。本当にいい
幼馴染だよ・・・。

「行ってきます」

準備を全て終えた僕は誰も居ない家に出掛けの挨拶を告げて戸締
りをして海未ちゃんと一緒に学校に向かう。よかった。日直には遅
れずに済みそうだ。これも海未ちゃんのお陰だ。

「海未ちゃん・・・いつもありがとう・・・」

「どうしたのですか？いつものしていることですよ？」
「だからだよ…。両親が不在の僕にこうして毎朝をお世話を焼いてくれる…。だから、いつもありがとう！」
「…こうして改めて言われると、少し恥ずかしいですね…。でも良いんですよ。私と僕の関係なのでですから」

僕は本当にいい幼馴染持った…。

海未ちゃんと他愛もない話をしていると2人の女の子の影が見えてきた。

「おっはよー！」

「おはよ〜」

サイドポニーが特徴で元気が取り柄な女の子、高坂穂乃果ちゃん。
右側の髪を輪にして束ねているロングヘアーが特徴でみんなの優しいお姉ちゃん、南ことりちゃん。

海未ちゃんと同じく2人も僕の幼馴染だ。

僕と穂乃果ちゃんのことりちゃんと海未ちゃんは、4人でずっと一緒だ。

「おはようございます」

「おはよう」

「それじゃあ、学校にしゅっぱーつ！」

合流した僕たちは再び学校へと向かう。

??????

『よう僕！おはよう！』

『俺君、おはよう！』

『なあ！昨日のアレ見たか？』

『うん！見た見た！』

『やばかったよなー、あれ！』

??????

なんとも懐かしい学生時代の記憶だ。あの頃に戻れたらいいの
と思う。

けど不思議に思う。

社会人になるまで成長している僕。まだ高校生で幼馴染の女の子
たちと学んでいる僕。

2つの記憶を持つ僕がいる。

どっちが本物の僕なんだ…。

どちらかが本物なのだとしたらもう1つの僕はなんなんだろう
か…。

そうして考え事していると階段を昇れば目の前にはもう学校と
いうところまでたどり着いていた。

「あ、穂乃果ちゃんたちだにゃ！」

階段を登ろうとしていた3人の女の子。

僕たちを見つけたショートヘアが特徴で、語尾に「にゃ」をつけるのが口癖の星空凛ちゃん。

セミショートヘアが特徴で、凛ちゃんの幼馴染の小泉花陽ちゃん。

セミロングヘアで癖っ毛が特徴で、大人びててツンデレな西木野真姫ちゃん。

彼女たち3人はどういう繋がりなのか簡単に説明すると、僕たちが通う音ノ木坂学院の部活動、アイドル研究部の部員で結成されたスクールアイドルグループ『μ's』と言うグループのメンバー。

僕もアイドル研究部に所属しているが、男なのでアイドルとして参加は出来ない。だから僕はあくまで見ているだけの立場。

「僕君大丈夫？少し顔色悪いよ？」

花陽ちゃんが僕を心配して聞いてくれた。

「そう言われればそうね。風邪引いてるなら言いなさいよ。薬渡すから」

真姫ちゃんもまた僕のことを心配してくれている。

嬉しいな本当に……。

『な?????』
『なんだお前!!またこんなミスしたのか!!』

『すみません!!』

『最近たるんでるぞお前!!やる気が足りないんじゃないのか!!お前なんていつでもクビに出来るんだからな!!』

『はい……!もうこのようないことが無い様、最善の注意を払います……!』

ま?????
また思い出された過去の記憶。

僕の上司は例え体調が悪く、病気をしている状態でも出勤させ。その上ミスを絶対許さない人だった。

それに比べてみんなはただ僕の顔色が悪いだけで体調に気遣ってくれる。

今の僕はなんて恵まれているんだ…。

「やはり本当に体調が悪かったのでは無いでしょうか…。無理をしていませんか？」

「大丈夫だよ…。ちよつと考え事していただけだから。心配させてごめんね」

少し立ち止まってしまったが、再び歩きはじめて学校に向かう。と言ってももう階段を上って信号を渡ればすぐなんだけど。

凜ちゃん達は1年生。僕たちは2年生だ。

教室は違う。

「また放課後にね」と3人とは別れた。

教室に鞆を置くと僕は1人職員室に向かった。

…けど少し寄り道して行こう。まだ余裕はある。少しこの学校の中を見てみたい。

「あら、僕じゃない」

3年生の教室まで来ていたようだ。

「絵里ちゃん、希ちゃんとにこちゃんもおはよう」

金髪のロングヘアをシュシュで1つ留めている、ロシアとのクォーターあやせえり 絢瀬絵里ちゃん。

ロングヘアを左右に分けてシュシュで結んでいる、みんなのお母さんとうじょうのみ 東條希ちゃん。

ロングヘアを耳の上部の位置に赤いリボンで結んだツイントールで、 μ , s の中で一番小さい矢澤やざわにこ にこちゃん。

3人とも3年生だ。

μ , s では先輩禁止をしていて、僕も3年生に対しても友達として接している。

「どうしたん？ウチらに何か用でもあった？」

「… ちょっと校舎を歩いてみようと思ってるね」

「アンタどうしたのよ急に… 本当に何かあったんじゃないの？」

「言われてみれば、顔色が少し悪いわね… 保健室に行く？」

「… 大丈夫だよ… 校舎をうろついているのも本当に何となくだから」

「本当に調子悪いんだっいたらはよ言いなよ？」

「ありがとう3人とも… 僕日直だからもう行くね」

「ええ、また放課後ね」

「倒れたりしないよね」

みんな本当にやさしい…。今すぐ泣きそうだ…。

授業を受けるのなんて卒業して以来だ……。社会人になっても毎日勉強の日々だ。誰かに教わることはあっても、こんなに丁寧に教えて貰った記憶なんてない。先生たちって本当にすごかったんだな……。

「あ????」

『お前また宿題やらないで来て……。何度言えばやってくるんだ……。』

『ごめんなさい！……へへっ』

『笑い事じゃない！お前このままだったらテストの点数も悪いは提出物が出てないわで単位だせねーぞ？』

『ええ……。それは困ります』

『だったらせめてテストの点数は取れ。今度のテストで90点以上取ったら単位は出してやる』

『90点!?そんな点数取れないよ……。』

『つたく……。どこがわからないんだ？放課後俺のところまで来い。わかるまでみっちり教えてやる』

『先生……。ありがとうございます！』

「あ????」

あの頃は勉強のことなんて考えずに生きていて、先生にすごく迷惑かけたなあ……。

「じゃあこの問題を……。僕、解いてみる」

本当にあの先生にはお世話になった。おかげで卒業もして進路まで決まった。あの先生今どうしているのかな……。

「おい僕ー！」

「……。は、はい!？」

考え事をしていたせいで先制の話が全く入ってこなかった。びつくりして立ち上がったのでそのまま椅子倒しちゃった……。

「私の話聞いてたか？」

「いえ、聞いてませんでした……」

「ぼーっとして…… まあいい、この問題を解いてみると言ったんだ…… 解けるか？」

「え、えと…… ううううですか？」

「お…… 正解だ。やれば出来るじゃないか。次からちゃんと聞いているんだぞ」

「すみませんでした」

「よしいいぞ座れ」

みんな僕を見て笑っている……。でもなんか嘲笑ってる感じじゃないからそんなにいやな気持ちじゃない。むしろこの学生の時の気持ち懐かしい……。

今日は体育の授業もある。

就職してから運動なんてしただろうか。

体は穂乃果ちゃん達が知っている僕だから思うように動かせる。

野球をやっていた時はこんなに体が動いたのにな……。

「今日の体育はソフトボールをやります！僕は野球経験者だったよね？キャッチャーやって」

こっちの僕も野球をやっていたんだな。そう言えば朝見たときに部屋にキャッチャーミットがあつたな。向こうの僕もキャッチャーだったし、こっちの僕もキャッチャーでやってたんだね。

『お?????』

『おーい！僕！俺の球受けてくれー！』

『分かったー！』

『行くぞー！』

『来ーい！』

部活のアップの時とか、昼休みとかはこうして球受けたりしてたな……。今あの子はプロの世界で活躍してるんだっけな。僕も一緒に

野球を続けていればプロ野球選手になれたのかな……。

学生にとって学校というものは1日の中ですべて長く面倒なこともかもしれない。だけど、一度終わってからまたやってみるとわかる。

勉強できること、学ぶことができるって本当に幸せな事なんだって……。

「僕君！部室に行こう！」

「日直の仕事終わってから行くから先に行ってて」

「わかったじゃあ待ってるねー！」

黒板掃除して、教室の窓閉めて、忘れ物がないか確認……。

よし大丈夫だ。

「… こんか」

ここが彼女たちが過ごした部室… いや、過ごしていく部室。

入るか… つていやちよつと待て！

もしかしたらみんな着替えてるかもしれない。せめてノックしてから入ろう。

コンコン

『はい！』

穂乃果ちゃんの元気な声が返ってくる

「ぼ、僕だけど… 入って大丈夫？」

『大丈夫だよ！早く入ってきなよ』

ドアを開けたらみんな椅子に座って勉強をしているようだった。

「あれ… みんな、練習は？」

「今はテスト期間だから練習は無いよ？」

「え、あ…」

「もしかして忘れてたの？」

そうか、今はテスト期間だったのか。今考えたら朝練とかやったのに今日してなかったな。

「あはは… ちよつとね…」

「駄目だよちゃんと勉強しないと！」

「ごめんよ花陽ちゃん…」

花陽ちゃんに怒られちゃった…。僕よりも1つ下なのにしっかりしてるな…。まあ実際の僕は成人してるんだけどね。

「かよちーん！ここどうすればいいのー!?」

「あつ、ここはね…」

「凜、最初から人に頼らず自分で解いてみなさい」

「頑張つて！穂乃果ちゃん！」

「ここはあ…！ここはあ…！お休み…」

「こら！解いてる途中で…起きてください！」

「じゃあ、にこ…ここは解けるかしら？」

「ええとここは…こうでいいかしら？」

「おおにこつち全問正解！ご褒美にワシワシMAX行つとく？」

なんだよみんな…。テスト勉強してるのに全然真面目にやってないじゃないか…。

?????

『みんなテスト勉強だー！』

『それなりにいい点とってベンチには入れてもらおうぞー！』

『つてお前！早々に寝るなー！…。平均点よりも下回ったら次の試合球拾いだぞー！』

『なあ僕…。この式つてどう応用すればいいんだ？』

『ごめん僕も数学苦手…』

?????

中学生の時はみんなで勉強会開いたりしたっけな…。あの頃は数学はダメだったけど、それ以外は結構真面目にやってたなあ…。

ポタツポタツ

「…え？」

ポタポタポタポタ

どうしてだ？…涙が…涙が止まらない…。

「どう、どうしたの僕くん!?どこか痛い!?ことりといいい所に保健室行く!？」

「…なんでも…無いよ…。ただ、ちよつとね…。」

昔のことを思い出してと言ってしまったら、それは彼女たちにとっては不可解なこと。

今の僕は2人分の記憶を持っていて、その1つが回想しているときの記憶。もう1つは今の僕の記憶。そしてその記憶に野球部や3人の女の子の幼馴染以上に親しい男友達は居なかった。

「…よし！今日はもう勉強は終わりにして、気分をすっきりさせましょー！」

僕が泣き出したことで沈んでしまった空気を絵里ちゃんがリセットするかのよう言い出す。

「え、そんな僕のために悪いよ…。みんな勉強が…」

「いいのよ。みんなここ最近ずっと勉強していたからちよつと疲れちやっただでしょ？だからこれからどこかに遊びに行きましょうー！」
「本当!?やったにゃー！」

勉強を切り上げてやってきたのはゲームセンター。

部活が休みになった日とかは、たまに来てたっけな。

「プリクラ撮るにゃー！」

「いいねえ！」

「プリ、クラ？」

「絵里ちゃん知らないの!？」

「あまりこういうところ来ないから…。」

「じゃあ絵里ちゃんも一緒に撮ろう!…。僕君も入って！」

「え?…。う、うん！」

穂乃果ちゃんに手を引かれてプリクラの中に入る。

撮るの初めてだな…。

「にゃー！」

「うわっ…。」

凜ちゃんと穂乃果ちゃんはポーズをとっていたけど、僕と絵里ちゃんは何もポーズできなかつた。

その後数枚の写真を撮り終えた。今度はデコレーションの方だ。僕は何も書かないけど。

「はいこれ！僕君の分だよ！」

「…。ありがとう」

受け取ったプリクラに写っている僕はとても間抜けな顔をしていた。

「… ふふっ、間抜けな顔だなあ」

「やつと笑った」

「え？」

「今日朝廊下であった時から僕ってばずつと辛そうな顔していたから心配だったのよ…でも良かったこうして笑ってくれて」

ははっ…。

僕は何を悩んでいたんだろう…。

2つ記憶を持っていようと僕は僕じゃないか…。

そして僕はここにいるみんなの友達じゃないか…。

何も悩むことなんてなかったんだ。

それをウジウジ1人で悩んで、僕って本当に情けないな…。

「そうか… 僕のために遊びに連れて行ってくれたんだね…。ありがとう絵里ちゃん」

「まあ大きい理由はそれだけ… 本当は凜と穂乃果が限界を迎えていたのもあったわね…」

「あはは…」

僕は僕なんでもう迷わない。僕はここにいる！

「よーしリズムゲームやろう！真姫ちゃん勝負だ！」

「な、なんで私がそんなこと…」

「ふーん… 負けるのが怖いんだあ…」

「な!? やってやろうじゃない！」

こうして僕たちは日が暮れるまで遊んだ。

「そろそろ時間よ……。ほら帰る準備しなさい」
「うわ、もうこんな時間だ」

外を見ると日が落ちていている。これ以上遅くなるとこの寒い時期に女の子たちにとっては危ない時間になる。

「今日はありがとうみんな……」

「いいんよみんな楽しかったでしょ？」

「ふふっ……。そっか。じゃあ僕もよかった」

帰る道はそれぞれ違う。ゲームセンターを出ると方向はバラバラに別れる。

「また明日ね！」

「明日からはちゃんと勉強よー！」

「分かってるってー！」

「みんな気をつけてー！」

今日は楽しかったなあ……。テストが終わったらまたみんなでこうして遊びたいなあ……。

なんて考えてるともうみんな違う道になる。

「じゃあまた明日！」

「明日もちゃんと起きるんですよ。朝練がないからと言って雪穗に起こしてもらっては将来困りますよ」

「……わ、分かってるよー！」

「気を付けてね。また明日」

そういつて僕も自分の家に足を向けようと思ったとき。

「あ、僕くんちよつと待って〜!」
「ん?」

ことりちゃんに呼び止められた。

「忘れちゃうところだった… はいこれ!」

「何?これ…!」

「僕くんに私たちからのプレゼント!みんなの僕くんが元気になりま
すようについて思いが込められてるよ!」

「ありがとう… 大切にするよ!」

「ありがとう!… じゃあ今度こそまた明日ね〜!」

「じゃあね〜」

ことりちゃんから貰ったものはお守りのようなものだった。

「ただいま」

朝に戸締りした我が家のカギを開けて誰も居ないけど、帰りを知ら
せる挨拶を告げる。

ことりちゃんから貰ったお守りには中に紙が入っていた。

そこには1人1人メッセージが書かれていた。

全部は言い切れないけど、「ファイトだよ!」とか「につっこにつこ
に〜!」とか書かれていた。

たった1日元気がなかっただけで僕にこんなものをくれるなん
て…。みんな本当に…。

ありがとう

もう今日はお風呂に入って寝てしまおう。

僕はお守りを握りしめて瞼を閉じた。

おやすみ…。

ジリリリリリリリリ
!!!!!!

「んんっ…」

聞きなれた目覚ましの音。

僕がほとんど寢床として使っていた部屋。

そうか…。やっぱり夢だったか…。そうだよね…。

「んんー！よし！…ん？」

今日も1日頑張ろうと気張った時に手の中に何かがあった。

それは僕が寝るときに握りしめていたお守りだった。

夢じゃなかったのか…。

夢だったはずだよな…。

なんだったんだ…。

「おっと。会社行く準備しないと」

僕もいつまで経ってもこんなこと続けているわけには行かないな…。

退職届を出して、地元に戻ってみよう…。そしたらまた野球なり、音楽なり、また挑戦してみよう。

ありがとう

女神様！

スクールアイドルが好きでも愛してるのはあなただけ

俺の名前は和佐田剛。スクールアイドルが好きな普通の高校生2年生で、現在は生徒減少によって女子高から共学になった、音ノ木坂学院に通ってるんだ。

今はスクールアイドルグループのμ、sのマネージャーしてるけど最初はそんなつもりはなかったんだ。でもリーダーの穂乃果に強く勧誘されて、μ、sのマネージャーをすることになったんだ。ちなみに俺は学校のみんなからは親しみを込めてツヨって呼ばれてる。

そして今日はμ、sがラブライブの決勝に進出できるかが決まる日。

「それでは結果発表です！第2回ラブライブ本選進出はは…μ、sです！」

この結果を聞いて、会場にいた人たちとμ、sのみんなは喜びの声を上げていた。俺以外は…

もちろんμ、sの決勝進出が嬉しくないわけじゃない。俺がこんな気持ちになってしまったのには理由はあるんだ。

それはμ、sの隣で無理して笑顔を作り、拍手を送っている茶髪のショートヘアーの女の子が原因なんだ。彼女はスクールアイドルグループA—RISEのリーダー、綺羅ツバサさん。

単刀直入に言うと俺はツバサさんに恋してる。俺は高校1年の時に、A—RISEのライブを見に行った時にステージ上に踊るツバサさんの姿に俺は一目惚れしたんだ。

1回だけUTX学院でμ、sがライブした時にツバサさんに直接会って話した時は、もうドキドキしすぎてまともに話すことがなくて。でもそのぐらいツバサさんのことが好きだから…μ、sが決勝進出が決まって嬉しいけど、嬉しくない気持ちになって…

俺がこんな気持ちになっていると、ラブライブの予選が終わった。お客さんがいなくなった後、ライブ衣装から制服姿に着替えたμ、s

のみんなが俺のところへ駆けつけてきた。

「ツヨ君ー！決勝進出だよー！」

「うん、おめでとう。これでラブライブ決勝だね。」

穂乃果が俺の手を両手握りながら言った。

けど俺の脳裏にはさきほどのツバサさんの表情がよぎってしまい、複雑な感情を抱いしまつて…

「ツヨ君？」

「どうしたのですか？」

「どこか体調悪いの？」

「い、いや…大丈夫…大丈夫だから…」

せつかくみんなが優勝したのに、ツバサさんのことを考え過ぎて俺の表情は暗くなってたみたいだ。穂乃果と海未とことりだけじゃなく、他のみんなも僕の様子がおかしいことに気づいたようだ。

「何よ？何か不満があるわけ？」

「ふ、不満なんかじゃないよ！ただ…その…」

「何のよ！はつきり言いなさいよ！」

「に、にこちゃん！真姫ちゃん！落ち着いて！」

花陽が痺れを切らして怒っている二人を落ちつかせてくれた。ごめんね俺の為に…

「ちよつとみんなの前で言うのもアレなんけど…いいかな？」

「ええに決まってるやん。」

「そうよ。水臭いじゃない。」

「ツヨ！凜たち友達でしょ！だから話して欲しいにや！」

「希…絵里…凜…」

3人がそう言った後、俺は他のみんなのほうを見ると全員、首を縦に振ってくれた。どうやら話してもいいみたいだ。

そして俺はツバサさんのことが好きだということ、その好きなツバサさんが無理して拍手が送っているのを見て、もの凄く複雑な気分になってしまったことをみんなに話した。

「そうだったんだ…ツヨ君がツバサさんのこと…」

「ごめん…せつかく決勝進出が決まったのに、こんなこと思ってた…」

でも俺ツバサさんのことは好きだから…どうしてもツバサさんが悲しんでいる姿が見ることができなくて…」

「ううん、いいよ。それより行ってあげなくていいの?」

「え…?」

「きつとツバサさん悲しんでいるよ。だから行ってあげて。」

穂乃果が優しい声音でそう言うと、再びみんなは首を縦に振ってくれた。

「みんな!ありがとう!俺、行って来るよ!」

俺はツバサさんのこと走った。恋人じゃなくてもツバサかさんのじよ傍にいてあげたかったから!

どこにいるかわからないけど、俺はツバサさんを捜す為、色んなところを走った。けどツバサさんはどこにもいなかった。

「はあはあ…」

やっぱりもう家に帰ったのかな…?

とりあえずあその公園で休憩してから、もう1度捜してみよう…俺は人気がない公園に入った。とりあえず座って休みたいからベンチを捜した。

遠目でベンチを見つけるとそこに人が座っていた。こんな時間に小さな公園に誰がいるんだろう?そう思いながらもベンチに向かった。

そこにいたのは…

「ツバサさん…?」

UTX学院の制服を着て、一人で泣いているツバサさんがいた。

「和佐田君…?どうしてここに…?」

「ツバサさんを捜してたんです。」

「私を…？」

「はい。その前にこれ使ってください。」

「あ、ありがとう…」

俺はポケットからハンカチを取り出すとツバサさんに渡した。涙を拭いた後、隣いいですか？と尋ねるとツバサさんは首を縦に振ってくれた。

しばらく沈黙が続いていたけど、ツバサさんが話を切り出してきた。

「ラブライブ決勝進出おめでとう。」

「ありがとうございます。あの…残念でしたね…」

「いいのよ。終わったことをいつまでも気にしても仕方ないわ。」

「ツバサさん…」

そう言うツバサさんだったが、やっぱりまだ無理してるようだった。俺は慰めの言葉をかけてあげようと思ったけど、何を言ってあげればいいのかわからなかった。

「それで…どうして私に会いに来たの？」

「心配だったんです。μ、sが決勝進出が決まった時に、ツバサさん無理して笑ってたから。」

「変わってるわね。μ、sが決勝進出してるのに、私のことを心配してくれるなんて。」

「確かに変かもしれませんが。でも…友達がこんな苦しい思いしてるのを黙って見ることもなんて俺にはできないんです！」

「友達…」

「はい！μ、sとA—RISEはライバル関係だったけど、恨みとかそういうのがあったわけじゃないですから！だから友達です！」

俺がそう言うのと、ツバサさんは驚いた表情をしていたけど、少しだけ笑顔になった。

「ありがとう。なんかちよつとだけ元気が出たわ。」

「!!／／／」

ずっと暗い表情かおしていたツバサさんが少しだけ笑顔になってくれた。笑顔になったツバサさんを見て、俺はドキドキしちゃった。

でも少しでも元気になってくれてよかった。

「優しいのね和佐田君は。」

「そんなんじゃないありません。さつきも言いましたけど、俺は友達が苦しい思いをしてるのを黙って見ることなんて俺にはできないだけなんです。それに…」

「それに？」

「特にツバサさんの暗い表情そんなかおをしているのを見るのは嫌なんです。」

「特に？どうして？」

「えつと…!!／／／その…!!／／／」

や、やばい！つい口を滑らせちゃった！どうしよう！

「和佐田君？」

やばい！ツバサさんが不審がつてる！俺はなんと誤魔化さないと！そう思っただけと考えたけど、何も思いつかなかった…本当にどうしよう…

窮地に追い込まれた俺だったけど、ずっと伝えたかった想いを伝えよう！俺は心の中で決めた。俺は勇気を振り絞って想いを伝える。

「ツ…の…こ…が…き…から…!!／／／」

「え？何て言ったの？」

俺は恥ずかしさのあまり声が小さくなってしまい、ツバサさんに耳に届かなかったようだ。

今度は大きく深呼吸をしてから、再び想いを伝える。

「ツバサさんのことが好きだから…!!／／／」

「え!？」

「1年の頃に見たライブで、ステージ上で踊るツバサさんの姿に惚れたんです…!!／／／それからずっとツバサさんのことを考えるようになって…!!／／／」

といたう言っちゃった！俺は恥ずかしさのあまり、顔を俯かせてしまったけど、ゆっくりと顔を上げてツバサさんの顔を見た。

ツバサさんの顔を見ると、両目から涙を流していた。大変だ！謝らないと！

「ごごごめんなさい！そんなつもりはなかったんです！」

ツバサさんおんを泣かせちゃった！最低だ！

俺は絶対に嫌われた…もうダメだと思つた時だった…

「嬉しいの。」

「え…？」

ツバサさんが涙声でそう言った。俺はツバサさんが嬉しいと言つたことに、俺は驚きを隠すことができなかつた。

さらにツバサさんは続ける。

「ライバルの私を心配してくれて…私を励ます為に私のことを捜してくれて…そんな優しいあなたに告白されて嬉しいの…」

そう言うツバサさんは、俺の胸に顔をうずめ、両腕を背中にまわしてきた。

「ちよ!?／＼／ツバサさん!?／＼／」

「少しの間でいいの…このままでいさせて…」

「え…？」

「もう終わったことつてさっき言ったけど、やっぱり悔しいの！μsに負けたくなくて、今まで頑張つて練習したのに負けて！今年がスクールアイドルとして活動できる最後の年だったのに！Aわ—RたIちSちEを応援してくれたファンの人にもあんじゅにも英玲奈にも申し訳なくつて！」

ツバサさんはずつと思つていたことを語り始めた。

俺は何を言えばいいかわからなかつたから、ツバサさんの頭を優しく撫でてあげた。

「和佐田君…？」

「俺にはこうしてあげることしかできません。だから今は泣いてください。ツバサさん気が済むまで何時間でも、何日でもいますから。また笑顔を見せてください。」

「和佐田君…」

俺がそう言うツバサさんの泣き声が公園に木霊した。

俺はただただ黙つて、ツバサさんの頭を撫でてあげた。

30分ぐらいしてツバサさんが落ち着いた。おもいつきり泣いたから、スツキリしてみたんだ。

「ありがとう和佐田君。おかげでスッキリしたわ。」

「ツバサさんが元気になってくれてよかったです。」

本当によかった…俺の告白を聞いて涙を流した時はヒヤツとしたけど元気になってくれて。あ…告白の返事どうしよう…まっいつかツバサさんが元気になってくれたし。

「そうそう。さっきの返事だけどね。」

「いや!!／／あれは!!／／／」

返事を聞くのが怖くて俺は慌てて、忘れてくださいって言おうとした。けどその必要はなかった。

だって、

「ん…」

ツバサさんが俺の唇を奪ったから…って！えええええええええええ!!／／／何で!?!／／／何で!?!／／／

少しするとツバサさんは自分の唇を俺の唇を離れた。

「あ、あの!!／／／今は…!?!／／／」

「これが私の答えよ。私、あなたに惚れちゃったわ。」

「ええええええ!!／／／」

とびっきりの笑顔でそう言われて、俺は驚きの声を上げてしまった。そんな俺を見て、ツバサさんはクスクスと笑っていた。

「もう、あなたが告白したんでしょ。何をそんなに驚いてるの?」

「そんなこと言ったって!?!／／／というか本当に俺でいいんですか!?!／／／」

「当たり前じゃない。好きじゃなかったら、私のファーストキスをあげるなんてことしないわ。」

「ファーストキス…!!／／／」

ファーストキスという単語を聞いて、たださえ早かった心拍数が、さらに早くなっていたのがわかった。

「どうしたの?私じゃ不満?」

「そんなことありません!俺にとってツバサさんほど可愛い女の子はいません!俺の命の代えても護ります!」

「フフツ!ありがとう。」

か、可愛い〜!!俺、本当にツバサさんと付き合えるんだ!

俺がツバサさんのあまりの可愛さにデレデレしていると、

「というわけで明日、私とデートね!ツヨ!」

「え!?!」

なんか勝手にデートのすることが決められちゃったんだけど!?それに急にツヨって呼ばれてるし!まあ:別にいいか。

こうして俺はずっと好きだったツバサさんと付き合うことになったんだ。ただ次の日、デートしたのはいいけど1日中、ツバサさんに振り回されて大変だった:でも楽しかったからいいか。

俺はスクールアイドルが好きだけど、愛しているのはあなただけです。ツバサさん。

深き海底に眠る

とあるマンションの一室にて、カーテンの閉め切られた真つ暗な部屋で、黒い装束に身を纏い、軽く結わえた頭のとっぺんに黒い羽を櫛のように刺した少女は高らかに告げる。

「さあ、リトルデーモン達よ！ かの星が真に正しき位置に座した時、世界の終焉の時が訪れる。その時、墮天使ヨハネの墮天の力が真に目覚め、皆を導くことでしょう！」

少女はふつとロウソクを吹き消し、目の前のパソコンを操作して動画配信サイトの生放送をストップした。

そして、生放送の閲覧数を見て少女は満足気に嘆息する。

ああ……今日もまた私のリトルデーモン達が増えたのだと。

そんな少々困った趣味を持つ少女の名は「墮天使ヨハネ」……ではなく、津島善子^{つしまよしこ}。

ただ少し、中二病という不治の病に罹っているだけの、至って普通の少女である。

そんな少女は、趣味である生放送配信のチャンネル登録者数を眺めながらため息交じりに呟く。

「それにしても最近、リトルデーモンがあまり増えないわね……」

当然、善子にとってはチャンネル登録をしてくれるファン——通称リトルデーモンは、一人でも増えてくれたら嬉しいのだけれども、そこは人の性、どうしても統計数値による結果に気を取られずにはいられないのだった。

「さて、どうしたもんだか……ちよつと趣向を変えて、リクエストに積極的に応えてみようかしら……ううん、ダメ！ ダメよヨハネ！ 墮天使ヨハネは愛想をふりまくような存在ではないわ！ だから私は、決して媚びない！」

そう力強く宣言した善子の元に、一通のメッセージが届いた。

痛可愛い生放送配信者『ヨハネ』としてそこそこ名が売れている彼女には、リトルデーモン達からのメッセージが届く事は珍しくないのだが、今回の宛先人は少し変わっていた。

【千の貌を持つリトルデーモン】様よりメッセージが届きました。

「さんの……え？ 何て読むのこの漢字？ か……かお？ 随分と変わった名前のリトルデーモンね」

善子は訝しみつつも、そのメッセージを開いた。

そして、そこに書かれていた文章を一目みて首を傾げる。

「なにこれ……イタズラ？」

そこには、日本語で書いてあるのにも関わらず、意味不明な言語の羅列が延々と刻まれていた。

活字を読み慣れていない善子はすぐさま読むのをやめようと思った。がしかし、意味が分からないはずなのに、その文字の羅列にいつの間にか夢中になって読み進めている自分に気が付く。

「あれ、おかしい……どうして、画面から目が離せないの……？ 私、何、してるんだっけ……？」

そうしていると彼女は、まるで頭の中で霧がかかったかのように他の事を何も考えられなくなっていった。

しかもその文字列は、読めば読むほどに書き手の狂った精神が読み手の精神を犯すかのように浸食する程、狂気に満ちた内容だった。

「あ……あ……いやあ……」

善子は自分の中の理性と呼べるものが食い荒らされていくのを感じながらも、しかしパソコンの画面から目を逸らす事が出来なかった。

そして、彼女はその意味不明な文字列の一節を、熱に浮かされたような表情で呟く。

「ふん……ぐるい……むぐるうなふ……くとうるう……」

その瞬間、ガクリとまるで糸の切れたマリオネットのように善子はパソコンのデスクに突っ伏し、朦朧とする意識の中で、彼女はたまたま目に入った友達と撮ったプリクラ写真を見つめ、かすれるような

弱々しい声で呟く。

「たす、けて……ルビィ……花……丸……」

そして、善子の意識は完全に闇に溶け――

――そして、消えた。



ポタリ。

頬を打つ水雫に、意識を覚醒させる二人の制服姿の少女。

「ひゃっ！ 冷たい……雨漏りずらっ？」

「ピギィ！ ……っ、つめたい……」

目を覚まし、顔を上げた二人はお互いに目を合わせる。

そしてさつきとは先程とは違う意味で驚愕の声を上げる。

「えっ！ な、なんでマルの部屋にルビィちゃんが居る……ずらっ？」

「は、花丸ちゃん!? なんで花丸ちゃんがルビィの部屋に？ ルビィ、

昨日花丸ちゃんの家にお泊まりしたっけ……？」

そう言い合った所で、二人はゆっくり周囲を見回す。

自分達は何か、前提条件からして大きく間違えている予感がしたからだ。

所々に苔がむした黒いレンガに覆われた四方の壁。

学校の教室ぐらいの広さなのに一切窓がなく、光源がないにも関わらず薄暗く照らされた室内。

じめじめと蒸し暑い湿度に、時折水雫が滴る真っ黒い天井。

そして極め付けには、部屋全体に充満している磯の香りと生魚が腐ったような匂いが混ざったような最悪の異臭。

二人が目の当たりにしたのは、この場所は自分達がつい先ほどまで眠っていた自室の暖かな布団の中とは、まるで違う場所だと気付くには十分過ぎる光景だった。

「ぴ……ぴギイイイイー!!!」

「ず……ずらああああー!!!??」

そのあまりな非現実さに、二人が思わずそう叫んでしまったのも無理もない話だろう。

ピギイと奇声を上げながら涙目になる赤い髪のショートツイン
テールの少女——黒澤ルビイ。

彼女は親友である栗色のロングヘアの少女——国木田花丸の肩
を掴んで勢いよく揺さぶった。

「ど、どどどどどどうしよう花丸ちゃん!? ルビイ達……誘拐され
ちやつたよおおおー!!」

「お、おおお落ち着くずら、ルビイちゃん。ま、まだマル達が誘拐され
たと決まったわけじゃ……」

「こんなの誘拐に決まってるよお! じゃなかったらさつきまで自分
の部屋で寝てたはずなのに、こんな所に居るはずないよ! どうしよ
う花丸ちゃん……ルビイ達、これから犯人さんに酷い目に遭わされ
ちやうんだあ……! うわああー!」

「泣かないでルビイちゃん! きつと今頃みんなマル達を探してるに
決まってるずら……」

ついには大きな声で軽く発狂したかのように泣き始めてしまった
ルビイに、花丸は慌ててその背中をさすりながら宥める。

そしてしばらくし、ようやく落ち着いたルビイを見て花丸はほっと
胸を撫で下ろす。

「やっと落ち着いた? ルビイちゃん」

「う、うん……それにしても、ここはどこ?」

「……分からないずら。酷い匂いだけど、魚と海の匂いがするから海
の近くだと思う……うわあ、それにしても床が湿ってたせいで、制服

がびちやびちやずら……」

そう言いながら花丸は、先程まで倒れていた床の湿り気で濡れた制服を見てため息をつく。

「どこかで乾かせたらいいんだけど………あれ？」

しかし、そこで運悪くも彼女は、気付かない方が良かった事実思いついてしまう。

「……………ず、ずらあ……………」

「ど、どうしたの、花丸ちゃん？」

「う……………ううん……………なんでもない。き、気にしないで、ルビイちゃん」心配するルビイの声に、花丸は必死で湧き上がる恐怖に耐え、この事実気付いていない友達に自分と同じ恐怖を与えないために口を閉じた。

気付いた事実は単純に、さつきまで寝ていた筈なのに自分は何故今制服を着ているのかという事。

花丸は眠る時はパジャマを着て眠っていた。つまり何者かが一度、パジャマから制服に着替えさせたことを意味する。

見ず知らずの人間に服を一度脱がされたかもしれない生理的悪寒と、そして、そんな事態に陥っていたのに目を覚ませなかったという不可解な事実。

その両方の恐怖を感じ花丸は、もしかしたら今自分達は誘拐どころではなく、さらに恐ろしく理解が及ばない範疇の事態に陥っているのではないかという考えに思い当たってしまったのだ。

「……………？ 花丸ちゃんが大丈夫なら良いけど……………」

「それより……………この場所を調べないといけないぞら」

花丸は改めて落ち着いて周囲を見回した。

先程は壁の色に同化していて見えなかったが、正面の壁に黒く錆びた鉄の扉があるのを発見した。

そして、その扉の横にこれまた背景と同化して見えなかったのか、苔がびっしりと生えた机のような物体があった。

花丸は見つけた情報をルビイに共有するために口を開く。

「向こうに扉と……………それと、机？ みたいなのがあるぞら」

「本当だ、扉がある……ルビイ達出られるの？」

「それは調べてみないと分からないかも……でも、なんだかあの扉……不気味な感じが……」

「い、行ってみよう、花丸ちゃん」

「うん……わかったぞ。一緒に行こうルビイちゃん」

二人は立ちあがり、恐る恐る歩きながら扉へと向かう。

そしてたどり着き、近くで見ると黒く錆びた鉄の扉は、まるで出口というより更なる恐ろしい世界への入り口のような不気味さがより一層感じられ、二人は固唾を呑んだ。

そして二人はせーのでドアノブを掴み、そして思い切ってドアノブを捻る。

しかし、無常にも鉄の扉は鍵がかかっていたようで、全く開く気配が無かった。

「……開かないね」

「……そりゃあそうだよね、だってマル達は誘拐されたんだよ、閉じ込められてるのが当たり前すら」

「でも、鍵があつたら開けられそうだよね。鍵……ないのかな？」

「そういえば……そっちに机みたいなものがあるすら。もしかしたら、調べたら何かあるかも……」

そう言い、花丸は苔でびっしりと覆われた腐りかけの木製の机を見た。

すると、その机の上には古い羊皮紙のような紙が置かれていた。

それを花丸と同じく見たルビイが口を開く。

「……もしかして、犯人さんからの要求の書置き？」

「と、とにかく読んでみるすら……」

花丸は恐る恐る羊皮紙に手を伸ばし、その書き置きを読んだ。

そこにはこう書かれていた。

ようこそ、深い深い海底の水槽へ

招待された君たちはおめでとう、彼らの仲間入りだ

それが嫌なら一時間以内に、この水槽から逃げろ

方法はその場所に居る君たちの友が知っている。

「……何、これ？　これが要求文……？」

意味不明な文書に首を傾げていると、その羊皮紙の裏からヒラリと一枚の紙のような物が落ちた。

それを拾い上げたルビイは、その紙が写真だと気づき確認すると、一瞬でその顔を真っ青にさせた。

「は……花丸ちゃん！　見てこれ！」

「な、なんぞら!？」

ルビイの様子に驚いた花丸は、写真を急いで見るとそこには――

両側に篝火が焚かれた祭壇と、そしてその上で生気を失ったような表情で暗い瞳を見開いた、黒衣の少女の姿があった。

その少女の名前を二人は良く知っていた。

何故なら、その少女は二人の大切な友達である津島善子だったのだから。

「よ……善子ちゃん!？」

「ど、どうしよう花丸ちゃん！　善子ちゃんもルビイ達と同じように誘拐されちゃったの!？」

「分からないけど……でも、こんな写真があるってことは、少なくとも善子ちゃんに犯人がなにかしたって事は確かです」

「そんな……善子ちゃん……」

「……とにかく、じつとなんてしてられないよ。犯人が逃げろって言ってるんだから、早くこんな所逃げて善子ちゃんを助けにいきましょう！」

そう言って花丸は、机に鍵がないかどうか必死で探し始めた。

机の上にびっしりと張りついた苔を祓い机の上に無い事を確認すると、木が腐食して開きにくくなった引き出しを懸命に引き開ける。すると、そこに黒く錆びた小さな鍵が入っていた。

「あつたずらー！」

「す、すごい、花丸ちゃん。これでここから出られるんだね！」

花丸は急いで鍵を扉に差し込み回すと、鍵は無事合っていたようにで扉の鍵が開かれる音がした。

「急ごう、善子ちゃんが待ってるずらー！」

「うんっ！」

そうして二人は力を合わせ、錆びついた扉を一緒にこじ開けようと、内側に少し扉をあけた。

その瞬間だった。

「うっ……なにこれ……」

「これは……ひどいずら……」

扉の隙間から、猛烈な魚の腐ったような腐臭が漂う。

この部屋に漂う匂いの発生源は、この部屋からだ二人はすぐに察する事が出来た。

「……開けるよ、ルビィちゃん？」

「う、うん……いいよ」

そうして二人は、恐る恐る扉を内開きに開けた。

そんな二人の目に飛び込んできた光景は、教室ぐらいの広さの床一面に埋め尽くされた、魚の腐りきった死骸だった。

床に散らばり生臭い腐臭を漂わせた魚の骸の山は、その濁った目でギョロリと入って来た自分達を睨みつけられるような錯覚を感じさせる。

「ひう……！」

「ピギッ……」

とても不気味で異様な部屋だったが、あらかじめ身構えていた二人は少し声を漏らすだけで恐怖に打ち勝つことができた。

そして二人は鼻を抑えながら怖々とその部屋に足を踏み入れる。

「なにこの部屋、気持ち悪い……」

「……早く抜けようルビィちゃん、あんまり長い時間ここに居たくないずら」

「うん……そうだね」

二人は正面にある最初の部屋のような錆びた鉄扉に向かって、魚を踏みつけないように慎重にかつ足早に歩を進めた。

扉にたどり着いた二人はすぐにドアノブに手をかけようとしたが、そこで一瞬花丸は思い留まった。

この先が外に繋がっていたらいいが、もし外ではなくまたこの部屋のようにな気味な部屋なら恐ろしい。少し開ける前に注意した方がいいだろう。

そう考えた花丸は扉を開ける前にルビイに断りを入れ、そつと扉に聞き耳を立てた。

そうすると、なんと扉の先から

ペタリ、ペタリ、ペタリ、と湿った足音が、こちらに向かって歩いてくる音が聞こえてくるではないか。

マズい、見つかったら逃げてしまったのがバレてしまう。花丸は顔から血の気が引くのを感じながら、ルビイに向かって言う。

「誰かがこの部屋に入ってきて来るよ」

「えっ……早く隠れなきゃ！」

「で、でも隠れられる場所なんてこの部屋には……そうずら！ ルビイちゃん、こっちへ」

花丸はルビイの手を引き、一緒に扉の隣にある壁に背を当てて張り付いた。

そして手で自分の口と鼻を塞いで息を殺し、ルビイにも同じようにするよう指示した。

しかし当然、ただ壁に張り付いているだけなので遮蔽物などは何もなく、もし入って来た者が横を向けばすぐに見つかってしまうだろう。

「え……こんなの隠れてないよ、花丸ちゃん……！」

「いいから、静かにするぞ……マルを信じて、ルビイちゃん」

「わ、わかった……」

そんな選択をした友人にルビイは慌てて反対したが、花丸の真剣な目を見て従う決心を固める。

そうして二人が息を殺した、その後僅か数秒後。

足音の主は扉を開き、二人が居る部屋の中に入って来てしまった。
(も、もうダメ……！……って、あれ？)

扉が開いた音がして思わず目を閉じてしまったルビイは、暫くしても何も起きない事に驚き、目を開く。

すると見えたのは、外側から内に向かって開いた扉によつて発生した死角に、上手く隠れる事に成功した自分達の姿だった。

狙い通り隠れる事に成功した花丸は、心の底から安堵する。

前の部屋が内開きの扉だったからとはいえ、この扉もそうだという確証はなかった。正直賭けだったものの、花丸は見事賭けに勝つたのだ。

(すごい花丸ちゃん……)

(油断しないでルビイちゃん、入って来た人がマル達に気づかないとは限らないから、いつでも逃げられるようにしておこう)

(わ、わかった……)

二人はそうアイコンタクトを交わし、入って来た者の動向を目ではなく耳で探る。

幸いなことに侵入者は扉を開きっぱなしにして真つすぐ歩き始めたので、二人を隠す扉はまだあった。しかしその所為で二人も相手の姿を視認する事ができないのだ。

侵入者は、ペタリ、ペタリ、と足音をさせながら遠ざかってゆく、どうやら二人が最初に居た部屋へ向かっているようだった。

(ルビイちゃん、今のうちにこっそり抜け出して先に進もう)

花丸はジェスチャーでルビイにそう伝え、ルビイはそれに頷いた。そして二人は勇気を出し、ソロリソロリと物音を立てないように、扉の影から抜け出した。

その時だった。

扉の影から出るという事は、同然扉で遮られていた視界が開けるといふ事。

それが致命的だった。

そう、二人は目撃してしまったのだ、侵入者の姿を。

“ソイツ”は全体的に灰色がかった緑色で腹部だけが白く、皮膚全

体が光ってツルツルしていた。

背骨にはまるで魚の背ビレのような隆起部がありその周りはウロコに覆われ、首の部分には左右にパクパクと開くエラがあり、剥き出しの手と足には水かきと鋭い鉤爪が鈍い輝きを放っていた。

そして、恐る恐る見上げた頭部はまさしく、魚としか形容できないような姿をしていた。

侵入者は、大柄な男でも凶悪な面をした悪人でもなかった。

人の形をした、魚のバケモノだったのだ。

「ずらあああああー！！！！」

「ピギイイイイー！！！！」

そのあまりにも常識を超えた、名状することも出来ない恐怖を前にして二人は我慢できずに叫んでしまう。

その瞬間、バケモノは顔を二人の方に向け、ギョロリと飛び出た二つの眼球で花丸たちを見据え

「■■■■■■■■■■！！」

訳の分からない、言葉にならないような声を発しながら、バケモノは部屋の中央から二人に迫る。

ルビイは涙目になりながら必死で扉に駆け込み、花丸は完全にパニックになりながらも部屋を出た後に扉を勢いよく閉め、バケモノから逃げるための判断を的確に行う事ができた。

ガンツ！ ドンドンドンドンドンツ！！

辛くもバケモノから逃げ切り、扉を閉めたその瞬間バケモノが扉を激しく叩く音が轟いた。

そんな事態に花丸はパニックを起こした頭でうわ言のように言葉を繰り返す、ルビイは泣き叫ぶ。

「何すら何すら何すら、何が起こってるすら何が起こってるすら何が起こってるすら！！」

「うわああああーん！ お化けだあー！！ 食べられちゃうよー！！！！」

「あつ……鍵つ……鍵鍵鍵鍵い……!!」

パニックになりながらも花丸はギリギリで扉に鍵がかけられる事に気付き、サムターン式の鍵をかけ、扉を施錠することが出来た。

その直後狂ったようにドアノブを開けようとする音がするが、錆びても固い鉄の扉はビクともしない。

ようやく落ち着きを取り戻した花丸は、今だ荒い息を落ち着かせながら、パニックを起こしたままのルビイを落ち着かせるように言う。

「る、ルビイちゃん……大丈夫だよ、バケモノはもう閉じ込めたずら」「う……うう……もうやだよ花丸ちゃん……一体なんだったのさつきのお化けは？ ああいうの詳しいんでしょ？」

「あんなのオラにだって分からないずら……でも、間違ってもアレは幽霊さんなんかじゃない……本物の化け物ずら」

「ピギツ……！ うわああーん！ もうやだよ花丸ちゃん！」
「よしよし……大丈夫だよ、ルビイちゃん」

そうやって数分、花丸はルビイを落ち着かせるために声をかけてようやくルビイが泣き止んだ頃、ようやく諦めたのか扉を叩き続ける音は止んだ。

「ひっく……ひっく……ごめんね花丸ちゃん、さつきからルビイ迷惑かけっぱなしで……」

「ううん、いいよルビイちゃん。あんなの見ちゃったら、きつとそうならない方が珍しいずら」

「でも……ごめんね、マルちゃん……よく考えたらルビイ、ここに来るまですつと花丸ちゃんに頼りっぱなしだし……役に立てなくて、ごめんね……」

「もう、ルビイちゃんは気にし過ぎずら。それにしてもこの部屋は……？」

そう言つて花丸が室内を見回すと、そこは先ほどまでの部屋と雰囲気は同じだったが違う点が一つ。それは、教室ぐらいの広さの部屋に沢山の本棚が所せましと並んでいる所だった。

「なんでこんな所に、こんなに沢山本があるずら……？」

「あ……見て花丸ちゃん、扉があるよ」

「本当だ、この部屋も気になるけど……とりあえず先に行くすら」
そうしてルビイが指差す先にはまた古びた鉄の扉があった。

学校で図書委員をしている花丸は、まるで図書館のようなこの空間に興味を惹かれない訳ではなかったが、今は急いでルビイと一緒にその扉に向かうのだった。

そして二人は扉の前に立ち、先程の件もあつたので扉の先に聞き耳を立てた。

すると、扉の先から何やらブツブツと意味の分からない単語を呟く女の声が二人の耳に届く。

「女の人の声がするすら！ でも……よく聞こえない……何を言ってるすら？」

「うーん……もうちよつとで聞こえそうなんだけど……」

そうして、より耳をすましたルビイは気付いた。

「花丸ちゃん！ この声……善子ちゃんの声だよ!!」

「本当すら!? ……本当だ、声が反響しててよく聞き取れなかったけど、言われてみると善子ちゃんの声に聞こえるすら！」

「は、早く行こう花丸ちゃん！」

「うん！」

そうして二人は扉に手をかけ開けようとした。

しかし、そこで無常にも鉄の扉は鍵がかかっているようで全く開く気配が無かった。

「うそ……こんな所でまた鍵すら!？」

「さっきの鍵は？」

「そうすら！ さっきの鍵が合うはず……うそ、合わないすら」

「ええ……! じゃあ……」

「……探すしかないすら、この部屋の中から」

そう言つて、花丸とルビイは部屋に立ち並ぶ本棚を見据える。

最初の部屋と同じように、きつとこの部屋の中に鍵があるはず。そう考えた二人は手分けして図書館のような室内の本棚を探し始めた。

「うう……本がたくさん……本の間には鍵が挟まってるのかな？」

「ルビイちゃん頑張つて、一応本も一冊一冊開いて確かめてみて、もし

かしたら……本の中身がくりぬかれて、中に鍵が入っているかもしれないぞら！」

「花丸ちゃん、それは本の読み過ぎじゃ……」

「ルビイちゃん……もうこんな状況になったら、例えファンタジー小説のような事だつてあり得ない事はないぞら！」

「そ、そうだね……うん。ルビイ、頑張つて探すね」

ルビイは若干変なスイッチが入ってしまった花丸に困ったような笑みを返しながら、本も開いて一冊一冊探し始めた。

そうして探し始めておよそ30分、花丸は図書委員の経験が生きたのか、ある本棚の一番上の列にある一冊の真っ白な装丁の本を発見した。

「あの本……他の本と違うぞら……」

花丸は背伸びをしながら頑張つてその本を取り、そして本を開くと、その本はたった3ページしか内容がなく後は白紙という不思議な本だった。しかも、その内容が書いてある3ページの内2ページはちぎり取られているという始末。

そこにはこう書いてあった。

大事なものは見上げてばかりじゃ見つからない。

悲嘆にくれる時にこそ見えるものもある。

ほら、見えるだろう、すぐそこに

「何これ……意味が分からないぞら」

1ページ目の中心にたった3行そう書かれており、そして後に続くページは大半が破り取られていて、それぞれ最初の文しか読むことが出来なかった。

【呪文『門の創造』について】

この呪文は太古の大魔導士が編み出したもので、別の場所に通じる異次元の門を作り出す秘呪である。

詠唱方法は——（この先は破り取られていて読むことができない）

【海底都市に眠る邪神について】

太平洋の海底には、沈み見捨てられた暗黒の都市が存在する。

そこで生きてまま死んだように眠る強大な力を持つ邪神が存在する。彼の者が目覚め、暗黒の海底都市が地上に復権を果たせば、邪神は見事地上に復活を果たし、世界を荒廃に導くだろう。その強大なる邪神は今でも地上の数多くの教団に信仰されている。

最もおぞましきその邪神の名は——（この先は破り取られていて読めない）

「……呪文？ それに……邪神？ ……いいいやいやそんなまさか、確かにさつきマルはファンタジー小説みたいな事もあるかもって言ったけど……いやまさか、本当にあるはず……!?!」

それを読んだ花丸は思わずそう呟いてしまった。

それは、昨日までなら冗談だと笑い飛ばしてしまうような事だった。

しかし、見知らぬ部屋に目覚めた自分達、気味の悪い部屋、そして異形の化け物との邂逅。

そんな非現実を体験してしまい、自分の常識という名の正気を失いつつある彼女は、この非現実も現実にもあり得るのではないかと感じていた。

しかし、邪神の存在の真偽はさておいても、この呪文の存在が本当だとするなら今すぐこの呪文を使えば自分とルビイは脱出できるのに、その肝心の詠唱方法が破り取られていて全く分からない。花丸は悔しくて歯がみした。

いっそ、この破れたページを探す方が鍵を探すより早いかも、と花丸がそう考えた時だった。

ぬめり、と本を握る手が滑り、花丸は本を取り落してしまった。

「えっ……? 一体何が……って、え……?」

本を落としてしまった自分の手を見た花丸は、自分の目を疑った。何故なら、見慣れた自分の手があったはずのその場所は、まるでさつき出会ったバケモノと同じようなウロコでびっしりと覆われ、手の指と指の間には水かきのようなものまで生えていたのだ。

「ヒッ……！」

異形と化した自分の腕に、視覚が現実を拒否し涙目になり、声にならない悲鳴を上げる花丸。

すると、近くに居たのかルビイが慌てて駆け出し花丸の元にやって来た。

「ど、どうしたの花丸ちゃ……え……その手は何!? ど、どうしちゃったの!?!」

花丸はルビイの方に目を向ける。

そんな花丸の目に入ったのは、自分のように手は異形と化していないものの、スカートから露出した脚の部分が完全にウロコで覆われ、さらには首の一部がウロコに浸食されつつあるルビイの姿だった。

ルビイがパニックに陥っていないのは自分の身に起こった異変に気付いていないだけで、きつともうじき、ルビイも自分の身に起こっている事態に気づくだろう。

自分達が化け物になりつつある。

そんな信じ難い現象に、ふと花丸の脳裏に過つたのは一番最初に目覚めた部屋の机の上にあったあの謎のメモの文章だった。

招待された君たちはおめでとう、彼らの仲間入りだ

それが嫌なら一時間以内に、この水槽から逃げろ

その意味を真の意味で理解してしまった花丸は、まるで自分を今まで繋いでいた最後の理性の糸がプツンと切れてしまった気がした。

「もう……わけわかんないすら……！」

「花丸ちゃんっ……!?!」

糸が切れた人形のように床に崩れ落ちた花丸を慌てて抱きとめるルビイ。

花丸は虚ろに何もかもを諦めたような瞳で、うわ言のようにブツブツと呟く。

「もうだめずら、あと30分……いや、目覚めた時からカウントされてたならもつと少ない時間で、この部屋の沢山ある本棚の中から小さな鍵を見つけ出すなんて、到底無理ずら。あははっ……ルビィちゃん、オラたちはさっきみたいなのバケモノになるんだよ。人間をバケモノに変える呪文なんてあるんだあ……おしまいずら……あは、アハハハハ……」

「花丸ちゃん、花丸ちゃん……いっ！ しっかりしてえ！」

しかし、ルビィがいくら呼びかけても花丸は正気に戻る事はなく、まるで狂気に支配されたような壊れた笑いを繰り返すだけだった。

「どうしよう、花丸ちゃんが……どうしよう……」

ルビィはオロオロと周囲を見回す。

しかしそこには沢山の本しかなく、ルビィを助けてくれるものは何もなかった。

さらにその上。

「ピギッ……いっ！」

ルビィはついに、自らの足が完全にウロコに覆われた異形のそれに変質してしまっている事に気付いてしまう。

自分の身体が知らぬうちに変質しているという恐怖、そしてそれがじわじわと自分を浸食している身の毛もよだつような感覚。

それらの感情に襲われ、泣き虫で弱虫のルビィは花丸と同じように恐怖の波に呑まれそうになる。

しかし、そんなルビィの耳に

「もういやずら……なんで、なんでオラがこんな目に遭うずら？ オラなんにも悪い事してないのに……助けて、助けて助けて助けて、誰か助けてえ……」

涙を流しながら、目の焦点も定まらずに訳も分からず助けを求める花丸の声が届いた。

その声にルビィは気付く。

この訳の分からない空間で目覚めてから、ずっと自分を慰めながら引っ張ってくれて、時には機転を利かせ命の危険を突破し、この何も

分からない暗闇のような状況を、探索して切り開いてくれた、心強い親友にはもう頼りきりではられない。

今度は――

「うん……助けるよ、マルちゃん。今度は私が、マルちゃんの道を切り開く番」

「……え……？」

助けを求める親友にルビイはそう宣言し、心を振るい立たせ、まわりついた恐怖心を振り払った。

ルビイは花丸の足元に落ちている真っ白な装丁の本を拾って読み、考えを巡らせる。

（ええつと……あと数十分でこの沢山ある本棚全部を調べるのは絶対に無理。じゃあこの本は？ この本は他の本とは明らかに違う……じゃあ、きつとこの意味の分からない文章にも意味がある……はず……だよな？ ううん、迷っちゃだめ！ 今はそう信じて考えなきや！）

ルビイがそうして本とにらみ合いながら考え事をしてしていると、不意に気付くことがあった。

（そういえばこの本、この本棚の一番上の所に空きがあるってことは、あそこに置かれてたんだよね。かなり見上げないと取れない所にあった本……もしかして、この本に書かれてる文って、直接ルビイ達に向けられたメッセージ？ だったら……）

ルビイは本を閉じ、そして地面に目を向ける。

（見上げていると絶対に見えない所、落ち込んでないと見えない所……足元に何かがあるって事！）

そうしてルビイは、丁度その本があった位置の床に小さな四角い切りこみのような線を見つけ、さらによく見るとその端に丁度手のかかる窪みがあるのを発見した。

ルビイは自分の考えが間違っていなかったことを確信する。

「――やっぱり！ そして、きつとここに……」

窪みに手をかけると、ルビィ自身でも驚くほどすなりと床のタイルの一枚が持ちあがり、その下にまるで床下収納のようなスペースが広がっていた。

そしてその中には、まるでルビィの健闘を称えるように銀色に輝く小さな鍵があった。

「あつたあ！ あつたよ花丸ちゃん！」

「……ほんとに？」

「うんっ！ これでルビィ達先に進めるよ。だから——」

ルビィは俯き涙を滲ませる花丸に、両腕の前腕をくつつけるように縦に揃えて顔を隠し、そして言う。

「花丸ちゃん、ルビィと一緒にがんばルビィ！」

腕を開き、花丸を元気づけるような満面の笑顔を浮かべるルビィに、花丸は涙を拭う。

「ふふふっ……やっぱルビィちゃんの必殺技は効果てきめんだね。オラ、なんで諦めてたのか分からなくなっちゃったすら」

「うんっ、よかった……元気になったね、花丸ちゃん」

そして立ち上がった花丸は、完全に狂気から立ち直り光が灯った瞳でルビィに向き直る。

「ありがとう、ルビィちゃん。もう私……何があっても諦めないよ」

「うんっ！ 一緒に行こう、花丸ちゃん！」

「そうだねルビィちゃん！ オラ達二人ならきつと怖いもの無しすら！」

花丸とルビィは手を固く握りしめ、扉に向かって歩みを進めた。

そして、扉の前に立った二人は気付く。

扉の傍らの床に、一枚の白い封筒が落ちているのを。

「あれ……ルビィちゃん、こんなのさつきまであつたかな？」

「いや、無かつたと思うよ……っ？」

「中を見てみるすら……」

封筒を破ると、すると中に入っていたのは金色の華麗な装飾が施さ

れた十字架と、そして花丸にとって、とても見覚えがある一枚の黒い羽が入っていた。

「この羽……善子ちゃんの！」

驚くルビイに、花丸は善子がとても気に入るような装飾をした十字架を握りしめながら言う。

「やっぱり間違いないずら、善子ちゃんはここに捕まってるんだよ」

「でも、なんでこんなものが急に……？」

「分からない……でも、マル達には時間がないずら。例え罠だったとしても先に行かなきゃ」

「うん、そうだね花丸ちゃん……ところで、その十字架は何なの？」

「多分善子ちゃんの持ち物な気がするずら。でも、善子ちゃんこんなの持ってたっけ……？」

首を傾げながら金色の十字架を眺める花丸。すると、その金属からほのかな暖かみを感じたような気がして花丸はほんの少しだけ心が落ち着いた。

——もしかして、なにかのお守りなのかも？

そう思った花丸は、その十字架をそつと握りしめて善子の持ち物なら返してあげようと誓ったのだった。

「よし……開けるよ、ルビイちゃん」

「うん……準備はオツケーだよ」

二人は扉に手をかける。

その扉からは、先程まではかすかに聞こえていた程度の善子の声よりも鮮明に聞こえていた。

扉の先で一体何が起こっているのか、恐怖で竦みそうになる足と手を、二人は互いに手を固く握りしめ合って勇気づける。

そして、重い鉄の扉が開いた。

すると中は今までの部屋とはまるで違い、とても大きなドーム状の部屋で広さは体育館の倍ぐらいの広さがあり、床は足首まで浸かるほど濁った水で満たされていた。

しかし部屋の中の光源は、中心にある祭壇の両側に煌々と燃える篝火以外に室内を照らすものは無く、今までの部屋より一層薄暗くなっ

のよ！」

生気が全く籠らない瞳で熱に浮かされたように花丸とルビイを見る善子に、二人は自分達の親友がおかしくなってしまう事を悟るには十分すぎた。

そして善子の言う、そのクトウルフという存在の神が決して良い存在ではない事も、この場を支配する邪悪な気配から十分に悟ることが出来た。

「神って……善子ちゃん、絶対違うよ！ 今善子ちゃんが呼ぼうとしてるのは、そんな良い神様じゃないよ！」

「そうずら！ 善子ちゃん一体どうしちゃったの!? 正気に戻るずら！」

そう呼びかける二人に、善子は冷めたい笑みで返した。

「正気……？ 何を言ってるの？ 私はとつても正気よ」

そして二人に向かって両手を広げ、壁に揃った魚の化け物達と背後の大きな影を見上げて言う。その瞳は、完全に狂気としか言い表しようがない程に淀みきっていた。

「だって……知ってしまったんだから！ この世界の真実は現実^{リアル}なんかじゃなかった！ この、冒瀆的で狂気の世界こそ、私が求めた本当の世界ツ！ ほら、アンタ達も気づきなさい！ そして、私達の一員になって、偉大なる神の復活にむせび泣きなさい！ ……その為に私が、アンタ達を呼んだんだからあー！」

その言葉が引き金になったのか、善子の背後で巨大な影が蠢く。

そして、この部屋全体が地響きで鳴動しながら、まるで奈良の大仏をも思わせる程の大きな石像が動く——否、それは石像ではなかった。

灰色の鱗に覆われ、石像に見えただけだったのだ。

“ソレ”は、まるで魚の化け物にそっくりだった。

しかし、違うのはその大きさ。その巨大な化け物は立ち上がると、まるで小さな人間など指先一つで捻り潰せるかのような、そんな絶望

的な存在感を放ちながら花丸とルビィを、魚の目で睥睨した。

その存在はまるで、儀式の邪魔するなら命の保証はないと二人に語りかけているようだった。

思わず、花丸とルビィは数歩後ずさりする。

その圧倒的な存在感に、自分達人間が、まるで目の前の存在にとつては取るに足らない存在で、機嫌一つ損ねるだけで一瞬のうちで殺されてしまうだろうという事を感じてしまう。

今までとは比べ物にならない程の恐怖が、絶望が、二人を狂気の世界へ導こうと襲い来る。

そんな圧倒的な超存在を目の前にして、二人は――

「――私達の善子ちゃんを返せ！ このバケモノ!!」

なんと二人は、自分達がいつ死ぬかもしれない恐怖に、絶望に、歯を食いしばり互いに握る手に力を込めてそう叫び、襲い来る狂気に奇跡的に打ち勝つことが出来た。

そんな二人に、善子は信じられないモノを見たかのような表情をする。

「嘘でしょ……このお方を見ても狂わない人間がいるなんて……!」

「善子ちゃん……! 絶対に、オラ達がこんな暗い世界から助け出してみせるぞら!」

「だから……私達と一緒に帰ろう! 善子ちゃんっ!」

二人はそう言い、善子に向かって駆け出した。

そんな二人に、今度は善子が後ずさりをする。

「よ、寄るな……! 私は、善子なんて名前は捨てた! 大いなるクトゥルフ様を信仰する、深き者の一員! ヨス・ザイラが私の新しい名前よ!」

「それは、違うっ!」

二人は強くそう言い切り、善子の両手を掴む。

しかし、そんな行動を善子の背後に居る巨大な魚の化け物は許してくれなかった。

「●●●……！」

人間には理解できない言語で叫びながら、化け物は巨大な拳を振り上げる。

そして、人を数人殺すに十分過ぎるソレを無慈悲に振り下ろす。

「ひっ……！」

それを見た花丸がとった行動は、確信があったわけではない。本当に偶然に、花丸は金の十字架を握ったままだった左手をその拳に向かって翳した。

するとその瞬間、花丸の中から何かがごっそりと持っていられる感覚がしたと同時に、十字架が光り輝き、そして黄色い豪風が巻き起こった。

そして、その黄色い風はまるで花丸たちを護る防壁のように化け物の拳を押しとどめたのだ。

そんな信じられない光景に、思わず花丸は混乱した頭で呟く。

「みっ……未来ずら……？」

「そんな事言ってる場合じゃないよ！ 花丸ちゃんっ！ 今の内に善子ちゃんを何とか正気に戻さないっ！」

「——っ！ 離して！ 離してって言うてるのよ！」

ルビイは必死で暴れる善子を捕まえながら、善子を正気に戻す方法を考えていた。

そうしていると、不意にふわりとルビイのポケットの中から黒い羽が空中に舞い踊った。

(……そうだっ！ 思いついた！)

ルビイはとっさに黒い羽を掴み、それを善子の団子型に結った髪に刺した。

そんな突飛な行動に善子は虚をつかれたような表情になる。

「へっ……っ？ これは……何……？」

目覚めて二人の姿を見た善子は驚いた後、黄色い風の防壁に拳をぶつけ続ける巨大な魚の化け物を見てさらに驚愕した。

混乱する善子に花丸は詰め寄る。

「善子ちゃん、色々説明したいけど本当にもう時間がないぞら！とにかく……ここから逃げる方法って知らない!? マル達が最初に目覚めた部屋にあった紙で、善子ちゃんが知ってるって書いてあったんだけど!」

「――へ!? そんなの知ってる訳……え……あれ……? な、なによこの言葉……」

当然の如く知らないといい返そうとした善子だが、そんな善子の脳に意味不明な言葉の羅列が過る。

しかし、意味不明でありながら、その言葉の羅列が意味する言葉を理解出来た善子は、ニヤリと笑みを浮かべた。

「フツ……ふふふふふふふつ! ついに……ついに“力”に目覚めたわ! やっぱ、私は選ばれた特別な存在だったのよ!」

「ほんとずら!」

「それ、本当!? 善子ちゃん!」

「ええ見てなさい、ずら丸! ルビィ! 堕天使ヨハネの真の力……魅せてあげるわ!」

そう言った瞬間、ついに三人を護っていた黄色い風が途切れ、化け物が巨大な拳を振り上げた。

しかし、善子は全く動じることなく、その口から冒瀆的な言語の羅列を放つ。

「おんぐ だぐだ りんか、ねぶろつと ついん、ねぶろつと ついん、おんぐ だぐだ りんか! 一にして全、全にして一の存在よ、我らを異なる場所に導きたまえ! いあ! いあ! よぐ!!そとーす! おんぐ だぐだ りんか!」

そして、拳が打ち付けられる紙一重の差で、善子と花丸とルビィは

立っている床に突如現れた次元の歪みのような大穴に吸い込まれ、そして落ちていった。

「ずらあああー！！??」

「ピギイイイイー！！！！」

「やったつ、本当に……本当に私、力に目覚めたわー！！！！」

そうして三人は、落下する浮遊感の中徐々に意識を失っていくのだった。



意識を取り戻した三人は、ベットの上で目を覚ました。

「ううつ……ここは……どこぞら……」

「うーん……頭ぐらぐらして、気持ち悪い……」

「うぶつ……ふふふつ、力に目覚めたは良いけど、この感覚には慣れないといけないわね……ほら、ずら丸、ルビィ、無事帰って来たわよ」

二人が善子に促されて見ると、そこは善子の部屋だった。

自分達が良く知る場所に戻って来たと分かった二人は、思わず二人で抱き合った。

「よかったあ……！ マル達助かったずらあ……！」

「うええええん……！ 怖かったよお……怖かったよお……」

そんな二人の手足は、気づけば生えていたはずの鱗は綺麗さっぱりなくなっていて、まるでさつきまでの出来事は夢だったかのように思えるほどだった。

そんな二人を見て、善子はバツの悪そうな表情になりながら言う。「その……さつきは全く覚えてないって言ったけど、こうして段々冷静になると、何となくだけ……さつきの空間に私がアンタ達を呼んだって事だけは覚えてるわ。だから、その……ごめんね、ルビィ、花

丸。そして……私を助けてくれてありがとう」

そう言つて謝りながらお礼を言う善子に、二人は泣き止んで笑つて答えた。

「ううん！ 善子ちゃんが助けられてよかつたずら！」

「善子ちゃんこそ、帰つて来れてよかつたね！」

「アンタ達………どんだけ優しいのよお………！ うええええん………」

そうして、今度は感極まつた善子に抱き付かれ二人は善子を優しく抱き締めるのだった。

こうして花丸とルビィと善子は、冒険なる世界の一端に触れたものの、無事元の日常を取り戻し、平和な学校生活を送るのでした。

めでたし、めでたし。

——ちなみにその後、世界のどこにでも繋がる門を開く呪文という“力”に目覚めた善子はより一層、中二病という不治の病を加速させてしまうのだが……それはまた別の話。

【終】

夢か真か

『スクールアイドルフェスティバル♪』

ニュースでも見ようとテレビを付けたらちようど流れていた。

『ラブライブ！スクールアイドルフェスティバル』

アニメ『ラブライブ』のキャラクターでラブライブの曲を遊べる流
行りのリズムゲームだ。ラブライブは友達に教えてもらってからハ
マってずっと追いついてきた。CDを買ったり、ライブの時にはL V
に行ったり頭の中は寝ても醒めてもラブライブだった。だが、いつし
か熱が冷めてきていた。

「あの頃はあんなに夢中だったのにな」

嫌いと言うわけではないが、あの頃ほど夢中じゃなくなっていた。
何がきっかけなのかは自分でもわからない。だが、距離を取っていた
……。

「久しぶりにやるか」

そして、スマホにスクフェスをインストールした。遊んでいれば熱
も戻るかもしれないし、距離を置こうと思った理由がわかるかもしれ
ないと思ったからだ。

「あの頃は毎日、画面みてニヤけてたりしてたな」

アプリを開くと同時に意識を失っていた……………。

目に突き刺さるような眩しさを感じて目が覚めた。

「ここは……」

辺りを見回すと淡い色のカーテンに、腕に繋がった点滴。病院にい
るようだった。

「ああ、目が覚めたんだね」

「……はい」

ふと見ると白衣を着た男の人がいた。

「君は覚えてないだろうけどね。近くの公園で倒れているところを救
急車で運ばれているんだ。なぜ、倒れていたか覚えているかい？」

「いえ……全く」

「そうか……」

「倒れていた所を運ばれたらしい。ついさつきまで、家でスクフェスをしようとかアプリを開いた所から記憶にない。」

「なら、名前や家は覚えているかい？」

「名前……家……」

「ダメだ、何も思い出せない。自分にとって重要な事が全て思い出せない。」

「ふむ……軽度の記憶喪失かそれとも……いや何でもない」

「あの……これからどうすれば良いのでしょうか？」

「名前も帰る場所もわからない。なら、施設とかに引き渡されたりするのだろうか。」

「しばらくはここで入院生活だ。名前や家は警察がなんとかしてくれるだろう」

「そうですか……」

「安心したまえ。すぐに思いだすさ」

「……」

少しは安心して良いのだろうが、まだ心の整理がつかない。なぜ、思い出せないのか、どうして倒れていたのか、まだわからない事が多すぎる。

「今日は休みたまえ。明日になったら警察が話を聞きに来るそうだ」

「はい」

そして、部屋から出て行こうとして

「そうだ、君が倒れていると通報してくれた人が来るそうだからお礼でも言っておくんだよ」

「はい」

部屋を出ていった。たぶん、あの人が担当してくれた医師の人だろう。部屋に居たって事は問診で、ここはそれなりに大きい病院って事か

トントン

と扉を叩く音が聞こえた。たぶん、通報してくれた人だろう。お礼

を言っておかないと

「入ってるも大丈夫ですよ」

そして、入ってきた人を見て驚きを隠せなかった。誰がどう見たつてあの、ラブライブの真姫ちゃんにそっくりな人が入ってきたからだ。

「何よ、入るなり変な顔して。いのちの恩人に失礼じゃないの？」

「あ…あ、すいません。知り合いにそっくりだったので、つい」

とつさに嘘を言う。いるはずが無いと本能が告げているが、目の前に居るのは誰が見ても、ラブライブの西木野真姫にしか見えなかった。

「なら、いいわ。それより体の調子は大丈夫なの？」

「あ、大丈夫です」

くつそ、ラブライブの世界に迷い込んだのかと混乱して言葉が俺じゃ無いみたいだ。

「そう」

そうだ、まだ確定した訳じゃない。話を少ししながらな情報を集めればわかるはず。その前にお礼を言っておいた方が良さな。

「この度は助けていただきありがとうございます」

「べ、別に倒れていた人がいたら連絡するのが普通でしょ」

「ですね…：変な事かも知れないんですが、名前を教えてくださいても大丈夫ですか？」

「に、西木野真姫。ここはお父さんが経営してる病院。だからすぐに運んで来れたの。貴方の名前は？」

「ははは…：運ばれる前の記憶が思い出せなくて、名前わからないんだ」

「はああ、人に名前を聞いておいて自分の名前はわからないの？」

「思い出せたら教え」

「約束よ」

「わかったよ。西木野さん」

そして彼女は部屋から出ていった。そして、この世界はラブライブの世界だと確信した。そうだよ、そうじゃなきゃ、話せるわけが無い。声だってアニメやゲームでひたすら聞いていた時期もあるんだし、間

違えるはずがない。　　までよ……本当にラブライブの世界だとしたら、ことりちゃんにも会える可能性があるし、真姫ちゃんと交流を深めれば絶対に会え………落ち着け、俺。ここで焦ってハマしたら水の泡だ。ゆっくりと着実に考えていこう。なら、何から始めていけばいいのか……

「う……む……」

彼が交流を深める方法を考えている時に、別の場所では

『どうだった？真姫ちゃん』

『体調は大丈夫みたい。後は――』

ここがラブライブの世界と言う考えは間違っただけではなかった。確かにμ、sはいるしA―RISEもいる。だが、一つだけラブライブとは違うところがあった。

『大丈夫だよね』

『うん。もう、逃がさない……』

それからは、忙しい毎日だった。警察の人と話したけど、名前も家もわからずじまい。入院をしている間に仮のアパートを手配してくれるらしいけど、手厚いサポートすぎて怪しいと思いましたが、手配してくれる心を無下にする訳にも行かず受けるとにした。第一この日本で誘拐されるわけがない、男子高校生誘拐しても何にももらないだろうし。

「へ〜西木野さんはスクールアイドルをやってるんだ」

「そうよ」

真姫と話す機会も増えて、μ、sの話題が挙がり、ここがラブライブの世界だと決まり嬉しい反面、なぜ迷い込んだのか不思議でならなかった。夢で明晰夢と呼ばれるものだとしても、ここまでリアルだとは思えなかった。

「そろそろμ、sの練習があるから」

「話できて楽しかったよ」

手を軽く振って見送る。これが夢でないのなら、真姫ちゃんについて行って、sの練習風景でも見てみたいな。夢であるなら、それくらいしなくちゃ勿体ないしなあ。退院したらこっそりついて行ってみよ。

「おっと、そろそろ検査の時間になるな」

そう言い残り部屋を後にした。

×

×side

「やつと、願いが叶うんだね！」

「やったね、穂乃果ちゃん。ことりも明日からが楽しみ」

「二人とも、楽しみなのはわかりますが、少しは落ち着いてください」

1つの部室で最後の話し合いが行われていた。

「明日からは真姫の提案通りで行こうと思うけどいいかしら？」

「うん。カードもそれが良いって」

「アイツく、私達から距離を置いてたことを後悔させてやるんだから！」

「にこ、少しは落ち着いて」

「小学生みたい…」

「何よー！」

傍から見れば他愛もない会話でしかないのかもしれない。だが、その言葉の裏には黒い感情が根を張っていた。

「体調も良さそうだし、今日中には退院できるよ」

「何から何までありがとうございました」

やっと、退院出来ることになった。リハビリ的に歩くわけでもなく、定期的に話をする事で何かを思い出すきっかけを探したりしていた。これならば、西木野先生の知り合いに学校の理事長をしている人

がいるらしく、そこに通う事になった。詳しい説明は送られてくるらしいが、真姫ちゃんのお父さんである先生の知り合いと想像したら……いや、女子高だから考えすぎか。

「あと、仮の名前は気に入ってくれたかい？」

「はい。だいぶしつくりきてます」

名前を呼ばなきゃ不便と言うことで、思い出すまでは白鷹 遊星と付けてもらった。

「それは良かった。男の子の名前を考えるのは初めてでね。娘の真姫も、名前は妻が考えたものなんだ。私にはネーミングセンスが無いらしいから心配だったよ」

「いえ、名前を考えられるのは凄い事だと思いますよ」

「ははは、そう言って貰えて何よりだ」

アニメでもゲームでも男性がほとんど出てこないラブライブだったけど、話せるとなると新しい発見が見れて面白かった。

「遊、そろそろ行くわよ」

そう、真姫が言う。今から住める家に連れて行って貰えるらしい

「おっと、話しすぎたみたいだね。いっておいで」

「本当にありがとうございました！」

今回ばかりは感謝してもしきれないし、どうにかして恩返ししなきゃなつと心に刻み、真姫の案内に従って歩き出した。

案内された場所は、何だか値段が張るんじゃないかと思えるマンションだった。エントランスまで来たはいいけど、入口で警備みたいな人もいたし管理人らしき人がいたり、絶対に安くはないと思えた。

「あの、ここって……」

「パパも言ってたように、ここが遊の住む事になるマンション」

絶対に何かある。そう確信した……

エレベーターに乗り、何階か上がってから扉が開く。

「ここが俺の部屋になるのか……」

そして、部屋の扉を開けたら首元に電流が走るような感覚がし、意識を手放した……

目が覚めると白い天井が見えた。軽いデジャブを感じながら、また倒れたのかと思いい身体を動かそうとした、が

「手錠？」

手錠のようなもので腕が止められていた。それより、一緒に来た真姫は……

「ここにいるわよ」

「ま、真姫。これは……」

「手錠よ。見てわかるでしょ？」

「それは見れば、わかる。何で繋がれてるのかって事を」

「逃がさないためよ。あの時みたいに」

「逃がさないって……」

何かがある？逃がさない？俺が真姫から逃げた……いつの話だ。こつちに来てからじゃない。あつちの世界のことになる。何をし……いや、こつちに来る前の出来事が原因なら前に本で似たような話があつた……あれは、主人公が小さい頃に読んでた本を久しぶりに開いたら本の中に吸い込まれるって話しが……つまり、ここは

「俺のスクフェスって事か」

「さすが、遊。わかつてるじゃない」

「でも、なんで……」

「なんで？……そんなの決まってるじゃない。貴方のことを想っていたからこの世界に呼びこんだ。貴方はゲームだと思つてなかつたかもしれない。けど、私達にも感情がありこの外を見ることがも出来た。けど、狭いこの世界でやれる事は少なくて皆が暗いときばかりだった。そんな時に現れたのが貴方だった。いつも笑ったり泣いたりしていたけど、私達と居てくれた……だけど、いつの日か顔を見せることが無くなっていた……」

たかがゲームだと思つていた。だけど、本当は意思があるなんて思つてもみなかった。こうなつたのは俺が原因なの……か……

「顔を見る事が無くなつてからの、sは荒れていった。ライブをす

る事がなくなり練習することもなくなった。けど、ある時希が言い出したの『こつちの世界に呼べばいい』って。やり方なんて知らない。けど、私達の想いが強ければ呼べるって……だから、あの日久しぶりに会えて、こつちの世界に呼べた時は嬉しかった……」

だけど、なんで

「一緒に泣いて笑ったり出来たこと……何も無かったこの世界で唯一の光だった……そして、初めて好きになった人だったから」

確かに真姫やμ、sの事は大好きだ。恋仲になれるんだったら死ぬほど嬉しい。だけど、俺にはそんな資格はない

「大丈夫。資格や離れてた事なんて今になっては過ぎたこと。今日からは私達の事だけ考えていれば良い……」

「ここには、真姫しか」

「9人で一気に来たら大変でしょ？だから一日に1人ずつ来るようにしたの。だから、今日は私」

逃げることは……無理だな。例えここを出れても、狭いこの世界ではすぐに捕まってしまうだろう。簡単に言うと、μ、sからは逃げられないってことか。もつと早く気付くべきだったこの異質さに。会えるか思っただけで、早く動いていればこうはならなかったのかもしれない。

「終わらないパーティを始めよう？」

これからの生活がμ、sとの幸せな同棲なのか、監禁される生活なのか今はわからない。例えここが俺のスクフェスだろうと、彼女達の生活を……ラブライブへの道を閉ざしてしまったのが俺なのは確かだ、本来のμ、sからかけ離れた存在にしまったのだから、本来あるべき姿に戻すのがやるべき事だと思った。それが、修復不可能だとしても……

ないちんげーるらぶそんぐ

私はあなたのことが好きでした。

綿毛のように柔らかく、川のせせらぎのように美しいあなたの声が好きでした。

私に向けられる温もりに満ちたその笑顔も好きでした。かわいらしいちよつとした仕草さえも愛おしく思えてしまう。

私はずっと、あなたの傍にいて、あなただけを見つめていました。ただの幼馴染ではなく、私の好きな、愛しい人としてあなたのことを見つめていました。

でも、あなたは私のことをそう見てはくれないことを知っています。

何故ならあなたの瞳には、私ではない人の姿が映っている。その人を見ている時のあなたは、よく私の知らない顔を見せる。愛おしそうに見つめ、あの人に陶酔するあなたの横顔を見ると、胸が締め付けられるみたいに痛む。決して私に向けてはくれないのでしよう。

こんなにも私は、あなたのことを想っているのに……

くく

「海未ちゃん……私ね、穂乃果ちゃんのことを好きなの……」

何の前触れもなく、ポツンと呟かれる。

学校帰りにことりの部屋を訪れてきていた私は、悩ましそうにしていたことりから突然聞かされた。

あなたはずるい人です……ちよつどいいタイミングで、いつも私を

困らせることを話してくのですから。心を読んでいるのではないのかと、疑ってしまうほどです。おかげで、心が黒い霧に包まれるみたいに陰鬱な気持ちになる。

「……知っていますよ」

さも何事もないように言葉を返すと、彼女も、うんと二言で言い返す。

しかし、言葉とは裏腹に、心の中ではうんざりしてしまっている私がいる。

知っているに決まってるじゃないですか……！ あなたの瞳には、いつも穂乃果私ではない人が映っている。3人私ではない人でいる時も、決まってあなたは穂乃果私ではない人のことを見つめている。こうして2人私ではない人でいる時でさえも……あなたは決して私を見てはくれない……

私があなただのことが好きであればあるほど、あなたが穂乃果私ではない人のことを話すのが辛いのです。あなたが穂乃果私ではない人と一緒にいるのを見るのが辛いのです。

こんなにもあなただのことを好きであるのに、まるで遠くにいるようなこの関係が耐えられなくなっている。

いつそのこと、あなただのことが好きであるとハッキリ伝えてしまいたい。

ですが、そんな大それたことを言えるような性分でもなく、いつも心の隅に秘めさせて口にすることはない。もし、私がそれを口にしてしまえば、きつとあなたは私のことを拒絶するのでしょうか。そうなれば、もう二度と私のことを呼ぶあなたの声を聞くことができなくなる。その笑顔さえも私の前から遠退いてしまう……

ならば私は、悟られることなくこの気持ちを仕舞い込んでしまおう、そう心に決めるのです。

「穂乃果ちゃんのことを好きなのに、ちゃんと『好き』って伝える勇気がないの」

「そう、なんですか……」

「ごめんね、こんなこと海未ちゃんにしか相談できないから……」

ことりは申し訳なきそうに眉をハの字に引き下げて言う。

私を頼り、必要としてくれることはとても嬉しい……。その時だけ、あなたは私を捉えて話をしてくれる。

けれど、それでもあなたの心の中には、穂乃果が棲み付私ではない人いている。

「好き」と伝えるだけなら毎日そう言っているではないですか」

「ううん、そうなんだけど……違うの……。そういう『好き』じゃなくってね……」

すると、両手を合わせると口元に添えて、頬を鬼灯のような朱色に染めた。

「あっ……」

ズキツ、と胸が痛む。まただ……あなたはまたそんな顔を見せる。愛おしそうに想いを寄せている乙女の様相に気持ち揺らいでしまう。私には向けられることのないあなたの素顔を、ただ見つめることしかできないことが苦しい……。

でも今は、あなたに選ばれなかった悲しみだけを抱くしかありませんでした。

「——海未ちゃんはどうなの？」

「えっ——？」

「海未ちゃんも好きな人にそういうことをしてみたいって考えたことないの？」

突然、ことりに言われて一瞬どきつとしました。

私のこの気持ちを伝えたい相手こそ、目の前で私のことを見つめるあなたなのだと言うことを言えずにいました。

もし声にして伝えてしまえば、あなたはきつと私から離れていくのでしょうか。それが恐ろしかった……

「い、いえ……私は、一度も考えたこともありません……」
否。

決してそんなことはありません。

もし私があなたにこの想いを伝え、あなたがそれを受け入れてくだ

さったのならどんなによかったことだろうか。あなたが傍におり、私に傾けられる声を聞き、心躍らせ、私に微笑む姿を永遠と眺めていたい。あなたの肌に触れ、その温もりを感じてみたい……あなたとの深愛に浸り続けていたい……

果てしない思いを巡らせていると言うのに、口にしてしまう虚偽に胸を苦しませてしまう。

「そっか……ごめんね、変なこと聞いちゃって」

「い、いえ……そんなことは」

「私、ちゃんと伝えたいの、この気持ちを。それに、ね……私、穂乃果ちゃんのことを考えちゃうと『好き』以上のことしてみたいって思っちゃうの。でも私、気が弱いから自分では言えない……。この気持ち、どうしたらいいんだろうね……?」

切なく言葉を紡ぐあなたは儂く見えた。繊細で、触れてしまえば崩れてしまいそうな脆さ。どうしてあなたは好きな人のことを想う時、女々しい姿を私に見せるのですか？ そんなあなたを見て、私がどう感じているのか知っているのでしょうか？ 私も……あなたをそうさせられるような人でありたかった……。そうしたら、今のあなたをそっと抱き込んで慰めてあげられたら……。……

……なら……いつそのこと――

「……してきますか?」

「えっ……?」

叶うことのない願いと言うのであると言うのなら……いつそのこと――

「私の身体をつかって、ことりがしたいことをしてみてもうどうでしょう？」

——あなたを汚れしたい——

「う、海未ちゃんっ……それって……？」

「ことりは、私のことを『穂乃果』だと思ってください。それでことりのしたいことを私に」

「で、でも……海未ちゃんは……」

「ことりは、ちゃんと伝えたいのでしょうか。『穂乃果』にその気持ちをを？」

「そ、それは……」

「なら、私で試してください。あなたがその気持ちを伝えきるまでの練習だと思ってください」

「海未……ちゃん……」

ああ……私はなんてひどい人なのでしょう……

ことりの気持ちを弄び、私の思い通りにさせようとしていることに引け目を抱いてしまう。

でも、仕方がなかった……こうでもしなければ、苦しきのあまりこの胸が張り裂けてしまいそうだった。

ことりが穂私ではない人乃果のことを好きでいい……

ことりが私のことを見てくれなくてもいい……

ならせめて、あなたを1人占めできる瞬間が欲しかった……

私は、それで構わないから……

「いいの、本当にいいの……？」

「ええ、構いませんから……」

醜い願いだと言うのに、あなたは何も知らない赤子のように興味を

示そうとする。無垢なあなたは何も知らなくていい……あなたはただ私にその声を、瞳を、温もりを与えてほしい。紛いモノでも構わない、穂乃果私ではない人にしか与えないモノを、私にも注いでほしいのです……。

「海未ちゃん……」

ことりの繊細な指が私の肩をそつと撫でた。そのままゆつくりも片方の手を私の腰に添えられて、身体を引き寄せられた。ことりは目線を合わせないように右肩に顔を埋めると、生温かい熱を帯びたあなたの吐息が肩から伝わってくる。

——熱い、あなたの熱で溶けてしまいそう。

「——っ！」

一瞬、声にならないモノが口から出てしまいそうになった。電流のような刺激が身体中を走り、背筋がぞくぞくしてしまう。

——だめっ、気持ちをしっかりと保たせなくては。

そう自分に言い聞かせるのですが、初めて実感することりの熱に眩暈しそうになる。

あなたはいま、私の知らない熱を私に注いでいるのだ、と。聞かずともわかってしまう自分がある。わかっている、欲しかった。あなたのすべてを知りたかったから。

私の知らないモノを誰にも与えてほしくなかったから、そつと、彼女の身体を抱き返した。

「脱がしても、いい？」

琥珀色の潤んだ瞳が訴えかけてくる。迷いのある声色で言うのに、あなたの手はすでに私のシャツの裾に手を伸ばしている。直接肌に触りたいのでしょうか、わかりきっていたことだ。それに私が拒む理由もない。

「かまいま、せん……」

高鳴る胸の鼓動が邪魔してうまく口にできない。

いつの間にか、顔も熱くなり、どこからともなく汗も吹き始めだしていた。

いくね。

相槌をかけるような声をあなたは口にする、私のシャツに両手をかけ、ゆつくりとボタンが外される。身体を見せられることに恥ずかしくなる私は、うつむき様に耳まで顔を赤くさせているのでしよう。私もあなたにしか見せない姿を晒すことに……

シャツを取られ、ブラだけになった私をあなたは見る。まじまじと、隅々まで見られているような視線を感じる。そんなあなたの目は、いつものようなやさしいものではなく、とても研ぎ澄まされていて……

「肌、白くて……きれい……」

どこか妖艶な顔をしていた。

けれど、そんなことに私は、悦びを感じた。

少しずつ、私の知らないあなたを見つけることができ、それを私にしか見せてないことに悦んだ。

もっと私に見せてほしい……

そのためなら、私の身体が汚れても構わなかった。

ことりは手を伸ばし、上半身に触れ始める。

肩。

胸。

お腹。

目につくところはどこでも触れて、じつくり感触を確かめている。あなたに触れられるだけで、くすぐったく身体を反応させてしまふ。

触れたところが熱くなって、火照りだす。

体内の熱を吐きだそうと、息も荒くなる。

でも、それがあまりにも心地良くなって、軽く癖になりかける。

——ああ……もっとあなたに触れてほしい……

——あなたの肌の温もりを身体に刻み込んでほしい……

自然にあなたを強く求めるようになるのに、時間はいらなかった。あなたに触れられている、抱きしめられているだけで私は、理性を捨てていかれそう。私の中のドロドロとした黒いモノが流動し、嬉しそうに悦んでいるのがよくわかる。あなたが私だけを求めているこ

とへの愉悦感と、純粋なあなたを汚していることへの背徳感が絶妙に混ざっている。

仕方のないこと。私はあなたのことをこんなにも思っているのに、あなたは振り向いてもくれなかった。私を見てくれなかったことへの失意には何度も泣かされてきた。

だから、あなたがそうして、必死に私の身体をむさぼろうとする様子が嬉しかった。

——もつと……もつと私を見て……！

赤くなる身体は更なる欲を求めた——

「……『穂乃果』……ちゃん……」

その刹那、熱した身体に悪寒が刺した。

強欲になりかけていた頭も冷静になり、我に帰る。

——あなたが、私ではない人穂乃果のことを呼んだから……

私を見て、私に触れて、私を感じているはずなのに、あなたはここにいない私ではない人穂乃果の名を呼ぶ。

『私のことを「穂乃果」だと思ってください』

ふと、自分が口にしたことを思い出し、落胆する。あなたは、どうなっても私のことを見てはくれないのだと……。あなたのその熱も、私ではない人穂乃果に向けられていくものなのでしょう。その事実が私を無情にさせる。

熱が冷めかけようとしていた。

「いつちも、触るね？」

それなのに、あなたの願いだけは断れなかった。

私の身体も、尚もあなたのことを欲したから……

私は小さく頷きながら、あなたに、この身体を明け渡した。

くく

あれから、ことりの方からせがまれるようになった。

どうやら、この身体だけの関係を気に入ってくれたらしく、何度も呼ばれては身体を重ねた。

初めは、あなたに触れられる快感に喜びを抱いたが、次第に薄れだす。あなたが私のことを意識していないことが大きかった。

最初に自分でそう言ったではないか。それなのに、私ときたらことりと肌を合わせることで、あなたが私のことを意識してくれるものだと、心のどこかで望んでいた。あなたに触れられるだけでよかった、と言うのに……。すれ違うだけで我慢していた私も強く意識し始める。

——やはり私は、あなたがほしい……。

——身体だけでなく、その心も……。

身体だけでもあなたを1人占めたかった。なのに今では、心まで欲しい、だなんて願うようになっていた。乾いた唇があなたを求めている。けれどあなたは、穂乃果私ではない人のために、と私に与えてくれなかった。

あなたとこうして触れ合うことで、あなたの身体の隅々まで私は知った。なのに、唯一知らないのは、あなたとの口付け……。あなたの、心許す相手にしか与えないもの。それがあなたの心なのだと言うのなら、それさえも奪い取ってしまいたかった。

けれど、その機会も与えられぬまま、月日は過ぎ去っていった。

くく

「海未ちゃん」

放課後。

いつものように相槌を打ってくる。

あなたはそうやって私に合図を送って、そういう日なのだと知らせてくれる。

「わかりました」

そう返すと、いつものようにあなたに手を差し伸べて手を繋ごうとしました。

「あつ……ご、ごめんね」

けれど、あなたは戸惑う様子で手を引いた。いつもならこうして手を繋いでくれると言うのに、どうしてか今日に限ってあなたは手を引いてくれなかった。

ふと、ことりの顔を見ると、そわそわした様子を伺わせていた。何かが違う、そうした違和感を抱いた。

「ことりちゃん、海未ちゃん。また明日ね！」

教室を出ようとしていた穂乃果が私たちに言う。

私は穂乃果が去る直前の顔を見てしまう。

そこには、今まで見たことのない穏やかな顔をした穂乃果が。それも、私を見てではなく、私の隣の……。

チクツ——

痛い、小さなとげが胸に刺さったみたいだ。

——まさ、か………

嫌な気持ちになる。

もやもやとした気持ちが煙のように立ち上り、私の心を覆った。知りたくない、その理由を。穂乃果がことりに見せるその顔の意味を、私は知りたくない。

いつもと違う反応。ことりから与えられるほんの些細なことが、私の心を傷つける。

「ギ、ギ、ギ」

あなたに言われて我に帰り、あなたの家に行く。
いつもとは違う、小さな間隔をあげながら……

そして、この違和感が現実となった。

くく

「私、ね……穂乃果ちゃんと付き合うことになったの」

えっ——？

何の前触れもなく、また、ポツンと眩かれる。

ことりの部屋に連れて来られて間も無くのことだった。

「今日ね、思い切って告白してみたの。そしたらね、穂乃果ちゃんもことりのこと、好きだって言ってくれて。それでね、ことりは、穂乃果ちゃんの恋人さんになれたの」

「そ、そう、ですか……」

「それでね、それでね！ 思いきってね、穂乃果ちゃんと、キス、しちゃった……！」

「……………えっ？」

「キスした時ね、ふわあゝつとした感じになってね、とつても幸せな気分になったの——」

あなたはとても嬉しそうに頬を赤くさせながら話をする。

私は——おそらく、蒼白させた顔で聞いているのでしょう。

「——好きな人にするのって、こんなにも胸がスツキリするものなんだね♪」

「……………っ」

胸を締め付けられる息苦しさに悶えながら……

「それで、ね。海未ちゃんとのこの関係を、辞めようかなって思うの」
「……………」

立て続けに襲われる落胆。

「穂乃果ちゃんに自分の気持ちを伝えたくって、その練習みたいにやってきたけど、もう必要ないかなって思うの」

私の心に、ぽっかり穴があいたような気持ち。

「海未ちゃんから誘ってくれて……いっぱいしてくれたから、ことりは自信を持てたの。感謝してるよ。でも、これ以上は迷惑かなあって……………」

——あなたがいなくなったら、わ、わたし……わたしは……

「海未ちゃんにも好きな人がいるだろうし、これ以上したら戻れなくなっちゃうかもしれない」

——わたしはもう……あなたなしでは……

「海未ちゃんは、伝えないの？　好きな人に、海未ちゃんの気持ちを？」

「……………わ、わたし……し、ですか……………」

聞かれると、ぼやけた様子で聞き返してしまう。すべてが上の空になりかけていたから……

「伝えたいです……………で、ですが……………その人は、きつと……………受け入れてくれないでしょう……………」

「そんなことないよ、海未ちゃん。海未ちゃんの好きな人はきつと、受け入れてくれるよ。だって、海未ちゃん、こんなに魅力的なんだもん」

「……………っ！」

——ドクン

突然、胸が強く高鳴りだした。

初めて、かもしれない。あなたから、ことりからそのように言われたのは……。あなたは今、私のことを見てくれている……。ずっと見てほしかったと切に願っていたことが、ようやく叶えられたような気がした。

あなたが私を意識してくれている——、それだけで私は悦んだ。もっと見てほしい……。もっと私のことを意識して欲しい……。切なる願いとして胸に秘めていたことが現実となった。なら、私の、もうひとつの願いも……。叶えられるのでしょうか……？

「本当に、受け入れてくれるのでしょうか……？」
「大丈夫だよ。絶対、受け入れてくれるよ！ 私の好きな海未ちゃんだもん。間違いないよ！」

——プツン

す……き……？

い、いま……ことりは、私のこと……好き、と……？

あの、ことりが……わたしのことを……好き……

あただが、よくわからない……。でも、ことりが、わたしのことを好きでいてくれたことだけはわかりました。そう、だったのですね……。わたしは、てつきり、好かれていないものだと思っていました……。でも、違うのですね……。わたしと、ことりは……。両想い、だったのですね……！

あ、あは……あはは……あはは……

その瞬間、頭を鈍器のようなものでぶつけられたかのような衝撃を受けた。同時に、何か大切なモノを失ってしまったような、崩壊してしまうような気分となる。

目の前が、真っ白になって……。何も見えなく……。盲目的になってしま……

「海未ちゃん、どうしたの？ 顔色悪いよ？」

ああ、ことりがわたしのことを心配してくれている……。なんてやさしいのでしょうか……。あなたのそのやさしさ、わたしは好きなんですよ……？

「海未ちゅん……？ どう、したの……？ ことりの手を握りだして……？」

あたたかい……。ことりのては、なんてあたたかいのでしょうか……。ずつとずつと、握り続けていたいです……

「う、海未ちゃん……！ い、いたい、いたいよ……！ 強く握り過ぎだよ……！」

「ことりは、受け入れてくれるのですね……？」

「えっ？ な、何を……？」

「私のこの気持ち、受け止めてくれるのですよね？」

「——っ！ も、もしかして、海未ちゃん……！」

「はいっ！ ことり、私はあなたのことが好きです!!」

やつと、言えました……。口にした瞬間、胸に詰まっていたモノが取り除かれたような開放感がありました。ああ、胸がスツキリすると言うのは、こういうことだったのですね！

ことりも嬉しそうです。こんなに身体を激しく動かして、喜びを表しているだなんて。よっほど私の告白に胸を躍らせたのでしょうか。

「だ、だめっ……海未ちゃん、だめだよ……！ こ、ことりには……穂乃果ちゃんが……！」

ほの、か……？

その言葉を耳にした時、とても嫌な気持ちになります。せつかくスツキリしたと言うのに、汚されたような気分です……。

不愉快です……。あなたが、そんな言葉を吐くことが……！

「穂乃果など知りません!! ことりは、私だけを見ていればいいのです! 私の名前だけを口にすればいいのです!! 今こうしているのは、穂乃果じゃない、私です!! あなたの好きな私が、しているのですよ!!」

私の邪魔する者など要りません。あなたには、私の他に必要ないのですから……!

「それに、あなたは受け入れてくれると、そう言ったではないですか?

あの言葉は嘘なのですか?」

「そ、そうじゃなくって、それは私のことじゃなくって、海未ちゃんの好きな子のことで……」

「私が好きなのは、ことりです! それ以外などありえませぬ!!」

まだ私の気持ちに理解できていないところがあるのでしょいか?

やはり、あなたに強く認知してもらうためには、あなたの心に直接触れなくては……

「海未ちゃ……んっ!」

強引に、あなたの唇に口付けを交わす。私の、好きという気持ちを証明するために。

しかし、口付けと言うのは、なんと素晴らしいのでしょうか。口にする言葉よりも深い気持ちを伝えることができる、最大の証明手段。それも、口溶けるような感触も共に味わえるなど、まさに一石二鳥です。

「……はあ、はあ……やめよう? ね? もうやめようよ、海未ちゃん

? 今なら間に合うよ……?」

涙を流すまで気持ちが悪かったのでしょうか? うふふ、ことりもかわいらしいところがあるのですね。それで止めようだなんて……もつとしたくなるじゃないですか……!

「だ、だめっ!! こ、こんなこと穂乃果ちゃんが知ったら、海未ちゃん嫌われちゃうよ!!」

「……っ!!」

また、穂乃果……穂乃果穂乃果穂乃果穂乃果ほのかほのかほ

のかほのかほのか……鬱陶しいのですよ……

「そんなに穂乃果に言いたいのですか？ 構いませんよ、言ってくれても？ でも、あなたが話せば、あなたがこれまで私とこうしてきたことがバレてしまいますが……いいのですか？」

「……………っ!!」

「酷い人ですよね……穂乃果のことが好きなのだど軽々しく口にしながらも、あなたはこうして私と身体の関係をつくった……。とんだ背信行為ですよ、あなたのしたことは？」

「そん、なっ……………」

「もし、穂乃果にこのことを知られたら、真っ先に困るのはあなたです。私と何度も身体を交らせて汚れたあなたを見て、どう感じるのでしょうか？ きつと、あなたのことを拒絶するのでしょうか？」

「い、いや……………いやだ……穂乃果ちゃんに嫌われたくないよ……………」

「なら……私の恋人になってください。そしたら、誰にも話しませんよ……」

「えっ…………や、そ、そんなの……………」

「選択の余地があるとでも？ あなたには、そんなものなどありはしないのですよ？」

「……………は、い……………」

ふふふっ、いい子です。こどりは賢いですから、どうすればいいのかわかっていますものね。

あなたを、誰の手にも渡しはしませんから……

くく

それから数週間後——

晴れて恋人同士になりました、私とこどりは、あれから2人である

時間が増えました。なり立ての時は、お互いに緊張しているところもありましたが、次第に打ち解けていくようになりました。

そして今日も2人で……

「ねえねえ、ことりちゃん。今日は一緒にどこか行こうよ！」

「えっ、あっ……うん……」

「そうだよ！ 恋人同士になってからあんまり2人つきりになったことがないんだから、今日こそは2人だけの時間を過ごそうよ！」

「う、うん……そう、だね……そ、それじゃあ——」

「——ことり？」

「……っ！ う、海未……ちや、ん……？」

うふふっ、私が後ろにいたから驚いているのですね。とてもかわいらしいです。

「今日は、私との用事があつたはずですよね？ 忘れましたか？」

「えっ、やつ……そんなの、聞いて——」

「——忘れましたか？」

「——っ、お、覚えてる、よ……うん、行こっか……」

「えー？ 今日も海未ちゃんとなの？」

「ご、ごめんね、穂乃果ちゃん……また、今度ね……」

雑踏を跳ね退けるようにことりの手を強く握りだすと、さっさとこの場から去りました。私とことりの時間が減ってしまうのではないですか。2人だけの時間は、一刻も逃がしたくないですから……。

「う、海未ちゃん……あの、ね……」

その前に——

「ことり」

「……っ！ な、なあに、海未ちゃん……」

「どうして穂乃果など私ではない人と話をしているのですか？ もうしないように

と言ったではないですか？」

「そ、それは……ほ、穂乃果ちゃんの方から話をしてきたから、つい……」

「つい、ではないですよね？ この前も同じことを言いましたよね？」

どうして私の言うことを聞いてくれないのですか？」

「ご、ごめんね……わ、私、頑張るから……だ、だから……」

「そうですか……そんなにお仕置きが欲しいのですか……」

「……っ！ ち、ちがつ……！」

「……何か？」

「う、ううん……いい、いけないことに、お仕置き、してください……」

「はい、よくできました。それでは、行きましょうか♪」

2人でこうしていられる時間がとても嬉しいものです。時々、こうやって私の言うことを聞いてくれない時もありますが、ちゃんと躰しっけをしてあげさえいればわかってくれるのでしょう。

私が、ことりのことを誰よりも愛していることを……

ただ最近は、笑うことをしなくなり、鋭く細めた眼で見るが多くなりました。あなたの笑顔、素敵でしたのに、見られないのは少し残念です。

代わりに、身体を交らせている時には、私の名前を必死に呼びかけてくれるあなたにうつとりしてしまいます。あなたが私のことを求めていることが、嬉しくて堪らないから。もっと、あなたから声を聞きたくって、ついつい力が入ってしまいます。

かわいいかわいい私のことり。

初めからこうしてしまえば、こんなに苦しまなくても済みましたのに。それに気付けなかった私も愚かでした。ですが、今では、私の虜。私のために鳴き、私だけを見つめてくれるかわいいことり。もう二度と、あなたを手放すことのないようにしましょう。

籠のなか閉じ込めて――

あなただけのために――

いつか、私の本当の愛が届くように祈ってます。

私だけの、ナイチンゲール小夜啼鳥——

〈 f i n 〉

第一次料理大戦

ある夏の日、音ノ木坂学院のある教室では、懇願するかのような大声と、それを振り払うような怒声がおよそ30分に渡って鳴り響いていた。

「真姫ちゃんおーねーがーいー！」

合宿やろーよー！」

「穂乃果、あなた海に行きたいだけでしょ！」

それに、この間行つたばっかしじゃない。」

しかし、お互いの主張は変わらない。

スクールアイドルのμ'sのリーダーである高坂穂乃果は、連日猛暑日が続く中、学校の屋上での練習は熱中症の危険が飛躍してしまう。

屋上には高い柵があるとはいえ、意識朦朧の状態では万が一もありえてしまう。そうなる前に、頻繁に気分転換をする必要があると考えていた。

まあそれは建前なのだが……

勿論、μ'sのメンバーであり、作曲担当である西木野真姫も穂乃果の言い分は理解している。

だが、その合宿場所を提供しているのは、あくまで真姫の親だ。

おそらく真姫が親に頼めば、快く貸してくれるだろう。前回の合宿でも、9人が負担したのは移動費だけで、それ以外の諸々の費用は親が出してくれている。

だから真姫はこれ以上親に迷惑をかけたくない。

その気持ちを分かってくれるであろう他のメンバーに視線を配つたのだが……

「チラッ

「うっ、うち冷たい飲み物買ってくるね！」

「チラッ

「わ、私生徒会の仕事しなきゃ……」

「チラッ」

「に、ここはアイドルの練習を……」「にこちゃんは逃がさない!」……ぬわあんでよお! どうしてあの二人は良くして私はダメなのよ!

それに周りを見てみなさい! 海未以外みんな教室から出ようとしてるわよ!」

そうにこに言われ、ハツとした様子で真姫が振り返ると、そこには真姫の視線から逃れようとしている花陽、凜、ことりの姿があった。ついでにドアの奥から逃げたはずの希と絵里も確認できた。

「そ、そんなに合宿がしたいの、あなた達……」

そう真姫が聞くと、みんなココココ頷いた。ちなみに海未はため息をついているが……

「はあ……分かったわ。パパに頼んで用意する。

でも、タダって訳じゃないわ! みんなに1つ、試練を与えるわ!」

みんなが唐突な真姫の発言に? マークを思い浮かべるが、真姫が提示した試練とは……

「それは、手作りの美味しい料理よ!」

『え……?』

「だから手作り料理よ!」

「き、急にどうしたのですか、真姫?」

みんなが真姫の急な行動にフリーズしている中、いち早く海未がツツコミをいれる。

すると、真姫はちよつとしたドヤ顔で、

「1度こういうのしてみたかったのよ!」

前回と同じように私が折れて終了、ただだとなんか癪に障るし……と、とにかく! 明日、学校の調理室で期待して待ってるわ!」

そう言い残し、真姫は1人、教室を去っていった……

時間はまだ残ってる、これ乗り越えれば、楽しい合宿が始まるんだから!

次回、城 (ry

「いや、ぬあにいい感じに終わらせようとしているのよ!」

なんで急に料理なんか作らなきゃいけないのよ!」

にこは納得がいかないと怒っているが、真姫に迷惑をかけているのも事実。

他のみんなもそれを分かっているから、一致団結して、みんなで良いものを作ろうと呼びかけようとした時、事件が起きた。

「なんで、なんで凜ちゃんは一緒に美味しいご飯を作ってくれないの!」

「目を覚ますにゃかよちん!」

かよちんは凜と一緒にラーメンを作るにゃ!」

ご飯が大好きな小泉花陽と、ラーメンを愛してる星空凜が悲痛な叫び声で珍しく喧嘩していたのだ。

「ちよつと2人ともどうしたのよ!」

すかさず絵里が止めに入るが、もう絵里の声は、2人の心には届かない。

「やめて絵里ちゃん!」

ことり、この問題は2人が解決するべきだと思うの……」

ことりが落ち込んだように喋るが、海未はことりの話し方に違和感を感じた。

「ことり……あなた楽しんでるでしょう?」

「ナ、ナニツテルカワカラナイナー」

「はあ……あなたって人は」

しかし、花陽と凜は黒いことりに目もくれず、米料理かラーメン、どちらを作るかを言い争って……否、もはや論点はどちらを作るかではなく、どちらが上かで喧嘩していた。

鬼気迫る2人の表情はもう、μ'sの知ってる2人では無かった。

そこで遂に、我らがリーダーの穂乃果が重い腰を上げ、1つ、提案した。

「それじゃあさ、明日どっちも真姫ちゃんに食べてもらおうよ!」

「「え?」」

「たまにはお互いぶつかった方がより成長するって言うし!」

穂乃果の言葉に賛同したのか、2人はかなりやる気だ。

「確かにそうだね！」

凜ちゃん、私負けないよ！」

「望むところだにゃ！」

そして、穂乃果は安易に提案した事を次の日に悔いることになるのだった……

次の日、真姫は普段食べることの無い、言い方は悪いが、庶民的な料理を期待して学校に着いた。

しかし、調理室に入った瞬間、辺り一帯にとってもいいラーメンの匂いが漂った。

心の中で某ジャンプのベルを鳴らしながら、『オーダー！』と言ってみたい願望をもっていたが、それを忘れるくらいにその料理をみると、どんな料理かと辺りを見渡すと、そこにはどっしりと店で見えるような寸胴鍋が置かれていた。

「ってなんでそんな大きな鍋があるのよ！」

「ふっふっふっ、真姫ちゃん驚いてくれたかにゃ？」

そこにはハチマキを巻いて、普段の練習の倍は汗をかいている凜の姿があった。

ちなみに寸胴鍋には、ほろほろに崩れた骨や臭み取りの為のネギが放り込まれていた。

「色々ツツコミたいのだけれど……」

その寸胴鍋ってどこで手に入れたの？」

「たまたまこの教室の棚に1つあったにゃ！」

勿論、調理学校でもない寸胴鍋など置かれてない。

料理部が部費で購入でもしたのだろうか？ 真実は闇の中だ。

「それで、材料費はどれくらいしたの？」

私が頼んだのだし材料費はだすわ……」

流石に1高校生に本格的なラーメンを作るとなると予算はシャレにならない。

その心配から聞いたのだから、返答は凜よりも奥のキッチンで作業していた花陽からだった。

「実はこれでも2000円で済んだんですよ。」

豚骨も検索した所数本でいいみたいでしたし、調味料はここに揃っていたので、あとは盛り合わせの野菜だけなので、そんなにかかっていません。」

「そ、それは良かったわ……」

これだけのボリュームで2000で済むのか、と驚きを隠せない真姫。

凜の作る本格的すぎる豚骨ラーメンも美味そうだが、花陽の方からも凜に負けず劣らず香ばしい匂いがしてきた。

「それで、花陽は何を作ったの？」

「私は凜ちゃん程大掛かりじゃないけど、にんにくチップスを砕いてふりかけにしてみたの！」

そこには揚げるのに使ったであろうオリーブオイルと小皿の上に盛られたにんにくチップスのふりかけはいい匂いを放ち、食欲がどんどん湧いてきそうだ……その隣にある山盛りのご飯に目を瞑ればだが。

「は、花陽、そのご飯はどうしたのよ？」

「もちろん、3人で分かるようだよ！」

1人でもいけない事はないけど、凜ちゃんのリラーメンもあるからね！

もしかして、私1人で全部食べないといけないのかと心配したが、その必要がなくて良かった。

そう話している間に、凜の作ったラーメンも完成した。

「いただきます（にゃー）！」

「まずはラーメン……っ！」

なにこれ、とても美味しいわー！」

まずはラーメンをひとすすり、流石に麺はスーパーで購入したみただが、麺とスープが素人が作ったとは思えないほど相性がよく、麺が止まらない。凜も大満足みたいだ。

しかし、ラーメンをすする手を花陽が止める。

「ちよつと真姫ちゃん、こつちのご飯も食べてよー！」

「分かったから手を離して、どれどれ……うん、これも凄く美味しいわー！」

ご飯とにんにく、ただそれだけなのにガツンとくる味のパワーに頭がクラクラしてくる程美味しい。ラーメンの味を越えそうな勢いだ。

どちらも予想を遥かに上回る美味しさだった。

「これは驚いたわ……」

ありがとう2人とも、さあ、そろそろ片付け「それはまだ早いよ真姫ちゃん。」……え？」

真姫は戸惑ったように花陽をみると、そこには10種類は余裕で超える量のご飯料理が並べられていた。

「まだまだ真姫ちゃんには沢山食べてもらうにやー！」

今度は凜の声に反応し振り返ると、これまた沢山の種類のラーメンがずらりと並んでいた。

「え、こ、これを全部食べるの？」

「そうだにや真姫ちゃん。」

「いっぱい食べて力をつけなきゃね！」

「さあ、召し上がれ！」

「うわああああー！」

ってあれ？今のつてもしかして、夢？」ギョルルル

「お、お腹が空いてきちゃったわ……」

お昼ご飯はラーメンに、いやご飯にしようか迷ってきたわ……どうしようかしら……」

真姫にしては珍しく、ご飯とラーメンどちらも食べたみたいでした。

マイ

「花陽、少し休憩して良いか？」

車に乗って二時間程経った時、先輩はそう言ってきた。

「あ、すみません。大丈夫ですか？」

先輩は私を迎えにきてくれた。実家にいると言っていたから、往復で考えれば四時間も運転している事に気づき、心配になった。

先輩が運転しているのは、高速道路の様に整備させた道ではなく、山に沿って出来た道だ。木々に囲まれ、車一台通るのがやつとの山道は、整備もあまりされておらず、曲がりくねって砂利や石、木の枝などが道路に落ちていた。普段運転をしない私でも、神経を使う運転である事は分かった。

「大丈夫、大丈夫。でも、その先で車が停めれるから、休憩には良いと思つてさ。花陽も休憩が必要だろ？」

「あの、ありがとうございます」

東京から宮崎までは飛行機で三時間、空港で先輩と合流してから更に二時間、自宅を出てから空港までの移動時間も合わせて考えると、六時間程経っており、慣れない長時間移動によって疲労が溜まっていた。

少し進んだ所で、右脇に車を停める事が出来るスペースが存在しており、そこで車は停車する。

先輩は、車から降りて伸びをする。私も倣って車から降りた。

11月、山の冷たい空気が肌をさし、空気に違和感を覚えた。

「空気が違う？」

「お、違うか」

先輩は、嬉しそうにそう言い、深呼吸をし始めた。

「花陽もやってみろ」

大きく空気を吸い込み吐く。澄んだ空気は都会の物より軽く、味さえ感じた。鼻からは山の自然の香りがする。土の、木々の、流れる川の、山に存在する自然が複雑に合わさった香りだ。車に乗っていた時は気づかなかったが、風に揺れる木々の音、川のせせらぎ、空を飛ぶ

鳥の鳴き声、様々な音がする。違和感は、空気自体が別物だったから感じた物だった。

「どうだ。凄いだろ？」

地元の自然を自慢する先輩。

「そう、ですね。本当に凄いです」

私は、九州の自然に圧倒されてそんな言葉でしか返せなかった。

「よし、休憩も済んだし行くか」

先輩は車に乗り込み、エンジンをかける。

「はい、楽しみです。先輩のお勧めのご飯！」

私はさつきまで以上に、今回の目的であるお米への期待を募らせた。

「おーい、起きろ花陽」

先輩に呼ばれ、私は目覚めた。

「あれ、私……眠ってました？」

「ああ、ぐっすりとな」

笑いながらそう言い、私の荷物を下ろしていく先輩。

途中休憩した時から一時間が過ぎていた。

「ここがばあちゃんの家、準備には時間かかるだろうけれど、見る？」

古い木製の家だ。下手をすると時代劇に出てくる程年季が入っているが、手入れがキッチンとされているのだろう、ボロという風には見えなかった。

「はい、気になります！」

「ばあちゃん！ この娘が話した、白米が大好きな後輩！ 美味しい白米を食べさせてあげて！」

大声で叫ぶ先輩。先輩の向いている方を見ると、田んぼがあり、お婆さんがいる。顔には深く皺が刻まれている。見える範囲で首も手も細く、曲がった腰を含めてとても小さく見えた。

慌てて、お婆さんのところに向かい、挨拶をする。

「お、お世話になりますー！」

「ああ、元気な娘だね」

お婆さんは、くしやりと笑った。

家に入って直ぐ目に映ったのは、昔ながらの土間だった。

「おや、土間は初めてかい？」

驚いた私にお婆さんが言った。

「はい、まだあるんですね」

思わず出た言葉だったが、失礼だと直ぐに後悔した。

「この辺りは皆こんなだよ。こんな田舎じゃあ、都会の娘さんには驚きだろうね。」

お婆さんそう言つて、奥からお米を持ってきた。

「丁度良く乾燥させた新米があるからね、お嬢さんの口に合うかわからないけれど、このお米を炊こうかね」

「新米！ とつても楽しみです！」

「少し時間がかかるけれど、いいかい？」

「はい！ お手伝いしますね」

「ありがとねえ」

嬉しそうに返事をするお婆さんは、先輩に似ていた。

「釜でご飯を炊いた事は無いだろう？ 私が教えるからね」

そこから、美味しいご飯を炊く準備を始めた。

「まずは、お米を洗うんだよ。水は山水で冷たいから気を付けてね」

お婆さんに教えてもらいながら、真似をする。

お米をふるいにかけて小さなお米を弾いていく。弾かれたお米は、後で飼っている鶏のエサにするらしい。それから、お米を少し手に取つて、水で丁寧洗つて釜に移していく。これを五合分行い、釜にお米の1・2倍程の水を入れる。

「ああ、上手だね」

時間が無い時でも、お米を美味しく食べるために手間を惜しむことは無かった。今まであまり理解される事が無かったが、褒められたことが嬉しい。

釜に水を入れ、そこから一時間ほど待つ。

「孫は元気にやれていますか」

お米に水を吸わせる間に、お婆さんは竈に火を付けながら話しかけてきた。

「はい、大学でもバイトでも皆の中心にいますよ。私もとてもお世話になっていて」

先輩とは大学で出会った。大学に入学して直ぐのレクレーションで先輩は手伝いをしており、スクールアイドルをしていた事もあって、変に目立ってしまったていた私のサポートをしてくれた。それが、話すようになるきっかけだ。奇妙な事にバイト先も同じになり、とても良くしてもらっていた。

「そうかい、それは嬉しいねえ。私は此処しか知らないから、あの子が心配だったんだ。ここに友達を連れて来た事も無かったから、苛められてないかと思っただけけれど……」

そこで一旦お婆さんは言葉を切り

「孫は楽しそうにしていますか。……本当に、本当に良かった」

涙を浮かべながら、そう続けた。

「さて、時間だね。ご飯を炊こうか」

お婆さんは涙を拭き、釜の元に向かっていった。なんだか、無性にお婆ちゃん達に会いたくなかった。

お米が水を吸って水かさが下がったので、水を足す。お婆さんの事も考えて、水の量を多めにして、柔らかく炊こうとしたが、「私の顎はまだ現役だよ」と言われ、お米の1.2倍程にした。

釜を置く竈の温度は釜底を温める程度になっていた。これは、炊きムラを起こさない様にするためらしい。

蓋をし、少し経つとチヨロチヨロと釜の中が沸騰し始める音が聞こえる。聞こえ始めたら、お婆さんと協力して薪を入れ、火を強くすると、沸騰が激しくなり、ジュウジュウと中身があふれ出す。そうすると、燃えていない薪を引いて、弱火にする。

ゴトゴトとした音を蓋が立てた。ここからは蒸らしの作業だ。中を見てはいけない。ここで蒸らしをキチンとすることで、旨みがまます。早く食べたいと訴える食欲を抑えて、じつと待つ。音が静まると、蒸らしも終わりとなる。藁を燃やして、余分な水分を飛ばせば炊きあがりだ。

「よし、外にあるおひつを持って来てくれないかい」

お婆さんに言われて、外に干してあるおひつを取ってくる。

蓋を取ると、炊き立てのご飯の香りが湯気と共に広がる。思わず、ぐうぐうとお腹が鳴った。それほどまでに食欲をそそる匂いだっただけで、香りだけではない。つやつやとし、たったご飯粒はぽんぽんに膨らみ、光を反射しキラキラと光って見事に炊きあがっている。それは、ご飯粒一つ一つが自らが主役だ！ と、主張しているようであった。

しゃもじを濡らし、お婆さんが慣れた手つきでご飯をおひつに入れて混ぜる。こうすることで、ご飯の間に空気が入りふつくらとなるらしい。混ぜる度に湯気と香りが溢れていく。

「腹減るよな」

いつの間にか帰ってきた先輩が、私の隣にいた。美しい見た目と、食欲を誘う香りに意識を持っていかれていたらしく、先輩に気づいていなかったらしい。

「先輩、おかえりなさい」

「ああ、ただいま。それより顔、拭いた方が良いで。よだれ、凄い事になってる」

先輩が自分の口のあたりを指でつついた。慌ててハンカチで口を拭いたが、お婆さんにも気づかれていたようで

「食いしん坊だね」

と、笑われてしまった。

食卓に並んでいるのは昔ながらの和食だった。白米とみそ汁と菜豆腐、それとそばだった。

『頂きます』

三人で手を合わせ合唱をし、食べ始める。

私に取ってのメインは、白米だ。

箸をご飯に入れる。混ぜられた事でふつくらとしたご飯は、箸の侵入をすんなり通し、軽くなる。

一口食べる。アツアツのご飯をハフハフと冷やしながら噛む。仄かな甘みを持っていたご飯粒を噛めば、小さなご飯粒に凝縮された旨みが溢れてくる。噛めば噛むほど溢れる旨さ！ 白米大好きな私で

なくともこの旨さを味わったなら、ご飯が主役と思えるだろう。

水を十分に含んだため、ご飯粒には余分な硬さはなく、適度な柔らかさを持つており、新米として普通の米とは違って舌触りが良い。

噛みしめて、溢れる旨みを感じた。しかし、早く次のご飯を頬張りたい。相反する思いは、口に休む暇を与えず、ご飯を食べる速度を加速させていった。

そんな私を見て、先輩とお婆さんが笑っていたことを、後日先輩が送ってきた動画で知った。

「どうだ。旨かっただろう」

食べた食器を洗ってお風呂をいただき、後は寝るだけ。と、なったタイミングで先輩はそう言ってきた。

「はい！先輩が食べさせてくれたお米が美味しかったので、ここまです来ましたけれど、あの時より美味しかったです。」

やっぱり、新米だからですか。そう、聞いた私に先輩が教えてくれた。

「いいや、それもあると思うけれど、一番は水だな。椎葉の水はな、山水を引いているんだ。標高1000m級の山達が連なる椎葉の水は、細かいフィルターを通すだけで飲むことが出来る程綺麗で、旨い。稲作にもその旨い水をたっぷり使うし、市販の炊飯でも、ご飯はその60%が水だ。ここみたいに釜で炊くと水の割合はもつと高くなる。旨い水と旨い米、育った土地の水と米の組み合わせ、さらに、椎葉の水は米炊きに合う軟水。これが旨くない訳がない。同じ水を使った豆腐や蕎麦も旨かっただろう」

確かに、私が夢中になつて食べたご飯はもちろん、人参やホウレン草が混ぜられたお豆腐や、山の幸がふんだんに使われた蕎麦も絶品だった。

「先輩、ここのお水って貰えるんですか？」

「なんだ。椎葉の水のファンになったか？ たしか、売っていた筈だ。それに、この水を送ってもいいと思う。米と一緒に送って貰えよ」「ありがとうございます！」

それは、とてもうれしい。

私がニコニコしていると、困った顔をしていた。

「それでさ、花陽。言いづらいんだが……」

「どうしたんですか？」

言いにくそうに先輩は

「そのさ、車が故障したみたいで、明日帰れそうにないんだわ。多分東京に戻るのには三日後になるかも……」

そう、言った。

「……ダレカタスケテ？」

久しぶりに叫んだ私の声は、山に響いて消えていった。

A smiling Cafe

ドキドキと心臓がうるさいくらい動いている。ただ電話をかけるだけなのに、こんな緊張するのは初めてだ。じわりと滲み出す汗が輪郭をなぞって落ちていく。

かれこれどれくらいの間スマホとにらみ合いをしていたのだろう。窓から見える入道雲が、ついさっきまで高みの見物を決めていたと思っただけなのに、今はその姿が見えなくなっていた。

大丈夫、電話をかけて話すだけだから、大丈夫。そう自分に言い聞かせて大きく深呼吸をする。

よし、と意を決して画面を操作し、電話帳から一人の人物の番号を呼び出す。

ごくりと生唾を一つ呑み込んで、発信ボタンを押した。

一回、二回、三回……無機質なコールが耳元で鳴り響く。コール音が聞こえるたびに大きくなる心音のせいで、近くで泣いているはずの蝉の声が聞こえない。

四回、五回、六回……無機質なコール音が途切れて、微かな生活音がスピーカーから流れる。

『もしもし』

低くも無く高くもない、けれども凜としていて頼りがいのある女声。その声に心臓を掴まれたように身体が一瞬硬直するけど、小さく深呼吸をして硬直を解く。

「も、もしもし、僕だけど——」

緊張してるから少しだけでもってしまった。だけど、もう賽は投げられたのだと佇まいを正して、もう一度深呼吸。

そしてぱさぱさになっていた唇を軽く湿らせて、人はいないけどしっかりと前を見据えて胸の内にある想いを女声にぶつけた。

「——今月の仕送りが振り込まれてないのですが。お母様」

瞬間、通話が切られた。

「ちよつとちよつとちよつと!!!」　なんで切ったのあの人!?!?」

電話かける直前まで「うわく仕送りの催促とか流石に気が引けるけど、ないと困るし、もしかしたら忘れられてるだけかもだしなく」みたいな葛藤で緊張してた息子の電話を言い訳もせずぶつ切りとは何事だろうか。さつきまで良心の呵責とか畏れ多さとかでバクバクに鳴ってた鼓動が、今度は別の意味でバクバクと鼓動を早くする。

脳裏に浮かぶのは、最後に通帳に刻まれた110の数字。例えここが辺境の田舎の地であっても、一か月110円じゃ生活できないよ。というか、家賃すら払えずに追い出される未来しか見えない。

「とにかくもう一度電話しなきゃ!　じゃないと僕が死ぬ!!」

スマホの画面を素早く操作して母さんの番号を再び呼び出す。今度は意外にもワンコールで繋がり、スピーカーからさつきの凛とした女声が聞こえる。

「もしもし、母さん?　なんでさつきはいきなり電話を切ったのさ!!」
『ごめんなさい。母さん、ちよつとアレルギーで「仕送り」って単語聞くと通話を切っちゃうらしくって』

「嘘を吐くにしてももう少しまともな嘘は吐けなかったの?!」

『正直引つかかると思ってたわ』

「この人は自分の息子をあまりにも低く見すぎではないのだろうか?」

「そんなの今どきの小学生でも騙されないよ!」

『ええ、そうね。騙されなくて本当によかったわ』

「……何か含みのある言い方だね」

『好きに解釈しなさい。……で、なんの用だったかしら?』

やつぱり小馬鹿にされてるような気がして問い詰めた気持ちにはあったけれど、ほぼ九割故意犯で仕送りを振り込んでいない母さんの事だから、下手すればこの通話も切られて音信不通になる可能性がある。ここはそれをぐつと堪えて会話を続けるのが賢い選択だよ。

軽く咳ばらいをして、僕は本題を切り出す。

「僕の仕おく——生きるための資金の事についてだよ。まだ振り込まれてないんだけど……」

『あら、そんなの振り込んでないから当たり前じゃない』

「そうなんだ。じゃあこれから振り込んでくれるって事だね」

『あら、そんなの嫌に決まってるじゃない』

「だよなー。あーよかつ……なんだって？」

僕の聞き間違いかな？ 何か生命線が絶たれたような気がするんだけど……。

『聞こえなかった？ 仕送りは振り込まないって言ってるの』

「なんで!?! なんで息子が路頭に迷って行き倒れる道をプロデュースしようとしてるのさ?!」

『大袈裟ね。東京にも野草や段ボールくらい生えてるでしょう?』

「それは世間一般では大袈裟になる事だから!! というか、段ボールは自然発生しないからね!?!」

自慢じゃないけど、そうなった場合、僕は一週間も生活できている自信はない。きつと一週間後の新聞の朝刊には小見出し程度の記事が載っていることだろう。最期の時は最愛の人に看取られながら静かに終えたいから、流石に勘弁願いたい。

一週間後の自分の成れの果てを想像して身震いしていると、母さんは呆れたようにため息を一つ吐いて少しだけ怒気を滲ませて話始めた。

『そもそもアンタね、なんで母さんが仕送りを振り込んでないかわかる?』

「えっと、僕をコンクリートジャングルに放り出すため?」

『端的に言えば馬鹿に払う金はないからよ』

「そんな理由で仕送り止めるとかアンタは鬼か!?!」

もしかやこの人は実は実母じゃなくて、遺産狙いの義母だったりしないのかな? 僕に対する言葉の棘が大きすぎる気がするんだけど。

『そんな理由、ねえ……』

「な、なにさ。僕は間違ったことは言っていないでしょ」

『……アンタ、一人暮らしする前に私とした約束を忘れたとは言わせないわよ』

「約束? ……………あー」

全身から冷や汗が出てきた。

『忘れてたのね。……まあそんなことだろうと思ってたけど』

「い、今思い出しました……」

『なら説明しなくてもわかると思うけど、私はその約束の中で言ったわよね？ 成績不振の場合仕送りの額は減らしていくって』

「い、言っただけど……。いや、でもそれにしたって仕送りゼロはおかしくない!? だって僕、単位は一つも落としてないんだよ!」

『一度全教科赤点を取って、追試と先生方の恩情で貰った単位でよくそんな口たたけるわね』

「お母さま? どうしてその事を知ってるのかは存じませんが、ここは一つ冷静に話し合いませんか? あまり怒ってばかりだとお身体に悪ですわよ?」

『それで息子の馬鹿が治るならいくらでも身体を悪くするわよ。で、何か申し開きは?』

スピーカー越しなのに感じる有無を言わせない圧力。

きつとここで上手く言い訳ができれば母さんも恩情で仕送りをくれるだろう。だから考えるんだ。この状況を打破して仕送りを手に入れる方法を……。だからお願いだ、僕の身体……。片手で遺書を書き始めようとしなくてくれ……。まだ生きていたいと、そう願ってくれ……。っ!!

「えっと、ですね。そのお……」

考える考えろ考えろ考えろっ! 教授にでっち上げの理由を喋って何とか単位をもぎ取ることができた頭で考えろ!

体感で10分。実際は2秒。ごくりと固唾を呑み込んで口を開く。

母さんが満足する言葉。それは――。

「……お」

『おっ』

「……お・ね・が・い♡」

『また生きて会えるといいわね』

無情に切られる通話。

教授に単位を貰った時、あまりにも頭が可哀想すぎるからと言われたのを思い出したのは、通話が切られて一時間後の事だった。

「というわけで助けてトモえもん」

「誰がトモえもんだ。というか、まずは状況を話せ状況を」

翌日。困った僕は、こういう時になんだかんだ役に立つ昔からの友人宅を訪れていた。

因みにこの友人、僕が「相談があるんだ」って言った瞬間に某ゲームの貧乏神をなすりつけられた時のような顔をしたけれど、僕は知っている。君が僕のテスト結果を秘密裏に母さんにリークしていたことを……。因果応報ってやつだね。ざまあみろ。

怒ると怖いのでバレないようにほくそ笑み、今の僕の状況を説明するために用意してもらった麦茶で唇を湿らせる。そして昨日の事の顛末を事細かに話していく。

「——とまあ、ザックリ要約すると、僕の大学の成績が悪かったから九月の……つまりは今月の仕送りはなしって事になったんだよね」

「金は貸さないからな」

「いや、流石にそんなことは言わないから」

後々禍根の残らない奢りならともかく、金銭の貸し借りは交友関係に響くっていうからね。ただでさえ少ない友人をこんなことで失うわけにはいかないよ。

友人はそうか、と少しだけ安堵したように言って、ずっと手の中に隠し持っていたであろう爪切りを傍らに置いた。もしお金を貸してと言っていたら、あの爪切りで何をされていたのかは気になるところだけど、それを聞く勇氣は僕にはなかった。

「でもじゃあ、お前は何の用で俺の家に押し掛けてきたんだよ」

「それは勿論、節約のために暫くここに住みつ——」

スツ（友人が爪切りに手を伸ばす）

「——くわけにはいかないから、アルバイトをしようと思ってます!!」
なんなの……なんなのさ、その爪切りは!! 得体が知れなさ過ぎて

滅茶苦茶怖いんだけど?!

未だ嘗てない程に爪切りに恐怖心を抱いている僕をよそに、友人は友人で僕の発言に気になる事があったのか、片眉をピクリと上げて僕を訝しげな眼で見る。

「バイトお？ お前がか？」

「僕以外に誰がするっていうのさ？」

「いや、まあそうだけどよ……」

いつもはさつきみたいにスツパリ物を言うタイプの友人が何かを言い淀む。僕がバイトするのはそんなにおかしな事かな？

不思議がる僕に、友人は姿勢を正して真剣なトーンで言う。

「正直、バイトは止めといた方がいいと思うぞ」

「一応聞くけど、なんで？」

「お前馬鹿じゃん」

さては貴様、心配するふりして喧嘩売ってるな？

「待て待て。お前は俺が喧嘩売ってるように見えるかもしれないが、正直お前がまともに働けるビジョンが見えないんだよ。マジで」

「いやいやいや、流石に僕だってバイトぐらいできるからね?! 教室で毎日馬鹿騒ぎしてるパリピにもできるんだよ?」

「でもな、アイツ等はちゃんと一桁の暗算ができるんだよ……」

どうやら友人の中では、僕は一桁の暗算もできない大馬鹿らしい。これには流石に異議を唱えたい。

「僕だって一桁の暗算できるし、なんなら二桁の暗算だってできるからー!」

「7×9は?」

「48!」

「今のお金を扱うサービス業に努めるといふ選択肢は消え——あ、おい、ここで舌を噛み千切ろうとするな。後始末が大変だろうが」

あの憎きパリピ達にもできることが僕にはできなかった。自決理由はそれで十分だろう。

後始末の心配する友人と心の中にある微かな理性が、何とか自決を押しとどめてくれた。……だけど、目の前で自決しようとする友人を

止める理由が部屋の後始末が大変だからというのは、それは優しさなのかな？

まあいいか。生きると決めたのなら、まずは目の前の問題をどうにかしないと。

「まあ、さっきのは急だったからちよつと間違えたけど、僕ってどんなバイトが向いてそうか相談したくて今日は来たんだよ」

「働くことに向いてなさそうだがな」

「うるさいよ?!」

きつと僕にも天職というものがあるはずなんだ。だから、そんな社会不適合者みたいに言われるのは心外だ。

「だけど実際問題、お前にお金を扱わせるのは不安だし、秋葉というか、ここら辺で工場のバイトなんてないし、喋らせると馬鹿丸出しのお前に向いてるバイトってそうそう無いぞ」

「そこまでスペック低くないよ! それに、ほら、ティッシュ配る仕事とかならできそうじゃない?」

「だけどあれ出勤日数自体少ないから、家賃その他払うにはちよいと足りねえんじゃないか?」

「うぐっ……確かに……」

家賃は都会にしては安い所に住んでるからこのバイトだけで何とかできそうだけど、光熱費とか水道代とか、食費や娯楽費……は削れども、8万弱は必要な計算になる。また聞き情報でしかないけど、正直ティッシュ配りだけで稼げる気はしない。

「ま、そういう具合に好条件のバイトが見つかるわけないわな。諦めて残ってる金で野草図鑑買うのが賢明かもな」

「残念だったね。残金の110円じゃ野草図鑑も買えないよ!」

「その情報で俺は、自信満々に言うお前の頭以外に何を残念に思えばいいんだよ……」

友人から憐みの視線を感じる。やめて! そんな目で僕を見ないで!! ついでにわざわざ立って押し入れにしまった段ボールを引っ張り出さないで!! 僕は一か月段ボール生活なんてしたくないから!!

「くうっ……!! 覚えてろよお!!! バーカバーカ!!」

「いや、何を覚えておけばいいんだよ……」

友人宅を飛び出す僕。

絶対にバイトして一か月食いつないでやる。そんな固い決意を胸に、僕はコンビニに駆け込んで求人雑誌を読み漁ることにした。……メイドカフェの時給高いなあ。

あれから二日後、僕は秋葉原からちよつと外れた所の路地にある、シックな感じの喫茶店の前に立っていた。

ここは、結局求人を探してもいい条件が見つからずに放浪してた時に見つけた喫茶店で、お腹もすいてたからふらりと立ち寄ってみた所だ。

内装は若い人たちがにぎわってそうな喫茶店とは違い、シンプルで落ち着いた感じがとても過ごしやすかった。出された料理もコーヒーも美味しくて結構長い間居座った気がする。

そしてその時に、カウンターにいたマスターが話しかけてくれて、ついテンションが上がってた僕はバイトを探してるけど、自分ができそうなバイトが中々見つからないことを話してしまった。今思うと、いきなりそんな話をしだすなんて結構迷惑な客だったのかもしれない……。

だけど初老の物静かなマスターは僕の話をしつかり聞いて、今の現状を憐れんでくれた。そして、一度この店でバイトを体験してみるかい? と提案してくれた。柔和な笑みを浮かべた時に後光がさして見えたので、多分マスターは仏か何かなんだろう。

勿論僕は是非と快諾。そして今日はその体験日。時刻は開店一時間前で、諸々の仕事内容を説明してくれるらしい。人生初めてのバイトで緊張はしてる。だけど、マスターはいい人そうだったし、お客さんも常連さんばかりらしいからきつと大丈夫だよね!

不安と期待を胸に、僕は扉を開けた。

「くたばりなさいっ!!!」

ブシユウウウウウウウ（顔面に殺虫スプレーをまかれる音）

「目が!! 目がああああああ!!」

沁みる!! 殺虫剤が目沁みて滅茶苦茶痛い!! というか叫んだせいで口の中に殺虫スプレーが!! まっず!!!

突然の出来事に対応できずに、店の入り口でゴロゴロと悶え苦しむ僕。開幕1秒でこの店でのバイトが不安一色で塗りつぶされてしまった。

「あ……え、ちょ、ちよつと、大丈夫?!」

近くにいた女性が慌てた様子で声をかけてくれた。

目の痛みを必死にこらえて声をかけられた方を見る。全体的に華奢なシルエツトで大人とも子供とも取れない独特な雰囲気のある女性がそこにいた。その右手には殺虫スプレーがあるから、きっと僕の顔面に殺虫剤をぶちまけたのはこの人だろう。

「ええ、大丈夫、です……ちよつと視界が霞んで呼吸が、しに、くだけ、です……」

「世間一般ではそれは大丈夫って言わないわよ?!」

確かにそうかもしれないけど、流石に死にはしないから大丈夫だと思おう。

徐々に治まる痛みをこらえて立ち上がる。目はまだ霞んでいるけど、ぼんやりと輪郭は見えた。

小柄で細身の身体。それを七分丈の真っ白なシャツに黒のレディースパンツとシンプルなカマーエプロンで包んでいる。綺麗な黒髪は後ろで一つに纏められていて、大人っぽい雰囲気を持ちながらも顔は幼く、いわゆる年齢不詳系の方だろうか？

「……あ、でも身長と胸は小さいから高校生かな?」

「アンタ初対面のくせにいい度胸してるじゃない」

人の額に青筋が浮かぶ瞬間を始めてみた気がする。

「ち、違うんです! 僕、考え事がたまに口に出ちやう癖があるみたいで! わざとじゃないんです!!」

「わざとなら尚悪いわよ!! というか何の弁明にもなっていないじゃない!!」

殺虫スプレーのノズルが僕の顔面を捉える。どうも言葉選びを間違えたようだ。

手を挙げて降参のポーズをしては見るものの、女性の指はすでにスプレーのトリガー部分にかけられており、僕の返答次第でその指が引かれてしまう。だけど困った事に、この場の打開策が何も思い浮かばなかった。

土下座すれば許してくれるかな？　と思っていると、女性は構えを解かずに僕に問いかける。

「……というか、アンタはそもそも誰よ。お店はまだ開店時間じゃないわよ」

好機。この流れで、何とかさっきの事をうやむやにできないかな？

「あ、えと、僕は今日ここでバイトの体験をさせてもらう者です。マスターさんに、この時間に来いって言われてまして……」

「バイトの体験？　私今の今まで聞いてないんだけど……」

「一昨日マスターが提案してくれて、急だし中学生の職場体験かって感じかもしれないですけど、本当なんです！　信じてください!!」

「……………マスター！　ちよつといい？」

確認のために厨房にいるマスターを呼び出す女性。僕の言い分は信じてもらえたけど、スプレーを下ろさない辺り警戒はしているみたいだ。中々手厳しいなあ。

「どうしたんだい？　にこ君——って、ああ、君はあの時の子だよ。待ってたよ」

厨房から出てきたマスターは僕を見たことで瞬時に状況を理解して、女性の警戒心を解くように歓迎してくれた。

聞く前にマスターが僕を迎え入れたせいで女性は2秒ほど目を瞬かせて固まっていたけど、状況を呑み込めたのかスプレーを下ろしてくれた。死にはしないけど滅茶苦茶痛いし苦しいから、またかけられなくて良かったと胸を撫でおろすばかりだ。

「ちよつとマスター。私、新人が入るなんて聞いてないわよ」

「ああ、昨日一昨日とにこ君は休みだったから伝え忘れていたよ。申し訳ない」

ははは、と柔らかく笑うマスターをジト目で軽く睨む女性。結構年上のマスターに対してタメ口で話してるし、結構付き合いが長いのかな？

「……はあ。まあ不審者やお客さんじゃなくて助かったわ」

「僕ももう一度そのスプレーを食らわなくて助かったよ」

「うぐつ。それは、その……悪かったわね」

「何か騒がしいなと思ってたけど、収集はついたようだね。とりあえず、にこ君の紹介をしてもいいかな？」

マスターはもう一度柔らかく笑うと、女性の隣に立って僕に女性を紹介する。

「彼女は矢澤にこ君。君と同じ大学生で……確か1歳年上だったかな？」

「僕は20歳です」

「私は21歳よ」

「という事みたいだね。にこ君は3年間働いてくれることもあって、もう大体の仕事はできるから、君も分からないことがあったら彼女に聞くといいよ」

年も近いし聞きやすいだろう？ そう言っただけウインクする姿はどこか可愛げがあり、少しだけドキリとしました。

マスターに紹介された女性、矢澤さんは僕の方に一歩だけ歩みよると、さっきまでのキリつとした顔が破顔した。

「にっこにっこにー！ 貴方のハートににっこにっこにー♡ 笑顔届ける矢澤にこにこ♡ にこにーって覚えてラブにこっ♡」

これからよろしくね♡ そう言っただけ軽くウインクする姿には何か薄ら寒いものがあり、少しだけブルリとしました。

さて、今のは何だったんだろう？ 何かご丁寧にフリまでついてたけど……。もしかして、初対面の僕が話しかけやすいように気をつかって笑わせようとしてくれたのかな？ その心遣いはありがたいけど、盛大に滑ってしまってる以上、迂闊な反応は矢澤さんを傷つけることになってしまう。

何とかいい感じにさっきのをなかつたことにしつつ、別の話題に転

換しなれば。

「マスター、なんかこの店冷房効きすぎじゃないですか？」

「さっきのが寒いなら寒いって素直に言いなさいよ！ 逆にむかつくわね！」

ダメだった。だけど自分で寒いって分かっているのならやめてほしかったよ。

「どうやら仲を心配する必要はないみたいだね」

いえ、結構心配でたまらないです。特に矢澤さんの頭とか。

口には出せない僕の訴えは、まあ当然のごとく伝わるわけもなく、マスターはてきぱきと僕たちに支持を出す。

「ここ君は取り合えずある程度ホールのスタンバイを頼むよ。君は制服を渡すから、それに着替えたらずはにこ君の手伝いをしてもらおうよ」

「分かりました」

「ふん。まあ手間だけはかけさせないでよね」

「その点についてはご心配なく。僕、友人や親からは手間はかけるだけ無駄だと言われているので！」

「……自慢気なところ悪いけど、アンタ、多分それ見捨てられてるわよ」

「なんと」

第三者から明かされる衝撃の事実。てっきり手間がかからないから、手間をかけようとしても無駄って意味だと思ってたのに……。

「……マスター、私これから先不安でいっぱいなんだけど」

「……まあ、きつと大丈夫だよ」

大丈夫だよ、矢澤さん。僕も胸が不安でいっぱいなんだ。

マスターの後についていき、矢澤さんやマスターが着ているのと同じ制服を受け取る。多少使用感はあったけど、洗剤の良い匂いがするし、特に気にすることなくそれを着る。

「おお……なんかそれっぽい」

ロッカーの隣に置いてあった大きな姿見で制服姿の自分を見る。平々凡々な顔立ちの僕でも、デザインと素材がいいおかげで、それな

りに様になっていた。

なんかこう、制服着るとこれから仕事するぞ！ って感じがしてテンション上がるなあ。……………ちよつと練習しておこうかな？

「い、いらつしやいませえ……………」

駄目だ。なんか言葉が尻すぼみになって頼りなさげに見える。笑顔も引きつってるし…………。

「いらつしやいませええ」

今度はなんか語尾が上がりすぎてる気が…………。うーん。難しいなあ。

これはちよつと練習した方がいいかな？

「いらつしやいませ……………いらつしやいませ……………いらつしやいませつ

……………いらつしやいませー」

「……………何やってんのよ、アンタ」

「ほわっっちゃ?!?!」

後ろを見ると、更衣室の扉の向こうで矢澤さんが呆れた目で僕を見ていた。

「ちよ、ちよつと！ いつから見てたんですか?!?!」

「三回目くらいからよ。着替えるだけなのになんか遅いと思つたら……………アンタもやってたのね、練習……………」

いたたまれない気持ちになったのか、苦い顔で顔を背ける矢澤さん。やめて！ そんな反応されたらただでさえ恥ずかしいのに、余計恥ずかしくなるっ!!

古来より日本には「穴があつたら入りたい」という諺があるけれど、今はその諺を作った人の気持ちがかかるかもしれない…………。なんならそのまま埋めてほしい気までする。

「……………ほら、開店まで時間がないんだし、しやがんでないで早く来なさい」

「……………はい」

羞恥で顔を染めながら矢澤さんを追ってホールへ向かう。

「おや、着替え終わったんだね。……………うん、とても似合ってるよ」

「マスター……………」

悲しいときに優しい言葉をかけてくれるマスターは、やっぱり仏かそれに類する存在だと僕は思う。

でも、そうだよ。せつかつく体験するんだから、あれしきの事でくよくよしてられないや。うん。マスターに迷惑のかからないよう頑張ろう!!

「よっし！ 矢澤さん、僕は何をすればいいですか!!」

「うわっ。何よ急に元気になって……まあ、取り合えずこの台拭きを使って全部のテーブルを拭いてちょうだい」

「はい!!」

「その時に、ナプキンとかの残量も確認して、必要そうなら補充しなさい」

「了解です！」

矢澤さんから台拭きを受け取って、近くのテーブルから拭き上げていく。あまり時間がないとも言ってたから急いで、でも絶対手は抜かないようにしっかりと拭いて次のテーブルに移る。……ただテーブル拭いてるだけなのになんか楽しいな。

「たー、たーたらたつたーたらららたららーらーらーらー♪」

「ぶふっ!!?」

「矢澤さん!!?」

ホールの床をモップで掃除していた矢澤さんが急に盛大にむせた。一体どうしたというのだろうか。

大丈夫ですか？ と近寄って尋ねると、ガシツと両肩を掴まれて、嬉しそうなのか嫌そうなのか、はたまた困ったような良く分からない表情で僕を見る。

「あ、アンタ、その曲……知ってるの？」

「その曲？ 今店内にかかっているジャズの事ですか？」

「違うわよ!! 今アンタが鼻歌で歌ってた曲よ!!」

「ええ?! 僕今鼻歌歌ってたんですか!!?」

「無意識だったの?!」

つい楽しくて歌ってしまったのか……。いつも家で一人作業とかがしてると鼻歌歌ってたからその癖かな……。恥ずかしい。

でも僕が鼻歌で歌ってたって事は、あの曲かな？　ちよつと前に人気があったスクールアイドルの曲なんだけど、もしかして矢澤さん知ってるのかな？

「僕は曲を友達から聞かせてもらっただけで詳しくは知らないんですけど、凄く好きなんですよね。メロディは優しい感じがするし、歌詞を聞いてると、こう、一人じゃないよ、頑張ろう!!　って気持ちになれて……って、矢澤さん？」

「……なによ」

「口が不自然に吊り上がってますけどどうしたんです？」

「な、何でもないわよ!!　ほら、早く仕事しなさい!!」

自分から聞いといてなんなのさ。変な人。

「……………」

『……よかったね、にこ君』

『……………はい』

こうして少しイレギュラーは起きたものの、開店作業は着々と進んでいき、開店十分前には準備を終わらせることができた。

僕は台拭きを一度流して洗って定位置に戻した後に、モップを片付け終わった矢澤さんの所へ行き、指示を仰ぐ。

「取り合えず、アンタは体験って事らしいからオーダーの取り方と料理の提供。そしてお客さんが食べ終わった後の片付けの一連の流れまで覚えてもらうわ。しっかり覚えなさい」

「記憶力に自身はないですけど、メモ帳があるので大丈夫です！」

「なんでアンタはこう、一々不安を煽るようなことを……まあいいわ」
矢澤さんは口頭ではなく、実際に動いて教えてくれた。

その流れとしては、お客さんが来たら人数を確認して席へ誘導。一度下がってメニューとお冷を出す。下がる際にはお決まりのセリフを言つて下がる事。そして注文が入ったら伝票を持って行つて注文を聞きながら記入をし、記入した伝票はここに張り付けておく……など、実に分かりやすく教えてくれた。

「——とまあ、これが一連の流れになるわね」

「なるほど。分かりやすかったです」

「ふふんっ。あつたり前でしよう?」

ない胸を張る矢澤さん。……この人とまだ会って一時間程度しか話してないけど、雰囲気は大人っぽいのに身長とかシルエツトとか性格の根っこが子供っぽいから素直に称賛しにくいなあ。

何とも言えなくて口をもにもによさせていると、マスターが軽く手を叩く。

「それじゃあ二人とも、オープンするから準備よろしくね」

「は、はい!」

いよいよオープンするのか……。大丈夫かな? ちゃんと案内と
かできるかな?

ドキドキと心臓が早鐘を打っている。そんな僕の不安を感じ取ったのか、矢澤さんがそばに来て肩に手を置く。

「来るのは殆ど常連だし、客数もそこまで多いわけじゃないから心配しなくても大丈夫よ。アンタはまず、『笑顔』と『恐れないこと』この二つだけ頭に入れておきなさい」

「矢澤さん……!!」

……やっぱりなんだかんだ頼れる先輩なんですね。その言葉で少しだけ、緊張がほぐれましたよ。

「それじゃあ先に私がお客さんを案内するから、それを真似て次に来るお客さんを案内しなさいよ」

そう言つて、カマーエプロンをピンとただして入口の方へ歩いていく。矢澤さん、あなたの仕事姿、しっかりと勉強させてもらいます!!

矢澤さんが扉を開けて、外にかかっていた「close」の立札を裏返して「open」にする。

さあ、バイトの時間だ……!!

——カラコンロン

1組目のお客さんが入店してきた。

「いらっしやいませえー。喫茶店『Smile』へようこそお」

できる事なら、さっきの尊敬とかその他諸々を返してほしい。それが、矢澤さんの接客を見て出てきた言葉だった。

「……………マスター?」

「……いや、うん。にこ君も常にあんな接客をしてるわけじゃないから、大目に見てやってくれないかい？」

自分が悪いわけじゃないのに申し訳なきような顔をするマスター。さつきまでサバサバとしてた矢澤さんが急に猫なで声全開で接客し始めたから驚いたけれど、マスター曰く、あの客はああいった接客をされると喜んでくれるらしい。いきなりお店の雰囲気とのミスマッチを見て絶句していたけれども、そういう事なら仕方ない。そういう事にしておこう。うん。矢澤さんの寒い自己紹介を思い出して、本当は本人がやりたいだけなんじゃないかと思っただけど、そういう事なのだ。

若干冷めた目で見ていると、再びカランコロンと軽快なベルが鳴る。どうやら二組目のお客さんが来たみたいだ。

「よし、頑張るぞっ」

大事なものは『笑顔』と『恐れない事』ツ！ 行くぞっ!!

「いらつちやいましえ」

これほど死にたくなつたのは初めてだった。

入ってきた二人の男性のお客さんは何かを堪えるに口元を抑え、上を向いている。もうこのバイト体験を放り投げて家に帰りたい衝動にかられたけれど、ぐつと我慢する。

ここで逃げたら友人の思惑通りになるし、何より、『恐れない事』という矢澤さんの教えに反することになる。ここは深呼吸でもして、もう一度仕切り治そう。

「い(ガリツ)……いらつひやいまへ」

痛い。思いつきり舌噛んだ。

「えつと、君、大丈夫かい？」

「……はい、大丈夫です」

お客さんに心配されてしまった。その心配は心についた傷に少しだけ沁みますね……。あと舌。

咳ばらいを一つして気持ちをリセットする。

「お客様は二名様でよろしかったでしょうか？ ……はい、では、こちらのお席へどうぞ」

二名のお客さんを席へ誘導し、一度下がってお冷とメニューを持つていく。流石にここでは失敗はせずに何事もなく渡すことで来た。

矢澤さんから教えてもらったセリフを伝えて一度下がる。裏の方に引くと、そこにはニヤニヤと笑う矢澤さんの姿があった。

「お疲れ様。まあ、噛むなんて誰もが通る道なんだから気にしないでよ」とよ

「だったらそのニヤケ面やめてもらえませんか?!」

傍から見ればアンタのさっきの接客の方が笑いものですけど!?!?

しかし、それを伝える前に矢澤さんはお客さんに呼ばれてオーダーを取りに行ってしまった。くそう! もう絶対失敗するもんか!!

そう固く決意したところで、マスターがカウンターの方から顔をだす。

「さっきのお客様の注文が決まったみたいだから、オーダーを取りに行ってもらえるかな?」

「あ、はい!」

「……にご君も言ってたけど、言葉を噛んでも気にしないようにね」

マスターと優しい言葉に見送られて、さっきのお客さんの所へ向かう。大丈夫大丈夫。失敗しても、しっかりと仕事をやり遂げることを優先するんだ、僕!!

「ご注文はお決まりでしょうか?」

よしっ! 入りは完璧だ!!

「はい。自分はたまごサンドとエスプレッソを」

「俺は……この店のおすすめって何かな?」

「この店のおすすめ、ですか……」

困ったな。勤務時間一時間ちよつとの僕には分からないんだけど……。

助けを求めて近くの矢澤さんに視線を送る。丁度注文を取り終わったのか、ばっちりと目が合う。

コミュニケーション時間が短い僕達でも、狭い店内だからこの会話は聞こえているはず。教えてくれ矢澤さん。ここのおすすめ商品って何??

その思いが届いたのか、矢澤さんは小さく微笑みを浮かべると、声を出さずに口だけ動かす。僕は読唇術の心得はないけど、大きくゆつくり動かしてくれたおかげで何とか読み取ることができた。ありがとう！ 矢澤さん!!

「当店のおすすめメニューは塩焼きそばとブレンドコーラになります」

「そんなメニューこの店にはないわよっ!!」

横から飛んできた矢澤さんに思いつきりチョップを食らう。容赦なく振り下ろされたのと勢いがついていたのとで結構痛い。

突然の出来事にお客さんが驚いている中、矢澤さんはすぐに笑顔を作って頭を下げる。

「申し訳ありません。彼はまだ入って間もない新人でして……」

「あ、ああ、そうだったのか。いや、こっちこそ悪かったよ」

「ありがとうございます。当店のおすすめはマスター謹製のナポリタンとブレンドコーヒーですが、いかがいたしますか?」

「じゃあ、その二つを頼むよ。……頑張つてね」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

僕の頭を掴んで下げさせた後に、にこやかに去っていく。これがプロ、か……。

「マスター、ナポリタン1、たまごサンド1、ブレンドコーヒーにエスプレッソ1入ったわ」

「了解。ドリンクの方は、にこ君お願いね」

マスターが厨房に下がるときに無言で肩に手を置いたのが、無償にいたたまれなかった。

時は流れて、ランチのピーク過ぎ。

最初こそ失敗しまくりだった僕だったが、矢澤さんのフォローと慣れで何とか乗り切ることができた。

現在時刻は15時。気づけばもう夕方が近くなっていた。

「ひとまず二人とも、お疲れ様。この賄い、よかったら食べてね」

そう言つて差し出されたのはソーセージや玉ねぎ、ピーマンがふんだんに使われたナポリタンだった。

「え、いいんですか？ これつて賄いというよりメニューにある奴じゃ……」

「まあね。でも、一生懸命に働いてくれてる若者に粗食を出すつても気が引けてね」

「マスター……!!」

何ていい人なんだ……!! 現代日本は労働者を数字と認識してぞんざいな扱いをするつて良く聞くけど、こうしてしっかりと働きを評価してくれる人もちゃんといるんだね……。マスターのような人がもっと増えれば日本の労働問題も何とかなるかもしれないな。

「ありがとう、マスター。でもいいの？ 私達二人一緒に休憩もらつても？」

「ああ。仕込み自体はそんなにしないし、私一人でも事足りるよ」

「そう。じゃあ先に休憩いただくわね」

「ゆつくり休憩しておいで」

そう言つて僕と矢澤さんは賄いをもつて裏へ下がる。

マスターが作つてくれた賄いのナポリタンは濃厚なケチャップの味と野菜の素材の味が絶妙で、更にそこにバターの風味が加わつて本当にこれがナポリタンなのか疑わしい程美味しかった。

「うわあ、滅茶苦茶美味しい……!!」

「アンタ、子供じゃないだから……。がつついてると喉に詰まらせるわよ」

矢澤さんは呆れた表情で僕を見ながら自分のナポリタンを食べる。なんか落ち着いた風を装つてるけど、ナポリタンを食べた時に目がきらりと輝いたのを僕は見逃さなかった。

それから暫くは僕らは黙つて賄いを食べる。疲れた体と盛大に嘸んで未だに少し痛む舌に旨さが沁み渡る。

「ごちそうさまでした」

奇跡的に同時に食べ終わった僕らは合掌してマスターへの感謝を

口にする。

「そういえば」

食器を下げてると、矢澤さんが唐突に切り出した。

「アンタが今日バイトしてた理由を聞いてなかったんだけど、何か特別な事情でもあったの?」

そういえば僕が今日だけ働くっていう事だけは伝えてたけど、その理由までは話してなかったっけ? 情けない話だから、あんまり話したくはないんだけど……。

ちらりと矢澤さんの顔をうかがう。まあ、今日は凄くお世話になってるし、沢山フォローもしてもらってる人に、嫌ですっていうのもお門違い……かなあ。

暫くうーんと考え込んだ結果、別に重い話じゃないしいいかという結論に至って話すことにした。

「実はですね——」

大学のテストが全部再テストで単位がギリギリ取れた事。それが母にバレて仕送りをカットされたこと。バイトして生活費を稼ごうとしたけど、友人には止められたこと。そして、マスターに誘われたこと。全部話した。

矢澤さんは終始呆れ顔で、話終わった最初の言葉は「アンタ本物の馬鹿だったのね」だ。ちよつとだけ話したことを後悔した。

「ひどいよ、矢澤さん……」

「悪かったわよ。アンタじゃないけど、つい思ってた事が口に出たのよ」

「それ何の弁明にもなってないですよ!？」

どこかでやったようなやり取りをして、矢澤さんがくすくすと笑う。

「けどあれね。アンタ見てるとなんとなく面倒見なくなる気持ちになるのが分かったわ」

「え、そんな気持ちになってたんですか?」

「流石に後半になるとそんな気持ちの方が強くなったわよ。何回もオーダーミスとかサブミスかするんだもの」

「うぐっ……」

確かに後半は矢澤さんがフォローに入る回数が増えた気がしなくもなかったな……。

さつきまでの自分の仕事ぶりを反省して噛み締めていると、矢澤さんはテーブルに肘をついて笑う。

「アンタは穂乃果にちよつとだけ似てるのかもね……」

「? 何か言いました?」

「別に。ただ、これからもここでバイト続けるの? って聞いただけよ」

「バイトですか……」

ふむと考える。

正直今日半日働いた感想を言えば疲れたしきつかったっていうのが本音だと思う。労働だから当たり前なんだけどね。

友人のいうように実際僕はバイトに向いてないなああって時々思いもしたね。特に最初のお客さんを迎え入れた時とか死にたくなかったし。

生活費だつて、流石に鬼畜な母さんでも見殺しにすることはしないだろうから、すすり泣きと今日の苦労話を脚色物を話せば仕送りをしてくれるかもしれない。そうすれば僕は働く必要がなくなるわけだ。

「正直辛かったですけど……」

……だけど、楽しかったというのもまた事実だ。

辛かったし疲れた。だけどそれ以上にマスターやここに来るお客さん。そして矢澤さんと一緒に働くのは楽しかった。だからこのままバイトを続けることもやぶさかではない。

それに今後、また仕送りを断ち切られても蓄えがあれば、暫くは生きていけるかもしれないしね。

「……まあ、検討中って感じですね」

「そ。私としては足手まといが増えたら困るけど、人では足りてないから期待だけはしておくわ」

それだけ言つて矢澤さんはホールの方に戻っていった。

僕も早く戻ると仕様。帰りにコンビニで履歴書を買う予定をリマ

インダーにセットして矢澤さんの後を追いかけた。

休憩

某月某日都内某所。そこそこ広い室内で海未とことりの二人は炬燵に入ってぬくぬくしていた。

「あつたかいね、海未ちゃん」

「そうですね、やはりこの時期は炬燵が手放せません」

「あ、ミカンとって〜」

「いくつですか?」

「うーんと、これくらい〜?」

ことりはテーブルの上に腕を乗せ、手をパーにして海未に見せる。その様子に海未は苦笑いを浮かべながら、ミカンの入ったザルから五つ取り出しことりに渡す。

「ありがと〜」

「それより他の皆は遅いですね」

「そろそろ来るんじゃないかなあ〜。あむあむ」

ことりがミカンを頬張りながら炬燵のテーブルに頭を乗せる。ちようどその時、部屋の扉がノックされる。扉から入って来たのは絵里、希、にこの三人。

「お待ちせ……ってあら? まだ二人しか来てないの?」

「おはようさん。二人がいて穂乃果ちゃんがないのは珍しいやん」

「穂乃果のやつ、寝坊してるんじゃないでしょうね」

「いえ、先ほど連絡が来たので、まだ寝てるということは」

絵里たちも炬燵に入り、再びまつたりとした時間が流れ始めるも、希がふと気づき立ち上がる。

「うちお茶淹れてくるけど、欲しい人おる?」

「はい」

「あ、私も」

「これから来る人数考えたら、ポットとか用意しておいた方がいいですよ。海未」

「はい。私たちも手伝いましょう」

希に続き、にこと海未が部屋から出て行く。

「ねえことり」

「なあに、絵里ちゃん」

「どうやったらミカンの皮がそんな剥け方するの？」

絵里がことりの手元を見ると鳥の形に剥かれたミカンの皮が複数個並び、戯れているワンシーンが作り出されていた。

「えつとね、ここをこうしてこうやって」

「ふむふむ」

「ここをこうして、最後にこうで、こう。これでかんせ〜」

「待って、最後の所をもう一回」

絵里に見せながら皮を剥いていたことり。しかし最後の1剥きがよく見えていなかったのか、もう一度見せてほしいと頼む。ことりは仕方ないなあ、とばかりにミカンを手に取り、再び剥き始める。その横では絵里が真似をしようとミカン片手にジツと見つめる。

「えつと、ここを」

「ええ」

「こう」

「……お願いもう一回」

三人が戻って来るまでさらに三つほど鳥を作り出しだが、終ぞ絵里は作り方が分からなかった。

「なるほどなあ。それでこの数分で鳥が増えたんやね」

「まるで動物園ね」

目を離していた数分の始終を絵里から聞き、納得の表情をする希と、鳥の数に少し引いた目をしているに。」

その動物園を作り出した張本人は、現在お茶を相方にミカンを美味しそうに頬張っている

「それにしても穂乃果はともかく、真姫たちは遅いですね」

「そうだねえ〜。あ、足音」

バタバタと騒がしく近づいてくる足音にことりがミカンを運ぶ手を止め、「扉を見る。それと同時にバーン、と勢いよく開く扉。

「おつまたせにやあ！ 星空凜、ただいま参上！」

勢いよく開けられた扉から、これまた勢いよく飛び込みながら名乗

り上げる凜。それから少し遅れて入室してくる花陽と真姫。

「お、遅れてごめんなさい」

「三人でお昼済ませていたら、予想外に時間がかかったわ」

「三人とも待つてたよ。さ、座つて座つて」

名乗りを終えるやいなや、無駄に洗練された無駄のない無駄な動きで炬燵に入った凜を横目に、ことりに促され足を入れる二人。その前にそつと置かれるミカンと湯呑。

「それにしても、こうして皆でのんびりするのもなんだか珍しいね」

「いつも穂乃果ちゃんが何かしら持つてくるもんね」

「そういう希も偶に持つてきますけどね」

「えー、そんな事ないよ」

ね、えりち。と横に座る絵里に同意を得ようとするも、絵里は何やら考え込む様子でそれには答ええない。そんな反応に希はあれー、と笑顔のまま首を傾げる。

「いえね、よく考えると希が発端の騒ぎが二個三個探せばありそうなのよね」

「そう言われてみれば、あんたたちが部室に来たのつて希が差し向けた事だったわね」

「えー、あれをカウントしてまうん？ でもそんな事言うたらにこつちとの鬼ごっこはにこつちが原因やん」

「あれは追われた立ち場だから、寧ろ私が被害者な気がするんだけど？」

「あの時にこちゃんを追いかけて始めたのつて誰だつて？」

花陽の言葉に一齐に当時の記憶を呼び起こすにこを除いた七人。そして同時に思い至ったのか、一齐に口を開く。

『誰だつて？』

「ちよおおおい！ なんで誰も覚えてないのよ！ この中でもしっかりしてる海未か絵里ぐらいはせめて覚えていなさいよ！」

「だ、だってあの時自然と後を追うつて結論に至ったし」

「そ、そうです。だいたいいつもこういう事を言う希や穂乃果が発案ではない事は覚えているのですが、なぜか誰が発案したのか、覚えて

いないのです！ 私は悪くない、私は悪くないです！ そう、全部先生がやれって」

「いや、別にそこまで責めてる訳じゃないから、少しは落ち着きなさいよ。別次元入ってきてるわよ」

うがー、と頭を押さえる海未を落ち着かせるにこ。その横では、もうその話題は終わったとばかりに別の話を始める面々。

「それにしてもここまでゆっくりしていいの？ 全員、とまでいなくても、何人かは予定あるんじゃない？」

「それについては私が答えるわ!!」

真姫の言葉を待ってましたとばかりに天井から降り立つ黒い影。突然の来訪者に一同そちらに視線を奪われる。

「クックック、さあ恐れ戦きなさい！ 堕天使ヨハネ、ここに降臨!!」

「あまりにも早い着地！ うちじゃなきや見逃してまうね！」

「……えっと、脚、大丈夫？」

決めポーズと共に立ち上がる堕天使ヨハネこと津島善子だったが、着地で痺れたのか脚が少しばかり震えている。

「フツ、心配せずとも私は堕天使。自動回復が働いてるわ。つまり！

これくらいどうってこともにやいわ！ ……ないわ！」

「あ、噛んで言い直した」

「えっと、取り敢えず座る？ 脚大丈夫じゃないでしょ？」

「ミカンもありますよ」

「優しさが逆に痛い！」

まるでダメージを受けたかのようにオーバーリアクションで胸を押さえるも、そのままいそいそと炬燵に入り湯吞とミカンを受け取る。

「それで、あなたは何か知ってるの？」

「モチのロン！ 私の千里眼「A」をもつてすれば見えぬものなどあんまりないわ！」

「あんまりなんだ」

「それは私たち、否、今この現状の説明にも繋がりにえること」

「今と現状で重複しとるやん」

「その真理とは！」

「とは？」

「何やら外界で祭事が行われてるとの事で、我ら一同様々な神の手によつて起こされるであろう波乱万丈な数日の中、せめてのこの日だけは僅かばかりな休息を齎さんという、導き」

善子が一息に言い切りお茶を飲むと、途端に訪れる沈黙。

それは善子の言っていることを何とか理解しようとする者、途中から思考が追いついていない者、始めから聞いていない者、すでに話そつちのけでミカンを食べていることりとそれぞれが黙っているのである。

そして何とか理解しようとした絵里がつまり、と口を開く。

「この数日間私たち、言い方からしてヨハネさんのお仲間も忙しいから、今日くらいはゆっくり休んでねって事でいいのかしら？」

絵里の確認に無言で頷く善子。その時、どこからともなく現れた二人の少女が善子の襟首を掴む。

「あ、善子ちゃんここにいたずら！」

「あ、どうもすみません。うちのメンバーがご迷惑をおかけしました。ほら善子、皆の所へ戻るよ」

「げえ！ ずら丸に果南！ どうしてここが！」

「はいはい。その話は後でね」

「失礼しました、ずら」

襟首を掴まれ、引き摺られるように連行されて行く善子を見送ったあと、まるで何もなかったかのようにそつと扉を閉める花陽。

「なんか……賑やかだったね」

「……そうね」

「なぜかどつと疲れたわ」

善子の登場から退場までのほんの数分、たった数分、されどその数分で謎の疲れに襲われ、机に頭を乗せる。態度に出さないまでも、他にも疲れているのか、しばらく誰も何も話さず、お茶を飲む音と、ことりによる動物園の拡散だけがされた。そして鳥が十一段のピラミッドになった時、海未が口を開く。

「ことり、流石にそろそろ捨てましよう?」

「うん、流石に私も作り過ぎちゃったって思ってたんだ。あ、花陽ちゃんゴミ箱取って〜」

「はい、どうぞ」

「ありがと〜」

「それにしても大分作ったわね。これ全部ことりが食べたの?」

「ううん、海未ちゃんの分も入ってるよ」

上から一つずつゴミ箱に入れながらことりが答える。

「凜は先ほどから何を読んでいるのですか?」

「えっと、他の参加者さんたちの小説を読んてるにや」

「ほかのさんかしやさんたち? また奇妙な名前の人がいるんですね」

「今の海未ちゃんのことば、この人にだけは言われたくないやろなあ」

「名前に関しては大分ふざけてるものね」

「私の悪口ですか!」

「ちやうちやう。ほれ、海未ちゃんあくん」

少しばかり動揺する海未は希から差し出されたミカンを食べ、お茶を一口飲み落ち着く。

「それでなんの話でしたっけ?」

「もしえりちがとあるマフィアのボスだったら」

「洗脳うけそうですね。あとオレンジ色のおしゃぶりとか持ってそうです。白い帽子とか被って」

「なんでそんな具体的な!?!」

「いえ、なんとなく」

海未のあまりにも具体的な想像に驚く絵里。そして今日何度目かの勢いよく開け放たれる扉。

「こんなタイミングで私がつ! 到着!」

「そして私も来ちゃいました!」

「脈絡なさすぎでしょ! ていうかもう一人は誰よ!」

「私です!」

「だから誰よ!」

「誰だ？」て聞きたそうな表情してますので自己紹介させてもらいますが、私はスクールアイドルの高海千歌！」

「なぜだかすごくイラツとするんだけど？」

「まあまあにこ落ち着きなさい。千歌さんだっけ？ 立ってるのもなんだから、ここに座ってお茶でも飲んでお話ししましょう」

「ようこそ……「スクールアイドル」の世界へ……」

「あんたら、いい加減にしないと怒られるわよ」

にこが握りこぶしを作った事で大人しく炬燵に入る穂乃果と千歌。

絵里と希は内心テンションこそ高かったものの、炬燵に入ったまま菓子受けに入っている煎餅の袋を開けていた。

「それで穂乃果はどうして遅れたんですか？」

「えつとね、早々に私がいてもなんだかなあつていう神の陰謀と、特に理由のない遅刻が私を襲ったから？」

「つまり分からない、という事ですね」

「あ、でもでも！ 来る途中で千歌ちゃんと会って、意気投合してたらこんな時間になって」

「はい！ それでどうせ行先同じですし、一緒に行きませんかって話からこうなりました」

ビシイ！ と敬礼をして続ける千歌。

「まあ私たちが到着して事は話すネタが無くなったって事なので」

「え、待って。もう終わるの？ なら急いで片付けないとじゃない！」
「そういう事ならもっと早く言ってよね！」

千歌の突然の告白にバタバタと慌てて散らかしたゴミなどを片付け始めるも、そんな様子を無視する穂乃果と千歌。

「そんな訳で！ ゆっくり休んだところでラストスパート！」

「皆張り切っていくよー!!」

「もしかしたら『μ's』じゃなくて『Aqours』の話かもしれないけど、そうだったとしても面白いのは請け合いです！」

「楽しみにしててね!!」

記憶と想い

陽の光が窓から降り注ぎ、私の目を直撃する。

「ん……もう、朝なのね……」

そつと上体を起こして、隣で幸せそうな寝顔を浮かべる人の頬女性を撫でる。

くすぐったそうにしながら薄らと瞼を開く。

「ふみゆ……絵里ちゃん？」

「私よ、希。朝ごはん作るからもう少し微睡んでなさい。昨日も遅くまでレポートやっていたのだし」

「それは絵里ちゃんも同じなんだから私も……」

「いいの、今日は私が当番なのだから。全く真面目なのはいいけど体を壊したら元も子もないのよ？」

「……うん、わかった。大人しくしてる」

「ふふっ、いい子ね」

「あ……もう！子供扱いしないでよ!!これでも絵里ちゃんと同じ歳なの!」

「はいはい」

そんな風に騒ぐ希を置いて、私は台所へ向かう。時間のかからないものを、と考えて冷蔵庫を覗くと卵とベーコンが目に入る。

「食パンはまだ残っているからそれとベーコンエッグかしらね。早く済ませてしまいましょうか」

メニューを頭の中で考えて、冷蔵庫から取り出したベーコンを切る。単純作業の中で、ふと考えてしまう。

今日が、6月9日だと。

「もう二年……いえ、まだ二年かしら？」

一度その事に思いを馳せてしまうと、数珠なりになって当時のあらゆる感情が戻ってきて涙が出そうになる。慌ててそれを抑え込みながら溜息を吐く。

「ダメね、私。強がりも虚勢も張れなくなってるわ。弱くなってる……」

私のせいで、希は。その言葉だけが最後に私の頭の中に残る。

止められない。脳裏に焼き付いた映像が走馬灯のように私の中を駆け巡る。だがその思考は、突然訪れた指先の痛みに掻き消される。

「痛っ—」

よく見ると、包丁が指に当たって血が出ている。普段ならこんなミスはしないのに、そんなことをぼんやりと考えていると——。

「絵里ちゃん——?!怪我してるじゃん!治療しないと!」

「いえ、このくらいかすり傷だから平気!ダメ!ちゃんと消毒するから!」でも朝ごはん——「そのくらい私ができるよ。とにかく先に怪我の治療だよ!」……」

そこまで強く言われると思っていなかった私は、黙ってなされるがままになる。腰掛けさせられ、消毒液を染み込ませた綿で患部をそつと触れられる。

「〜っ!」

「ごめんね、少し我慢して」

「いえ、大丈夫よ。私の方こそごめんなさい……少しぼーっとしていてどこか他人行儀な受け答え。機械的な自分に少し嫌気がさす。

「……………」

その後、希が私に変わって作ったベーコンエッグを食べ、私が食後に入れたコーヒーを飲みながら会話をした。

「ね、絵里ちゃん。今日病院が終わったら美術館に行かない?」

「ええ、いいわね。その近くでお昼も食べましょっか」

「やった♪今日はね、とある画家さんの展覧会なんだ、ずーっと気になつてたの!」

子供みたいにはしやぎながら希はチラシを見せてくる。

「!!」

そのチラシに、私は見覚えがあった。二年前に私が希を誘って見に行こうとしていたものだったから。

「?どうしたの絵里ちゃん。顔真つ青だよ…?」

「い、いえ…なんでもないわ。先にシャワー浴びて準備してくるわね」
「え……………あ、うん」

平静を装って立ち上がり、着替えを持って風呂場に駆け込む。希の影が近くに見えないことを確認してから、静かに涙を零す。嗚咽が漏れないように、必死に堪えながら。

「……………っ、どう……………してっ…今日に限ってあんなに思い出させるのよっ……………うあ……………今日は……………今日一日だけは…笑っていないきやいけないのにつ!」

臆病な私は、希に彼女が^{記憶}全てを失う事になったきっかけを打ち明けられていない。拒絶されるといふ恐怖からだった。

「……………もう…大丈夫かしらね」

その嗚咽を無理矢理押し潰す。私には弱音を吐く権利も、許しを乞う権利も無い。

私にできるのは——笑顔を作る事だけだから。

「ねえ絵里、ちよつといいかしら?」

病院で希が検診を受けている最中、私は真姫に話しかけられた。彼女は今、研修生として彼女の父親の病院で研修を受けている。

「ええ、構わないわ」

着いてきて、と顎をしゃくられた先は近くにある自販機。カ

シユツ、と軽快な音を立てながら開けた缶コーヒーを煽って真姫は切り出す。

「ねえ、絵里——貴女、何時まで希に隠しているつもりなの？」

真姫から向けられる視線は、とても冷ややかなものだった。

「貴女は何時までそうやって逃げているつもり？自分を何処まで追い込めば気が済むの？」

彼女が言っている事の意味は理解している。話せと言っているのだ。希に隠_私して_罪いる事を全てうち明けろと。

「そんな事——できるわけないじゃないの!!」

私の……私のせいで希は記憶をなくしてしまったのよ!!

そんな事を話して——私は、私は嫌われたくないのっ！嫌よ……私は、二回も大切な人を失いたくない」

「絵里——でも、貴女……酷い顔してるわよ。」

希がいる時には明るい顔をしていたけど、居なくなった瞬間別人のような、辛そうな表情をしているわ。

貴女は少しずつ壊れているんじゃないの？」

解っている、そんなことは指摘されるまでもなくわかっている。

「でも——なら……どうしろって言うのよ！……どちらにせよ私はあの娘のいない世界なんか生きてても意味が無いのよ!!」

全てを話して嫌_失われるか、誤魔化し続けて壊れるか。そののどに差があると言うのよ？

——もう遅いのよ。二年も経ってしまった」

それに対して、冷静沈着な態度を突き通す真姫は溜息を吐いて言うてくる。

「絵里……貴女、希の事を全っつ然信用していないのね」

その言葉に、真姫を睨みつける。

「なんですって——？貴女今——「だってそうでしょう!!」「っ！」

いきなり声を荒げられ、一瞬止まった動きを見逃さず襟元を掴まれ壁に叩きつけられる。先程の大声で周りの人がこちらを見ているが、それにお構いなく真姫は怒鳴り散らす。

「何が『話をしたら嫌われる』よ!!希がそんなに軽い女だと思っている

わけ?!希がそんなに人の気持ちに鈍感だ思っているの?!

確かに貴女が希に言った言葉は酷い言葉だった。それは私もそう思うから間違いない。

でもね!!二年間、記憶の無い希に対して貴女は本気に向き合ってた!!その事を希が何とも思わないと思っっているの?!

自分の中の被害妄想に浸って悲劇のヒロインぶってるんじゃないわよ!!

私の友人をこれ以上愚弄するなら、たとえ貴女であつても許さないわよ!!」

「あ——」

「忘れないで、絵里。希はずっと貴女と一緒にいたのよ?苦しんでる事にあの娘が何も気づいてないと思わないで。」

——多分知ってるわよ。貴女が、無理してる事」

怒鳴ってしまったってごめんなさい。そう言っつて白衣を翻した真姫は去っていった。周りで見ていた人達がまばらになつても、私はその場から動けなかった。

私は、ずっと希に嫌われたくなかつた。でも、もしこの話を受け入れてくれるとしたら?そんな都合のいい話があるのだろうか——?

「私は一度、希を裏切っている。そんな私をあんな娘が受け入れてくれるというの?そんな事ある筈が——」
「絵里ちゃん!!」——希?!

ベンチに座つて項垂れていた私は、目の前に希がいる事に、声をかけられるまで気づかなかつた。

「あ……いつから、聞いてたの?」

希はキョトンとした顔をしている。

「へ?…なんの事?」

聞かれていなかつた事に安堵しつつ、笑顔を作つて希に向ける。

「……いえ、なんでもないわ!検査の方は?」

「うん!もう定期検診もこれで終わりつて言われたよ!傷もすっかり良くなつたつて」

「そう……それじゃ、美術展に行きましようか!お腹も空いてしまつたしね」

「……………うん」

「…?どうしたの、希」

「ううん、なんでもない。行こう絵里ちゃん」

そつと手を握って、希は先頭で歩いていく。その手はとても温かくて、心地良かった。

「絵里ちゃん、ありがとう。今日は付き合ってくれて」

美術展からの帰り道、夕暮れに照らされた希の顔はとても綺麗だった。

「き、急に何を言っているの？私も楽しかったわよ？色々なものを見れたし」

いきなりの事で少し面食らってしまう。そんな風に言われた事はこれまでに無かったから。

「……………それとごめんね。私、絵里ちゃんに嘔吐してた」

「——え？」

「本当は聞いてたんだ、病院で独り言を言ってるの」

頭の中が真っ白になって、何も考えられなくなる。あれを聞かれていた——まさか。

「……………なんて、言ってたのを聞いたの？」

『私は一度、希を裏切っている』って所から」

「……………そう。全部、聞いてたのね」

「うん……………それでね。私、絵里ちゃんにお願いがあるんだ。ほら、今日って私の誕生日でしょ？」

だからね、と続ける。

「話……………してくれないかな？絵里ちゃんと、私の間にあったこと」

……………想像は、していた。だから覚悟もしていたしいざとなれば話をする気でいた。

「少し……………待ってもらえるかしら……………家に戻って……………お風呂に入って……………ご飯食べて……………その後……………話をさせて……………」

私の身体は酷く震えていた。恐れている、それは間違いない。怖い、二年間ずっと恐れていた事が今現実になろうとしている。

「大丈夫……………大丈夫だよ絵里ちゃん」

私は希に抱き締められていた。安心する希の匂いと温もりに、涙が零れ落ちそうになり、踏み止まる。

「私は、絵里ちゃんを嫌いになったり、絶対に、しないから」

ハッキリと、耳元で区切るように言う希。私はその言葉に、黙って

頷いた。

「……ごめんなさい、もう大丈夫」

「そっか……うん、それならいいの」

そつと、距離を取る。

「……今すぐ、話を聞いてくれる？」

もしも、これが最後になるのだとしたら。希の言葉があっても、そんなふうにしてしまう自分がいるのは確かだ。

「……また時間を置いたら、覚悟が鈍りそうだから」

「うん……わかった」

私は強い人間ではない。何か支えがないと簡単に意思が折れてしまう、そんな弱さを持った人間だ。だから、私の中に彼女の与えてくれた温もり（勇気）が残っているうちに、話をしたい。

近くの公園のベンチに腰掛け、少しの間深呼吸を繰り返す。

そして私は口を開いた。二年前に、私が犯した罪を話す為に。

五年前、の話になるわね。私達はスクールアイドル、sとしての活動を終えて、高校を無事卒業した。

貴女は覚えていないけれども、私達は結構有名人だったのよ。まあ、今は関係ないからその話は置いておくとして。

それから二年、私と貴女は同棲を始めた。高校は真面目だった貴女が寝坊したりするとは思ってなかったけれど……とても、幸福な毎日だったわ。私にとって、かけがえのない日々だった。

どうでもいい事で笑いあったり、映画を見て一緒に泣いたり、そんな日々の繰り返しだったし、ずっとそんな生活が続くものだと思っていたわ。

——残念ながらそんなことは無かったけれど。

雨の日、だったわ。6月8日の朝の事。私達は口喧嘩をしていたの。

きつかけが何であったのか、今はもうよく覚えていないのだけ

ど、本当に大したことない事だったと思う。それから、それはほんどんエスカレーターしていった。

『……女同士で恋愛っていうのが間違ってるのかもしれないわね』
ポツリと、零れた言葉。頭に血が上っていた私はその言葉の意味なんて、その時は考えてもいなかった。

『絵里ち……何を言って……』
『だってそうでしょ?! 大学を見ても私達みたいな人はどこにもいない! 浮いて当然よ、変な目で見られて当然だわ…普通じゃないのだから』

今となってみれば——いえ、数秒後の私ですらこの言葉がどれだけ貴女を傷つけるのか解っていた。

『そんな……絵里ち……』

『あ……希……これは…違……』

『っ!! バカ!!』

貴女は、出ていってしまった。私は自分がそんな言葉を放ったことに呆然として動くことが出来なかった。

『私……は……っ……なんて事……』

追い掛けなきや、そして謝ろう。そう自分を奮い立たせ、家を出たのはそれから一時間後だった。

それから、私は貴女を探して走り回った。何ヶ所も見て回ったし、μ s の皆にも手伝ってもらいながら貴女を探し回って——

『希!!』

『絵里……ち……?』

向こう側の道路に、貴女が歩いているのを見つけた。信号も青だったから、急いで貴女に謝ろうと思って走って渡っていたの。そうしたら貴女も私の方に走ってきて——

『危ない!!』

『え——』

貴女は私を突き飛ばした。タックルされるような形で押された私はその場に尻もちをついてしまった。

『希……何を——』

視界を貴女の方に向けて、私は貴女の姿が見えない事に気付いた。咄嗟に周りを探すと数メートル程離れた場所に貴女が倒れているが見えた。

『希っっ!!』

ぐったりとした貴女を抱えると、貴女は笑いながら言ったわ。自分が死にかけてるのによ。

『全く……周りはよく見んとアカンで絵里ち……』

ああ、朝はごめんなあ……いきなり出てっしてしもうて……』

『何を言っつて……悪いのは私で……っ』

『ふふっ……確かに、ウチらは普通じゃないけどな……絵里ちのこと好きっつて想いは、誰にも負けへんのやで……?』

朦朧としているのか、話が噛み合っていない。

『泣いたらアカンで絵里ち……笑ってる絵里ちが、ウチは大好きなんやから……』

その言葉を最後に、貴女は何も言わなくなった。私にはただ、貴女を揺らすことしか出来なかった。

『希……? ねえ……返事……してよ……! お願い……だからあ……っ!』

「……それからは、貴女が目覚めてからの話になるわね。

私は、貴女に向かって酷い言葉を投げかけて貴女の思いを裏切った。その矢先、私は真姫から貴女が記憶を失っている話を聞いて——償う事を決意した。

何があっても貴女の隣で貴女を守る。そう自分自身に誓ったのいいえ、それすらも私の自己満足だったのかもしれないわね。

私は結局、貴女と一緒に居ること自体に、私自身が依存している。だからこそ『償い』なんて隠れ蓑を使っているのかもしれないわね」
どちらにせよ、私は最低な人間だ。人の想いを踏みにじって弄んでいる。

「ね、絵里ちゃんはさ。今の私の事どう思ってるの？」

「私が貴女に何かを抱く権利なんて——」そんなの関係ないよ。今の絵里ちゃんの気持ち、聞かせてくれないかな？」……」

柔らかく、それでも有無を言わせぬ希の迫力に押されるように——背中を押されるように——言葉を紡ぐ。

「都合がいいってことはわかってるわ：私が最低だってことも……。

でも私はそれでも——」

東條希の事が、大好き。

「それは、今の私、それとも記憶を失う前の東條希？」

「……どっちも、よ。だって貴女は口調が違うだけでそっくりなんですもの……」

フツと、自分の口元が緩むのを感じる。

「どちらかが好き、という訳じゃないの。だって二人とも貴女でしょ？」

「そっか——よかった。これで記憶が無い時の私の事が好きなんて言われちゃったら、ウチの立つ瀬が無いもんね」

どこか、希の雰囲気がおかしい。第一、呼び方がいつもと違う。私をそう呼ぶのは——

「え——何言ってる……？」

「二年ぶり、になるのかな？この二年間の事もちゃんと覚えてるから変な気分やけどね。」

——ただいま、絵里ち」

「その呼び方——まさか……思い……出したの……？」

信じられない。主治医の先生に話を聞いたところによれば、記憶が戻る可能性はほぼゼロであるそうだ。

「思い出したよ、絵里ち。絵里ちから話を聞くまではほんやりモヤがかかっているみたいやった。けど、話を聞くうちに何もかも、ね」

「——ッ!!」

「おっとと……今まで、よく一人で頑張ってきたね……絵里ち。お疲れ様」

飛びつき、涙が流れるのを見られまいと希に顔を押し付ける。どん

な気持ちか、などと言えるようなものでは無い。この二年間のあらゆる感情が溢れ出てきて止まらないのだ。

「わたしっ……ずっと、謝りたくって……でも覚えてない貴女に話して……嫌われたくなかったの……ごめんなさい……ごめんなさい……私のせいで貴女は二年も……!!ごめんなさい!!」

「ええんよ、絵里ち……ウチの方こそあんな事で急に飛び出したりしてごめんなあ……」

ずっと寂しい想いさせて、ずっと無理させてきてごめんなあ……」
希は目を合わせるとそつと涙を拭ってくれた。そのまま目を逸らさずに言ってくる。

「もう、自分で自分を苦しめなくてええんよ、絵里ち。ウチがずうっと隣にいるから」

「…私は……私は自分を許せない……貴女に……「絵里ち」……」

「ウチは、ここにいますよ。ちゃんと、いる。」

もし、絵里ちが自分を許せないなら、許せるようにウチも手伝う。
…もう何もかも一人だけで抱える必要なんてないんやで。ウチにも半分背負わせてよ、絵里ちが背負ってる物」

「どうして……そんなこと言えるのよ……」

私は希を傷つけ、記憶を失ったあとの彼女を利用した。そんな人間の為にどうして希は――。

「好きだから、だよ絵里ち」

「え……」

優しく、本当に優しく希は私の額に唇を押し当てた。恥ずかしそうに照れ笑いしている希に私は目を丸くしているだろう。

「――だから、ね。仲直りしよ、絵里ち」

そつと、手を差し出される。

「貴女は変わらないのね――ずっと」

そして私はその手を――

「全く、あの二人……世話が焼けるんだから」

「え、真姫ちゃん、それどういう事なの？」

とあるカフェの一席で二人の女性が話をしている。

「希、大分前から思い出してたみたいなのよね、全部」

「はあ?!じゃあずつと——」

「言い出せなかったんですって。それに記憶にも確証が持てなくて不安だったそうよ」

「あつきた……そんなのさつさと話しちゃえばいいのに」

「誰もがにこちゃんみたいにバカ……単純じゃないのよ」

「うっさい!余計なお世話よ!!……で、なんで私を呼んだわけ?これでも売れっ子アイドルだからそんなに暇じゃないんだけど」

「……絵里に言った手前、私も少し自分に素直になってみようと思っただけよ」

「んな——!」

待ってる。

もう冬になろうかという時期なのに日中の外はそれほどの寒さは感じられない。

家の近くには海岸がある。受験時期はこんがらがった頭を整理するためによく訪れたものだ。

釣りをする人、遊ぶ子どもを見る親、あるいは僕のようにただ遠くを眺める人。海水浴シーズンはとつくに過ぎているのに、思ったよりも人がいる。

風に吹かれながら、思ったよりも足を深く沈ませる砂の上を、ゆっくり、ゆっくりと歩く。

はつきりとつけられた足の形は、波にさらわれて消えていく。

松浦果南まつうらかなんという女性に告白してから、もう半年が経とうとしていた。

□

目が覚めて最初に見えたのは、白い天井と揺れるカーテンだった。

あれ、と思いながら起き上がると、ずきりと頭が痛んだ。

意識がぼうつとして、ふらふらする。放っておけば落ちてしまいうな頭を手で支える。

そこで、ようやく私はどこかの病室のベッドの上に寝かされているのだと気づいた。

どこだろうか、なぜここにいるのかという不安は、シャーツと開けられたカーテンの向こうにいる人物によって消された。

「果南……」

すらっとした長い黒髪、キリっとした目つき。親友の黒澤くろさわダイヤが立っていた。

「私……」

「練習中にこけて、頭から倒れたんですわ」

もやもやとした意識がだんだんとはつきりしてきて、思い出しにくい。曲の通し練習で足を踏み外して、勢いよく頭を打ってしまったのだ。

何か大事なものが零れ落ちたような気がする。

「なかなか珍しい光景だったんじゃない?」

ダイヤは盛大に息を吐きだした。

「最初に言う言葉がそれですか? こっちはさんざん心配したのに」

呆れた顔の中に、安堵がにじみ出ている。

必要もないのに、ダイヤが不自然なほど冷静を取り繕って髪を撫でながらいくつか言葉を交わしたあと、ダイヤがみんなを呼び戻すと、すぐにやってきた。

私を見ると泣き出す子もいて、歓喜の声も響いて、看護師から怒られてしまった。

ゆっくり休養することを告げられ、名残惜しそうな表情を見せながらも、みんなが追い払われる。

そうなるのが当然のことながら、騒々しさはなくなり、少し寂しくなる。

ここにいてはやることもない。早く治そう。そう思って、また寝る体勢に戻る。そのとき、こんこんと扉がノックされた。

「果南さん、入るよ」

扉が静かに開いた。

そろりと入ってきた男の人は、ゆっくりと音を立てないように近づいてくる。

落ち着いたような足取りではあるが、見た目は逆に汗だくで、浅い呼吸を繰り返している。寝たまま、目だけ開けている私を認めて、彼は安堵のため息を漏らした。

「ごめん、起こしたかな」

「来てくれたんだ」

寂しかった気持ち吹き飛ばす。

不謹慎だけれども、私のためにすぐにすつとんできてくれたのは嬉しい。

「来てくれたんだ、じゃないよ。頭を打ったって聞いたけど大丈夫?」

「うん。一応何日か入院して、問題ないか診てもらおうけど」

元気なところを見せようと、起き上がりとしたけれど、彼は抑え

てきた。そのときの慌てた顔といったら、普段の落ち着いた雰囲気からは想像ができないほどだ。

彼は、私が働いてるダイビングショップの常連。優しく穏やかな性格の大学生。

そして、私に告白してきた男性でもある。

緊張で身体を固めて、まっすぐに、シンプルに『好きだ』と言われたのを鮮明に覚えている。

かくいう私も、頬が赤くなって、身体が火照るのを感じて、その場では何も言えなかった。

それから何度もデートのようなことをしてきたけれど、私はまだ答えを出せていない。

早く返事をしなければ、とは思いますが、どうにも心に決着がつけられない。

関係か、立場か、心地よい今から何か崩れてしまいそうで、一歩が踏み出せない。

『僕のために早く答えを出さなきゃ、なんて考えなくていいよ。果南さんがどう思うか、どうしたいか、はっきり決められたときでいい。僕はずっと待ってるから』

彼は嘘をつかない。告白からかなり経った今でも、返事が彼の望むとおりにいかないかもしれないのに、待っていてくれている。

私はそれに甘えて、ぬるま湯から抜け出せない。残酷だとは思う。それでも、彼は表情も態度も変えずに、友達とし

ての距離を保ったまま私と接してくれている。

生殺しだよなあ、なんて罪悪感が出てきたりして。

「やっぱり痛む?」

ちよつと落ち込んだ私の表情に反応して、言葉をかけてくれた。

少しだけ頭がずきずきするけど、それよりも別のところが痛い。

これ以上心配をかけたくなって、平気だと返す。

嘘を言わない彼に、嘘で返してしまったことにまた胸が締めつけられる。

できるだけ彼を見ないように、ふいと顔を逸らす。

体調が悪いと判断したのか、彼は一言二言残してすぐに去っていった。

△

数日に渡る検査の結果、果南さんの身体に異常はないと判断された。

むしろ同年代の女の子と比べても健康すぎるということで、派手な運動を控えることを条件に退院の許可をもらえた。

その話が出たのが月曜日のこと。ご家族は都合のつく次の休日まで、果南さんを病院にいさせるつもりだったが、早く外に出たいという彼女の駄々に負けたようだ。

しかし他の人も空いてはおらず、そのことを果南さんから聞いた僕が、付き添いに立候補した。ちょうど授業があるのが昼からだだし、果南さんを一人にしておけないのは僕も同じだ。

そうすると、彼女はやはり休日まで待つと引いたが、僕は半ば強引的に、むしろ喜んで役目を引き受けた。

病室に着くと、彼女はすでに着替えを済ませていた。

「待たせた？」

「起きてからずっとね。こんなところにずっといたら、気が滅入っちゃおう」

「言つとくけど、まだしばらくは安静だからね。朝のランニングも練習もなし。もちろんダイビングもだ」

「え〜」

可愛らしく頬を膨らませる彼女を置いて、僕は受付で手続きを済ませる。といっても、ほとんどのことはすでに果南さんのおじいさんがやってくれていたみたいで、僕は担当の看護師さんに、『果南さんにさせてはいけないこと』の説明を受けるくらいしかしていない。

振り向くと、いつの間にか荷物まとめを終わらせて近くのソファに座っていた果南さんが手を振っていた。

「もう、子どもじゃないんだから」

「みんな、果南さんのことが心配なんだよ。ほら貸して」

長つたらしい話を本人ではなく、僕だけが聞いていたことに不満が

あるのだろう。床に置かれていた鞆を拾い上げる。

「大丈夫だよ」

「いやいや、みなさんに任されたんだから、最大限に務めないとね」
車で迎えに来られればよかったんだけど、家のは親が通勤に使っている。

病院を出て、なにやら不満げな果南さんを連れて、駅前バス停に向かう。

ベンチに腰掛けて待っている間、果南さんはそわそわしだした。

「あのさ、ちよつとだけ駅の周り歩いてみない？」

「だめだよ。安静にって言われたし、バスだつてもうちよつとで来るから」

ふくれっ面になる。あざといと思えないのは、普段のさばさばした性格のおかげだろうか。

「バスは何回でも来るじゃん。それに、じーつとしてるだけじゃ、余計に身体に悪いよ。ね、だめ？」

上目遣い攻撃である。

それでくらくらっとくるあたり、僕もまだまだ甘い。惚れた弱みというやつか。お爺さんに心の中で謝罪。

「一時間だけだよ」

「うんっ」

とたんにはあつと明るい笑顔。

……うん、彼女の言う通り、じつとしているほうが彼女にとっては悪いのかも。

自分を納得させて、僕は立ち上がった。

果南さん曰く、病院食はまずくはないみたいだが、量が少ないらしい。

よく体力を使う彼女にとっては地獄だろう。

ツナサラダの、いわゆるおかずクレープをほおばりながら、不満を垂らす。

もしかして、食べながら鬱憤を晴らしたかったのか。

まあ、バスの中で大声を出すわけにもいかないし、こうやって発散

しながらのほうが精神衛生上いいのかも。

「兄弟はいるんだっけ？」

「いないよ。ダイヤさんや高海たかみさんみたいに姉妹がいるのが羨ましいって話したじゃないか」

「あー、そうだったっけ。たしか……」

「この間の、新曲PV撮影のときだよ」

それまで額に指を当てていた果南さんが、ぱんと手を叩いた。

「撮影の段取り確認してるときだよ！」

「僕たちが喋ってるが高海さんが入ってきて……」

「みんなでダイヤに怒られたんだっけ」

「結局、ダイヤさんも会話に乗っかってきたんだけどね」

ルビイはくルビイはくって妹自慢を延々と聞かされて、最終的に国木田くにぎださんが話を収めたんだ。

ついこの前のことだから、記憶に新しい。

あのときのダイヤさんの顔といたら、興奮で若干赤くなっていたのが普段とギャップがあつて面白かった。

「あれから兄弟の話が一時期ブームになってさ、あなたがお兄さんだったらしいのにくって話題に上がってたよ」

「僕が？」

「特に千歌が、甘やかしてくれそうだった」

「いやいや、僕は厳しくいくよ」

「いや、絶対に甘やかすよ。千歌に泣きつかれて勉強を教えたのは誰だったかな」

人差し指を向けて、果南さんはにやにやと笑う。

「あれは、ほら、良い点数を取らないと練習に参加できないって言うたから」

「わざわざ家に行って教えることもないのに」

「高海さんのお母さんにも言われたよ」

「梨子りこちゃんに作詞アドバイスをしたのは？」

「あれはたんに感想を言っただけ。男性から見てこの歌詞はどう思うか聞かれたから」

「花丸ちゃんに本を貸したのは？」

「本の趣味が合うから、好きな小説を紹介しあっただけ。どれも大したことじゃないだろ」

振り返ってみると、ずいぶんなところまで関わってきたものである。

有名になってきた彼女たち『A q o u r s』のファンに向けて、改めて自己紹介をするという企画で、どうしても人手が足りないということで、果南さんに頼まれてカメラマンをしたのが最初だ。

それからは、彼女たちは僕を頭数に入れてくるようになった。

しかしまったく迷惑ではない。彼女たちの歌や踊りを見られるのは贅沢だし、何より感動する。

心の底から楽しんでいるA q o u r sのライブは、万人を惹きつける魅力がある。

僕も少しは関わっていると感じられるのは、代えがたい満足感と達成感があった。

だから、これは僕の自己満足でもある。

「それに、こうやって私のわがままに付き合ってくれるし」

「それは……」

僕は一瞬言葉に詰まった。

「それは甘やかしてるかも。失敗だったかな」

「そうかも。私は嬉しいけど」

「そういうこと言うから、何かしたくなるんだよ」

君が嬉しいと思つて、笑ってくれるから言うとおりにしてしまふ。

僕がやりたいことだけど、それを甘やかしていると云われればそうなのかもしれない。

一時間はすぐだった。

後ろ髪を引かれる思いを懸命に追いやつて、果南さんの『もうちょっと』という誘惑もギリギリのところで振り切つて、なんとか帰路につかせることに成功した。

果南さんの家は、駿河湾に浮かぶ淡島あわしまにあるため、船を乗っていないと辿りつけない。

最寄りの停留所までのバスでもそうだったけど、多少の揺れでも果南さんの身体を気にしてしまう。

過保護だ。彼女は、本人の言う通り子どもじゃないし、しっかりしてる。

風がすーっと全身を撫でる。その涼しさのおかげで、身体が火照っていたの自覚する。

浮かれている。けどその何が悪い？ 松浦果南という素敵な女性と二人きりでいれて、舞い上がらないほうがおかしい。

船の揺れと風が、果南さんの髪をなびかせる。

きれいな人だ、といつも思う。

澄んだ海の中でもひときわ美しく、泳ぐ魚より華麗で、力強くもある。

「今日は迎えに来てくれてありがとう」

「いいんだよ。やりたくてやってることだから。下心もちよつとはある。半分はないかな。四割、いや三割」

照れくさそうにする果南さんに、僕の頬も緩んだ。

△

私たちの関係は、なんとと言えるだろう。

恋人未満ではあるが、何以上なのかは言いようがない。

もちろん、そういうふうにしてしまったのは私だ。

彼からの告白への返しを保留にしているせいで、複雑な関係にしているのは否定できない。

けど、まだどうするべきかは決めかねている。

もし、その、彼とそういう関係になつてしまつたら、スクールアイドルと彼とを天秤にかける場面が必ず出てくる。

すべてをうまく回せるほど器用じゃないのは自覚していた。

船から降りて、家兼ショップに入ると、帰つてきたという感覚に刺激される。

お客さんから、心配だったという声を聞いて、すぐに働けるように戻らないといけない気持ちが高まる。

けど、問題がないことをちゃんと示してからじゃないと、彼にもお

じいにも心配をかけちゃうし……

「ああ、いや、僕はここで。これから授業もありますし」

この店の常連でもある彼は、おじいともすっかり仲良しになっていた。

荷物を渡しながら、何か言われている彼に近づく。

「どうしたの？」

「ちよつと寄ってけて。お誘いはありがたいけど、もう大学に行かないといけないから」

「ほんのちよつとくらいならいいんじゃない？」

彼は首を横に振った。

「誰かさんが駅回りを歩きたいとか言わなければ寄ってたかも」

「誰かさんが受け入れてくれたから時間がないってこと？」

いじわるなことを言つて、いじわるな笑みを浮かべると、彼は「そうだね」と苦笑した。

△

暑かったり寒かったり、安定しないな。この上着だって、秋用に買ったものなのに、汗が出てきそうだ。

しかし脱いでしまってシャツ一枚になれば寒くなるという絶妙な嫌がらせみたいな気温の中、僕はじつと座って待っていた。

駅前にある、『幸せの木』を取り囲むような円形のベンチが、いつもの待ち合わせ場所だ。

果南さんが退院してから、初めてのデート。

何度も繰り返してきたのに、毎回緊張してしまうのはいかなものか。

「ごめん、遅れちゃった」

いつの間にか、手を合わせてぺこりと頭を下げる果南さんがいた。

あまりにも時間を気にしすぎて、目の前のことに気づかなかつたようだ。

そんなに待ってないよ、と定番のセリフを吐いて、彼女の服装に少し驚く。

「半袖……」

「ん？」

「寒くない？」

「全然。今日はあったかいし」

果南さんのさわやかな笑顔に、僕は安心した。

もうすっかり元通りだ。というか、入院していたときから彼女は変わらず元気だったけど。

十回以上は駅前散策をしているのに、飽きがこない。

商店街の興味ある店を回るだけでも相当なのに、A q o u r s の他のメンバーのことを知るために、一人では入らないであろう店にも足を運ぶとなれば、とても回り切れない。

「あそこのクレープ美味しいんだ。ダイヤと鞠^{まり}と来た時もお互いのやつを……」

「聞いたよそれ」

「あれ、そうだった？」

「ダイヤさんが抹茶クレープのやつで、鞠^{まり}さんがバナナだろ？ ついこの間じゃないか。忘れるには早すぎるよ」

果南さんの退院日に連れまわされたときに、楽し気に言っていたのを覚えている。

あのときの果南さんはいつも以上に饒舌で、いろいろなことを言っていたから、何を喋ったか忘れてたのか。

初めて会った日から、僕が告白してから、いつ何を話したかこんがらがるほどに、僕たちの一緒にいる時間はどんどん長くなっている。

僕にとっては、すべてが昨日のことのように思い出せるけど。

「こうやって出かけるのは、けっこう久しぶりだね」
前に行ったのは、確か一か月ほど前だ。

普段は二週間に一度くらいだから、一、二回ぶんぶり。

僕としてはことあるごとに顔を見せていたから久しぶりという感覚がないが、まあそこは個人の感じ方それぞれだろう。

「前は一時間だけだったからね」

「一時間？」

果南さんは首を傾げた。

「君がわがままを言っつて、この駅の周りを一時間だけ回ったじゃないか」

「あー……つと、えつと……」

「ほら、兄弟の話もした」

「ルビィとダイヤが羨ましいってやつ？」

「じゃなくて、僕が兄だったらつてやつ」

あー、と納得して手を叩く果南さんだったが、またすぐに首をひねった。

「そもそも、その話したっけ？」

僕は眉をひそめる。

ついこの間交わした会話を覚えていないのか。

僕の様子に、彼女も奇妙な感覚に囚われたのか、目が泳ぐ。

「あ……れ……う？」

果南さんの顔が青ざめていく。

「した？ した……よね。そうだよ。千歌が、甘やかしてくれそうだつて言つてたつて、私言つたよね……」

自分の言つたことが信じられないというように、彼女はしきりに首を触り、頬を撫で、頭を掻いた。

荒い呼吸を繰り返す果南さんのことを、僕はただ見ることしかできない。

「なんで？ なんで忘れてたんだろう……」

正体のわからない嫌な予感が背中を走る。

異変が起きてる。それも良くない類の異常だ。

ここで、僕まで慌てふためくと歯止めがきかなくなる。できるだけ落ち着いて、パニックに陥っている彼女を刺激しないように、優しく声をかける。

「まだ本調子じゃない？」

「う、ううん、大丈夫大丈夫。ほら行こ」

無理に笑顔を作つて、手を引く果南さん。僕はその手を逆に留めた。

「果南さん」

「大丈夫。大丈夫だから……っ」

何かがおかしいことは、果南さんが一番わかっている。

笑顔は崩れ、歯を食いしばって、それでも僕を連れて行くこととする。だめだ。平気だと楽観的になって、何も見えていないふりをするわけにはいかない。僕は力を込めて意地でも動かない。

僕を心配させないように、いつもと同じ日を過ごそうとしているのだろうけど、どうしても心配してしまうよ、果南さん。

「……ごめん」

謝る彼女の顔は、僕がいままでに見たことのない悲愴に塗れていた。

結局その日は、混乱したままの果南さんを送って終わった。

次の日には、すぐに病院に向かわせたけど、結果は前と変わらず、まったく問題のない超健康体だと言われた。

でも違和感は拭い去れず、むしろ日に日に増していった。

まず、待ち合わせの時間に遅刻することが多くなってきた。いや、それだけならそう大してわめくようなことじゃない。家のことで忙しい日はあるし、遅れるならちゃんと言わなければならない。

だがその連絡がどんどん遅れていつている。定刻を過ぎてからメールが飛んでくることもしばしばあった。

それだけじゃない。何度か行った店でも、何度か食べたものでも、まるで初めてかのような反応を示すようになった。前に聞いた同じ話をすることも少なくなる。

僕と果南さんの間にあるズレはどんどん大きくなっていく。

思い過ぎしならしいけど……僕はスマホを取り出した。ある人物の電話番号を呼び出して、通話ボタンを押す。

「ダイヤさん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

△

ふう、と一息ついて汗をぬぐう。

練習はハードになっていくけれど、それもみんなが成長していつているからこそできることだ。

私はもともと体力には自信があったから、身体を動かすのには慣れ

ていた。みんなが倒れこむほどのメニューでも、まだ一通りこなせるくらいには。

「果南さん、お身体は大丈夫ですか？」

身体が冷える前にストレッチをしたあと、ダイヤが話しかけてきた。

「ああ、頭のこと？ すっかり平気だよ。頑丈なのが取り柄だからね」

「あの人がしつかり送り迎えしてくれたおかげですわね」

「あの人？ あの人ってだれ？」

私がそう言うと、ダイヤが固まった。

「あの……例の彼です。一緒に帰ったんでしよう？」

「いや、あの日は一人で帰ったよ」

ダイヤは目を見開いた。ぐくりと唾をのんで、そわそわしだした。

「いえ、あの……本当に覚えていませんか？」

一語一語区切るように言う。

本当に、というのが気になった。平日で誰も都合がつかなかったけど、じつとしてるのが退屈だったから、一人で退院したはずだ。

「すぐには帰らずに、駅の周りを歩いたりしたんでしたよね？」

「うん、ちよつとだけね。一人だったけど、まあ楽しかったよ」

そう言っても、ダイヤはむしろ表情をこわばらせた。

それからいくつかの質問をしてきた。いつどこで誰と何をしたか、というような世間話……というより探りを入れてくるような質問。

妙だと思いながら答えていくと、ますますダイヤの顔が険しくなる。

少しの間何かを考えて、たつた一言。

「帰ったら、よく思い出してください」

それだけ言って、ダイヤは背中を向けた。

△

夕方、授業の途中で、ダイヤさんからメールがあった。

急だが、果南さんのことで、どうしても話したいとのことだ。時間はある。それにダイヤさんがすぐにといいからには、よほどのことなのだろう。

了承して、二人とも知っているカフェで待ち合わせることにした。授業を終えて急いで向かうと、ガラス張りの窓の向こうにその姿が見えた。

手を振る彼女に僕も応えて店に入り、まっすぐ彼女の座るテーブルへ駆け寄る。

「急に呼び出して、申し訳ありません」

「それで、果南さんは？」

僕は息を整えて、椅子に腰かけながら口を開く。

「まずは……」

「単刀直入に」

挨拶も世間話もなしなのは礼儀知らずだが、今の僕には余裕がなかった。

わざわざ電話ではなく直接。しかも日を考えるでなく、すぐに会いたい。嫌なフラグが立てられまくってる。

悪いことは早めに聞き、対処をするに限る……と言い聞かせているが、実際には焦っているだけだ。

「取り乱さずに聞いてください」

僕は頷いて、先を促す。

「果南さんは、確かに記憶があいまいになっています」

「ごくり、と喉が鳴った。」

疑っていたとおりの、単なる忘れなどではなく、果南さんの記憶が消えていつているのだ。

ただし。僕は次の言葉を予測して緊張した。

「ただし、忘れているのは……」

「ダイヤさんはゆっくりと息をのんだ。」

「あなたのことだけでした」

僕は静かにこめかみを抑えて、うずくまらないように肘をつく。血管がどくどく脈打つ。

そこでようやく呼吸をしていないことに気付き、大きく息を吐いた。足元が崩れたかのように、奇妙な浮遊感が襲ってくる。

突きつけられた事実には、心と頭が追いついていない。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫に……っ」

一瞬で怒りと苦悩が噴き出してくる。大丈夫に見えるか、と叫びたい衝動に襲われ、ダイヤさんを睨んでしまった。

彼女が怯えた表情をして、びくりと身体を震わせる。とたんに罪悪感が湧き上がり、僕を冷静にさせた。

「大丈夫じゃない」

浮きかけた腰を落ち着けて、深呼吸。沈黙が二人の間を支配する。

ダイヤさんの持つてきた情報は、希望的観測を含めたいくつかの予想の中で、一番最悪な答えだ。

「果南さんは……」

「新しいことから忘れていつてる」

ダイヤさんの言葉を継いだ僕に、彼女は目を大きくした。

「そこまで知っていたんですか」

「知ってたというより、推測してた。それしかないことはすでに気づいていた」

何度も果南さんに探りを入れたなかで、もつとも辻褄があうのがそれだ。

「けど認めたくなかった」

僕はまた頭を抱えて肘をつく。

動けずにいる僕に、ダイヤさんからの言葉はなかった。

△

退院の日をよく思い出して、なんておかしいことを訊いてきたもんだと思ったが、ダイヤの驚き訝しんでいる顔は、冗談ではなく真剣そのものだった。

「変なの」

そう呟いて、使っていないノートを出してペンを握る。

覚えていることを思いつくまま書いて、空白の部分を埋めようとする。

一番古い記憶から掘り起こして、すらすらと書いてみせる。ほら、一ページ、二ページ、三ページも埋まってきた。

頭を打って退院した日だって、あのときは一人で帰って……
そこで、ふと手が止まってしまった。

頭を打って何日か入院したあと、問題ないって言われて退院して……それから彼に会ったんだっけ？

あれ？

退院した日は誰にも会わなかったんだっけ？

ううん、まっすぐに家には向かわなかった。病院食は少なかったから、そこらへんでなにか食べようと……

安静にしていなきゃいけないのに、誰かにおねだりして、帰るのを少し遅らせてもらったんじゃない？……

『一時間だけだよ』

声が反響して、はつと思ひ出す。そうだ、あの日は彼が私と一緒にいてくれたんだ。

そんな大事なことが、今の今まですっかり抜け落ちていた。

『よく思い出してください』

ダイヤに言われたことの意味がわかって、悪寒が走る。

私、彼のことを忘れていつている。

とたんに冷や汗がふきだして、呼吸が浅くなる。

そんな馬鹿なことあるわけない……今だって単純にど忘れしてただけ。

必死に頭を回転させる。

あの日、私は彼と一緒に食べ歩いて、他愛もない冗談の言い合いもした。

けど、何を食べて、何を言われた？

彼の顔を思い浮かべる。彼の言ったことを思い浮かべる。けれど表情にも声にもノイズがかかって、振り払えない。

「いやだ……」

彼のでくれたことも言ってくれたことも、感触も顔も消えていく。そんなことを想像して、焦燥が押し寄せてくる。

不安がこみ上げて、涙が流れる。一粒、ぽたりとノートに落ちて、文字を滲ませていく。

ぎゆうつとスマホに着けたストラップを握る。尖った部分が手に
食い込んで痛い。

忘れたくない。忘れたくなんてないのに、埋まらない溝が記憶の中
にある。

「やだよ……やだよ……」

それ以上、ペンは動かなかった。

△

僕という存在が自分の中から消えていつていることを、果南さん自
身も知ることとなった。

もともと隠せるつもりもなかったが、ダイヤさんからした話が決定
的だったようだ。

忘れていくことすら、結局は忘却の対象となっているのだが。

何度も重ねたデートの記憶が消えていた。

行った場所や交わした言葉も、僕と一緒にいた時間がほとんどなく
なったものになってしまっている。

たちが悪いのは、頭を打ってからの記憶もなくなっていることだ。

これでは新しく思い出を作ることまでできない。

会うたびにだんだんと遠慮がちになっていき、ついには敬語で話す
までに戻ってしまったときには、すでに二人での外出はデートという
体裁を失っていた。

記憶を復活させるためのお出かけは、皮肉にも彼女の後退を僕に示
すだけとなっている。

前回覚えていたことでも、今回は忘れていると知るたびに焦りを感じ
る。

かろうじて、僕が誰かはわかるようだけれど、それもいつまで保つ
ていられるかわからない。

「毎日、覚えることをノートに書いてるんです」

申し訳なさそうに目を伏せながら、果南さんは言った。

「あなたとどんなことをしたか。思い出せるかぎり。けどやっぱ
り、あなたのことだけだんだん思い出せなくなってる。もう、何行か
しか書けなくなってるんです」

そのノートを、彼女は見せてくれた。

一ページ目からめくると、文字でびっしりと埋められていた。

一番上に書いてある日付からみて、最初に書いたときは三ページと少しにわたって書かれている。

それはしだいに、日が進むにつれて短くなっていく。忘れないようにと、文字が濃くなっていく。

どれだけ苦しんだか。ぐちゃぐちゃになっていく文字と、しわがついたページを見ればわかる。

「学校にいるときとか、働いてるときとか、完全にあなたを忘れるときもあるんです。メール見ても思い出せないときがあつて……顔を見過ごすように思い出せる」

果南さんは僕の腕を掴む。

「ごめん……っ、ごめんなさいっ」

ぼろぼろと流れる涙は、僕の袖をわずかに濡らす。

辛いのは、果南さんだ。

一生懸命に繋ぎとめようとした記憶の糸が、次の瞬間には無情にも途切れている。

だから、僕は言えなかった。

そのノートのこと、だんだんと思い出せなくなっていること。

それは昨日も聞いたことだと、どうしても言えなかった。

記憶がなくなっていると気づくたびに、果南さんは取り乱したり、ぼうつとすることがあった。

そのせいで、こけたり、事故に巻き込まれたりするかもしれないと考えると、気が気じゃない。

ならば迎えに行こうと提案したものの、却下された。

『絶対に行きますから。だから待っていてください』

意地だ。忘れてたまるものかという意地。

果南さんは、僕のことを覚えててくれると約束した。だから、僕も代わりに約束した。

『待つよ。ずっと待ってる』

どんどん忘れていつているなら、どんどんと思い出す可能性だってある。

折れて崩れそうな心を、なんとか希望で繋ぐ毎日。

日に日に他人になっていく様を見て、擦り切れていつているのは自覚していた。

今日がだめなら明日はなんとかなる。それが、今日がだめなら明日もだめだろうに変わっていく。

もう何十度目になるか、腕時計とスマホを見る。メールや電話は来ていないが、まだ待ち合わせの時間までかなりある。

今日は大丈夫かと訊くのが怖い。もしも、僕のことを忘れ去って、お前は誰だと返されたら、僕には継るものがなくなってしまう。

か細い希望の糸が切れたら、あとは落ちていくだけだ。

今だって、いつ来るかより、来るかどうかを心配している。

バスが到着した。

ぞろぞろと降りてくる人たちの顔を、一人ひとり凝視する。

いた。果南さんが飛び降りるような勢いでバスから飛び出し、こちらに向かってくる。

僕の顔を見ると、そのままの勢いで笑顔と謝罪の混じった顔を見せてくる。

よかった、来てくれた。

僕はほっと胸をなでおろし、彼女に近づいていく。

「果南さん、早いね。僕も待ち合わせ時間より早く来たから、人のこと言えないけど」

嬉しさのあまり、こみ上げる感情を抑えきれずに早口になる。

しかし、それ以上彼女は近づいてこない。

小首をかしげて、眉をひそめたままの表情で固まっていた。

「えっと、あの、ごめんなさい。誰でしたっけ？」

ぷつん、と何かが切れたような気がした。

△

時計のアラームが鳴る。

スマホと、ベッドの傍らに置いていた小さな置時計の二つが、私を

起こした。

今日は、いつもと変わらない休日だったはず。それなのに、絶対に起きるように設置された二つのアラームがやけに気になった。

腕に何か抱えている。ノートだ。力が入れられたせいで少し曲がったノートを抱いたまま、私は眠っていたらしい。

その表紙に書かれている『絶対に忘れない！』という文字を見て、はっと気づく。

そうだ。今日はあの人に会う約束をしていたんだ！

よかった。忘れてない。まだ彼の存在が、私の中に残っている。

壁一面には、今日やるべきこと、思い出すべきことを書いた紙を貼っていた。

それを見ながら、必死に、彼の名前と姿、言葉を心に留めて、いったんノートを机に置いてから服を着替える。

今まで気になっていなかったことが、当たり前にあるものがすべて私を止めようとしているみたいで、焦りと怒りが心を支配した。

服がハンガーにかかっているのにいらいらした。

家の出入り口に扉があるのにいらいらした。

家から対岸まで船を使わないといけないことにいらいらした。

バス停まで少し距離があるのにいらいらした。

バスが来るのも、出発するのも、走っている速度も、すべてが遅いのにならいらした。

駅に着き、扉が開いた瞬間、急いで降りて駆ける。

髪が乱れるのも構わずに走る。それよりも大事なことが待っているから。

焦がれていた姿がそこにいた。

まだ時間には十五分ほどあるのに、そわそわと、腕時計と辺りを交互に見ている。

安心させなきや。覚えてる。あなたに会いたくてここに来た。忘れないようにいろいろ手段を講じたんだ。

あなたは何て言うかな。困ったような顔をするかな。嬉しそうにはにかむかな。

駆け寄りながら、声をかけようと口を開いた。
開いたけれど、声が出なかった。

いや、正確には、何を話すつもりだったのか、わからなくなったのだ。

あれ？ 私は、なんのためにここにいるんだっけ。息せき切って、髪も振り乱してまで、なんでここにいるんだろう。

向こうから、男の人が近づいてきて、軽く手を振った。

「果南さん、早いね。僕も待ち合わせ時間より早く来たから、人のこと言えないけど」

「えっと、あの、ごめんなさい。誰でしたっけ？」

どこかで会っただろうか。

記憶をたどっても、彼はいない。親戚でもないし、友達でもないはずだ。シヨップのお客さん……かな？

だけど、私の言葉に明らかかなショックを受けたようで、男の人はつと息をのんで、何かを言おうと口を震わせる。

数秒、話そうとして、手を伸ばそうとして、結局彼は光を失った目を伏せた。

「いえ……ごめんなさい。知り合いに似ていたものですから」

今にも泣きそうな顔をして、がつくりと肩を落とした男の人は、引きずるような足取りで去っていった。

△

悪い意味で、不安と緊張が消し飛んでしまった。

そうなれば、身体も心も温度を意識し始め、冷たくなる。

風は頬に突き刺さるほど寒いし、ため息は白く染まって空へ消えていく。

果南さんに言われた言葉が、頭の中でリフレインしていた。

『えっと、あの、ごめんなさい。誰でしたっけ？』

ついにここまでできてしまったかと、沈んだ気持ちであってもなく歩く。

彼女は勉強やお店のことなどのライフワークに関しては覚えてい

何より同じ学校の友達やスクールアイドル仲間のこととも忘れていないのは喜ばしいことじゃないか。

忘れてるのは僕のことだけだ。

他のことを忘れる代わりに、僕に関する記憶が身代わりになったのかも。なんて、納得できるほど僕の心は強くなって、歯を食いしぼると目から涙が零れ落ちた。

シヨックがでかすぎる。

覚悟はしていたはずなのに、いざ初対面のような顔をされるとくるものがある。

あまりに落胆すぎて、それ以上松浦さんの顔も見れなくて、声も聞けないほどだった。

積み重ねてきた時間も会話も、松浦さんと過ごした何もかもがなくなったと認めたくなくて、意味を探す。

どこへ向かうでもなく歩く。止まっていると、先ほどの果南さんの顔が脳の底から追いかけてくる。

駅の南口を出て、別のことを考えようと何かを探す。けれど、浮かんでくるのは果南さんのことだけだった。

あのファミレスも雑貨店も喫茶店もボウリング場も、目に入ってくる建物だけでなく、道路でさえも、彼女と一緒にいた場所だ。

振り払おうとするたびに、思い出が溢れてくる。

僕も同じく忘れられたら幸せだろうか。

君といたことを、なかったことにできれば、全部元通りになるだろうか。

果南さんを頭から追い出そうとしても、知らなかったころに戻れるわけがない。

ましてや、僕は果南さんのことが好きなのだ。

学校でのことや、スクールアイドルのこと、家族やダイビングシヨップの話をするときの楽しそうな表情が好きだった。

一緒にいるときに見せる、柔らかい表情が好きだった。

透明な海のような綺麗な心が、今を謳歌している幸せな顔が、僕を見てくれる目が、僕の心を掴んで離さない。

苦しい。苦しい。苦しい。

果南さんを想えば想うほど、胸は張り裂けそうで、全身が切り刻まれるようで、頭は破裂しそうになる。

だけど、どうしても忘れられないんだ。忘れたくないんだ。

「果南さん」

口から彼女の名前が漏れた。それは白い息とともに暗い空へと消えていく。

いつの間にか、満点の星空が瞬くほどに時間が経っていた。身体は冷え切って、動かすのが辛かった。

帰ろう。

ここには何も無い。

△

自室に戻ると、奇妙な光景が広がっていた。

壁のいたるところに、紙が貼られていたのだ。

何日の何時にどこへ行けだとか、誰かの名前だとかが書いてある。

私の字だ。

寝ぼけてやってしまったのだろうか。気味悪く感じて、紙をはがして、ごみ箱に突っ込む。

ふと机の上を見やると、確かにこれみよがしにノートが置かれてあった。

表紙には、私の字で『絶対に忘れない！』と濃く書かれている。けど、こんなものを用意した覚えはない。

どうやら最近寝ぼけているか、変な行動を起こすことが多くなっているらしい。

頭を打った影響だろうか。もう一度病院で診てもらったほうがいいのかもわからないかも。

ノートもごみ箱に捨てて……ようとしたところで手が止まった。

捨ててしまえば、取り返しがつかなくなる。そんな気がして、仕方なく机の引き出しにそれをしまった。

△

「で、それでばーんってー」

「ばばーん……ね」

「そう、ばばーん！」

カメラを持つ僕に、高海さんはそう指示する。

彼女の感覚的な説明は僕のセンスと合わないみたいで、結局最後はダイヤさん筆頭に他のメンバーにアドバイスをもらって修正するの
がいつものことだ。

今日は、新曲撮影のお手伝いにお呼ばれした。

普段、練習風景などのみんなの様子を撮る際には三脚で十分なのだ
が、今回は躍動感が必要だそうで、二年生に頼み込まれた。

このときには既に対する果南さんの態度がおかしいことは、み
んなが承知の上だったが、デリケートなことだと察して聞いてこない
のが幸いだった。果南さんにも聞いていないみたいで、記憶が消えて
いることを知っているのは、相談に乗ってもらったダイヤさんと鞠莉
さんだけ。

「果南、あなたのことを忘れてしまったのね」

撮影前のストレッチを終えた鞠莉さんが話しかけてくる。

僕はカメラが正常に作動するか確認するふりをして、試撮影をしな
がら答えた。

「追い打ちをかけたいのか？」

「そんなつもりは……」

「冗談冗談」

軽く笑い飛ばそうとしたけど、ぎこちなかったのは自分でもわか
る。

鞠莉さんは笑いもせず、安心もせず、眉をひそめたままだ。

「そうだよ。全部忘れてる。全部ね」

果南さんは身体が固いメンバーの手助けをしている。

彼女は僕のことを、なにかと手伝ってくれる地元民にしか認識して
いないだろう。

『僕』が映らなくなっただけから、まだそんなに経っていないはずなの
に、長らく話していない気がする。

「今日はごめんなさい。しばらくは遠慮するように言っておくべき

だったわ」

「いいや、黙っておくようにって言ったのは僕だし」

「もし訊かれたら、みんなにはなんて答えるつもり？」

「喧嘩した」

「……いつかはばれるわ」

「だろうね」

「喧嘩したくらいであなたのことを知らないなんていうほど、果南は薄情じゃないもの」

「知ってる」

Aqoursの誰に言っても嘘だとわかるだろう。

だけどこれはもう、どうしようもないことで、すでに手遅れになった問題だ。

ならわざわざ本当のことを言って、みんなを悩ませる必要もない。

ダイヤさんと鞠莉さんを巻き込んだことさえ、後悔しているのだ。

「一番大事な人にばれてもすぐ忘れられるのが幸いかな」

「幸い？ 最悪の間違いじゃなくて？」

「どっちも同じようなものだよ」

「そんな目をしながらだと、説得力がないわよ」

どんな目だ。と問うように鞠莉さんを見る。

「捨てられた子犬の目」

「見たことあるの」

「ノン。けどよく使われる表現でしょ？」

確かによく聞くけど、結局どういう意味なのか。

人間の勝手を呪う目か、あるいはこの世の不条理を憎む目だろうか。

それとも、なるべくしてなった現状を痛感して、諦めた目だろうか。

「鞠莉さーん！ 撮影始めますよー！」

僕の言葉は、高海さんの号令で遮られた。

撮影は滞りなく終わった。必要な分は撮り終え、あとは他に撮ったものと合わせて編集するだけである。

時間は、ようやく午前が終わろうというところで、太陽も空高くで

照っている。

休日ということもあつて、撮影終了後はA q o u r sメンバーでご飯を食べようと盛り上がった。

僕も誘われたけど、片づけしたあと用事があるからと言って拒否する。軽いブーイングを受けたけど、手伝いを頼んだ手前か強く言つてこなかった。

ならせめて片づけを手伝うと言つてきたみんなを、せっかくの休日なんだから楽しんでおいでと制する。

用事なんて嘘だ。本来あるはずのそれは、なくなつてしまった。ここに来ておきながら一人になりたいだけだ。

片づけだつて、カメラと、念のためと出して使わなかつた三脚やらマイクを鞆にしまうだけ。

それを担いで、とぼとぼと帰路につく。

△

撮影後で昼食を食べて店を出るころ、まだ陽は照っていた。

まだクリスマスには早いのに、駅前の木に飾り付けられたオーナメントが目につく。

少しだけ話があると鞠莉に言われた私は残つて、あとのみんなはバスに乗って帰つていった。

「それで、話つて？」

円形のベンチに腰かけて、隣を叩く。私は察して座つた。

「こうやって一緒にスクールアイドルの活動をして、談笑して、なんて去年の私が聞いたら驚くでしょうね」

いつもの飄々とした中に、真剣な声色が混じっている。

鞠莉が言っているのは、今の三年生三人でスクールアイドルをしていたころのことだろう。

解散してからは、その誰もが、主に私が二人を避けていた。そのときと比べると、真逆の世界になったものだ。

「あれで一度は分かれてしまったけど、あの経験があつたからこそ、今の私たちがあつて思つてるわ」

「うん、私も同じ」

みんなが悩んで、怒って、何かしらの答えを見つけて。それを言葉にして伝えるということの大切さを学ぶには遠回りしすぎたかもしれないけど、必要な遠回りだったと思う。

「引きずるのはよくないけど、前に進むためには、ときに過去に戻る必要もあるのよ」

それを知ってるわよね？

そんな目を向けて、鞠莉はしばらく黙った。

知ってる。知ってるよ。

けれど、鞠莉の口ぶりは、それをもう一度思い出してほしいという言葉が含まれているような気がした。

大事な大事な感情を忘れてる。そういう言い方だった。

何かが頭の中ではまった。めっちゃめっちゃに崩されたパズルのピースが直っていく錯覚が、一瞬間に閃く。まだ穴があって、だけど周りにピースは散らばっていない。

「忘れないで。果南のことをずっと待ってる人がいるってこと」

「鞠莉……？」

「私から言えるのはそれだけ。じゃ、いい報告を待ってるわ」

ウインクをして、鞠莉は歩き去っていった。

いつの間にか私の全身に力が入っていて、拳が握られていた。

△

いったん帰宅したけれど、もやもやが晴れない。

いてもたってもいられなくなって家を出て、少し歩く。

もう冬になるうかという時期なのに日中の外はそれほどの寒さは感じられない。

家の近くには、海岸がある。受験時期は、こんがらがった頭を整理するためによく訪れたものだ。

釣りをする人、遊ぶ子どもを見る親、あるいは僕のようにただ遠くを眺める人。海水浴シーズンはとくに過ぎているのに、思ったよりも人がいる。

風に吹かれながら、思ったよりも足を深く沈ませる砂の上を、ゆっくり、ゆっくりと歩く。

ふと足が止まった。

積まれた石がある。拳くらいの大きさのが四つ。

賽の河原というものを思い出した。

子どもが親より先に死んだ場合、三途の川で石を積み上げなければならぬというものだ。十個積み上げないといけませんが、完成間近で鬼が石を崩してしまう。

築き上げた希望が目の前で永遠に潰されていく救いのない話。

それを見て、もう歩く気が完全に失せて砂利の上に腰かけた。足を立てると、ジャラジャラと音を立てて砂利が崩れる。

駿河湾の向こうで、太陽が輝いていた。それがあまりにも眩しくて、視線をずらす。

聞こえるのは波が奏でる音だけ。

追って波立つ音と、引いた時に聞こえる、炭酸が抜けるような石を撫でる音。それは砂浜や海で何度も聞いた。

五感は、ときとして不意に記憶の引き出しを開ける。僕は果南さんのことを思い出していた。

最初はちよつとした興味だった。スキューバダイビングができると聞いて、単なる好奇心で体験をした。

海の中は僕が思っていたよりも、いや、僕が見てきたものの中で一番輝いていて綺麗だった。

……正直に言うと、二番目だ。ダイビングをするたびに、果南さんに見惚れていたのだから。

そのときの衝撃をまだ覚えている。海を駆ける彼女の姿は何よりも美しく、僕はあつさりとした恋に落ちた。実はマーメイドなのだと知られても、信じたかもしれない。

意を決して、僕から話せるようになるまでに長い時間を要したけれど、そのおかげで仲良くなれた。

仲良くなれたと……思っていた。

それは思い違いで迷惑だったのかも。

何時間経つただろうか。陽は沈んで、さすがに冷え込んでくる。空を見上げると星が見えていた。

「ハイ」

星が遮られた。視界に入り込んできた金髪と整った顔で、すぐに鞠莉さんだとわかった。

「もう帰ったんじゃないのか」

「たまにはあなたと話をするのもいいな〜って思っただけ。果南抜きでね。ね、ダイヤ」

彼女が後ろを振り返る。

言った通り、もう一人の人物がそこに立っていた。

「ダイヤさん」

「こんばんは」

首をすくめて、両手をこすらせている。

白い息が出るまではまだ足りないけど、肌寒さを感じるには十分な気温だ。

服を見るに、暑かった午前ものと同じだから、体感ではさらに刺さるだろう。

「家はこつちじゃなかったはずだけど」

「ここに来て、あなたの前に立って、あなた以外に用があるとお思いですか？」

海が見たくなかったのかも。という冗談を飲み込んで、僕は彼女の次の言葉を待った。

暗いせいで顔に影が差しているが、申し訳なさそうに曲げた困り眉ははっきり見えた。

「ご家族に訊いたら、ここにいます」

それだけ言って、二人とも黙った。

わざわざここまで来て、僕に言いたいことがあるのではないかと思ったが、違う。

僕が話すのを待っているんだ。

僕は立ち上がって、ぽつりと、呟くように口を開く。

「僕が告白してから、果南さんはよく謝るようになった。先延ばしにしてごめんなさいってね」

僕は待つと言って、実際に待ったけれど、それがむしろ果南さんに

決断を迫らせた。いろんなものを天秤にかけさせて、彼女を苦しめたのかもしれない。

「もしかしたら僕は邪魔だったのかも。忘れたほうがよかったのかもしれないな」

大きくため息をついて、鞠莉さんは僕の前に立った。

「先に謝っておくわね。ごめんなさい」

言って、一度頭を下げてから、パシンと音が鳴った。

頬が熱をもって、じんじんと痺れる。

ビンタされたと気づいたのは、彼女の平手を見たのと、頬に走る痛みを自覚してからだった。

「なにを……」

「大事なことを忘れてたから、衝撃をあたえれば治るかなって」

「僕は忘れてないよ。全部、全部覚えてる！」

「だったらー！」

僕の叫びもかき消すほど声を荒げた鞠莉さんの目には涙が浮かんでいた。

「果南がどれだけあなたのことを想ってたかもわかるでしょ!? 忘れてたほうがいいなんて、冗談でも言わないで！」

「でも忘れられたんだ。僕は忘れ去られた！それが現実なんだ！」

まだまばらにいる人たちが、こちらを見る。

それでもかまわずに、僕は悲鳴をあげるように、感情のままに叫んだ。

「覚悟はしてたよ。忘れられても、記憶を取り戻してやるぞって。懸命に戦ったよ！ だけど誰が誰をどれだけ想おうが、どれだけ頑張ろうが、これが現実だ」

果南さんから、僕の存在が消えていくことに焦って、無力を感じて、結局は負けた。

僕は負けたんだ。

襲ってきたのが、不条理か運命か、神のいたずらか、なんにせよ僕は勝てなかった。

尻すぼみになった僕の言葉に、鞠莉さんは返すことなく、場が静ま

る。

次に口を開いたのは、ダイヤさんだった。

「私は、あなたより果南さんのことを知っているという自信がありませんわ。小さいころから苦楽を共にして、強いところも弱いところも、何が好きで何が嫌いか、お互いのあらゆることを知り尽くしています」

それはそうだろう。むしろ、果南さんが関わる限りの人で、僕が一番付き合いが短い。

彼女は僕に近づくと。

「……そのつもりでした」

ダイヤさんは笑った。

「でも、あなたに向けるような笑顔を、わたくしは見ることがありません。あなたのことを話すときの顔を、わたくしは知りませんでした。正直、嫉妬してしまいますわ。人生の半分以上も一緒にいた親友の新しい面を、出会ってから半年そこらのあなたが見つけてしまったことに」

棘のあるような言葉とは裏腹に、言い方も表情も柔らかい。

「しかし、あなたのことを知るにつれて、納得させられました。お人よしで、自分のことを第一に思わなくて、頼られたら断らない、損でお節介な性格」

「褒めてる?」

「もちろんですわ。少なくとも、果南さんが特別な感情を抱くのは仕方ないと思えるほど、あなたのことを評価していますのよ」

少し驚いた。

僕のせいで、果南さんと彼女たちが過ごす時間は確実に減っている。憎まれこそすれ、良く思われるとは考えてなかったからだ。

「果南さんがあなたを大切に思っていることもまた、現実なのです。果南さんをそんなふうにしてしまったあなたに、残酷なことを言っても?」

どうぞ、と手を向ける。

「諦めないでください。あなたを信じている果南さんを、どうか……」

そこで、ダイヤさんは口をつぐんだ。

その言葉の先は、彼女自身にもわからないのだろう。

言いたいこと、言うべきことがありすぎて、頭と心がぐちゃぐちゃになる。

そんなことは前にもあった。

『聞いてほしいことがあるんだ』

とある日、果南さんは言った。

『たぶん、えつと……』

おろおろと手を動かしながら、顔を赤く染めて、目も泳いでいる。深呼吸して、ようやく落ち着いたと思ったら、こんどは胸の前で指をもじもじさせる。

『すき……なんだけど。たぶんね？ だけど、私にはまだ今ある何かを崩す覚悟がないんだ。だから、お断りというかそんなじゃないか、むしろ離れたくないっていうか……そう、あなたとは離れたくない。嫌いじゃないってことだけ、知っていてほしいんだ』

手をぶんぶんと振る。首をさする。頭を搔く。

切羽詰まって動揺していることを全身で表しながら、えーつとえーつと、と言葉を紡ごうとしている。

『えつと、何が言いたかったんだろうね？』

しどろもどろになる彼女を可愛いと思いつつ……

『僕は……』

普通の人生を歩んでいく中で告白ほど勇気を振り絞るべきものはない。

拒否や嫌悪される可能性も考えながら、それを恐いと思いつつ、それでも告白した。

学生、シヨップの店員、スクールアイドル。みっちり満たされている彼女の人生の中に、僕が入る隙間があつて、僕が入ることが許されることを願った。

少しでも果南さんが僕のことを考えてくれるなら、これ以上はないと思つた。

「僕は……」

悩んでくれるということ、少なくともその時だけは、果南さんの中に僕の居場所がある。僕はそれだけでいい。

だから僕は……

「待つよ。答えが出るまで、僕はずっと待ってる」

そのときに言った言葉が、口をついて出た。

そうだ。僕はまだ、答えをもらっていない。

自分の気持ちだけ伝えて、まだ果南さんの口から何も聞けてない。

忘れられたから終わりだなんて、そんなの勝手だ。

忘れられても思い続けるのも勝手だ。

同じ勝手なら、僕のしたいことをする。

忘れられたらいいのに、なんて大嘘だ。果南さんのことを手放したくない。

ダイヤさん。果南さんを諦めるなつてのは、確かに残酷だよ。現れない人をいつまでも待つって、拷問にも等しい。

それでも僕は誓った。ずっと待つって誓った。誓ったはずなんだ。

「ごめん、ダイヤさん、鞠莉さん。行かなきゃ。もう暗いから、ほんとは送っていきたいんだけど」

「いいから急ぐー！」

二人同時に凜とした声を響かせた。その顔は、怒っているようにも笑っているように見えた。

指示通り、僕は来た道を急いで戻る。

家から駅まで、自転車なら二十分くらいか。全力で飛ばせばもっと短いはず。

「果南さん」

呟いて、僕は走り出した。

△

部屋に戻っても、鞠莉に言われたことが引つ掛かって、立ち尽くしていた。

いつも悩んだときは走りにいったりするのに、そんなことをしてる場合じゃないと、身体が動かない。

ポケットに入れていたスマホを机に置いて、固まる。

『果南さん』

誰かが私の名前を呼んだ気がした。

男の人の声。

どこかで聞いたような、というレベルではなく、もっと間近で聞いたはずの声。

止まっていた時間が動き出したかのように、すつと手が動いた。

それをするつもりはないのに、手が勝手に引き出しを開ける。

そこには、一冊のノートが収められていた。

『絶対に忘れない！』と表紙にでかでかと書かれている。その字はまぎれもなく私ののだ。

めくっていくと、知らない名前と、その人と過ごした日のことが書かれている。

ページが進むにつれ、字は少なくなつて、濃くなつて、乱れていく。

誰かの存在を取りこぼさないように、必死で書いたことを思い出す。

……思い出す？ 思い出すつて？ 私は何かを忘れてる？

ごっこん、とスマホが机から落ちてしまった。ちゃんと置いておいたはずなのに……

照明に照らされて輝く小さな何かが、キンと音を立てて床に倒れる。

銀のイルカだ。

スマホに着けられるよう、紐が結ばれている、銀色のイルカのストラップ。

動いてないはずなのに、それが宙で揺れている光景が鮮明に浮かんだ。

頭の中で、ぱちりとピースがはまった。

『あなたもほら、友達とかとき、遊んだりしないの？』

いつかどこかで、そんなことを『誰か』に訊いた気がする。

その『誰か』にもたくさんの友達がいるのに、会いたいと思つたときと一緒にいてくれるから、迷惑になつてないかと心配になった。

『果南さんに会えるのが一番だからね』

そう言つて、『誰か』は笑つた。

『誰か』は、そういうことを普通のように言つてのける人だつた。

『今日来ていただいたお礼です』

それよりも前、まだ私たちがお互いのことをそれほど知らないとき、私と『誰か』は一緒に出掛けた。

『誰か』は小さい箱を差し出してきた。

欲しかったけど、買わないままだったそれを、『誰か』はプレゼントしてくれた。

嬉しかった。

それをもらったこと。

ちらりと見ただけのはずのそれを買つてくれるほど、『誰か』が私を見ていること。

お礼だなんて言つて、気を遣わせないようにしてくれた『誰か』の優しさも。

『松浦さん、あなたのことが好きです』

『誰か』を意識するきつかけになつた最初の言葉。

勇気を振り絞つてぶつけてきたその言葉も感情も、すべてが混じりつ気のない本当のことだと知ることができて、言いようのない暖かさに胸を満たされた。

ただひたすらに、まっすぐな澄んだ心を見せてくれる人。

そんな人だから、私は……

そんな人なのに、私は……

『待つよ』

はにかんで、彼は言つた。

『僕はずっと待つてる』

気づいたときには、すでに身体は動いていた。

無理を言つて船を出してもらつて、対岸に着くやいなや駆けだす。バスは待つてられない。彼を待たせられない。

心臓が破裂しそうになって、肺が爆発しそうになつても、走る速度は落とせない。

商店街を風のように抜けていく。こんなに速く走れるなんて、自分

でも知らなかった。

ここまで来ればもう少しだ。

いつもなら、同じ場所にいるはず。あのベンチで座っているはず。空はもうすっかり暗くなっていた。そのせいで気づくのが遅れたけど、行きかう人の中で一人、誰かを待つ彼の姿があった。

それまでのスピードはどこへやら、私の一歩が重くなる。

何を言えばいいんだろう。

謝罪も感謝も、断られたらと考えると足がすくむ。

待つててくれているのも、私に罵声を浴びせるためかも。

彼のことを考えれば、それはありえないとわかるけど、嫌なことを考えると膨らんでいく。

「あ……」

ぱつと目が合う。

私は彼がこつちに気づいたことに、彼は私が来たことに驚きの声を上げた。

彼が近づいてくる。

何を言われるだろうか。私の身体は硬直して、逃げることも駆け寄ることもできない。

目の前まで来たときは、息が止まりそうだった。

怯えて下がりそうな足をどうにかして留まらせる。たとえどれだけ罵られようと、受け入れる義務がある。

受け入れなきや、それこそここまで来たことも、ここまで待たせたことも無意味になってしまう。

覚悟を決めて、彼の目を見る。感情をこらえようと震える唇を結んだ。

さあ、何がきてもいい。そう決心したのに……

「こんばんは」

いつものように、普通の日みたいなのにこりと笑って挨拶してくる。

一言で、不安が一気に崩れていった。

「ばか……ばかだよ。来ないかもしれないのに……」

彼は頷いた。

「それでも来てくれた」

心が脈打つ。身体が熱くなる。

「私は……っ、あなたのことを忘れてしまったのに……っ」

「それでも思い出してくれた」

彼はそつと、私の手を掴む。

どれくらいここにいたんだろう。彼の手はとても冷たい。でも離したくはなかった。

「ぐ、ごめ……っ、ごめんなさいっ、ごめんなさい！」

様々な感情がないまぜになって、縋るように彼の裾を握りしめる。

彼は泣き叫ぶ私の頭を引き寄せて、胸に押し付ける。

鼓動が聞こえる。とくとくとくと早鐘を打っている。

落ち着くまでに何分かつただろう。彼の上着はしわくちやになつて、私の涙の跡がついていた。

まだしゃくりを上げる私を抱きとめながら、しかし彼は何も言わない。

「もしまた忘れたら？」

待つていてくれたことは嬉しいけど、私は彼をひどく傷つけてしまった。

もう待たなくていい。拒否しても文句は言わない。

離れたくないくせに、突き放すように私は言葉をつづけた。

でも彼は……

「今度は迎えに行く」

「それでも忘れるかも」

「何度でも迎えに行く」

「拒否するかもしれないよ」

「それなら、ダイヤさんや鞠莉さんや、君のお爺さん経由で呼び出すさ。店の前や通学路で待ち伏せしてもいい」

彼は深呼吸した。

「何度でも何度でも、君を呼ぶよ」

いつも通りの、シンプルな言葉。

意味はわかる。けど、何が彼を突き動かすのかわからなかった。

「どうして?.. どうしてそこまでしてくれるの?」

彼は一瞬驚いたような顔をした。

なんでそんな簡単なことがわからないんだ? とでもいうように。

「君のことが好きだから」

その言葉をこぼさないように、言ったことを噛みしめるように、私
がちやんと理解できるように、ゆっくりと言った。

ああ、もう。

彼はそういうことを普通に言つてのける人だ。

落ち着いてて、優しくて、ちよつと抜けてる人。

私を好きでいてくれる人。私を待っていてくれる人。私の手を引いてくれる人。

今までの私は、彼の言動の一つひとつにドキドキして、はつきりとした言葉を返せずに右往左往していた。

でも、私の気持ちはすでに決まっていたんだ。

「私も、私も好き」

言うと同時に、抱き着くのはそのままに、手を背中に回す。

彼の存在を感じたくて、力の加減も忘れて、抱きしめる。

彼も逃げずに抱き返してくれる。何よりも優しくて、暖かくて、確かな感触だった。

「こんな私でもいい?」

「そんな君だから、好きになったんだ」

たったそれだけの言葉で身体が熱くなる。痺れるように心が震える。

けど嫌じゃない。ううん、嬉しい。

幸せが心を満たして、彼の身体を離さなくて、目から溢れる。

願わくばこの瞬間が永遠に続けばいいのに、なんて言葉を漫画や映画で何度も見たことがある。

その意味がようやくわかった。

本当に時が止まってしまえという意味ではなく、表情がわかるこの距離で、話ができるこの関係で、一緒にいられて幸せでいられるこの時間が、未来でも変わらないようにと願っているんだ。

この先が見たい。

未来はどうなっているだろう。そんなことは誰にだってわからない。わかるはずがない。

けれど一つだけ確かなことがある。

何年後だろうと何十年後だろうと、気の遠くなるような未来であろうと、私はあなたを覚えてる。

あなたの隣で、あなたのことをずっとずっと覚えてる。

今もこれからも、ずっと。

ずっと。

恋人は天使

テレビでは、つい最近まで紅葉が見頃だと報じていたニュースキャスターが今日は寒冷地方の積雪量について報じている。季節の移り変わりとは早いものだと思いつながら外出の用意をする。……今日はコートを着ていこうか。

彼女との待ち合わせ時刻は12:00。今、待ち合わせ場所である沼津駅の掛け時計は30分前を指していた。少し早く着きすぎただろうか、……それにしても街中にはカップルだろうと思われる男女が何組も行き交ってる。

まあ、それもそうか。何を隠そう本日12月24日はクリスマスイブ。街全体がサンタクロースもニッコリのクリスマスモード全開だ。

これまでの自分なら「リア充爆発しろおお！」と邪念を撒き散らしていただろうが今はそんなことする必要は微塵もない。なぜなら自分相楽さから 匠たくみもそんなリア充の仲間入り、渡辺曜という天使のような恋人ができたのだから。

「ごめん！待ったかな?!」

約束の時間を僅かに過ぎた頃、ふと声のする方に振り返ると肩を下に弾ませながら膝に手をつく天使がいた。

「ごめんね、ホントはもつと着くつもりだったんだけど今日が楽しみすぎて寝坊しちゃって……あの……その、怒ってない?」

いつもの元氣澆刺な様子からは想像できない薄花色のロングスカートを基調とした大人っぽい服装に加えてそんな潤んだ目で上目遣いをされては怒りという感情を起す方が至難の技だ。

そんな彼女を見ると自分は心の奥底から溢れ出る恥ずかしさを隠すようにそつぽを向くと早足で最初のデートスポットへと天使のエスコートを開始した。

「ん〜！やっぱり内浦の海はキレイだよ〜！高校時代はここでダンスの練習をしたっけ」

大きく伸びをしながら海を見つめる彼女はどこかの写真集に載っ
ていてもおかしくないぐらいに美しい。

「で最初につれてきてくれた場所は……カフェかな？」

自分が彼女との最初のデートスポットに選んだ場所はい最近
オープンしたばかりの海辺に建つこじんまりとした喫茶店だ。

「これがメニュー表か。どれどれ……いろんなメニューがあるんだね
！お、このハンバーグ美味しそう……あ、店員さん！これを二つお願
いします！」

彼女の大好物がハンバーグだということは一般常識として脳に刻
み込まれているのでこの注文は想定どおりだ。下調べしたかいが
あったと思わず心の中でガッツポーズをしてしまう。

「そういうえば、匠と付き合い始めてからもう3年が経つんだね〜確か
告白されたのは高校を卒業した時だったけ」

注文した料理を待つ間、彼女がしみじみと話すので自分もふとこれ
までの過去の出来事を思い出す。

曜とは物心付いた頃から知り合いで小さい頃は家が近所だったの
もあり毎日のように遊んでいた。

だが小学校に入学し、だんだんと女の子を異性として意識し始める
高学年。毎日一緒に登下校する二人を見たクラスの輩に「いちやい
ちやカップル」だのと騒ぎ立てたてられ、思春期故の気恥ずかしさが

生まれたため毎日一緒だった登下校がバラバラになり、毎日交わしていた「おはよう」「またね」の言葉も次第に無くなっていった。恐らくそれと同じ時期だろうか何か胸の中にモヤモヤとした感情が生まれ始めたのは。

中学も一緒の学校へ進み三年間同じクラスだったが特に何も無し、あったとすれば修学旅行で同じ班だったことと、「おはよう」の挨拶は再び交わすようになったことぐらい。その間にも胸の中の原因不明モヤは増幅していくばかりで、そして卒業の日を迎えた。

結局心に抱えていたモヤは晴れることはなくただ、ゆつくりと存在そのものが記憶から消えていった。

そして高校生、お互い別々の高校へと進学し曜との関わりは無くなるかと思われた……だが今思えば神様の助けだろうか、運命の赤い糸とも呼べるラブライブが自分と曜との関係を大きく変えることになる。

『最近この沼津にある廃校寸前の高校にスクールアイドルが誕生した』そんなことを高校の友人から聞き八割方興味本意で沼津での夏祭りへ出向いたときそこで見たのだ。スクールアイドルA q o u r sの一員として笑顔満開で踊る幼馴染みの姿を。そしてそこで過去に抱えていたモヤの存在が記憶の奥底から蘇り、ついにその正体気づいたのだ。モヤの正体は「幼馴染み曜への恋心」だと。

「ほんとあの時はびっくりしたよ。高校の卒業式から帰ってきたら家の前に立って待っていていきなり『好きです！』って言うんだもん。……でも凄く嬉しかったんだよ？だつてずっとその言葉を10年以上待ってたんだから」

そう、曜が高校を卒業した日、自分はずっと抱えていてようやく気づいた自分の想いを素直に幼馴染みへとぶつけた。ただ一言、「好きです」と。

その言葉を聞いて彼女は初め、目を見開いて驚き、沈黙の時間が流れた。

「そりや突然来てそれはねえよな」なんて心の中で毒づいていたその刹那、曜は突然自分に飛びつき、強く抱きしめると「ずっとその言葉を待ってたんだよ？」と言いながらと大粒の真珠のような涙を流してくれた。自分はそんな彼女の抱擁に応えようと、「待たせてゴメンな」と今にも目から溢れ出そうな涙を寸前で堪えながらそう返答した。

かくして、その時から自分達の関係は「幼馴染み」から「恋人」へと変化したのである。

「こちらがご注文頂いた炭火焼きハンバーグです。大変お熱いので気をつけてお召し上がりください」

暫時の刻思い出話に浸っていると注文の品がやってきた。彼女の好物であるハンバーグ、熱々の鉄板に乗っており焼き目がしっかりとついているうえに、まだ「パチパチ」と肉の焼ける音がしているのが食欲を存分にそえられる。

「じゃあ、いただきまーす！……んく美味しい！匠も食べてみなよー」
いつだったか、「美味しく食べる君が好き」だなんてコマージュナルがあったが今その意味がようやく理解できた気がする。美味しそうにハンバーグを頬張る彼女はとても幸せそうだ。10分もしないうちに鉄板にデカデカと乗っていた炭火焼きハンバーグはあっという間に消え去った。

「あわしまマリンパーク!!暫く来てなかったよ」

腹ごしらえも済んだところで向かった先は本日のメインデートスポットともいえるあわしまマリンパークだ。

「ねえねえ、早く入ろうよ!」

キラキラと目を輝かせる彼女は子供の頃に戻ったかのように駆け出すと館内へと進んでいく。そんな彼女を微笑ましく思いながら自分も駆け足で後を追った。

「なんととってもイルカ、アシカさんは見ないとね!あ、あと遊歩トンネルにも行かないと!」

島に渡ると直ぐにアシカのショーの案内があったため早速アシカのいるステージへと向かった。流石クリスマスイブ、ということでショーの会場は何人いるのか?というぐらいに人で溢れかえっていた。

「わく凄いい人だね………あの………手、握ってもいいかな?」

彼女からそんな風に聞かれてきつぱり「NO」と答える人間は果たしてこの地球上に存在するのだろうか?

自分は何も言わずにポケットに突っ込んでいた右手を出すと彼女の左手と絡ませた。

いきなり結ばれた手に驚きながらも彼女は強くその手を握り返してくれたのだった。

「……なんか懐かしいね。小さい頃もこんなふうと一緒に見たことあったよね」

手をつなぎながら見るアシカのショーは子供の頃を思い出しながらもお互い握る手の大きさに自分達の成長を感じたのだった。

「このトンネル！二人で一度来てみたかったんだあ！」

アシカのショーを見終わった後、彼女の手を引きながら向かったのは淡島遊歩トンネル。宇宙を表現したのか、はたまた内浦の海を表現にしたのか、トンネル全体には紺碧色の光のアーチがかかり、天井には星や、魚を形どった光が散りばめられていてこのトンネルを見るためにわざわざ県外から人が訪れるほどらしい。

「うわあ……まるで光の世界にいるみたいだね。あ、この赤い光、ペンギンの形してるよ！この青色はイルカさん！それでこっちはさつき見たアシカさん！」

トンネルの天井に散りばめられた光のアーチに嬉しそうに眺める姿はまるで子供のようで、新しい形を見つけたたびに指をさしてはヒマワリのような明るい笑顔を振りまく。自分は彼女のこんな底なしの笑顔が大好きだ。

「はあく久しぶりに来れて楽しかった！展示されてた魚の種類が増えてたよね!？」

時間が経つのは早いものだ。お昼すぎには入ったマリナーパークから出てきてみれば太陽が西へと傾き、あたりは黄昏時といったところだろうか。

淡島を出ると自分は夕焼けの見える砂浜に彼女を連れてきた。

「なんか今日はあつという間だったね〜これからももつといろんなところに行きたいな」

そう言いながら彼女は砂浜にゴロンと寝転がった。それにつられて自分も隣に寝転ぶ。

「あく寒いーやっぱり12月の海は寒いよ〜…今日は本当にありがとう。最高のクリスマスイブだったー」

そう話す彼女の表情はとても満足そうだ。

……渡すなら今かな？

おもむろに左のポケットに手をつ突っ込むと中から小さな箱を取り出し自分の横に寝転がる彼女の頭にポンツと乗せる。

「ん、これって………わぁ！綺麗なアクセサリー！」

彼女が嬉しそうな声を上げながら箱に入っていたライトブルーの宝石が付いたネックレスを夕焼けの光にかざした。すると、彼女のイメージカラーである鮮やかな青色をした宝石は地平線に沈む太陽からの光を受けてキラキラと一等星のごとく煌めいた。

「こんなプレゼントまでくれて……大好きだよっ！」

そう言うとき彼女は潤んだ瞳を伏せながら自分に強く抱きつく。まるで告白をしたあのときのようにだ。

「自分も曜が大好きだぞ」

そう言って彼女の頭を撫でようとしたのだが……何故か声が出ない。ここで自分はあることに気がついた。

そういえば今日のデートの中で自分は言葉を発していない……？

そんなことを考えていると頭に響くように声が聞こえてきた。

「ーみ!!おーて!!」

だんだんと声は大きくなっていく。突然、瞼が重くなり始め、ゆっくりと視界がぼやけ始めた。

そして、自分はその流れに抗うことなく静かに目を閉じた。

目を覚ますとそこにはさつきまで見ていた嬉しそうな表情をする彼女……ではなく対照的な不機嫌な表情をする彼女の顔があった。

「今日はクリスマススイブだからデートしようって約束したのに……！約束の時間になっても来ないから家に来てみたらニヤニヤしながら寝てるし……もう知らない！」

そう言うとき彼女はそっぽを向いてしまう。この一連の流れを見てようやく「あれは夢だった」のだと気づいた。

「ごめんな曜！今すぐ準備するから待っててくれ!!」

そう言いながらベッドから飛び起きると自分はおもむろに彼女の頭を荒く撫でた。

「ひゃっ?!……もう、早くしてよ?それにしてもさつきどんな夢を見

てたの?」

「えっ? うーん……幸せな夢だったぞ」

「何それ!? ねえねえく教えてよく!」

プクツと顔をふくらませる彼女を横目に笑みをこぼしながら急いで服装を整える。

今日は12月24日でクリスマスイブ、これまでの自分ならリア充に邪念を送っていただろうが今は違う。

何故なら僕には幼馴染みであり恋人の天使がいるのだから。

「よし、やっと準備できた! お待たせ。曜」

「うん、それじゃあ行こうよ匠。あわしまマリンパークに向かって全速前進ヨーソロー!」

浜辺少女とのパス

突然だが、いくつか質問したい。

『夢』とはなにか？

眠っている間に、現実にはない事象の感覚を起こすこと。
将来実現させたいと思っている事柄。

今回の質問の場合、後者で捉えてほしい。

『夢』とは、「国民を守る自衛官になりたい」、「祖父のように部下から慕われる人になりたい」といった人がそれぞれ持つであろう憧れ、理想、願いである。

二つ目の質問。

『努力』とはなにか？

人が目標を実現するために、心や身体を使って務めること。

『努力』とは「試験に合格するために、勉強を頑張る」、「あの人に負けない為に強くなる」といった人がそれぞれ抱くものに対して、一生懸命になること、没頭すること、足掻くことである。

『夢』を叶えるために努力する。

それはこの社会で多くの人がやっている若しくはやってきたことだ。

『努力』が実って『夢』を実現させた人もいる。

ならば、逆は？

ここで最後の質問。

君達は、挫折をした事があるか？

俺はある。

俺にとっての『夢』は目標から呪いに変わった。
俺にとっての『努力』は無意味な物に変わった。

これから綴られる物語はそんな俺と浜辺の少女の物語だ。

冬を越え今は、花が芽を出し始める春と白い肌も健康的な小麦色に焼ける夏模様の狭間。

いつの夕暮れも綺麗な物だが、この時期の夕暮れはまたいつそう美しく見えるものだ。

そんな景色を独り占めできる防波堤で俺は思いふける。

夕焼けを独り占めできるこの場所は俺にとってお気に入りのスポットだ。

普段なら誰にも邪魔されることは無い。

そう、普段ならの話だ。

だが、今日だけは違った。

俺がいつものように夕焼け浸っていると、後方からものすごい足音が近づいてくる。

ぶっちゃけ、ものすごく気になる。だが、ここで振り向いたら負けな気がする。だって、走ってきてる人が必ずしも、俺めがけてるとは限らない。

のに、振り向いて目が合ったとする。「なに、この人。お前なんかに用ないし。きもいからこっち見んなよ」って思われたくないじゃん？

だから、俺は振り向かない。

そんな事を考えてるうちにも、足音は近づいてくる。

「その人、ちよつと待ったあ!!」

この場には俺しかいない。つまり。

結局、俺に用があるのかよ…。

「あ?」

叫び声と共にやってきた足音は俺のすぐ後ろで止んだ。

一体なんなんだ。俺の時間を邪魔するやつ顔でも拝んでやるか…。

そこには、長く青い髪をポニーテールに纏めダイビングスーツで身を包んだ少女の姿。

ダイビングスーツのジッパーから除く白と黒のラインのビキニ。そして、その水着が包み込む大きな胸に一瞬目が向いてしまう。

それなりに遠い場所から全力疾走でもしてきたのか、息は完全にながらっており、肩で息をして手に膝を置いている。

「なんだ？俺に用事か？」

「なんだ、じゃないよ！」

少女は一つ息を吐くと、ものすごい剣幕で俺に詰め寄ってくる。

近い。顔が近い。よく見ればこの子…かわいいし。

「今、君海に飛び込むとしたでしょ!!」

ん？なんの話してるんだコイツ。

「は？海に飛び込む？俺が？何言ってるんだアンタ」

「え？」

俺と少女の歯車がうまく噛み合っていない。というかもう既に少女の思考は停止していた。

「つまり、アンタは俺が海に飛び込むとしたと勘違いして走ってきた…と？」

「はい……」

話を聞いてみれば、防波堤に突っ立って思い老けていた俺の姿を彼女は、今まさに海に飛び込み自殺しようとしているように見えたらしい。早とちりもいいところだ。

「ぶつ……くつ……くは、くははははは……アンタ、ドジだな」

早とちりしてしまった恥ずかしさ故に、少女は顔を真っ赤に染め俯く。

「しかも、拳句の果てには全力疾走してきた……ぶくくく」

「ちよつと君！笑いすぎ！」

ぶくーと頬を膨らませ、怒る少女。その姿は彼女には失礼だが可愛らしくも、面白かった。

「悪い悪い」

「悪いと思つてないでしょー!」

まあ、ぶつちやけ別に俺は悪くないし。ただ、夕焼けを見てただけだからな。

「でもなんでこんなところに?」

と、聞かれても特にこれ!という理由もなければただの日課に近いものだ。だから答えられるような理由なんてない。

「別に理由なんてないけど」

だから、こう言うしかない。

「理由もなくこんなところに来るなんて……ひよつとして君やっば危ない人?」

やっばつてなんだ。やっばつて。失礼な奴だな。

「アンタの方がよっぽど危ないと思うんだけど?」

「まーたそういう事を言うー!そんな人はモテないぞー」

グサツ。彼女の言葉が俺の胸に刺る音が確かに聞こえた。

顔に出てたのか少女はしてやったりと笑顔を見せる。

が、途端にふと彼女の視線が時計に向き、わたわたと慌て出す。

「もうこんな時間?!お店の手伝いしなきゃ!!じゃあね!飛び込んだりしちゃだめだよ!」

「飛び込まねえっーの」

俺の言葉を聞く前に少女は、走り去ってゆく。

最後まで俺の言葉聞いてねえし……まったく……嵐のようにやって来て嵐のように去ってったな……。

それに、気が付けば夕焼けはその殆どを海に沈め切りは少しずつ暗くなり始めていた。

あの少女と出会ってから、数週間後。特になにか変わるわけでも

なく、ただひたすら同じ毎日。

そう。変わらない毎日になるはずだったんだ。今日もあの日と同じように一変を迎える事になるとは誰が予想できただろうか？

いつも通りに終礼を終え、いつも通り歩いて下校してた。今日はまっすぐ家に帰ってゲームでもするかと呑気に考えていると、曲がり角で人影が現れる。ぶつかりそうになり反射的に避けたが次の瞬間、目の前の光景について目を疑ってしまった。

「すみませ……………あつ!？」

「あつ!」

なんと今、あの日、俺を飛び込み少年と勘違いしたポニーテールの少女が目の前にいたんだ。

「君っ!なんでここに!？」

「それはこっちのセリフなんだが…」

よく見てみれば、少女が着ている制服は浦の星女学院の制服なのだ。

浦の星女学院は、俺の通ってる学校からさほど遠くない場所に位置してるんだ。

そう考えるとここで出くわすのも納得がいくじゃないか。

俺がそんなことを考えてると同じく、少女も俺の姿をマジマジと見つめていた。

「へえー…………君あそこの生徒だったんだ…やっぱ世間って狭いんだね」

まあ、確かに世間は狭いがこんな田舎町なんだ。沼津周辺だと高校なんてだいぶ限られてくる。

「ここであつたのも何かの縁だし、一緒に帰ろうよ」

女の子二人で下校なんて、知り合いにでも見られたら変な誤解を招きそうで嫌なんだが。

というか人の話は聞かない、変な勘違いをするような人と帰ってたらくるくなく目に合わない気がしてたまん。

「今、ものすごく失礼な事を考えてない?」

ちっ。なんでわかるんだよ。

「気のせいだろ。ていうか、俺がアンタと一緒に帰るメリットがないから断る」

「ひどい！そんなこと言わずにさー！」

少女は俺の肩をしつかりと握ってもものすごい勢いで揺さぶる。

「やめろ!!脳が揺れる!」

「なら、一緒に帰ってくれる?」

「わかったよ……けど、途中までだからな」

俺の承諾を得るなり、少女はニコニコと歩き出す。

一体なんでこうなる……俺は頭を抱えながら、彼女の後を歩く。

一方的に話しかけてくる、少女に相槌を打ちながら俺は後ろを歩く。

一緒に歩き出して十分くらいに足しそうな時、コロコロと俺の足元にサッカーボールが転がってきた。

風に吹かれてきたのだろうか?ボールを拾い上げ、それが来た方向を見つめるとそこには、幼さを余り残し、ワーワーと幼い声を上げ楽しそうにボールを追いかけてピッチを駆け回るサッカー少年たち。

サッカー……か。

『上がれー!!』

『5番マークー!』

『DF、抜かせるなよ!!』

無邪気にボールを追いかける少年達の姿を見ているとある感情が込み上げてきた。

『羨ましい』と。

数年前までは俺もサッカープレイヤーだった。

サッカー一筋で、本気でサッカーで飯を食うことを考えていたものだ。チームメイトと共に毎日練習を繰り返し、『夢』の為に『努力』を続けていた。

だが、その『夢』はある日のある事件を境に『呪い』に変わり果ててしまった。

そんなことを思い出していると、自然とボールを持つ手に力が入る。「ボール……返さないの?」

少女はキョトンとして心配そうに顔でこちらを見つめている。それにさえ気づかないほど夢中になって見ていたんだろうか。

我ながら、未練がましいいったらありやしないな。

そんな自嘲をしながら少年達を横目にボールを投げ返す。

それを、見届けると俺達は無言で歩みを再び進める。

何歩何分歩いたか。気まずい雰囲気のまま無言が続く。それをぶち壊すように少女が口を開いた。

「今日、暇?」

唐突だな。俺も年相応の男子高校生だから、デートの誘いなら嬉しいもんだ。俺だってそういう事には興味はあるさ。けど、今はそんな気分ではない。

「暇だけど、生憎と……」

「よし!決まり!今から海にでも行くっ!」

そう言っただけ少女は俺の手を握り小走りに走り出す。

人の話聞けよ。しかもほぼほぼ強制連行じゃねえか。

まあ…帰り道の海ぐらいならかまわないか。

どこまでも続いているように錯覚させる水平線に、沈んでゆく夕焼け。

「夕焼け綺麗だね」

いつもなら1人で眺めていたはずの景色を少女と2人で眺めている。

「綺麗じゃなかったらしょっちゅうこんなところに来ない」

自分1人のお気に入りの場所が他人に知れてしまったという後悔はありはするが、何となく嬉しくもあった。

「さつき、サッカーボールが転がってきた時様子変だったけど何かあったの?」

「別に……」

「嘘だ。お姉さんに言ってるらん？思う所があるなら相談に乗ってあげよ？」

誰がお姉さんだ。俺は高3だぞ。アンタが制服着てるって事はタメか年下しかありえねえだろ。留年とかしてなければだけど。

彼女に俺の何かを言ったところで何かが変わるはずがない。のに、俺を見つめる少女の瞳には敵いそうもない。

「俺も数年前までサッカーをしてたんだ。けど、怪我で二度とサッカーができなくなった」

「え？」

「膝前十字靭帯断裂っていう怪我さ」

スポーツをしていれば多少の怪我は付き物だ。サッカーによくあるのは足首、膝の靭帯の損傷。

その中の一つに挙げられるのが膝前十字靭帯断裂。それは、サッカープレイヤーにとって致命的な怪我。

その怪我故に、引退を余儀なくせざるを得なかったプロの選手もいたほどだ。更に、残酷な事に俺の場合半月板損傷も伴っていた。

「靭帯断裂って……それ試合中に？」

「試合中の接触も原因ではあるみたいだけど、そもそも膝が弱ってたらしい」

俺の膝は過度な練習による負担、そして度重なる試合中の相手との接触によりボロボロになり既に限界を迎えようとしていたらしい。

痛みは時々あつたけどそれでも、俺はサッカーを続けた。

『どうにかなる』と自分に言い聞かせて。

そんな時に、あの事故は起きた。

あれは、中学最後の大会。1対1と同点で残り時間もほんのわずか。ここでゴールを決めたチームが勝つのは目に見えていた。互いに負けじまいとボールを追いかける両者に、遂に勝利の女神が微笑むかのように俺らのチームにコーナーキックのチャンスが訪れた。

メンバーの殆どがゴール前に張り付き、無論俺もゴールの目前にいた。

ピリピリと空気が張り詰める中、ぼーるは弧を描きながら俺の足元へと落ちててきた。チャンスだと、俺も足を伸ばしたが、相手側もボールを触らせまいとボールを弾こうとした……その瞬間、俺の膝裏に相手の勢いの付いた蹴りが飛んできてそのままゴールポストに強打。

それでも試合は続行し、俺もアドレナリンが出てたからか痛みは全く感じてはいなかった。

そして、同点のまま試合終了のホイッスルと共に俺は膝から崩れ落ち、そのまま病院に搬送され、残酷な診断を受けることとなった。

医者からはサッカープレイヤー復帰はほぼ不可能。あるいは、復帰できたとしても、大幅な能力低下は否めないと診断された。

それが、俺の夢への挫折の瞬間。

サッカーが大好きで、サッカー選手を目指して一心不乱に続けてき努力さえ全てが無駄になったんだ。

『サッカー選手になる』

その夢はもう二度と叶わない理想という名の鎖で俺を縛り付ける呪い。

諦めのつかない夢に縛られた俺は、どっちつかずでなあなあに流されたまま、今ここにいる。

だから、無邪気に走ってボールを追いかけ回せる少年達が羨ましかった。

1つのことに夢中になれる楽しさを俺は知っているからなおさら。

変えようのない残酷な過去を気が付けば少女に語っていた。なぜ、彼女に話したんだろうか。答えはわかっている。きつと、誰かにわかって欲しかった。聞いて欲しかったんだ。

横目で様子を伺うと少女は難しそうに考え事をしている。

「そっか………んー………」

「なんだよ」

「じゃあ、私と一緒にサッカーしようよ」

この女は何故いつも俺の話聞いてないんだ？聞く気がないのか？それとも聞いててあえてそうしてるのか？

「だから、俺はサッカーはもうできないって…」

「軽いパスくらいなら出来るんじゃないの？」

ニカツと少女は微笑む。その笑顔は夕焼けに照らされて一層眩しい。

その笑顔に逆らえる気はしなかった。

「わかったよ……」

「じゃあ、明日ボール持ってきてねー」

しかも、明日からやんのかよ。行動力のあるお方で。折角、こつちがあんまり考えたくない事を話したっていうのにバカバカしくなってきたわ。

だが、これが彼女の魅力なのかもしれない。

俺のお気に入りの防波堤近くの砂浜にて。

「むー……うまくボールが蹴れない……」

昨日唐突にパスサッカーをしようと言い出した少女。

その本人は今、うまくボール俺の足元まで届かない事がご不満なようだ。

膝を抱え込み頬をふくらませてブスくれている姿がその証拠だ。

素人にいきなり足元に綺麗にパス出されてたまるかよ。

パスを出すといっても、単純に蹴ればいいわけじゃない。

軸足の位置、膝の落とし方、蹴る足の力の入れ方、当てる位置、体の重心、上半身は起こす、言い出したらキリがない。これらは実際に経験を積んでから得るものだから。

ましてや、ここは砂浜だ。ボールの力は地面に吸収されてしまう。ならばただのパスでは駄目。では、どうするか？普通のパスより強く出すしかない。だが、普通のパスを出せないとその先は難しい。

であれば、基礎をしつかりしなければ。

「ボールを蹴る時、軸足をもう少しボールから離しみる。じゃないと蹴る足の可動域が狭まって力も入らない」

ボールを蹴る上で一番と言っても過言ではないほどに肝になってくるのは軸足。近すぎず遠すぎずの距離に持つてくるのがポイントだ。

「なるほど……よしーもう少しやるよー！」

俺が少し離れたところまで来ると、それを合図に少女はボールを蹴り出す。さっきまで俺の足元にすら来なかったボールが俺の足元にきちんと渡ってきた。

それには俺も驚いた。きっと彼女自身運動神経は良いのだろう。たかだか少しアドバイスしただけでこれほど変わるとは。

俺もボールを右足で蹴り出し彼女の元へと送る。

他愛もない話をしながらただ、ボールを蹴り合いパスをするだけの事をひたすら二人で繰り返す。

それだけなのに何故か心地いい。

心地の良い時間はあつという間に過ぎていき、気づけば夕日もほぼ姿を隠す刻になっていた。

「はー！楽しかった。また明日もやろうね」

「どうせ断ったって無理やりやらせんだろ？」

「おっ。わかってきてるじゃん」

ケラケラと笑う少女。それに釣られて俺も笑をこぼす。

「さて、そろそろ帰らないと…」

「あいよ。気をつけて帰れよ」

「じゃあねーバイバイ」

別れの言葉を告げると姿が見えなくなるまで少女は手を振り続けた。

砂浜でたった二人だけのサッカーをするようになってから数日後。

数日も経てば少女もだいぶコツを掴んで、綺麗なパスを出せるまでに至った。

「いやー、やっぱ難しいねー」

そう言いながら当たり前のように俺の隣に座る少女。

「筋はいい方みたいだけどな」

「そう？なんか照れちゃうな…えへへ」

ここ最近、毎日彼女と会っているからか彼女の事をだいぶわかってきた。

同じ歳であること。

自分の身体能力が非凡であることに本気で気づいてないこと。

だけど、分からないことが一つだけ。

何故、俺に構うのか？

それだけがわからなかった。

「なあ、アンタは何で俺に構うんだ？」

「唐突に変な事聞くね。んー…なんかあったかもしれない私みたいだから…かな？」

「あつたかもしれない、私？」

俺にはその言葉の意味がわからない。その真相は彼女の中にあるから。

「そ。私もね、一時期はある事に夢中だった。努力もした…けど、上手くいかなくて諦めちゃった。だから君と同じなんだよ」

つまりは、彼女もまた夢に挫折した一人だ。

スクールアイドル。その言葉は何度か俺も耳にしたことはある。芸能プロダクションを介さず一般高校の生徒を集めて結成されたアイドルの事。

所謂芸能人ではなく、ご当地アイドルのようなもの。

だが、そのスクールアイドルという言葉をよく聞くようになったのもここ数年の話だ。

なんでも、廃校寸前だった学校をたった9人のスクールアイドルが救ったんだとか。それはスクールアイドル界では伝説扱いされてるらしい。

伝説のスクールアイドルの母校と同じように、少子化の影響で生徒数が年度右肩下がり为学校があるのも事実。

それは、浦の星女学院も同じらしい。これ以上生徒数が増えなければ廃校もやむ得ない。

だから、自分の大好きな学校を守るために彼女もまたスクールアイドルになり、廃校阻止を目指していたんだと。

幼い頃からの知り合い3人と共に立ち上がり、努力した。

その努力を嘲笑うかのように悲劇は起きた。

大会のさなか、メンバーの1人が足首を怪我するという事態が発生。

その1人にこれ以上の負担をかけてしまえば、再起不能になるかもしれないと悟った彼女は敢えてチームを解散へと導いたという。

「現実って無慈悲だよな」

彼女の言いたいことはわかる。努力を続けたとしても必ず報われるとは限らない。

俺や少女のように途中で挫折を味わう事もある。

「今…私の幼馴染が2年前の私達と同じようにスクールアイドルになって学校を救おうとしてるんだ」

そして、彼女もまたその幼馴染から力を貸してほしいと何度も頼み込まれているらしい。が、一度味わった挫折から立ち直るのはそう簡単なことではない。

彼女は『救いたい』という夢と、『また同じ事になるかもしれない』という恐怖の間で葛藤しているのだ。

ただ、挫折してその後の答えを持ち合わせない俺に言えるのは

「アンタのやりたいようにやればいいんじゃないか？」

「え？」

「なんか、君に話したら少しだけ気持ちが悪くなったかも。ありがとう。」

礼を言われるような事はしてないんだけどな。とりあえずありがたく受け取ろう。

「お礼の代わりにっていいのもおかしいけど、私も君に一つだけアドバイスがあるんだけど」

「アドバイス？」

「そう。君は夢を諦めるしかなかったって言ってたけど、私思ってたんだ…サッカーコーチになってみたらか？」

「コーチ？」

「コーチといえば、プレイヤーに対して指導する人のことだよな。」

「そ。君、教えるの上手だし。それに、サッカーが好きなら辞めるんじゃないかってその知識経験を活かせる方がいいじゃない？」

確かに彼女の言う通りだ。だが、教えるのが上手いというのは自分自身全く気づいてなかったし、むしろ俺一人ではその道を思いつきすらしなかった。

「コーチ……か。それも悪くないな」

夢を追えなくなったら、夢を追わせてやる側になるのも悪くはない。

「ぶっ……く……ははは」

何故か同時に笑いが零れる。

「なんだか一人で難しく考えてた事って他の人の簡単な言葉で動いちゃうんだね」

「だな」

まったくだ。俺のたった一言は彼女のたった一言は、俺たち互いの考えを景色が変わりゆくようにいとも簡単に変えてしまった。

「じゃあ、もっと知識付けなきゃな」

「私は、過去とメンバーと向き合わないと」

「さて、そろそろ続き始めるか」

夏に差し掛かる夕日はあの日よりも確かに長く俺達を照らしてる。

まだ時間はある。だから、俺達は時間の許す限りパスを出し合おう。

夏は過ぎ、紅葉茂る秋。数ヶ月前と変わらずに俺と少女は時間のある時は砂浜で二人だけのサッカーをやっている。

「そういや、スクールアイドルの方はどうだ？」

少女は2年前のメンバーと和解を経て、浦の星女学院スクールアイドル：A q o u r sとして前に進み出した。

「うーん…ぼちぼちな」

スクールアイドルとして再出発してからも周りのメンバーに引張られ、悩みの種が消えそうにないらしい。

「君の方はどうなの？」

俺はというと小学校の時に世話になったチームのコーチをやっている。んだが相手は小学生…：好奇心の塊だ。人の話は聞かないし、暴れたい放題だ。全く手に負えねえつたらありやしねえ。が、だからこそ教えがいがある。それをわかってくれた時の嬉しさがある。

「大変…：だけど楽しい」

「そっかー」

彼女は満足そうに笑顔を咲かせ、まっすぐとボールを俺の足元に蹴り出す。

少女には夢がある。昔と変わらない学校を守りたいという夢。

俺にはもうあの頃の夢は追えない。だから、それに代わる、新しい夢を見つけた。

夢は違えど、経験は同じ。だからこそ、俺らは笑い会えたんだ。

最後に、いくつか質問したい。

『夢』とはなにか？

眠っている間に、現実にはない事象の感覚を起こすこと。

将来実現させたいと思っている事柄。

今回の質問も、後方で捉えてほしい。

『夢』とは、「国民を守る自衛官になりたい」、「祖父のように部下から慕われる人になりたい」といった人がそれぞれ持つてであろう憧れ、理想、願いである。

二つ目の質問。

『努力』とはなにか？

人が目標を実現するために、心や身体を使って務めること。

『努力』とは「試験に合格するために、勉強を頑張る」、「あの人に負けない為に強くなる」といった人がそれぞれ抱くものに対して、一生懸命になること、没頭すること、足掻くことである。

『夢』を叶えるために努力する。

それはこの社会で多くの人がやっている若しくはやってきたことだ。

『努力』が実って『夢』を実現させた人もいる。

ならば、逆は？

ここで本当に最後の質問だ。

君達は、挫折をした事があるか？

俺はある。

俺にとつての『夢』は目標から呪いに変わった。

俺にとつての『努力』は無意味な物に変わった。

だが、そこから何も変わろうとしなかったら、その夢と努力は一生形を得ずして、消えゆくのだ。

諦めるだけが答えではない。その知識は、その経験はなにかに活かせるかもしれないんだ。

挫折から俺はそれを知った。

そう、呪いは新たな目標に変えられる。

だから、挫折した時は1度周りを見てほしい。新しい夢、道が見つかるかもしれない。

1人で無理に見つけようとしなくてもいい、誰かとそれを共有してこそ見つかるものもあるのだから。

「怪我でサッカーを諦めた俺にすらできたんだ。」

その選択次第で貴方の人生は大きく変わ……つと、カツコつけてたところにボールが。

「何ボールとしてるのー？」

「悪い悪い」

俺は受け取ったボールを、力強く、まっすぐに蹴る。

あれから数年後も俺と少女はこうやってパスサッカーを続けている。

そして、今日もあの日と変わらない二人の間をボールが転がる。

まぶしいほどに輝くもの…

「いよいよ本日ファイナルを迎えるラブライブ！どのグループの頭上に栄冠が輝くのか!!」

ピクッ

アナンウンスの声が響き渡り、自分の肩が少し震えるのが分かる。でも、それは決して怖いから不安というものから来ているのではない。

みんなで、9人で、この場所に立てるから。

あの時の、2年前のAqoursがたどり着けなかったその先へ、この9人で来れたから。

自分のやりたいと決めたスクールアイドルを全力でできるから。そんな嬉しさが高揚感が、ここまで来れた奇跡に自分は今、奮えている。

…もうすぐ自分達の番が来る。

すると、自分を含めた9人がステージ裏に集まり、それぞれの表情を確認し合う。

みんなの表情には不安なものは一欠片もなく、そこには純粹に、

ー勝ちたい!!ラブライブで優勝したい!!ー

という気持ちが溢れ出ていた。

「0から1へ…1からその先へ!!」

千歌さんの声が…Aqoursの救世主の声が聞こえる。

…あなたがいてくれたから、わたくし達はまたひとつになれた。

互いにすれ違いあつて、バラバラになりかけた3人をまたひとつにしてくれた。

もちろん、わたくし自身

また、浦の星にAqoursが蘇り、スクールアイドルとして活動できるようにと、裏でココソコと動いてはいましたが、結局は、自分1人の力ではどうしようもなかった。

ですが、千歌さんが…いえ、梨子さん、曜さん、花丸さん、善子さん、ルビイが、あなた達が居てくれたから、また果南さんや鞠莉さんと、スクールアイドルをすることができた。

わたくし、黒澤ダイヤがこうして、この場所に立って歌えるのもあなた達がいてくれたから…だからこそ今日は精一杯歌おう。

世界中のラブライブを好きな人たちのためにも

自分達を応援してくれている沢山の人のためにも

Aqoursのこの9人のためにも

自分自身のためにも

そして、一年前、スクールアイドルという夢を諦め、心の中の火が消えかかっているいたわたくしに、また火を灯してくれたあの人のためにも…

だから、行こう!!

この9人で、Aqoursとして最高に輝いてみせよう!!!

「Aqours!!サンシャイン!!!」

ラブライブ決勝戦会場、アキバドームに、9つの声が響き渡り、直後、9つの輝きがステージに現れる。

その9つの輝きの名はAqours。

そして、その名は今大会の優勝グループの名でもあった。

—————

…少し時が進み大会翌日の夜。

「それでは、A q o u r s 優勝おめでとう!!ということであー乾杯!!」
「「「「「乾杯!!」」」」」

ある高級ホテルのバイキングで、A q o u r s メンバー達は祝杯をあげていた。

「さあー今日は、小原家の力でここを貸し切りにしてあるから!みんなジャンジャン好きなものを食べていってネー!!」

「いいんですか…?ここ都内でも結構有名なホテルのはずじゃ…」

「いいのよ。梨子!だってついに成し遂げたのよ!!ラブライブ優勝という夢を!!だから、遠慮せずに楽しんでほしいの。」

それに、この祝賀会はパパが独自で用意してくれたものなの。」

「鞠莉さんのお父さんがですか!?!」

「ええ、娘とその友人達へのささやかなプレゼントだーってね!

浦の星のために活動してくれたA q o u r s への感謝の気持ちを込めて用意してくれたものなの!」

鞠莉と梨子がそのように談笑している横では、善子と花丸がデザートコーナーで一悶着起こしていた。

「うわあ、美味しそうな食べ物がいっぱいずらー!」

「ちよつ! ずら丸。ちゃんと食べれる分だけよそりなさいよ!!そんな山盛りにしてあんた、それ1人で食べるつもり?」

「まるは平気だよー そういう善子ちゃんも結構お皿によそってるずら」

「嫌だからヨハネ!! それに私は自分で食べられる分しかよそってないわよ!!」パクっ

「あ、それまるのケーキすら!返すすらああ」

「あはは…またあの2人やってるよ」

「全く、モグっ みんなの食い意地の パクっ 悪さには呆れるよー」

「…千歌ちゃん?その様子を見てると、千歌ちゃんも人のこと言えないんじゃない…」

席に座わり、柑橘系の料理に舌鼓を打つ千歌を尻目に曜は苦笑いをする。

しかし、そういう曜の皿にもちゃっかり食べものがよそらている…
「うゆ…2人とも喧嘩はダメだよー」

「ルビィちゃんもたべるずらく プリンあげるずらー!」

「ふえ!? いいの!? ありがとう花丸ちゃん!!」

「なっ! あんたが買収されてどうすんの!?!」

それを見かねたルビィが2人の間に入っていくが、花丸にいい感じに丸め込まれてしまう。

そして、プリンを美味しそうに頬張るルビィに善子…もとい、ヨハネが鋭いツツコミを入れる。

「さあー みんな! シヤイ煮もあるわよーどんどん食べて! 食べて!!」

「なっ!? 先越された!…墮天使の涙もあるわよ (ギランツ)」

その言葉を聞いてより一層沸き立つ一同。

そんな中、果南とダイヤはその様子を少し離れたところで見ていた。

「あらあら、鞠莉も、善子ちゃんも、みんなもはあんなにしゃいじやつて まあ、気持ちはわからないでもないけどねー」

「ふふっ そうですわね。本当にスクールアイドルをやっついてよかったですわ。」

「そうだね、本当に…よかったよ。もし、あの時の諦めたままだったら私は、もう二度とここに立っていないしラブライブで優勝するって夢を叶えることもできなかつた。」

「果南さん…」

「だから、ダイヤには本当に感謝しているんだよ。今更なんだけど、ちゃんとお礼を言っておきたくてね。」

「そんな…決して私だけの力ではありませんわ。千歌さん達がいてくれたからこそ、いえ、9人が居たからこそ、今こうしてここにわたかし達はいるのですわ。」

「ふふっ そうやって謙遜するところ、ダイヤらしいなー。」

果南はそう言いながら微笑む。すると、ハッと何かを思い出したようにダイヤを見た。

「あーそういういえばダイヤ。お礼といえば、結局ダイヤの言っていた人には会えたの？」

「え!？」

ダイヤは不意をつかれたのか、素っ頓狂な声を上げてしまった。すると、果南が付け加える。

「ほら、一年前。東京に修学旅行できた来た時、会ったていう…」

「なるほど…急に聞かれたものですからびっくりしてしまいましたわ。あの人の事ですか。それが、昨日大会が終わってから探してみたのですが、会えなくて…」

「what, s? ダイヤー あの人が誰のことデース？」

「ま、鞠莉さん!? いつの間にか?」

そんな声が聞こえ、ダイヤと果南は後ろを振り返ると、

スツと鞠利がダイヤの後ろに立っていた。そして、ジト目でこちらを伺ってくる。

「いつまでたつてもこっちにこないからよ! で、その人って誰の事デース?もしかして…彼氏?」

「な、何を仰いますの!?! あの人はそんな人ではなくてですぬ…」

突然の爆弾発言にダイヤはとっさに怒鳴ってしまった。しかし、その声は他のメンバーにも聞こえたらしく、

「えー何々?何の話?」「私にも聞かせてー!」「千歌ちゃん、曜ちゃん、せめてお皿は置いて行って…」「恋バナずらあ? パクつもぐつ」
「すら丸!あんたいつまで食べ続けているの?太るわよ!」「ピー!おねえちゃん。彼氏さんいたの?…いつのまに…」

と、3年生の方へと集まってきた。果南以外の面々はダイヤの顔をまじまじと見つめ 早く続きを! とせがんできた。

「ええつと…そのお…」

ダイヤは少し顔を赤くさせながら下を向く。

「こらこら、みんな。そんなにジロジロ見ないのー。ダイヤが恥ずか

しがってるじゃん。ねえ？ダイヤ。私も、この間さわりを聞いただけだし、もし、よかつたら私を含めみんなに話してくれない？ダイヤが東京であったという不思議な人の話。」

果南がみんなをなだめ、ダイヤにそう促す。

すると、「そうですねえ…」と、ダイヤが少しずつ頭をあげる。

「少しこの話は長くなりますし、それにそこまで面白い話ではありませんわよ。後、鞠利さん。あの人は、彼氏とかそういうものではありませんわ。あの人はわたくしの恩人ですの。そこだけは勘違いしないように！」

少し強めで口調手間ダイヤがみんなに念を押す。

そして、ダイヤはゆっくりとその人について語りはじめた…

—————

1年前

わたくしは、東京に修学旅行に来ていました。

東京…と聞いてわたくしも色々思うことはあったのですが、人生一度しかない高校の修学旅行。

去ったことはあまり気にせず、せっかくの東京ですし、楽しもうと踏ん切りをつけていましたの。

学校側もあるわたくしのことを配慮してくれたのか、ここ、秋葉原周辺では観光を行わず、他の場所を観光コースに設定してくれました。そして、修学旅行の3日間はあつという間に過ぎ去り

いよいよ沼津に帰ろうとした時…事件が起きたのですわ…

修学旅行3日目の昼下がり 都内某公園

「ハ、ハハハ…一体どこですの…」

ダイヤは1人都内の公園に佇ずみ途方に暮れていた。

「まさか、こんなことになるとは思いませんでしたわ…」

そういうと、ダイヤは頭を抱え落ち込んでしまう。

今、ダイヤがどのような状況に置かれているのか、それは先ほど起きた方を順を追って説明しなくてはならない…

数十分前、修学旅行最後の班行動も終わり、ダイヤ達は集合場所である東京駅に向かっていた。

しかし、最寄りの駅に着いたときに最悪の事態が起きた。

いくら探しても財布が見つからないのだ。多分、最後に寄ったお土産売り場で忘れてきてしまったのであろう。そのため、ダイヤは一緒に行動していた友達に売り場に財布を取りに引き返すことを伝え、元来た道を走った。

幸いにも、売り場に財布はあったのでことなきを得たのであったが、そこからが大変だった。

来た道がわからない…

ただ、売り場から駅までの道を往復すればいいだけの話なのだが、ちょうど時刻が正午を周り、人通りが激しくなってきた。そのため、駅に向かおうにもダイヤは人波に流されあっちへフラフラこっちへフラフラ…と、

しばらくすると全く知らない場所に来てしまっていたのだ。

「とりあえず、緊急時には先生方に連絡を取らなくてはいけませんわ…え!？」

携帯を取り出し、緊急連絡用の電話をかけるが中々繋がらない。

よく見ると、携帯の左上には『圏外』の文字が出ていた。

「う、嘘ですよねえ…流石に日本の首都、電波の届かない場所などあるはずがないと思うのですが…このまま、連絡も取れずにここで一人ぼっちなってしまうのでしょうか…うう（グスッ）」

普段は冷静さ保っているダイヤだが、このように困難に直面した場合、結構打たれ弱いところがある。

「去年といい、今年といい、東京ここに来ると本当に良いことはありませんわ」

その様は、1年前。自分のわがままで親友に無理をさせてしまい、

アキバドームで一曲も歌うことができなかつた…あの日の姿に似ていた。

その時、不意に後ろから声をかけられた。

「おい、嬢ちゃん？」

「ピイツ!？」

急に後ろから声をかけられたためダイヤの口から変な声が出てしまふ。

一体誰が…

そう思い後ろを振り向くと、そこには

よれたロングコートを羽織り、中には朱いTシャツ、それに薄汚れたズボンを履き、頭にはキャスティング帽をのつけた長髪の男が立っていた。

そう、この男こそダイヤが言っていた東京であつたという恩人その人であつた。

その男はダイヤを指差した。

「…ピイイ？ ふはっははは なんだよその声は。変な声で驚くんだな」

そういうと男は、腹を抱え笑いはじめた。

「なっ／＼／＼で、出てしまったものはしょうがありませんわ！ それに、急に後ろから声をかけられたら誰だつて驚きますわ!!」

「いやあわりわり。なんでえ、しよぼくてたと思つて声をかけたら案外元気あるじゃねえーか。」

ダイヤは恥ずかしくなり男に食つてかかると、男はそれを軽くあしらうとおもむろにダイヤのそばによる。

「…なんですの。あまり近くにやらないでください。大声をあげますわよ。」

「おいおい、なんだよ。俺がそんなに怪しいやつに見えるのか？…別に変なことしようつてわけじゃねえよ。ただ、ここら辺じゃ見かけ

ねえ顔だなと思って声をかけたのさ。」

そういうと男は、ロングコートの後ろから紙袋を出すと、その中から真っ赤なリンゴを取り出し、それをダイヤの方に向かって差し出す。

「へへっ 一個どうだい？」

「え!?! …ええつとその…よろしいんですの?」

今はちようどお昼。先程からの出来事で食事を摂ることすら忘れていたダイヤにとつて、そのリンゴはとても魅力的なものであった。

「ああ もちろん。」

男が言うのと同時に、

ダイヤは男からリンゴをもらい、手に取るとそれを少し眺める。

そのリンゴはまるで燃えている炎のように、見事なまでに真っ赤に熟れていた。

しばらくして、ダイヤは「いただきます」と小さくいうと、リンゴを一口ずつ食べていった。

シャリツ シャリツと心地よい音が響く。男はその様子を微笑みながら見ていた。

「…美味しい …このリンゴすごく美味しいですわ!」

「そうかい。うまいかあ。流石は林屋の一押しの一品だけある。こりや西や紀ちゃんが聞いたらきつと喜ぶぞ。」

男の声色が少し嬉しそうになる。

そして、男はダイヤの顔がだんだんと笑顔になっていくのを確認すると、こう切り出した。

「嬢ちゃん。さつきやけに落ち込んでたじゃねえか?それに、その制服。ここら辺じゃ見かけないな…何かあったのか?」

ダイヤは、その言葉を聞き少し戸惑った。

果たしてこの状況を初対面の人間に話していいものなのだろうか?

だが、少なくともこの男の今までの行動を見ると悪い人間では無さそう。それに、もしかしたら東京駅までの行き方を教えてくれるかもしれない。

そう考え、「実は…」と、今起きている状況について説明し始めた：

「なるほど…：そいつは災難だったな。」

男はリンゴを頬張りながらダイヤの話聞きそうだった。

「それで…：その、差し支えなければわたくしに、東京駅までの道をわたくしに教えてくださいませんか？」

「よし、わかった。東京駅に行くならならこの先の××駅まで行った方がいい。そこからの方がはやしな。」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

ダイヤがそういうと、男はおもむろに立ち上がり、手に持っていたリンゴを全部食べ尽くした。そして、ぎゅーつと背伸びをすると準備体操を始める。その様子を見てダイヤは少し不思議に思った。

「うん？　なんで急に体操始めてるのか？　って顔だな。俺も駅までついていくんだよ。久々のロードワークを兼ねてな。」

「そんな…：リンゴまでいただいたうえ申し訳ありませんわ。」

「気にすんなよ。ロードワークも兼ねてって言ってるだろう？」

「ロードワーク…：あなたは何かスポーツをやられているのですか？」
何故？　ダイヤがこんな質問をしたのか。それは男の様子が健康志向のための走り込むにしては、何か気合が入りすぎているような印象を受けたからだ。

「お？　嬢ちゃん結構鋭いな。さて、なんでございましょうかねえ。」

…：そろそろ行くか。ついでに、答えは俺に追いつけたら教えてやるぜ。」

そういうと男は、踵を返しスツと走り始めた。

それに対して、ダイヤは「え!!?　ちょ、ちよつと待ってください!!!」と男の急な行動に対応できずにいた。男の走るスピードは、案内しておくと言うにはかなり速いもので言っている事とやっている事が矛盾していないか？

とダイヤは感じた。

しかし、ここで男を見失えば駅への行き方も分からなくなる。
それだけはまずい：

そして、ダイヤは男の背中を追いかけていた。

――

「oh！ ダイヤは高校2年生になっても、迷子になっていたんだねー」

「あはは…なんかダイヤさんらしいね」

鞠莉と千歌がここまでのダイヤ話を聞いて率直な感想を述べる。

「だーかーらー!!そういうことが言いたいわけじゃありませんわ!話を腰を折らないでくださいまし!」

…後、千歌さん?らしいって、わたくしのイメージについて色々誤解があるようですわねえ。これは少しお話が必要みたいですわね…」
「ピイツ!お、おねえちゃん。落ち着いて!顔が怖いよお!ルビイのプリンあげるから機嫌なおしてえ」

スルーして欲しかった自分の恥ずかしい過去を掘り返され、もはや赤面を通り越して威圧感を漂わすダイヤをルビイがなだめる。

「でも、ダイヤの恩人ってそういうことだったのね。迷ったダイヤを助けてくれたいい人じゃない。」

「なんか、ぶっきらぼうだけど優しそうな人だよねー。まるも会ってみたいぞら!」

「ダイヤさん。それでその後どうなったんですか?なんか、話を聞いている限りまだ何かありそうな気がするんですが…」

善子や花丸が男への印象を言った後、曜が疑問を呈した。

「ええ、そうです。まだこの話にはつづきがあるのです。むしろ今までの話はまだ本題ではありませんわ。」

そして、ダイヤはメンバー全員に向かって微笑みかけた。

「もしかしたら、わたくしがみなさんと一緒に、今ここにすることが出

来たのは、あの人のおかげかもしれません。」

—————

あの後、わたくしはあの人の後を追いかけていきましたわ。

公園を出ると、すぐに商店街にでました。

先程の人波よりかは少ないのですが、人混みが凄いところでしたわ。

すると、彼はそこをまるで風のようにスツスツと流れるように駆け抜けていきます。

わたくしの方は…スクールアイドルとして活動していたからでしょうが、追いつけこそしませんでしたが、速いなど思われた彼のペースにだいぶ着いていけているような感じでした。

走って少し経った頃でしょうか？

商店街を抜けた外れに今では珍しい、木造の橋が見えてきましたの。すると、急に彼が止まり私に向かってこういったのです。

「嬢ちゃん…勘違いだったら悪いが、お前さん…燻ってやがるな。」と…

「燻っている…？」

その言葉をかけられた時、ダイヤは最初、何を言われているのかわからなかった。しかし、少し思い当たる節もある、だが、わかるはずがない。

そう思っていた。

「ああ、俺のこのペースについて来た事にも驚いちやいるんだが、それと同時にある特定の場所でペースがガクツツと落ちるのを感じただよ。」

そう言いながら、男はポケットに手をつ突っ込むと一枚の紙を取り出す。そこには、大きくデカデカとした文字で『ラブライブ!』と書かれたポスターが…

そう、男の手には今年のラブライブ本戦の告知ポスターが握られていた。

「…そ、そのポスターがどうしたんですの…」

ダイヤの声が少し震える。

何故だ？なぜわかった？そのポスターには、極力目を合わせないよ
う気をつけていたはずなのに。もうその事は関係ない。そう自分に
言い聞かせていたはずなのに…

「やっぱり、当たりみたいだな…こいつが貼り付けられている場所で
嬢ちゃんの走るペースが少し遅くなっていたのさ。」

「…関係ないですわ…」

「関係ないことは無いな。こいつを見たときの嬢ちゃんの目つきに表
情も変わってた。遠目から見てもよくわかったぜ」

男そう言いながら、パンパンツと手に持っているポスターを弾く。
「まだ、会ってたかが十数分しか経ってないけどよ。これだけははっ
きり言える。さっきの目つき、まるで、何か昔に嫌なことがあって、今
まさに自分の夢を諦めかけちまつてるような、そんな感じがしたぜ
？」

なんで？なんでこの男は、こんなことを言うのだろうか？そんな疑問
を抱きつつ、ダイヤは目の前の男を背けた。

何故なら男のその言葉は、あまりにも的確に自分の急所を突いてか
らだ。

「う… …さ…い…すわ」ボソツ

「ん？」

「うるさいですわ!!そのポスターをわざと見ないようにしていた理由
も、わたくし達の事も、何も知らないくせに!!知ったような口をきか
ないでください!」

男に向かってダイヤは怒鳴る。目に涙を浮かべながらこの3日間
知らず知らずのうちに溜め込んでいた気持ちを吐き出していた。

そして男は、ダイヤの叫び聞いた後、静かにこう切り出した。

「…そうか…だが、それにしちや目の奥の火はまだ消えちやいないな。」

「!?ッ」

「スクールアイドル…だっけか? お前さんはまだそいつを諦めきれてねえ。嬢ちゃんは何かに理由をつけて、その気持ちを封印してる。違わないか?」

「…違います。わたくしはもうスクールアイドルは…だつて…」

「たしかに、俺は嬢ちゃんのことは何も知らない。でもな 職業柄そんな風に苦しそうな様子をした奴らを何度も見てきた。ブスブスと燻っている奴らをな。」

そういうと、男は少し悲しそうな顔をした。だが、口元は少し笑っている。

その言葉と表情に、ダイヤは頭にきた。

何も、知らないくせに、よく言う。

この男は何様だ? 他人の思い出したくもない過去をほじくり返すのはそんなに楽しいか?

ドス黒い感情が胸の中でグルグルと駆け巡る。

この東京の3日間何も思わないわけないだろう。

自分の夢のせいで、危うく2人の友達の人生を狂わせかけたのだから。

3人の友情に亀裂を作った自身の夢に…スクールアイドルというものに嫌気がさしていたこの1年間。

何も思わなかったわけない。

気づけばダイヤの口からはその思いが溢れ出していた。

長い間閉じ込めていた。2人への思いと自分自身の本音を。

「だつて…もう、終わったんですもの。わたくしのわがままは…『スクールアイドルをやりたい』というわがままは終わったんですの!!」
「わたくしがスクールアイドルをやろうと、果南さんと一緒に鞠莉さんを誘って…自分の好きな事で学校を救えるかもしれない。そんな

事を思ってた。…でもそれは、結果として鞠利さんに無理をさせて、果南さんにも嫌な思いをさせてしまった。

…私は、自分の思い描いていた夢で2人を傷つけてしまったんです!!」

「だけど…だけど…」と首を左右に振りダイヤは苦しそうに叫ぶ。その様を男はただじっと何かを見据えるように、見守っていた。

「あの頃に戻りたい…果南さんや鞠莉さんと一緒にもう一度！スクールアイドルやりたい!!」

でも、でもおツツ もう…無理なんです。Aqoursは…もう終わってしまったのですからツツ!!」

全てをぶちまけたダイヤはガクツツと膝をついてしまった。そして両手で肩を抱きしやがんだ体を震わせる。

そして、伏せている顔からはポタポタと数滴の雫が落ち地面を濡らし始めた。

それを見た男は「…」と何も言わずにダイヤにコートをかけた。

「何をするんですの…。同情なんて…」とダイヤはかけられたコートを払おうとするが、今度は男のゴツゴツとした手に頭を撫でられた。

「優しくしないで…ください…」

ダイヤは1年間誰にまで言うことのできなかつた溜本当の気持ちぶちまけ、最後の感情が溢れ出す。

あの後、何もできずにただ友情に亀裂が入っていく様を諦観するとしかなかつた自分への後悔。

3人で同じ夢を追いかけているあの頃へ戻りたいという虚しい思い。

それらがぐちゃぐちゃに混ざりつた感情が…男に優しくされたことで決壊した。

「うつわああああああん」とダイヤの泣き叫ぶ声が、橋の前にこだました…

「だから、もうわたくしはスクールアイドルはやめました。もちろん、やりたい気持ちは今でもありますわ。でも、もう友達を巻き込み傷つけるのは嫌なんですの…」グスッ

少し経ち、落ち着いてきたダイヤが泣き止みそう言った。

そしてそんな彼女に男はゆっくりと語りかけるように話し始めた。

「…友達を傷つけた…か。なるほどな…その気持ち。俺にもわかるよ
うな気がするな。」

「え…?」

「俺の場合は、傷つけた… というよりは殺した。というか言い方が正しいな。昔、俺は文字通りこの手で、友達…って言葉じゃ足りないな。生きがいつてヤツを殺しちまったんだ。みんなは事故だと言ったがな。」

「…ころ…した? 事故…? どういう事ですか?」

「俺は、ボクサーだな。」

ずっと昔に、ある男と試合をしたんだ。ソイツは俺との約束を守るために過酷な減量に耐えリングに上がってきた。そして、俺たちは全力で戦った。」

男はそう言いグツと手に力を入れる。そしておもむろにその手を前に突き出した。

「燃えた、真っ赤にこれまでかッ!! ってほどにな。」

そして、俺は負けた、完敗だったさ。

でもよ… アイツは俺の放ったテンプルの一撃、後頭部をリングロープに強打したのが原因で死んだ。さつきまでリングで死闘を繰り広げた奴が、目の前でぶっ倒れてそのまま逝っちゃったんだ。」

「俺はそのあとショックで、ボクシングをやめようと思った。俺のことを始めて好敵手として認めてくれた奴を、俺との奇妙な友情とを守ったアイツを俺はこの手で殺したんだ。」

でも…俺はボクシングって奴を拳闘って奴を辞められなかった!!」

「なぜ…ですか?」

「…なぜか、か。」

そこまで言うとは男は突き出した手を戻し、その顔をダイヤの方に向けた。

そしてこう言った

「よくわかんねえけどひとつだけはっきりしてるんだ。

俺、拳闘つてやつが好きだからやってきたんだ。これは本当なんだ。俺は俺なりに燃えるような充実感を何度も味わってきた。あの血だらけのリングの上でさ。」

そういう男の目は真っ直ぐにダイヤを見ていた。そして、男は大きく手を振り上げ叫ぶ。

『そこいらの連中みたいにブスブスとくすぶりながら不完全燃焼しているんじゃない。ほんの瞬間にせよまぶしいほど真っ赤に燃えあがるんだ。そして、あとにはまっ白な灰だけがのこる。燃えかすなんかのこりやしない。まっ白な灰だけだ。』

…ってな、俺は、拳闘には嘘をつかなかったんだよ。だから辞めずに今でも続けてる。」

「それに、殺しちゃまったアイツのためにも俺は拳闘を続けなきゃっても思った。命って言う炎を真っ赤に燃やしてアイツは、見事に真っ白な灰になったアイツのためにもよ…」

男のその叫びを聞いた時、ダイヤの中の何かがボツと燃え上がった気がした…

燻った心に火が灯った気がした…

その後、男とダイヤは駅に着いた。

あの後、お互いに何も喋ってはいない…でも、嫌な雰囲気ではなかった。むしろ、ダイヤからは先程時折見せていた影が消え、その表情は明るかった。

「…その、ありがとうございます。」

先に口を開いたのはダイヤだった。

「ああ、どういたしまして…。俺はそろそろ戻るよ…」

男はそういう、ダイヤに背を向け走り去ろうとする。

「ま、待ってください!!」

「!?…どうしたんだ?また何か落としたのか?」

「ち、違います!…あの、わたくし!あなたの最期の言葉を聞いて…」

「ああ、あれは忘れてくれ…。あまり人に言うもんじゃなかった。」

「いえ!…あの言葉を聞いて、わたくしもう少しスクールアイドルを続けて行きたい!!そう思えたんですの。」

わたくしは好きだから…スクールアイドルが大好きだから!

灰…にはなりたくないですけども、わたくしはもう一度輝きたい!

3人で、A q o u r sとしてもう一度輝きたい!!そう思えたんです…」

男の最後の言葉を聞いた後、ダイヤはずっと考えていた。

3人を自らの夢で傷つけてしまったのは事実で、それは変えることはできない。しかし、だからといって、自分がやりたい。本当に好きだ。と思う夢を諦めるのは違うのではないかと感じたのだ。

それに。今、ダイヤの夢にもう一つの夢ができた。

『A q o u r sを復活させてまた3人で歌いたい』という夢が…

0からのスタートというにはマイナスからのスタートといった方がいいのかもしれない。でも、それでも私はやりたい。そう思った。「そう…。か。ふふっ 嬢ちゃん。ひとつだけ、最後に俺から言える事はな。多分これから先、嬢ちゃんは苦しい事や辛い事にぶち当たってくと思う。でもな、その気持ちだけは絶対に消しちゃいけない。それが消えちまったらもう二度とその火はつくことはないからな。」

男のいう言葉にダイヤは首を縦に降る。

「その火さえ消えなければ、また人は真っ赤に燃え上がってる事ができる。そうさ、まぶしいほどに輝くものになれるんだ!!」

一つ一つの言葉がダイヤの胸にストーンとハマっていく。

駅に電車の近づく音が聞こえる。もう直ぐ別れの時だ。そしてダイヤ最後にこう訪ねた。

「わかりました。後、わたくし申し遅れましたが、浦の星女学院生徒会

長兼スクールアイドル『A q o u r s』のメンバー黒澤ダイヤと申します。…最後にあなたの名前を教えてください。」

「俺か？俺は…」

ダイヤの問いに男がそう言いかけた瞬間。

ピンポンパンポンっ と駅のアナウンスが流れ男の声を掻き消す。そのそして、そのアナウンスはダイヤが乗らなくてはいけない電車が着いたという合図でもあった。

「え… すみません。聞こえなかったのもう一度！もう一度お願いします！ 時間が、時間がないんです!!」

ダイヤはそう叫ぶが男はニッコリと微笑みながらこちらに手を振る。駅に西日が差し男を隠す。ダイヤはその光に思わず目をつむりすると、光の中から男の声がした。

「… 互いにそろそろ時間見たいだな。もう少し、見守っていたかったんだかな…どうも、天国のリングでアイツが俺の事を呼んでいるらしい…」

「じゃあな。ダイヤ、お前ならきつと輝けるはずさ。他の8人と一緒に、まぶしく輝くものにな…」

そして、男の声が途切れると、西日がさらに強くなり一気にカツとあたりが光り輝いた。当然ダイヤは目を開けることができず、呆然と立ち尽くす。

しばらくして、西日の光が弱くなりダイヤが目を開けると、そこには男の姿はもう無かった。

—————

「これが、私が一年前にあった不思議な人の話ですわ。 どうでしたか？そこまで面白い話ではなかったでしょう？」

「「「「「「……」」」」」」

「うっ!?な、 なんですの皆さんそんなに静まり返って、面白くないとは言え、何か反応をください！はなしたわたくしもわたくしですが、

正直傷つきますわ（汗）」

「違うよダイヤ…みんなね…」ハグウウウウ

果南がおもむろにダイヤに抱きつく。いきなりのことにダイヤも混乱し「ちよつ、ちよつと果南さん!? 一体どうしたんですの!」と驚く。

すると、2人に鞠莉も抱きついてきた。

「ダイヤ…やっぱり私たちスクールアイドルを続けていて良かった…今のダイヤの話を聞いたらなおさらそう思えたの…」

「ふ、2人とも／＼ 恥ずかしいですわ…」ダイヤがそう言っても、ぎゅうつと2人はダイヤを離そうとしない。

そんな様子を見ていた他のメンバーは、3年生達から離れたところに固まり何かヒソヒソ話していた。

「ちよつと！ 貴方達いい加減に…ってほかの皆さんも何しているんですか、2人を止めてください!」

6人は互いに顔を見合わせて、ニコつと笑う。

そして、千歌が声を上げた。

「ダイヤさん…わたし達、本当にこの9人でAqoursとしてスクールアイドルをやれて良かった! だから…もう一度歌いませんか?」

「歌う?」

「はい! 最後にこの東京でもう一度! ダイヤさんの言っていたその人にも届くように!」

急遽、ラブライブで優勝を果たしたAqoursが都内の高級ホテル屋上で一曲だけの単発ライブを行う。という情報がTV関係者やライブ関係者に入った。

それを聞きつけた、各局、スタッフはすぐさまホテルへと直行。ものの1時間で全て機材を揃い集め、ステージを作り上げた。

なぜ？Aqoursは急にライブを行うのか？しかも、一曲だけ：AqoursにTVの報道陣のそういった質問が殺到する中、リーダーである高海千歌はこう答えたという。

「スクールアイドルを応援してくれた人達へ感謝の気持ちを込めて、そして、9人でAqoursとして活動することができた事への感謝の思いを、全てが始まったこの東京でもう一度歌いたかった。」

そして、9人がステージに立つ：

そして、ホテル屋上を1人の男が見下ろしていた。

「へへっなんだよ。こっちがお天道様の方だつてのにあっちの方が眩しいじゃねえか。なあ…本当に輝いているぜ。」

「なにしてんだよ、ジョー…そんなに下を見下ろして。お？ さあ早く行くぞ！なにせ今日のメインイベントさ。ささ、リングで力石君が待ってる。」

「分かってるよおっつあん。そろそろ行くか… こっちも負けてられねえしな。」

そういうと、男は下を向いていた顔を上げ、遠く見える『約束^天へのリング^国』へと駆けて行く。

はるか下から聞こえるAqoursの歌声を背に聴きながら…

終わり